大分県文化財調査報告書第132輯

一般国道10号（戸次・犬飼拡幅）
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 利　光　遺　跡

2002

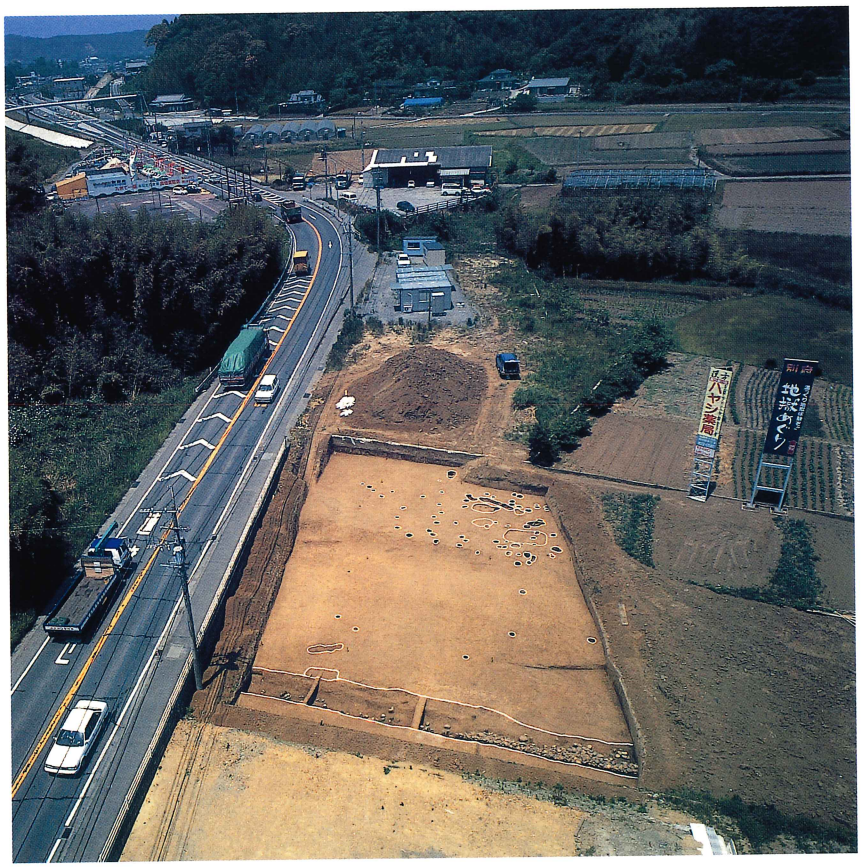
大分県教育委員会

# 利光遺跡（としみついせき）

利光遺跡脇ノ津留地区全景（南から）

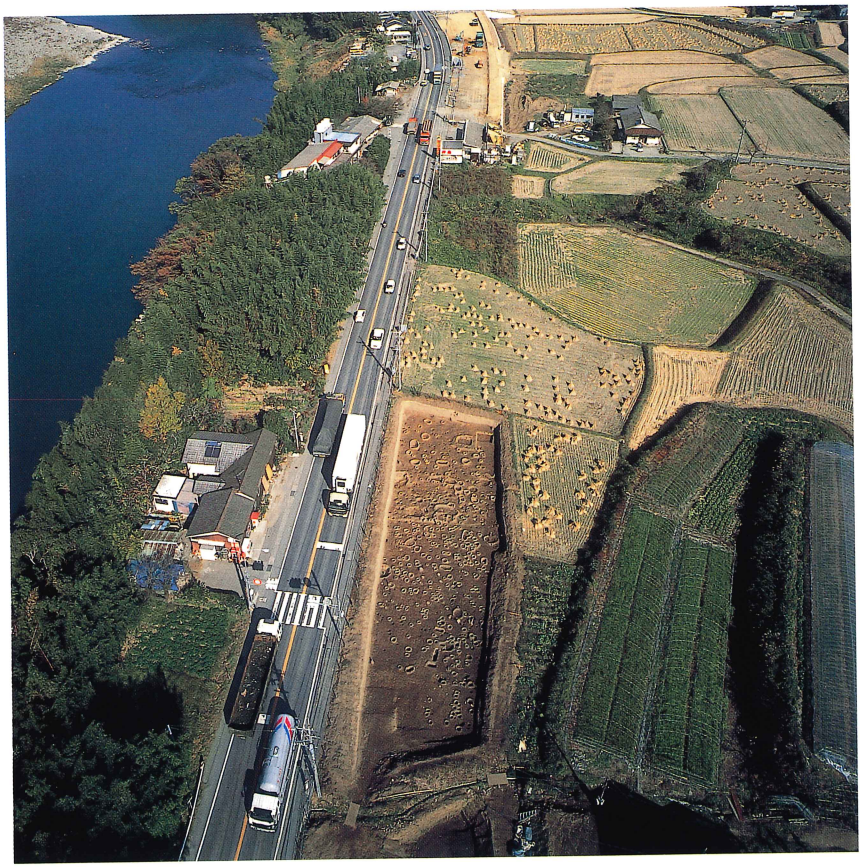
利光遺跡脇ノ津留地区遺構検出状況

利光遺跡鵜ノ木地区Ｃ区弥生時代遺構検出状況全景



利光遺跡鵜ノ木地区Ｃ区中・近世遺構検出状況

利光遺跡鵜ノ木地区A･B区中・近世遺構全景（北から）



利光遺跡久保地区全景

# 序　　文

大分県教育委員会では、平成６年度から一般国道10号戸次・犬飼拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してきました。調査では、旧石器時代から近世にいたる数多くの遺構・遺物が発見され、本地域が先史時代から変わることなく生活の場として利用されてきたことを明らかにすることができました。本書は、その発掘調査の記録です。

本書が本地域の歴史を解明する新たな資料となるとともに、歴史遺産として埋蔵文化財を御理解いただく契機となれば幸いです。

最後に、調査の御指導・御協力をいただきました関係各位及び地元の方々に対し、深く敬意を表すと共に、厚く御礼を申し上げます。

平成14年３月

大分県教育委員会教育長

石　川　公　一

# 例　　言

1．本書は平成６～８年度に行った一般国道10号（戸次・犬飼拡幅）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は建設省（現国土交通省）の委託事業として大分県教育委員会が実施した。

3．発掘調査にあたっては、大分市教育委員会並びに地元の方々のご助力を得た。

4．本書に使用した座標系は、昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系である。図郭に表示してある座標値はキロメートル単位である。

5．本書の執筆はⅠ・Ⅲ-1・Ⅲ-4-C・Ⅲ-5を友岡信彦、Ⅱ・Ⅲ-3・Ⅲ-4-bを後藤一重、Ⅲ-2・Ⅲ-4-A-cを清水宗昭、Ⅲ-4-A-aを坂本嘉弘、Ⅲ-4-A-bを山崎文子、Ⅲ-5-A-dを高橋徹が担当し、編集は担当者で協議して行った。

6．出土遺物及び関係資料は大分県教育庁文化課文化財資料室で保管・管理している。

# 本 文 目 次

序文
例言
Ⅰ　はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の経過 …… 1
　3．調査団の構成 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
　1．地理的環境 …… 3
　2．歴史的環境 …… 3
Ⅲ　調査の成果 …… 5
　1．利光遺跡の概要 …… 5
　2．利光遺跡出土の旧石器時代遺物 …… 6
　3．利光遺跡脇ノ津留地区 …… 11
　　A．遺跡の概要 …… 11
　　B．弥生・古墳時代の遺構 …… 13
　　a）竪穴住居跡 …… 13
　　b）土坑 …… 48
　　c）その他の出土品 …… 50
　　C．近世の遺構 …… 52
　　a）溝 …… 52
　　b）土壙墓 …… 52
　4．利光遺跡鵜ノ木地区 …… 55
　　A．縄文時代 …… 56
　　a）縄文早期土器 …… 57
　　b）縄文後期・晩期土器及び勾玉 …… 73
　　c）縄文時代の石器 …… 94
　　B．弥生・古墳時代 …… 109
　　a）竪穴住居跡 …… 110
　　b）その他の出土品 …… 128
　　C．近世 …… 131
　　a）溝 …… 131
　　b）土坑墓 …… 136
　　c）土坑 …… 137
　　d）掘立柱建物跡 …… 142
　5．利光遺跡久保地区 …… 157
　　A．遺跡の概要 …… 157
　　a）土坑 …… 157
　　b）火葬墓 …… 174
　　c）集石遺構 …… 175
　　d）包含層出土遺物 …… 176

# 挿 図 目 次


第 1 図　利光遺跡周辺遺跡分布図 …… 4
第 2 図　利光遺跡周辺地形図 …… 5
第 3 図　利光遺跡出土旧石器時代石器実測図 …… 7
第 4 図　利光遺跡出土旧石器時代剥片類実測図 …… 8
第 5 図　利光遺跡出土旧石器時代石核類実測図 …… 9
第 6 図　利光遺跡出土旧石器時代石器実測図 …… 10
第 7 図　利光遺跡脇ノ津留地区周辺地形図 …… 11
第 8 図　利光遺跡脇ノ津留地区遺構配置図 …… 12
第 9 図　利光遺跡脇ノ津留地区１号竪穴実測図 …… 13
第10図　利光遺跡脇ノ津留地区１号竪穴出土土器実測図 …… 14
第11図　利光遺跡脇ノ津留地区２号竪穴実測図 …… 15
第12図　利光遺跡脇ノ津留地区２号竪穴出土土器実測図１ …… 17
第13図　利光遺跡脇ノ津留地区２号竪穴出土土器実測図２ …… 18
第14図　利光遺跡脇ノ津留地区２号竪穴出土土器実測図３ …… 19
第15図　利光遺跡脇ノ津留地区３・４号竪穴実測図 …… 20
第16図　利光遺跡脇ノ津留地区４号竪穴出土土器実測図 …… 21
第17図　利光遺跡脇ノ津留地区５号竪穴実測図 …… 22
第18図　利光遺跡脇ノ津留地区５号竪穴出土土器実測図１ …… 23
第19図　利光遺跡脇ノ津留地区５号竪穴出土土器実測図２ …… 24
第20図　利光遺跡脇ノ津留地区５号竪穴出土土器実測図３ …… 25
第21図　利光遺跡脇ノ津留地区６号竪穴実測図 …… 26
第22図　利光遺跡脇ノ津留地区６号竪穴出土土器実測図 …… 27
第23図　利光遺跡脇ノ津留地区７号竪穴実測図 …… 27
第24図　利光遺跡脇ノ津留地区７号竪穴出土土器実測図 …… 28
第25図　利光遺跡脇ノ津留地区８号竪穴実測図 …… 29
第26図　利光遺跡脇ノ津留地区８号竪穴出土土器実測図 …… 30
第27図　利光遺跡脇ノ津留地区９号竪穴実測図 …… 31
第28図　利光遺跡脇ノ津留地区９号竪穴出土土器実測図 …… 32
第29図　利光遺跡脇ノ津留地区10号竪穴実測図 …… 33
第30図　利光遺跡脇ノ津留地区10号竪穴出土土器実測図１ …… 34
第31図　利光遺跡脇ノ津留地区10号竪穴出土土器実測図２ …… 35
第32図　利光遺跡脇ノ津留地区11号竪穴実測図 …… 37
第33図　利光遺跡脇ノ津留地区11号竪穴出土土器実測図 …… 37
第34図　利光遺跡脇ノ津留地区12号竪穴実測図 …… 38
第35図　利光遺跡脇ノ津留地区12号竪穴出土土器実測図 …… 39
第36図　利光遺跡脇ノ津留地区13号竪穴実測図 …… 40
第37図　利光遺跡脇ノ津留地区13号竪穴出土土器実測図１ …… 41
第38図　利光遺跡脇ノ津留地区13号竪穴出土土器実測図２ …… 42
第39図　利光遺跡脇ノ津留地区14号竪穴実測図 …… 44
第40図　利光遺跡脇ノ津留地区14号竪穴出土土器実測図１ …… 45

第41図　利光遺跡脇ノ津留地区14号竪穴出土土器実測図2 …… 46
第42図　利光遺跡脇ノ津留地区15号竪穴実測図 …… 47
第43図　利光遺跡脇ノ津留地区15号竪穴出土土器実測図 …… 47
第44図　利光遺跡脇ノ津留地区1号土坑実測図 …… 48
第45図　利光遺跡脇ノ津留地区1号土坑出土土器実測図 …… 49
第46図　利光遺跡脇ノ津留地区出土土器片加工品実測図 …… 51
第47図　利光遺跡脇ノ津留地区溝出土遺物実測図 …… 52
第48図　利光遺跡脇ノ津留地区土壙墓実測図 …… 53
第49図　利光遺跡鵜ノ木地区周辺地形図 …… 55
第50図　利光遺跡鵜ノ木地区基本土層図 …… 55
第51図　利光遺跡鵜ノ木地区縄文時代調査区位置図 …… 56
第52図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図1 …… 58
第53図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図2 …… 59
第54図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図3 …… 60
第55図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図4 …… 61
第56図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図5 …… 62
第57図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図6 …… 63
第58図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図7 …… 64
第59図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図8 …… 65
第60図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図9 …… 66
第61図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図10 …… 67
第62図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図1 …… 77
第63図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図2 …… 78
第64図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図3 …… 79
第65図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図4 …… 80
第66図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図5 …… 81
第67図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図6 …… 82
第68図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図7 …… 83
第69図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図8 …… 84
第70図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文晩期土器実測図1 …… 85
第71図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器実測図1 …… 86
第72図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器実測図2 …… 87
第73図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器及び玉類実測図 …… 88
第74図　利光遺跡鵜ノ木地区出土石鏃実測図 …… 95
第75図　利光遺跡鵜ノ木地区出土石鏃・剥片石器実測図1 …… 96
第76図　利光遺跡鵜ノ木地区出土剥片石器実測図2 …… 97
第77図　利光遺跡鵜ノ木地区出土剥片石器・石核実測図 …… 98
第78図　利光遺跡鵜ノ木地区出土磨製・打製石斧実測図 …… 104
第79図　利光遺跡鵜ノ木地区出土打製石斧・礫器実測図 …… 105
第80図　利光遺跡鵜ノ木地区出土礫器類実測図1 …… 106
第81図　利光遺跡鵜ノ木地区出土礫器類実測図2 …… 107
第82図　利光遺跡鵜ノ木地区弥生・古墳時代遺構配置図 …… 109

第83図　利光遺跡鵜ノ木地区1号竪穴実測図 …… 110
第84図　利光遺跡鵜ノ木地区1号竪穴出土遺物実測図 …… 111
第85図　利光遺跡鵜ノ木地区2号竪穴実測図 …… 112
第86図　利光遺跡鵜ノ木地区2号竪穴出土遺物実測図1 …… 113
第87図　利光遺跡鵜ノ木地区2号竪穴出土遺物実測図2 …… 114
第88図　利光遺跡鵜ノ木地区3号竪穴実測図 …… 116
第89図　利光遺跡鵜ノ木地区3号竪穴出土遺物実測図 …… 116
第90図　利光遺跡鵜ノ木地区5号竪穴実測図 …… 118
第91図　利光遺跡鵜ノ木地区5号竪穴柱穴2土器出土状況実測図 …… 119
第92図　利光遺跡鵜ノ木地区5号竪穴出土遺物実測図1 …… 120
第93図　利光遺跡鵜ノ木地区5号竪穴出土遺物実測図2 …… 121
第94図　利光遺跡鵜ノ木地区5号竪穴出土遺物実測図3 …… 122
第95図　利光遺跡鵜ノ木地区5号竪穴出土遺物実測図4 …… 123
第96図　利光遺跡鵜ノ木地区5号竪穴出土遺物実測図5 …… 124
第97図　利光遺跡鵜ノ木地区6号竪穴実測図 …… 125
第98図　利光遺跡鵜ノ木地区6号竪穴出土遺物実測図1 …… 126
第99図　利光遺跡鵜ノ木地区6号竪穴出土遺物実測図2 …… 127
第100図　利光遺跡鵜ノ木地区出土土器片加工品実測図 …… 128
第101図　利光遺跡鵜ノ木地区出土弥生・古墳時代土器実測図1 …… 129
第102図　利光遺跡鵜ノ木地区出土弥生・古墳時代土器実測図2 …… 129
第103図　利光遺跡鵜ノ木地区近世遺構配置図 …… 131
第104図　利光遺跡鵜ノ木地区溝1実測図 …… 132
第105図　利光遺跡鵜ノ木地区溝1出土遺物実測図1 …… 133
第106図　利光遺跡鵜ノ木地区溝1出土遺物実測図2 …… 134
第107図　利光遺跡鵜ノ木地区1号墓及び出土遺物実測図 …… 136
第108図　利光遺跡鵜ノ木地区2号墓実測図 …… 137
第109図　利光遺跡鵜ノ木地区土坑1～5実測図 …… 139
第110図　利光遺跡鵜ノ木地区土坑6～9実測図 …… 140
第111図　利光遺跡鵜ノ木地区土坑10～13実測図及び出土遺物実測図 …… 141
第112図　利光遺跡鵜ノ木地区掘立柱建物跡配置図 …… 143
第113図　利光遺跡鵜ノ木地区建物1・2実測図 …… 144
第114図　利光遺跡鵜ノ木地区建物3～5実測図 …… 145
第115図　利光遺跡鵜ノ木地区建物6・7実測図 …… 147
第116図　利光遺跡鵜ノ木地区建物8実測図 …… 148
第117図　利光遺跡鵜ノ木地区建物9実測図 …… 149
第118図　利光遺跡鵜ノ木地区建物10～12実測図 …… 151
第119図　利光遺跡鵜ノ木地区建物13～15実測図 …… 152
第120図　利光遺跡鵜ノ木地区建物16実測図 …… 153
第121図　利光遺跡鵜ノ木地区出土近世土器実測図 …… 154
第122図　利光遺跡鵜ノ木地区出土土錘実測図 …… 155
第123図　利光遺跡久保地区周辺地形図 …… 157
第124図　利光遺跡久保地区遺構配置図 …… 158

第125図　利光遺跡久保地区土坑1及び出土遺物実測図 …… 159
第126図　利光遺跡久保地区土坑2～5実測図 …… 161
第127図　利光遺跡久保地区土坑6及び出土遺物実測図 …… 162
第128図　利光遺跡久保地区土坑7実測図 …… 162
第129図　利光遺跡久保地区土坑8及び出土遺物実測図 …… 163
第130図　利光遺跡久保地区土坑9及び出土遺物実測図 …… 164
第131図　利光遺跡久保地区土坑10実測図 …… 166
第132図　利光遺跡久保地区土坑10出土遺物実測図1 …… 167
第133図　利光遺跡久保地区土坑10出土遺物実測図2 …… 168
第134図　利光遺跡久保地区土坑11～16実測図 …… 171
第135図　利光遺跡久保地区土坑17及び周辺出土遺物実測図 …… 172
第136図　利光遺跡久保地区土坑18実測図 …… 172
第137図　利光遺跡久保地区土坑19及び出土遺物実測図 …… 173
第138図　利光遺跡久保地区火葬墓実測図 …… 174
第139図　利光遺跡久保地区集石遺構1及び出土遺物実測図 …… 175
第140図　利光遺跡久保地区集石遺構2及び出土遺物実測図 …… 177
第141図　利光遺跡久保地区出土土錘実測図1 …… 178
第142図　利光遺跡久保地区出土土錘実測図2 …… 179
第143図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図1 …… 183
第144図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図2 …… 184
第145図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図3 …… 185
第146図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図4 …… 186
第147図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図5 …… 187
第148図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図6 …… 188
第149図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図7 …… 189

# 表　目　次

表1　利光遺跡旧石器時代石器計測表1 …… 6
表2　利光遺跡旧石器時代石器計測表2 …… 10
表3　利光遺跡脇ノ津留地区出土土器片加工品計測表 …… 50
表4　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器観察表1 …… 68
表5　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器観察表2 …… 69
表6　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器観察表3 …… 70
表7　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器観察表4 …… 71
表8　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器観察表1 …… 89
表9　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器観察表2 …… 90
表10　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器観察表3 …… 91
表11　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器観察表4 …… 92
表12　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器観察表5 …… 93
表13　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代玉類計測表 …… 93

表14　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代石器計測表１ …… 99
表15　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代石器計測表２ …… 100
表16　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代石器計測表３ …… 101
表17　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代石器計測表４ …… 102
表18　利光遺跡鵜ノ木地区溝１出土土器観察表 …… 135
表19　利光遺跡鵜ノ木地区１号墓出土土器観察表 …… 136
表20　利光遺跡鵜ノ木地区出土中・近世土器観察表 …… 154
表21　利光遺跡鵜ノ木地区出土土錘計測表 …… 155
表22　利光遺跡久保地区土坑１出土土器観察表 …… 160
表23　利光遺跡久保地区土坑８出土土器観察表 …… 163
表24　利光遺跡久保地区土坑９出土土器観察表 …… 165
表25　利光遺跡久保地区土坑10出土土器観察表 …… 169
表26　利光遺跡久保地区集石遺構２出土土器観察表 …… 176
表27　利光遺跡久保地区出土土錘観察表１ …… 180
表28　利光遺跡久保地区出土遺物観察表１ …… 187
表29　利光遺跡久保地区出土遺物観察表２ …… 189
表30　利光遺跡久保地区出土遺物観察表３ …… 190
表31　利光遺跡久保地区出土石硯計測表 …… 191

# 写真図版目次

図版 1　利光遺跡脇ノ津留地区全景利光遺跡脇ノ津留地区竪穴検出状況、１・２号竪穴
図版 2　利光遺跡脇ノ津留地区竪穴検出状況、１・２号竪穴
図版 3　利光遺跡脇ノ津留地区５号竪穴、１・２・６号竪穴、２・５・８号竪穴
図版 4　利光遺跡脇ノ津留地区５・９・10・11号竪穴、14号竪穴
図版 5　利光遺跡脇ノ津留地区15号竪穴、土坑墓１、土坑墓２・３
図版 6　利光遺跡脇ノ津留地区竪穴出土遺物
図版 7　利光遺跡脇ノ津留地区竪穴・土坑出土遺物
図版 8　利光遺跡鵜ノ木地区全景・遺構検出状況
図版 9　利光遺跡鵜ノ木地区全景
図版10　利光遺跡鵜ノ木地区縄文時代基本土層・遺物出土状況
図版11　利光遺跡鵜ノ木地区１～３号竪穴
図版12　利光遺跡鵜ノ木地区１～５号竪穴
図版13　利光遺跡鵜ノ木地区５号竪穴、６号竪穴
図版14　利光遺跡鵜ノ木地区１号墓、２号墓、土坑10
図版15　利光遺跡鵜ノ木地区土坑11～13
図版16　利光遺跡鵜ノ木地区掘立柱建物跡全景、建物２・３
図版17　利光遺跡鵜ノ木地区建物４・６・７
図版18　利光遺跡鵜ノ木地区建物８～10
図版19　利光遺跡鵜ノ木地区建物11・12
図版20　利光遺跡鵜ノ木地区建物14～16

図版21　利光遺跡出土旧石器
図版22　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器
図版23　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器
図版24　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器
図版25　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器
図版26　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器
図版27　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器
図版28　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器
図版29　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器
図版30　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器
図版31　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代石器
図版32　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代石器
図版33　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代石器
図版34　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代石器
図版35　利光遺跡鵜ノ木地区竪穴出土土器
図版36　利光遺跡鵜ノ木地区溝１・土坑墓出土土器
図版37　利光遺跡久保地区全景
図版38　利光遺跡久保地区畝状遺構・土坑１
図版39　利光遺跡久保地区土坑２～４
図版40　利光遺跡久保地区土坑５～７
図版41　利光遺跡久保地区土坑９・10・19
図版42　利光遺跡久保地区火葬墓、集石１・２
図版43　利光遺跡久保地区出土遺物
図版44　利光遺跡久保地区出土遺物
図版45　利光遺跡久保地区出土遺物
図版46　利光遺跡久保地区出土遺物
図版47　利光遺跡久保地区出土遺物

# Ⅰ　はじめに

## １．調査に至る経緯

一般国道10号(戸次・犬飼拡幅)工事に伴う道路建設予定地の大南地区は、大野川中流域に位置する。当地域を通過する一般国道10号は県中部と県南を結ぶ主要幹線道路として重要な役割を果たしている。しかし、近年の交通量の増加に伴う慢性的な交通渋滞を引き起こしているのも事実である。このため建設省(現国土交通省)では一般国道10号の渋滞解消と交通の円滑化を図るため、道路改良工事に着手することとなった。

大分県教育委員会では、建設省九州地方建設局との協議に基づき、一般国道10号(戸次・犬飼拡幅)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施することとした。

## ２．調査の経過

平成２年４月に予定路線内の分布調査を実施した結果、６カ所の遺跡及び遺跡推定地を確認した。このため、平成６年８月から用地買収の終了した地点を中心に試掘及び本調査を開始した。

平成６年度は、利光遺跡の試掘及び本調査を実施した。まず、調査対象遺跡内を小字ごとに５地区に分け、それぞれにトレンチを設定し、重機による試掘調査を行った。その結果、鵜ノ木・久保・タンクワ地区で本調査の必要が生じた。そこで９月から鵜ノ木地区の本調査に着手し、この結果、耕作土下80㎝程度の砂泥層を取り除いた面から、近世の柱穴群・掘立柱建物跡や土坑墓等が確認された。また、この遺構検出面は縄文時代の遺物包含層であり、近世遺構調査後、この層の掘り下げを行った。

平成７年度は、利光遺跡・上戸次北遺跡・上戸次遺跡の試掘及び本調査を実施した。利光遺跡では前年度調査した鵜ノ木地区で、縄文時代の遺物包含層の掘り下げを行いつつ、北側部分の試掘調査を実施した。北側部分は後世の攪乱を受けていて、遺構の確認はできなかった。久保地区は表土下80㎝前後で、中世の包含層が確認された。包含層内からは輸入磁器や16世紀後半代の華南三彩片、多量の土師質土器が出土している。包含層下では中世の土坑・火葬墓・柱穴群等が確認された。タンクワ地区は前年度の試掘調査の結果、流紋岩の石核が出土したため、本調査を実施したが、数点の石器類と摩滅した縄文土器が出土しただけで、攪乱を受けた包含層であることが確認された。上戸次北遺跡・上戸次遺跡は大野川の河岸段丘上に位置し、水田として利用されていた。調査は用地買収の終了した地点にそれぞれ試掘トレンチ23本と16本を設定し、重機による遺構検出作業を行った。この結果、両遺跡とも明瞭な遺構・遺物の確認はなかった。

平成８年度は、利光遺跡の本調査を実施した。鵜ノ木地区は前年度調査区北側の未調査部分の掘り下げを行い、近世の溝・土坑・柱穴等を確認した。また、近世面のすぐ下から弥生時代終末期の竪穴住居跡６棟が確認された。脇ノ津留地区は鵜ノ木地区とは脇ノ津留川を挟んで北側に位置する。試掘調査の結果、鵜ノ木地区で確認された近世の遺構面は存在せず、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡15棟を確認した。

## ３．調査団の構成

調査の組織は次の通りである。

平成６年度

| | |
|---|---|
| 調査主体 | 大分県教育委員会 |
| 総　　括 | 帯刀　将人（大分県教育委員会教育長） |
| | 末広　利人（大分県教育庁文化課長） |
| 調査委員 | 賀川　光夫（大分県文化財審議委員、別府大学教授） |
| | 田中　良之（九州大学大学院教授） |
| 調査主任 | 清水　宗昭（県文化課主幹兼埋蔵文化財第一係長） |
| 調 査 員 | 坂本　嘉弘（県文化課主査） |
| | 村上　久和（　　同　主査） |
| | 友岡　信彦（　　同　主任） |
| | 山田　尚志（　　同　嘱託） |

平成７年度

| | |
|---|---|
| 調査主体 | 大分県教育委員会 |
| 総　　括 | 田中　恒治（大分県教育委員会教育長） |
| | 末広　利人（大分県教育庁文化課長） |
| 調査委員 | 下條　信行（愛媛大学教授） |
| 調査主任 | 清水　宗昭（県文化課主幹兼埋蔵文化財第一係長） |
| 調 査 員 | 高橋　徹　（県文化課副主幹） |
| | 友岡　信彦（　　同　主任） |
| | 綿貫　俊一（　　同　主任） |
| | 山田　尚志（　　同　嘱託） |
| | 丸尾　博恵（　　同　嘱託） |

平成８年度

| | |
|---|---|
| 調査主体 | 大分県教育委員会 |
| 総　　括 | 田中　恒治（大分県教育委員会教育長） |
| | 後藤　一郎（大分県教育庁文化課長） |
| 調査委員 | 西谷　正　（九州大学教授） |
| 調査主任 | 清水　宗昭（県文化課主幹兼埋蔵文化財第一係長） |
| 調 査 員 | 高橋　徹　（県文化課副主幹） |
| | 後藤　一重（　　同　主査） |
| | 永井　実　（　　同　主任） |
| | 荒井　孝廣（　　同　嘱託） |

# Ⅱ　遺跡の立地と環境

## 1．地理的環境

利光遺跡のある大分市大字上戸次利光一帯は、大分市の南部、大野川中流域の大南地区に位置する。地形的には大野川東岸の山稜地に囲まれた三日月状の河岸段丘平坦地である。拡幅工事の行われている国道10号線は、大野川に沿って走り、東側の山麓との平坦地に集落が形成されている。この平坦地は現在主に水田として利用されているが、昭和30年代初期に昭和井路の完成に伴い、畑地から水田へと土地改良工事が行われている。この工事に伴い表土の一部を削り、谷など低地を埋めて現在の水田としている。また、この地区は近年まで度々大水に見舞われる地域であり、土砂の厚い堆積がみられる。

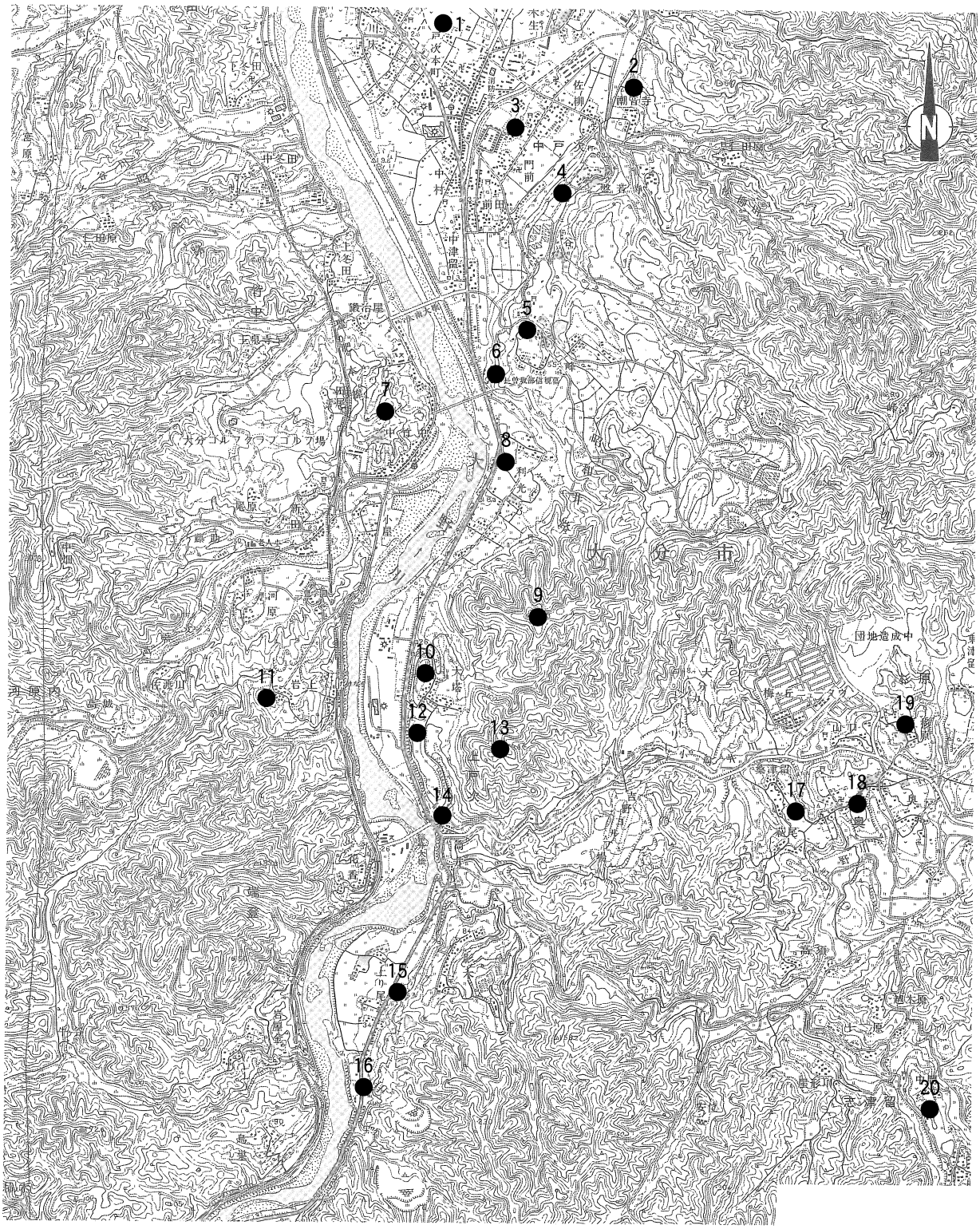
## 2．歴史的環境

当地は江戸時代を通じて臼杵藩領であったが、明治８(1875)年、利光村・嶺村・大塔村・上尾村・影木村・川原村が合併して上戸次村となる。明治22年、戸次村が成立し、大正10(1921)年町制が施行される。昭和29(1954)年判田村・竹中村・吉野村との合併で大南町が成立。昭和38年大野郡大野町安藤の一部を編入後、２市２町１村と合併して大分市となる。

当遺跡の南東側の山頂には鶴ヶ城（鶴城・鶴賀城）跡が位置する。建久７(1196)年１月11日、豊前・豊後両国守護職兼鎮西奉行に任命された大友能直の先発として、実弟古庄重能が６月11日浜脇（現別府市）に上陸したとき、阿南家親が当城に陣を構え抵抗したという(「大友家文書録」)。天正14(1586)年豊後国に進攻した薩摩島津軍は大塔の梨子尾山に布陣、12月７日大友一族である利光宗魚の籠城する鶴ヶ城を攻めた。鶴ヶ城には7百余騎と、農民ら老若男女３千余が立籠っていた。10日に城主利光宗魚は戦死。しかし城の本丸を落とすことはできず、11日まで城を囲んでいた。12日には鶴ヶ城を救援しようと嶺地区山崎一帯に布陣した仙石秀久、長宗我部元親・信親父子、大友義統らの連合軍が大野川東岸の島津軍を攻撃。島津軍をいったんは利光に退却させたが、島津軍の側面からの攻撃に会い、中津留川原に追い込まれ大敗（戸次川原の合戦）、府内へ敗走した(「大友家文書録」)。この合戦で長宗我部信親が討死し、その墓が利光の北、嶺地区の戸次川原を望む丘陵上にある。また、鶴ヶ城跡の山腹にある成大寺には、利光宗魚の墓がある。キリスト教の布教が進んでいた府内近郊にあって、戸次はキリシタンの多い地区でもあった。利光宗魚も天正13年に洗礼を受けたキリシタンで、鶴ヶ城に立籠った人々の中にも多くのキリシタンが含まれていたと考えられる。鶴ヶ城跡の山頂には元禄16(1703)年に建てられた供養塔がある。

成大寺は寺の由来書によると、開山の時期は不明だが、寛弘８(1011)年仏師定朝が毘虜遮那仏２体を刻し上野金剛山宝戒寺とこの成大寺に安置したと伝えられる。大友氏の豊後入封(1196)後、九州探題の惣道場として栄え、その後大友能直の孫重秀（戸次家の祖）が戸次の地を領するに及び、戸次家の祈願所となる。後年戸次貞直の子利直（利光家の祖）が戸次家に代わって戸次を領し、鶴ヶ城城主となってからは、利光家の香華院となった。天正14年の鶴ヶ城の合戦の際、子院もろとも焼失した。慶安元(1648)年「胎蔵山成大寺」（臨済宗妙心寺の末寺）として再興。その後再び廃寺となったが、惣村中の発起により現庵舎が再興された。その後昭和22年、再び廃寺となり現在に至る。境内には利光宗魚の墓の他、観応元(1350)年に没した成大寺住職信庵阿奢梨正忠の墓がある。また、昭和５年に建てられた戸次川原の合戦の戦死者名を刻んだ石碑もある。碑文には「昭和３年御大典ノ時 朝廷更ニ元親ノ遺勲ヲ嘉シ正三位ヲ追贈セラル 是ニ於テ戸次川戦死ノ英霊モ初メテ泉下天恩ニ浴スルヲ得タリ」とあり、この時期の日本で天皇を中心とした歴史の再評価が行われていたことを示している。

参考文献　『大分県の地名』日本歴史地名体系45　平凡社　1995




**第１図　利光遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院戸次本町より転載)**

１．中戸次遺跡　２．潮音寺遺跡　３．佐柳遺跡　４．般若寺遺跡　５．峰遺跡

６．長曽我部信親墓　７．鏡城跡　**８．利光遺跡**　９．鶴ヶ城跡　10．大塔遺跡

11．岩上遺跡　12．応当遺跡　13．応当城跡　14．応当南遺跡　15．上戸次北遺跡

16．上戸次遺跡　17．桑津留遺跡　18．奥遺跡　19．杉原遺跡　20．中間遺跡

# Ⅲ　調査の成果

## 1．利光遺跡の概要

利光遺跡は大分市の南部、大野川右岸の河岸段丘上に位置し、周囲には鶴ヶ城跡・戸次河原合戦跡など中世の豊薩合戦時の遺跡が多数存在する地域である。当該地区は昭和初期までは畑作中心であったが、昭和井路の完成により、水田地帯へと土地の改良が行われている。

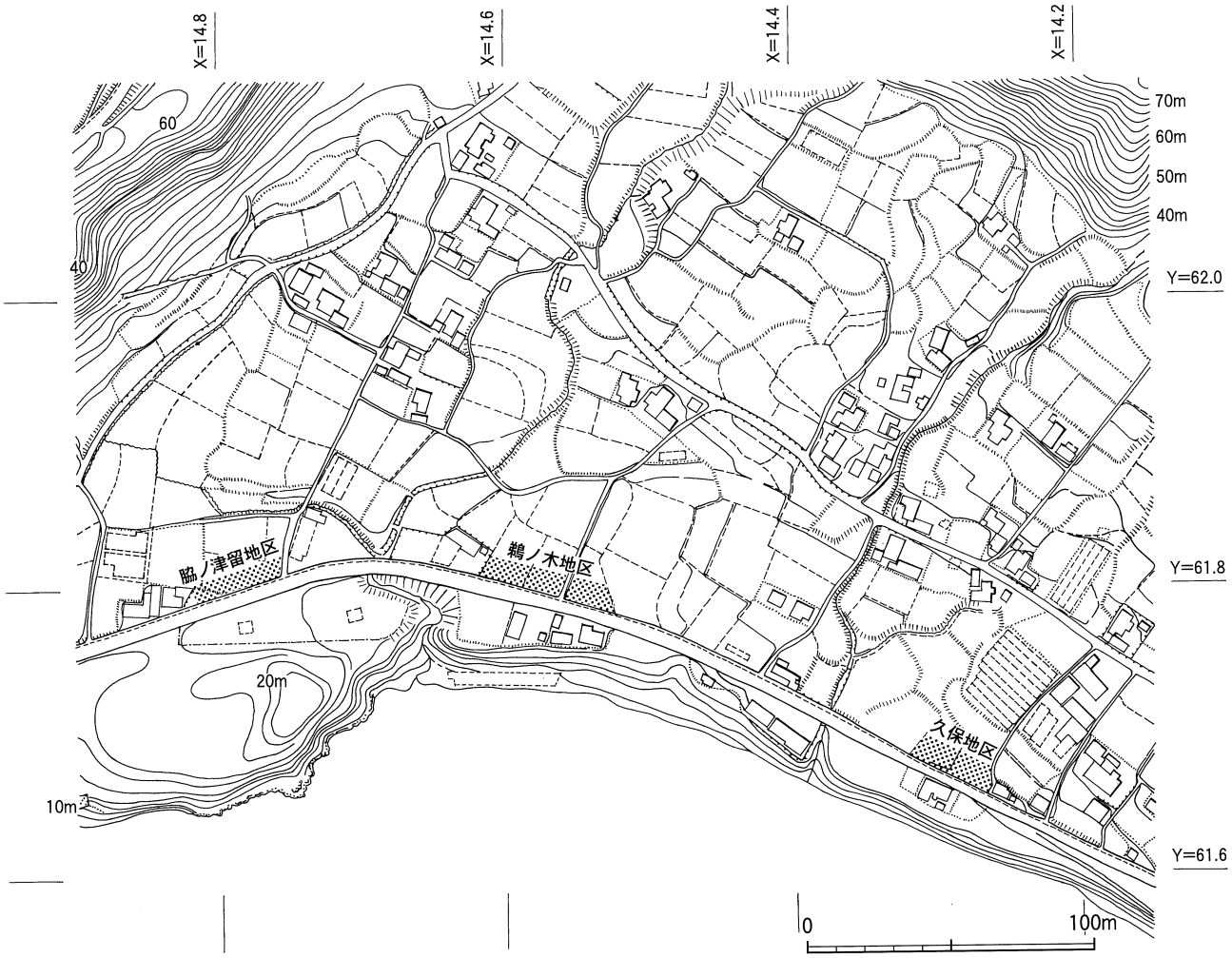
調査対象区は延長約１㎞におよび広汎なため、小字ごとに５地区に分け試掘調査を行った。この結果、脇ノ津留・鵜ノ木・久保・タンクワ地区で遺構の存在を確認した。

脇ノ津留地区は、利光遺跡の北端に位置し、平成８年度に本調査を行った。調査の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡が15棟確認された。

鵜ノ木地区は、利光遺跡のほぼ中央に位置し、平成６～８年度に本調査を行った。表土層から約0.8mで近世の溝・柱穴群・掘立柱建物跡・土坑群等を確認した。この遺構検出面は縄文時代～弥生時代の遺物包含層で、最深で約1.8m程度堆積していた。また、調査区北側では脇ノ津留地区と同時期の竪穴住居跡が５棟確認された。

久保地区は、利光遺跡の南側に位置し、平成７年度に本調査を行った。調査の結果、中世の遺物包含層と、土坑・柱穴群等を確認した。遺構の時期は概ね14世紀代であるが、包含層からは16世紀代の遺物の出土もみられた。

タンクワ地区は試掘調査で旧石器遺物と礫群を確認したため、本調査を行ったが、旧石器遺物は包含層出土であり、礫群は旧河川敷跡と確認されたため、以後の掘り下げは行わなかった。




第２図　利光遺跡周辺地形図(1／2500)

## ２．利光遺跡出土の旧石器時代遺物

### 鵜ノ木地区

利光鵜ノ木遺跡からは、縄文時代の遺物とともに後期旧石器時代の石器類が出土している。これらの本来の包含層はすでに失われているものであるが、特徴的な石器がみられるので、抽出して記述する。

**ナイフ形石器（第３図１・２）**

１・２ともに典型的なナイフ形石器ではないが、一側辺に刃潰し加工を施しており、ナイフ形石器の中に含まれる。１は横長剥片を素材とし、一端を尖鋭的に加工したポイント状の石器である。２も横長剥片とみられる素材であり、偏三角形の一部に刃潰し加工、基部に調整加工を施した三稜尖頭器に近い形態のものである。

**スクレイパー類（第３図３～８）**

いずれも片面加工の削器・掻器類である。３・５～７は削器、８は掻器、４は両方の用途をもったものと分類できるであろう。とくに４は、打面部の一側もノッチとして加工している。素材については、５・６は横長剥片、他は幅広の縦長剥片である。

**尖頭器（第３図９）**

サヌカイト製の尖頭器である。横長の剥片を素材としており、両面加工によって一端を尖鋭化している。基底部は切損面となっているが、そこから新たな基部加工がなされている。パティナが新しい感を受けるため、あるいは縄文時代の可能性もある。

**剥片類（第４図10～21）**

10～21は縦長剥片と石刃である。15は石刃としてよいものである。18は打面再生のための輪切り状の剥片。19は幅広剥片。20・21は自然面を多く残す不定形剥片である。石核調整時のものであろう。

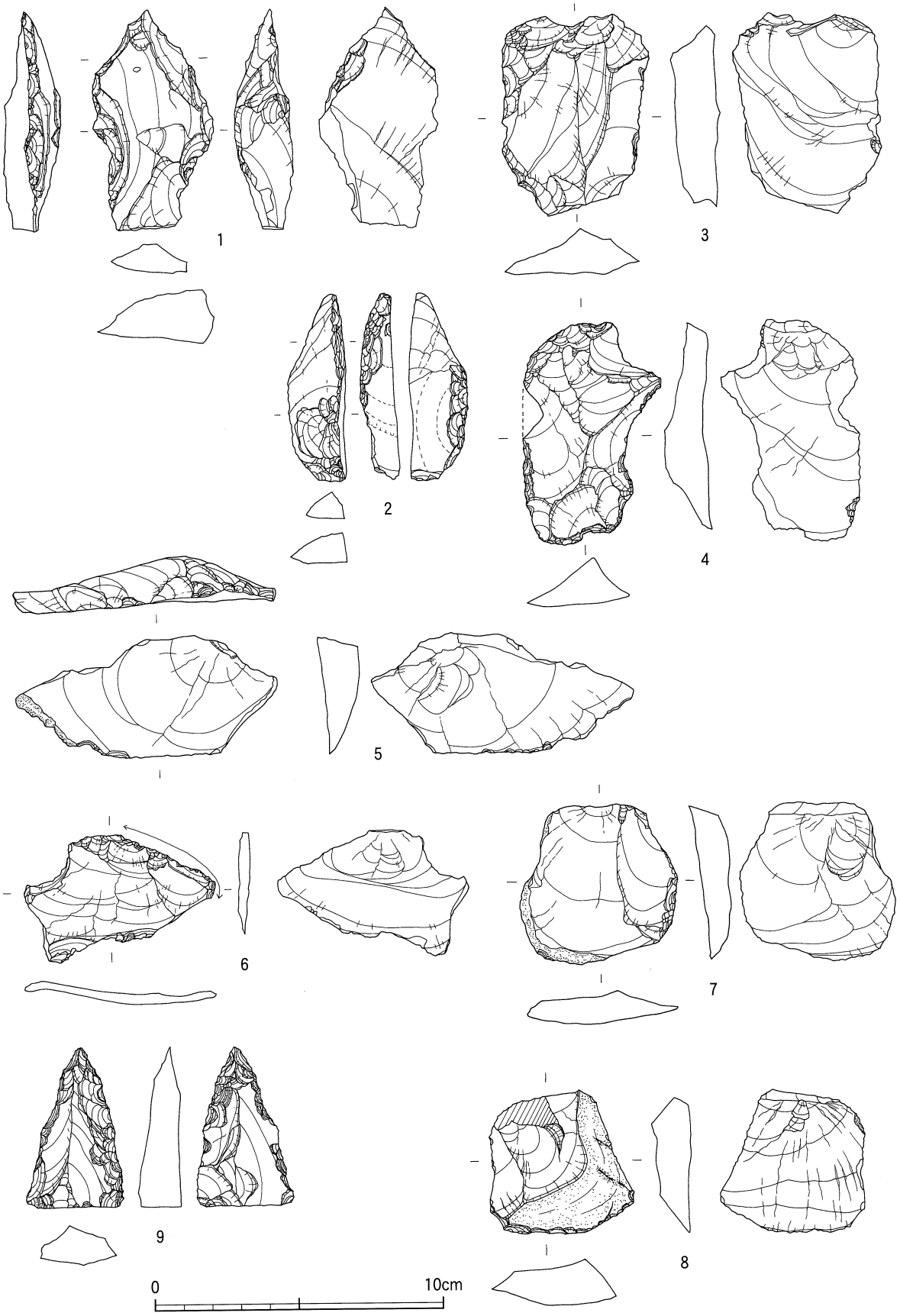
**石核（第５図22～25）**

22・24は剥片素材の石核。22はやや小型の自然面を残すもの。22は、多面体の残核とみられるもの。24は大きな剥片剥離ののち、一側面に再加工し、スクレイパーとしたもの。25は円盤状をなす石核。26は大きな円礫を半裁してその面を打面とし、略円錐形に幅広の剥片剥離を行ったものである。

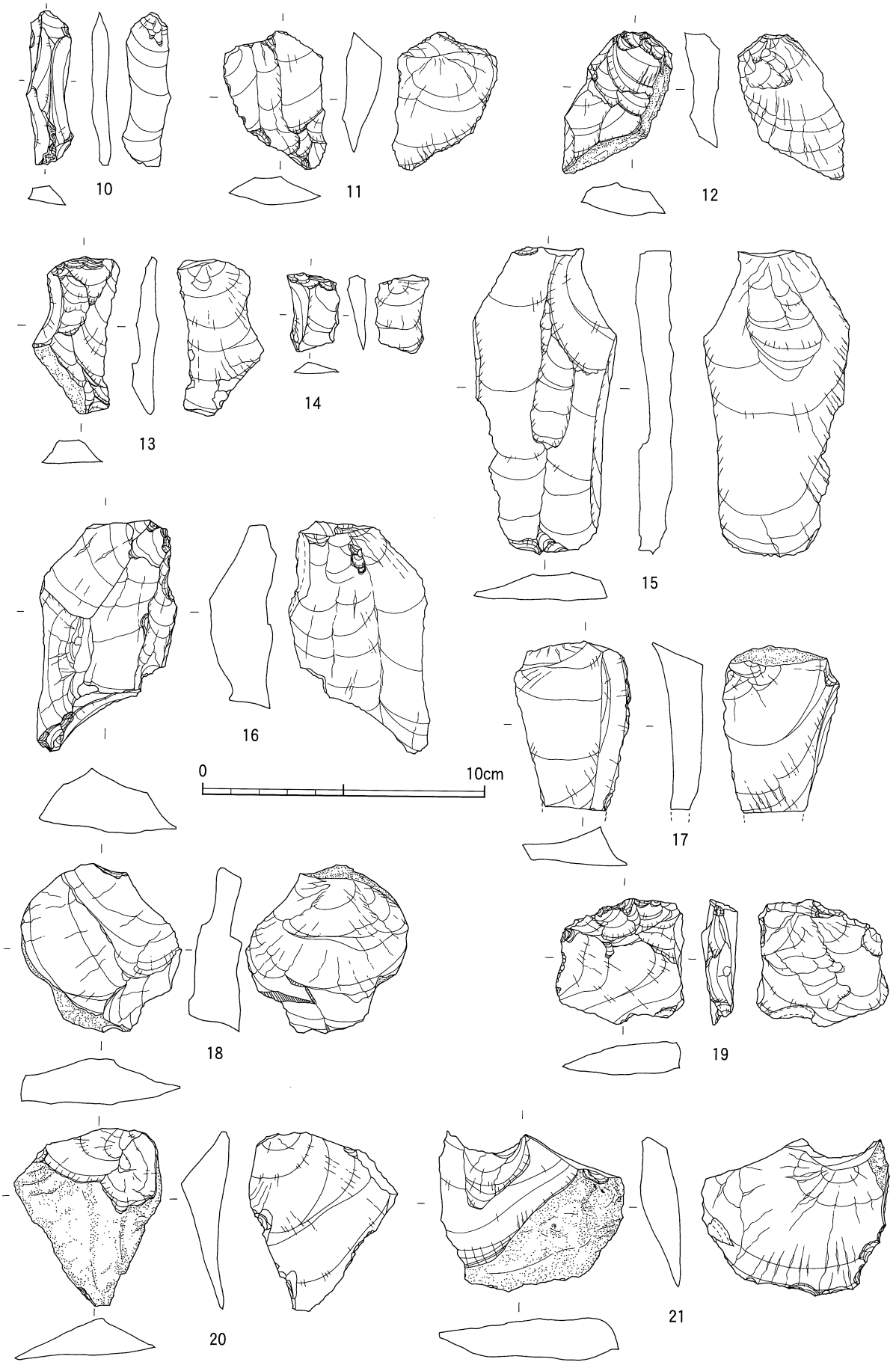
以上旧石器時代の遺物については、時期を示す典型的な石器は少ないが、素材となる横長剥片の存在、またその母材たる剥片素材石核からみて、その多くはＡＴ降灰後の時期に属するものとみられる。

**表１　利光遺跡旧石器時代石器計測表１**

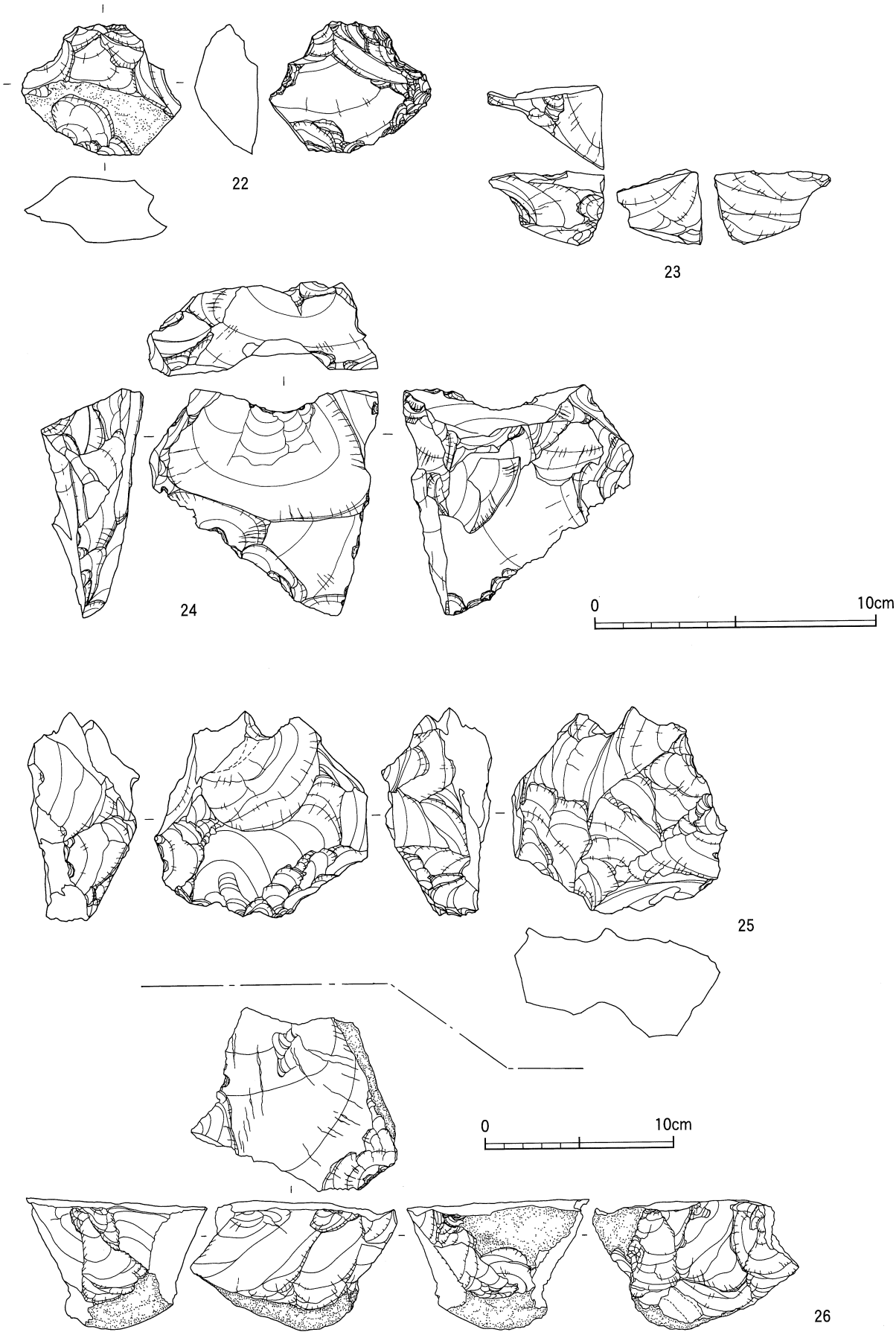
| 遺物番号 | 出土地区 | 出土地点 | 器種 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚み(cm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鵜ノ木 | C5-49 | ナイフ形石器 | ホルンフェルス | 7.6 | 4.2 | 1.95 | 49.8 | |
| 2 | 鵜ノ木 | C4-33 | ナイフ形石器 | ホルンフェルス | 6.5 | 2 | 1.2 | 16.7 | |
| 3 | 鵜ノ木 | C3-15下 | 削器 | ホルンフェルス | 7 | 5.15 | 1.65 | 56.4 | |
| 4 | 鵜ノ木 | C3-38 | 抉入削器 | ホルンフェルス | 7.6 | 4.8 | 1.55 | 44.1 | |
| 5 | 鵜ノ木 | B6-72 | 削器 | ホルンフェルス | 4.2 | 9.15 | 1.45 | 48.6 | |
| 6 | 鵜ノ木 | B2-80 | 削器 | ホルンフェルス | 4.45 | 6.6 | 0.9 | 13.1 | |
| 7 | 鵜ノ木 | C2-14 | 削器 | ホルンフェルス | 5.5 | 5.45 | 1.4 | 38.9 | |
| 8 | 鵜ノ木 | 中層一括 | 掻器 | ホルンフェルス | 4.9 | 5.05 | 1.5 | 37.9 | |
| 9 | 鵜ノ木 | ２トレンチⅢ層 | 尖頭器 | サヌカイト | 5.55 | 3.4 | 1.55 | 24.3 | |
| 10 | 鵜ノ木 | C3-63上層一括 | 剥片 | 珪化木 | 5.45 | 1.75 | 0.8 | 6.2 | |
| 11 | 鵜ノ木 | C5-39 | 剥片 | ホルンフェルス | 4.9 | 3.75 | 1.35 | 17.8 | |
| 12 | 鵜ノ木 | C5-35 | 剥片 | ホルンフェルス | 5.1 | 4.85 | 1.35 | 21.7 | |
| 13 | 鵜ノ木 | C3-17 | 剥片 | ホルンフェルス | 5.55 | 3.1 | 1.2 | 16.3 | |
| 14 | 鵜ノ木 | C3-2ﾄﾚﾝﾁ | 剥片 | ホルンフェルス | 2.75 | 1.9 | 0.7 | 3 | |
| 15 | 鵜ノ木 | C6-48 | 石刃 | ホルンフェルス | 10.8 | 5.1 | 1.35 | 72.7 | |
| 16 | 鵜ノ木 | A3-12上 | 剥片 | ホルンフェルス | 8.2 | 5 | 2.35 | 85.1 | |
| 17 | 鵜ノ木 | B3-32 | 剥片 | ホルンフェルス | 6 | 4.15 | 1.85 | 39.9 | |
| 18 | 鵜ノ木 | B5-68 | 剥片 | ホルンフェルス | 5.95 | 5.7 | 1.85 | 55.9 | |
| 19 | 鵜ノ木 | C6-49 | 剥片 | ホルンフェルス | 4.45 | 4.6 | 1.25 | 26.8 | |
| 20 | 鵜ノ木 | B6-70 | 剥片 | ホルンフェルス | 6.3 | 5.3 | 1.7 | 33.5 | |
| 21 | 鵜ノ木 | C5-33 | 剥片 | ホルンフェルス | 5.65 | 6.7 | 2.15 | 55.2 | |
| 22 | 鵜ノ木 | C2-13 | 石核 | ホルンフェルス | 4.65 | 5.75 | 2.35 | 59.5 | |
| 23 | 鵜ノ木 | B6-61 | 石核 | ホルンフェルス | 2.65 | 4.1 | 3 | 20.2 | |
| 24 | 鵜ノ木 | 3トレンチ-1530 | 石核 | ホルンフェルス | 8.1 | 8.25 | 3.9 | 144.4 | |
| 25 | 鵜ノ木 | C3-2G最下層 | 石核 | ホルンフェルス | 7.4 | 7.6 | 3.9 | 194.2 | |
| 26 | 鵜ノ木 | 17トレンチ-2 | 石核 | ホルンフェルス | 6.85 | 11.15 | 9.7 | 657.5 | |




第３図　利光遺跡出土旧石器時代石器実測図（1／2）




第４図　利光遺跡出土旧石器時代剥片類実測図（1／2）



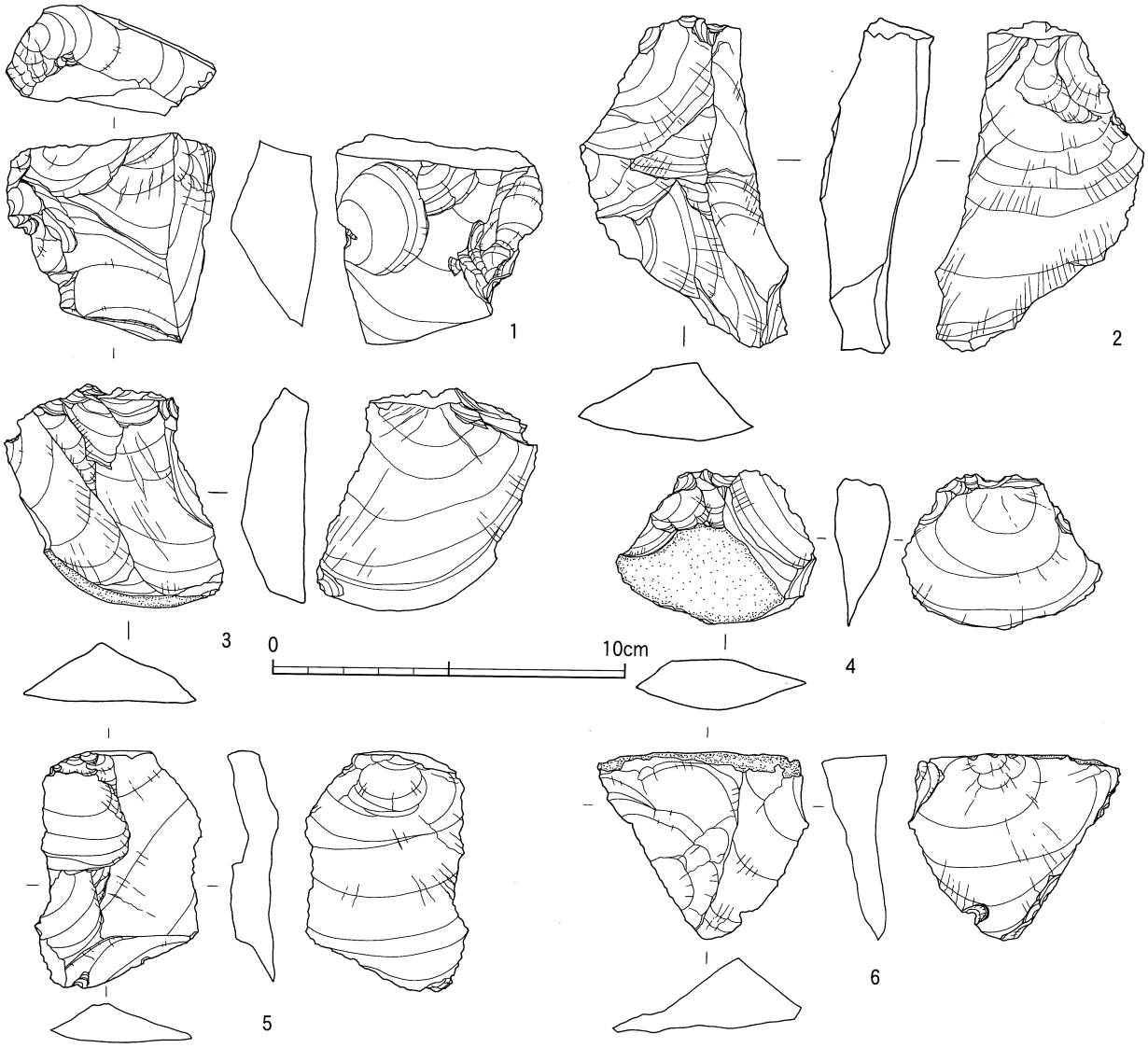

第５図　利光遺跡出土旧石器時代石核類実測図（1／2・1／3）

**タンクワ地区（第６図１～５）**

１は剥片素材の直交する打面をもつ石核。２・３はノの字状をなす幅広の剥片。ともに平坦な打面をもつ。４は調整された打面と背面に大きな自然面をもつ。５は幅広の縦長剥片である。石材はいずれもホルンフェルス類である。

**久保地区（第６図６）**

ほぼ三角形をなす。自然面を打面とする幅広の剥片。




**第６図　利光遺跡出土旧石器時代石器実測図（1／2）**

**表２　利光遺跡旧石器時代石器計測表２**

| 遺物番号 | 出土地区 | 出土地点 | 器種 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚み(cm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | タンクワ | 表採 | 石核 | ホルンフェルス | 5.15 | 6.1 | 3.05 | 94.2 | |
| 2 | タンクワ | 14 | 剥片 | ホルンフェルス | 9.45 | 5.95 | 2.25 | 93.6 | |
| 3 | タンクワ | 19 | 剥片 | ホルンフェルス | 6.4 | 6.25 | 1.75 | 65.2 | |
| 4 | タンクワ | 12 | 剥片 | ホルンフェルス | 4.4 | 5.7 | 1.5 | 31.9 | |
| 5 | タンクワ | 表採 | 剥片 | ホルンフェルス | 6.7 | 4.65 | 1.45 | 36.6 | |
| 6 | 久保 | B11-28 | 剥片 | ホルンフェルス | 5.3 | 6 | 2.3 | 43.7 | |

## 3. 利光遺跡脇ノ津留地区

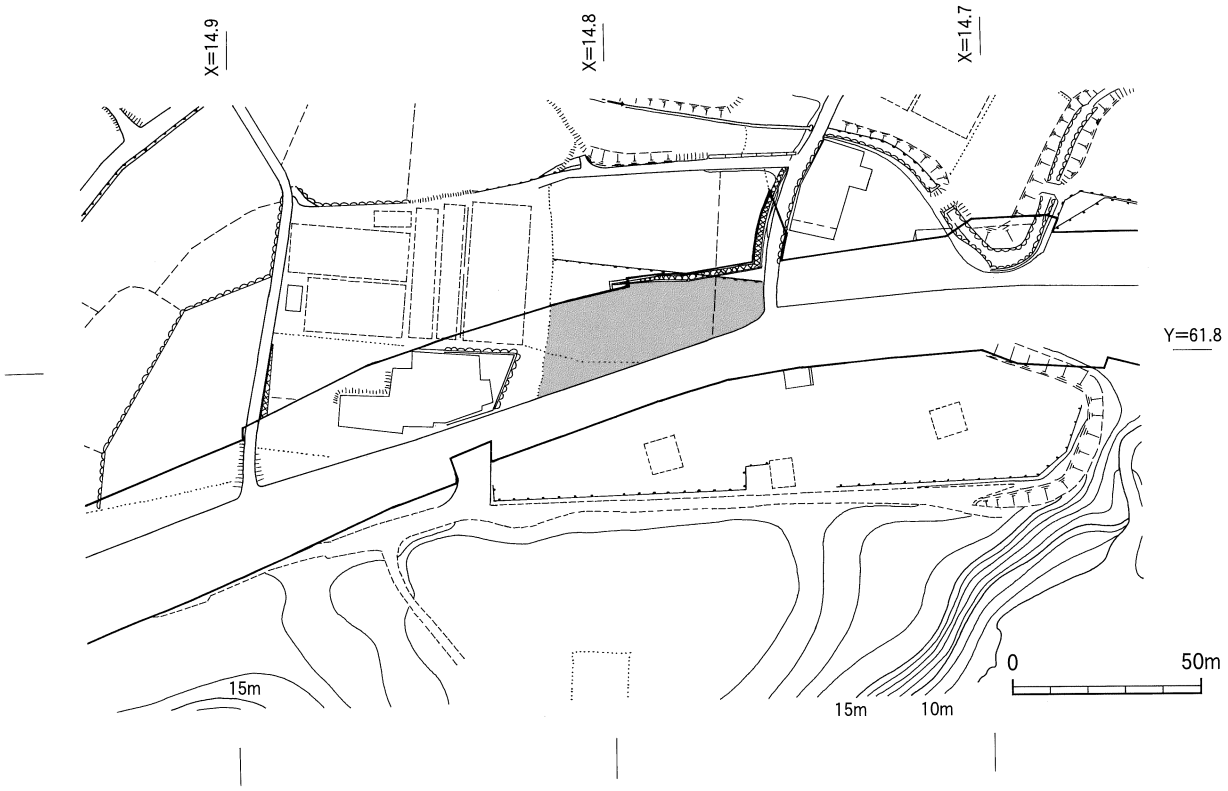
### A. 遺跡の概要

遺跡は大分市大字上戸次字脇ノ津留に所在する。大野川右岸に展開する利光遺跡群のなかで最も下流の北側に位置しており、小河川の脇ノ津留川をはさみ鵜ノ木地区に隣接する。

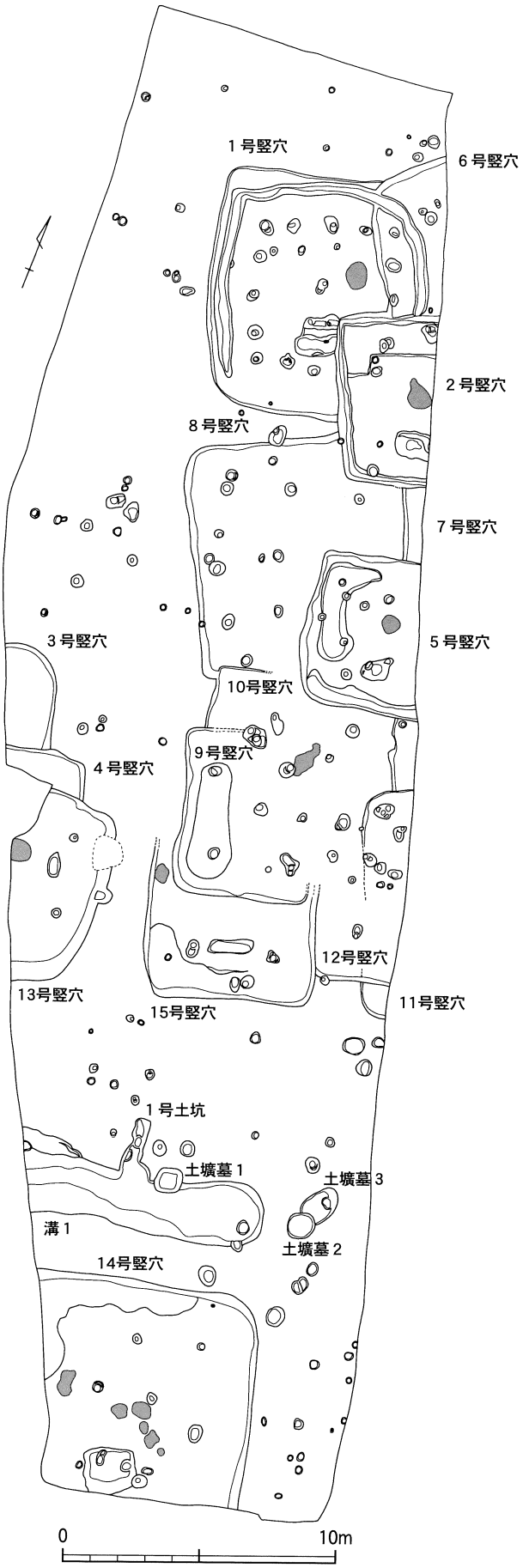
脇ノ津留地区では、隣接する鵜ノ木地区の調査において中世、弥生時代、縄文時代の遺構・遺物が検出されているのを受けて、まず試掘調査を行った。調査では、調査区内に２×６ｍのトレンチを２本設定した。手掘りによる掘り下げを行った結果、上層では近世の瓦などが検出されたが遺構は確認されなかった。さらに１ｍ程掘り下げたところ、弥生時代の遺物とともに竪穴群が検出された。以上の状況から本調査を実施することとしたが、排土置き場の関係から調査区を二つに分け、まず北側の三分の二の調査を行った後、残りの地区の調査を行った。

本調査では重機による調査区の掘り下げを行い、表土下１ｍ程で竪穴群を検出した。竪穴群は複雑に重複しており、調査は慎重に進められた。その結果、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴が15基確認された。竪穴はいずれも方形を呈するものであるが、そのうち半数が調査区外に及ぶ。このほか溝１条、土壙墓３基を検出した。これらは、近世の所産と考えられる。

さらに、縄文時代の包含層の有無を確認するため、竪穴のない部分にトレンチを設けた。隣接する鵜ノ木地区で縄文時代早期から晩期の良好な包含層が確認されているため脇ノ津留地区でもその存在が期待されたが、トレンチを竪穴検出面から１ｍ程掘り下げても包含層は確認されなかった。




第７図　利光遺跡脇ノ津留地区周辺地形図（1／2000）




第8図　利光遺跡脇ノ津留地区遺構配置図

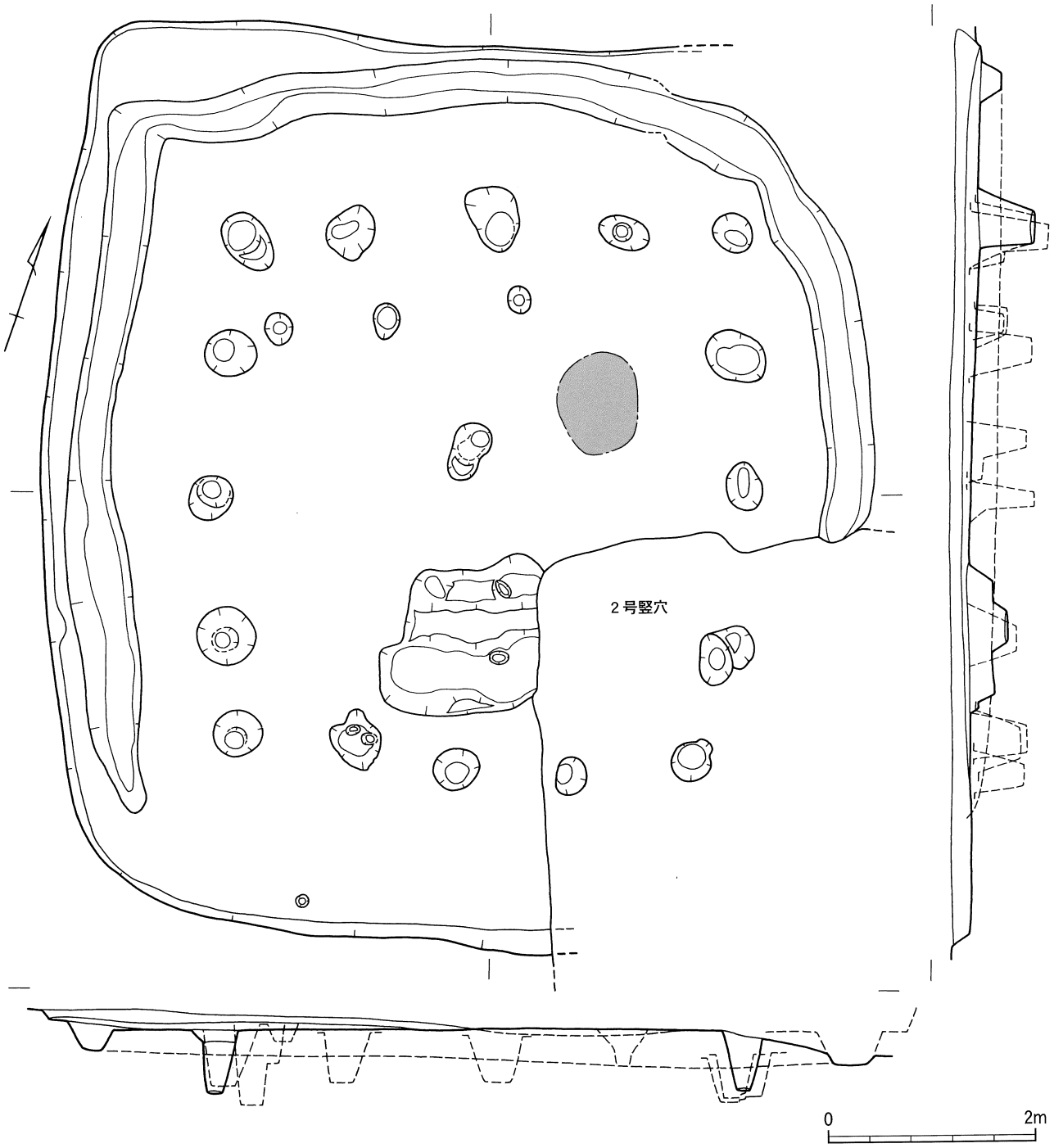
## B.　弥生・古墳時代の遺構

### a）竪穴住居跡

#### 1　1号竪穴（第9図）

1号竪穴は竪穴群の最も北側に位置するもので、東側を2号竪穴と6号竪穴に切られる。

平面プランは方形で、規模は他の竪穴に切られていない西側の一辺が約8.4mを測る。また、竪穴の深さは検出面から20㎝程で、本遺跡の中では比較的浅いものである。主柱穴の配置については、やや特異な形態を呈する。すなわち、各々の壁から約2mの位置で柱穴を方形に巡らし、加えて中央に1本配置するというもので、主柱穴は合計17本を数える。壁に沿い方形に巡らされた柱穴は、4本柱の間の各辺にさらに3本を配置した形態である。各柱間の長さはおおむね心々で1mか



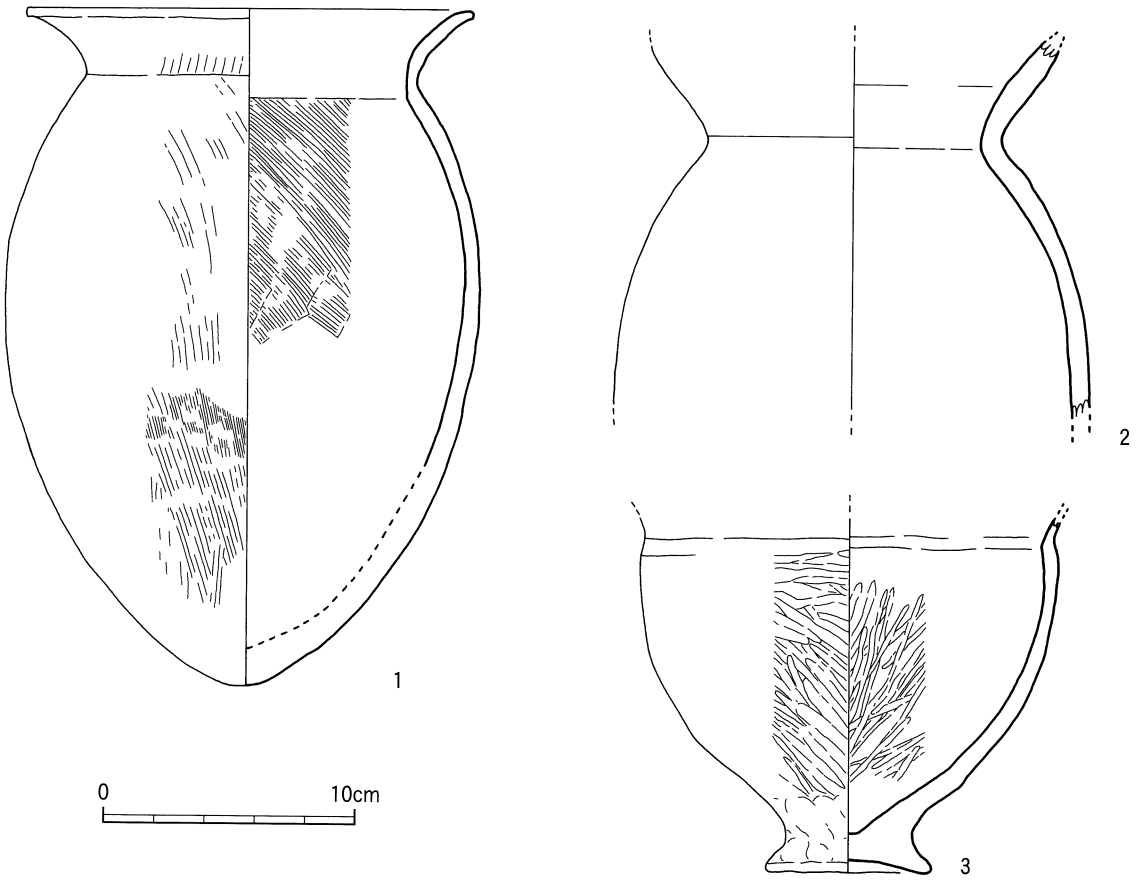

第9図　利光遺跡脇ノ津留地区1号竪穴実測図（1／60）

ら1.2mである。さらに、竪穴の中央にも１本配置されるが、これら合計17本の柱穴はいずれも規模や深さが同様である。よって、これらを柱穴の形状や規模から、主柱穴と補助柱に区別するのは難しい状況である。また、柱列と壁の間には、南側をのぞき溝が巡らされる。溝は幅40～60㎝、深さ約20㎝の規模である。竪穴内の壁に沿う溝が、壁直下に巡らされる場合が多いのに対し、本竪穴では壁から10～70㎝離れて巡らされる。しかし、溝は微妙に蛇行するなど整然さを欠き、コーナー部では北西コーナーで直角にちかく曲がるのに対し、北東コーナーでは隅丸を呈する。このほか、竪穴内の遺構として炉跡と土壙がある。炉跡と思われる焼土は竪穴中央東よりにみられる。焼土は長径１m、短径0.8mの楕円形を呈するもので、比較的規模が大きい。土壙は中央の柱穴と南側柱穴列の間に位置する。２号竪穴に切られ全体が不明であるが、南北1.4m、東西1.6m以上の規模をもつ。深さは、最も深い部分で約40㎝を測る。最後に、竪穴からの出土遺物は、規模に比し少量であった。

竪穴出土土器（第10図）には、甕と脚付き鉢がある。

１、２は甕である。１は完形品で、口径17.8㎝、高さ26.6㎝、胴部最大径18.8㎝である。口縁部は頸部から緩やかにくの字状に外反する。胴部は長胴気味で、胴部最大径は中程にある。底部は、わずかに平底の痕跡が残るような尖底状を呈する。調整は胴部内外面ともハケメが施される。２は口縁部と胴部下半を欠くものである。口縁部は頸部からくの字状に緩やかに外反し、胴部は長胴気味である。

３は脚付き鉢である。口縁端部を欠くが、頸部から短く折れる。肩部に最大径があり、胴下半に向かいすぼまる。底部には短い脚が付く。調整は、胴部内外面にヘラミガキが施される。

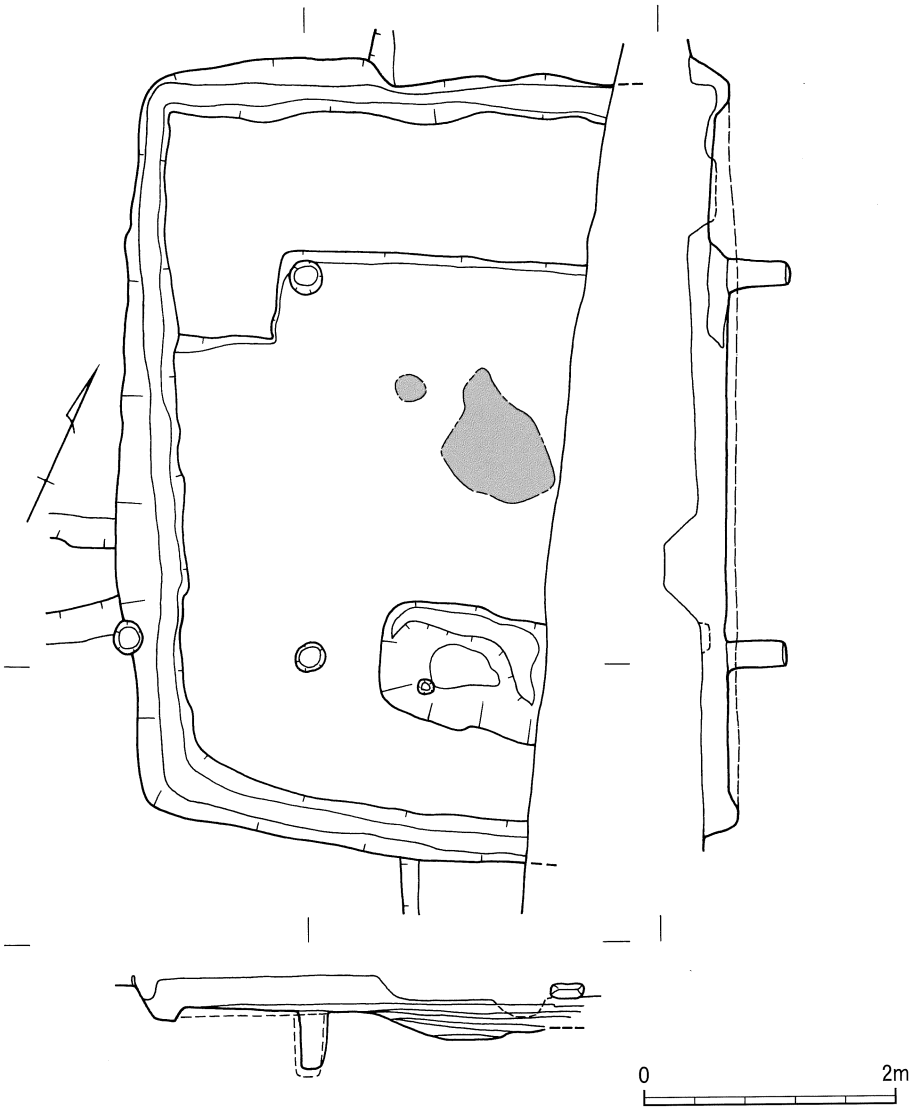



第10図　利光遺跡脇ノ津留地区１号竪穴出土土器実測図（1／3）

## 2　2号竪穴(第11図)

2号竪穴は、1号竪穴と一部重複しながらその南東側に位置する。このほか、6号竪穴、7号竪穴、8号竪穴とも重複し、すべての竪穴を切る。

竪穴は平面プラン方形で、東半分が調査区外に及ぶ。規模は、全体が明らかな西側の一辺から、一辺約5.8mほどと推定される。深さは、遺構検出面から約50cmを測り、本遺跡の竪穴では深い方に位置付けられる。各辺には、壁に沿い溝が巡らされる。溝は、幅20～30cm、深さ約10cmを測る。また、竪穴の北側の壁に沿いベッド状遺構がみられる。ベッド状遺構はL字状を呈し、北側の壁から西側の壁に沿い折れ曲がる。幅は北側が1.2m、西側が0.8mを測り、床面からの高さは0.1m程である。次に主柱穴の配置についてみてみよう。東半分が調査区外に及び全体が不明ながら、4本柱と推定される。北側の柱穴はベッド状遺構のコーナー部に位置し、南側柱穴との心々距離は3mである。このほかの竪穴内の遺構として、炉跡と土壙がある。炉跡と思われる焼土は竪穴のほぼ中央にみられる。焼土は2ヶ所に分かれており、大きい方は不定形、小さい方は円形を呈する。大きい方は長径1.1m、短径0.8m、小さい方は径0.2mである。また、土壙は竪穴中央南側の主柱穴間にある。長軸を東西方向にもち、東側が調査区外に及ぶ。規模は短軸1.0m、長軸1.4m以上である。



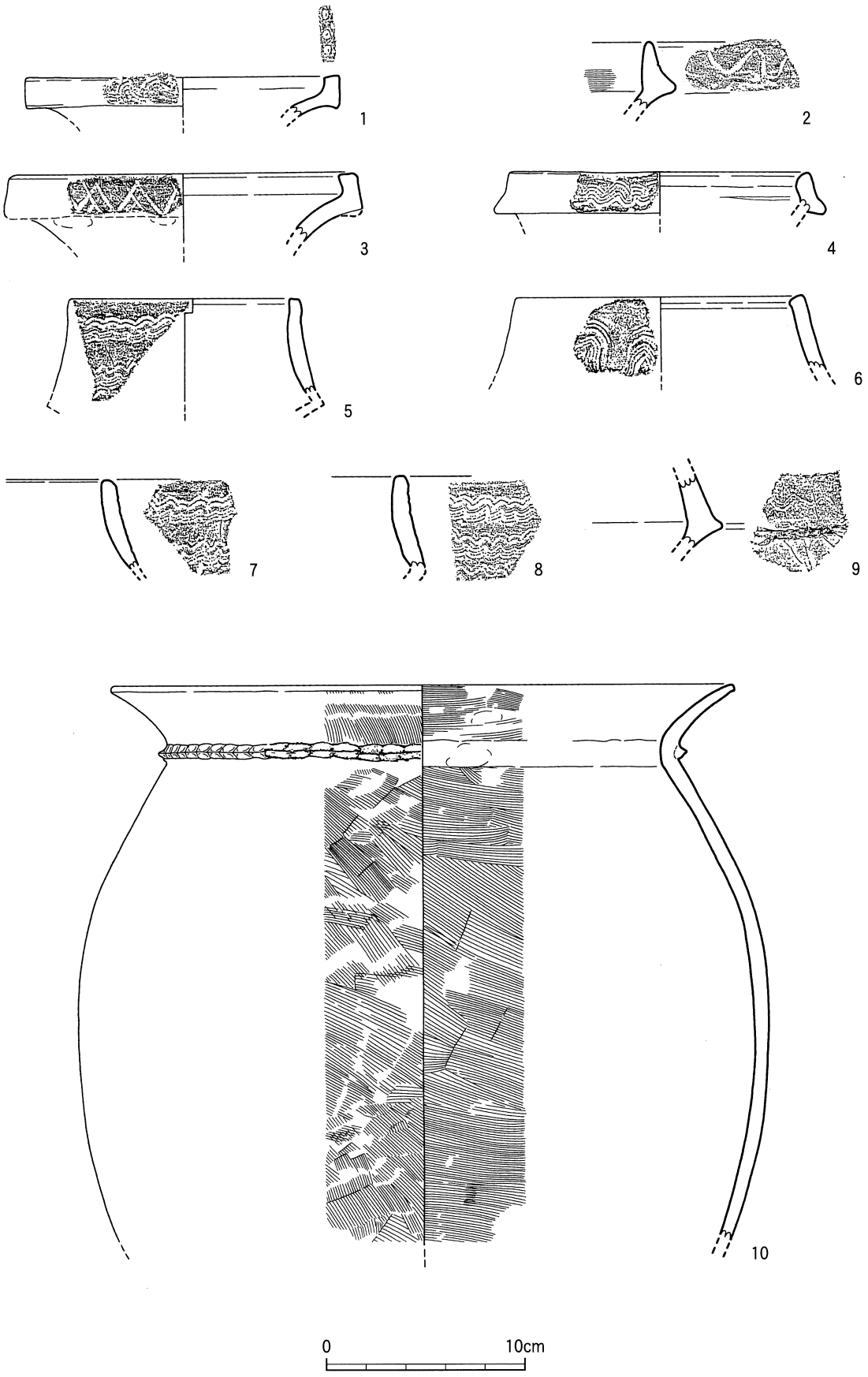

第11図　利光遺跡脇ノ津留地区2号竪穴実測図（1／60）

竪穴出土土器（第12～14図）は、壷、甕、高坏、鉢がある。

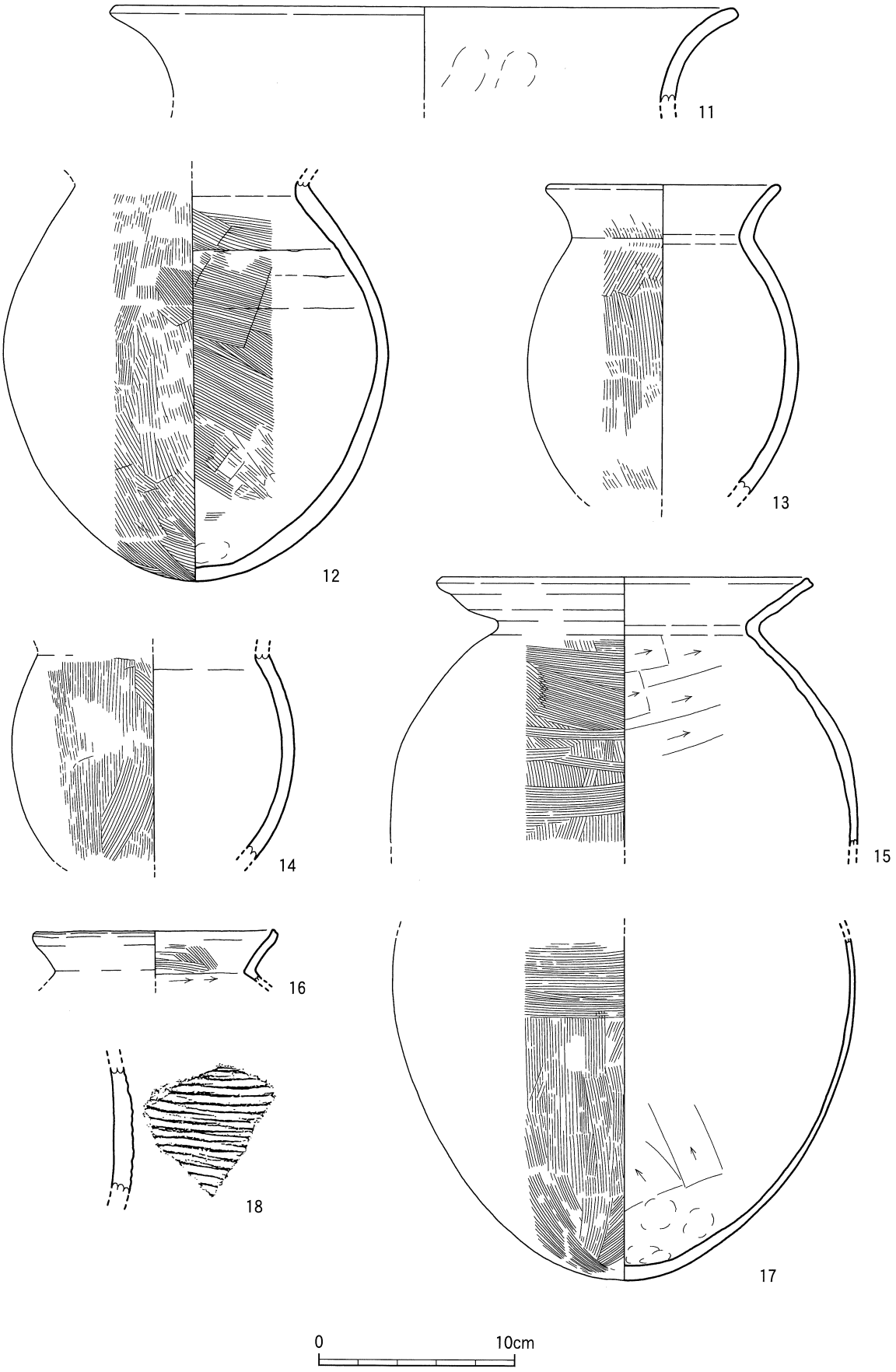
１～９は壷で、いずれも二重口縁壷である。１は口縁部が短く直立に立ち上がるものである。口縁部外面に櫛描波状文がみられ、上面に竹管状工具による刺突が施される。口径は15.8㎝である。２は外反気味に口縁部が直立するもので、口縁外面にはヘラ状工具による波状文がみられる。３は１と同様な器形を呈するもので、口縁が直立気味に立つ。口縁外面には、ヘラ状工具による連続山形文が施される。４は短い口縁部が内傾気味に立ち上がる。口縁外面には櫛描波状文がみられる。５～９は口縁部の立ち上がりが長い一群である。５は口径11.8㎝の小型品である。口縁外面には、櫛描波状文が２段にわたってみられる。６は口径14.8㎝である。口縁部は内傾気味に立ち上がる。口縁外面には、櫛描波状文が施される。７も口縁部が内傾気味に立つ。口縁外面には櫛描波状文が、２段にわたりみられる。８も７と同様な器形を呈するもので、櫛描波状文が２段にわたり施される。９は口縁部の立ち上がり部である。外面には櫛描波状文がみられる。

10～18は甕である。10は口径32㎝を測る比較的大型のものである。口縁部は頸部からくの字状に外反し、頸部には突帯が付される。頸部の突帯は断面三角形で、指によるツマミが連続的に施される。調整は、内外面ともハケメがみられる。11は口縁部のみの資料である。口径31.8㎝を測る大型のものである。12は口縁部を欠く胴部のみの資料である。最大径が中程にあり、球形の胴部を呈する。底部は丸底で、内外面ともハケメ調整が施される。外面のハケメは縦方向、内面のハケメは斜方向である。13は小型品で、口径は12㎝である。底部を欠くが、胴部は長胴気味である。胴部外面に縦方向のハケメがみられ、内面はナデにより仕上げられている。14は口縁部と底部を欠くもので、球状の胴部を呈する。調整は、外面が縦方向のハケメ、内面がナデによる仕上げである。15は口縁部が強くくの字状に折れるもので、口径18.6㎝を測る。胴部下半を欠くが、球状の胴部を呈するものと思われる。調整は胴部外面下半が縦方向のハケメ、外面上半が横方向のハケメで、内面にはヘラケズリが施される。16は小型品の口縁部で、口径12.2㎝である。口縁端部は上方につまみ上げ気味である。口縁部内面にハケメ調整が施され、胴部内面にはケズリがみられる。17は丸底を呈する胴部下半の資料である。外面下半には縦方向のハケメが、上半には横方向のハケメが施される。また、内面にはヘラケズリの後ナデが施され、底部ちかくにはオサエがみられる。18は胴部の破片である。外面には、比較的粗い平行タタキが横方向に施される。内面は丁寧なナデである。

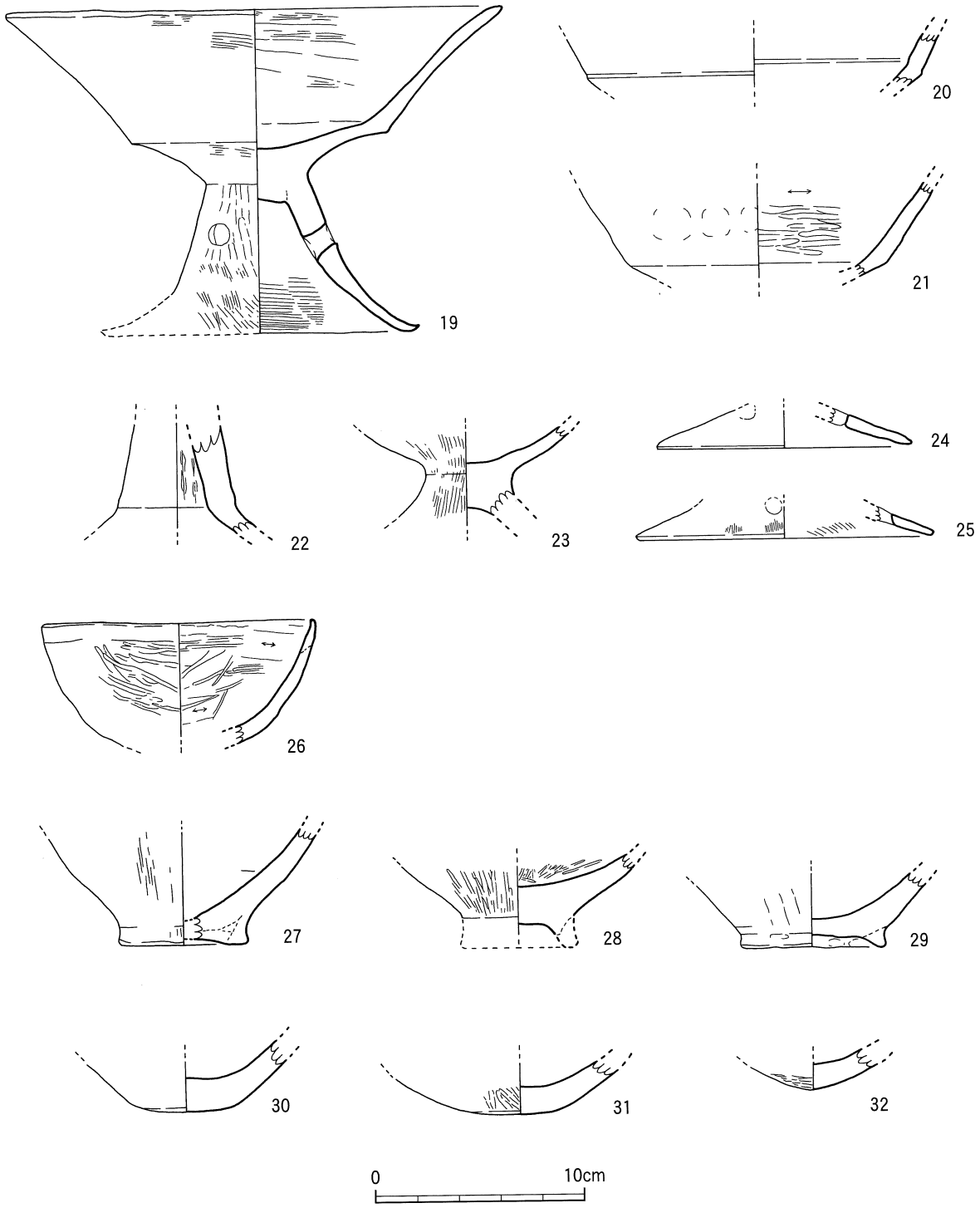
19～25は高坏である。19はほぼ完形の資料で、口径23.６㎝、高さ17.７㎝、復元底径７.６㎝を測る。坏部は下部に稜をもち、外反気味に大きく口縁部に向かい立ち上がる。坏部内底面は凹んでいる。脚部は比較的短めで、裾部へ緩やかに開く。脚部端部は、上方につまみ上げ気味である。脚部上部には、円形の透かし穴がみられる。また、坏部と脚部の接合部には、円盤充填が確認される。調整は、坏部内外面がハケメ後ナデである。脚部は、外面上半が縦方向のヘラミガキ、下半がハケメである。内面はナデとハケメ調整がみられる。20は坏部の資料である。口縁立ち上がり部のみで、稜をもち口縁に向かい緩やかに開く。21も坏部立ち上がり部の資料である。坏部下半に稜をもち、口縁部に向かい斜方向に開く。調整は、外面がナデとオサエ、内面が横方向のヘラミガキである。22は脚部の破片である。外面はナデ及びヨコナデ調整が施され、内面には絞り痕とナデがみられる。23は脚付き鉢の可能性もある。脚は低めのものと考えられ、裾部に向かい開く。調整は、外面が脚部及び坏部とも縦方向のハケメで仕上げられる。内面は、坏部が板状工具によるナデ、脚部がナデである。24は低脚の裾部である。底径は16.2㎝を測る。裾部に向かい大きく開くもので、円形の透かし穴がみられる。透かし穴は、外から内に向け焼成前に施されている。調整は内外面ともナデである。25は24と同様な器形である。底径は14.2㎝を測る。やはり円形の透かし穴がみられるが、24に比べ低い位置にある。内外面とも細かなハケメ調整が施される。




第12図　利光遺跡脇ノ津留地区２号竪穴出土土器実測図１（1／3）




第13図　利光遺跡脇ノ津留地区２号竪穴出土土器実測図２（1／3）




第14図　利光遺跡脇ノ津留地区２号竪穴出土土器実測図３（1／3）

26は鉢である。丸底を呈する椀状のもので、口径13.2㎝を測る。調整は、外面がナデ後ヘラミガキ、内面がケズリ後ヘラミガキが施される。

27～32は底部である。このうち27～29は平底のもの、30はわずかに平底が残るもの、31、32は丸底を呈するものである。

### 3　3号竪穴（第15図）

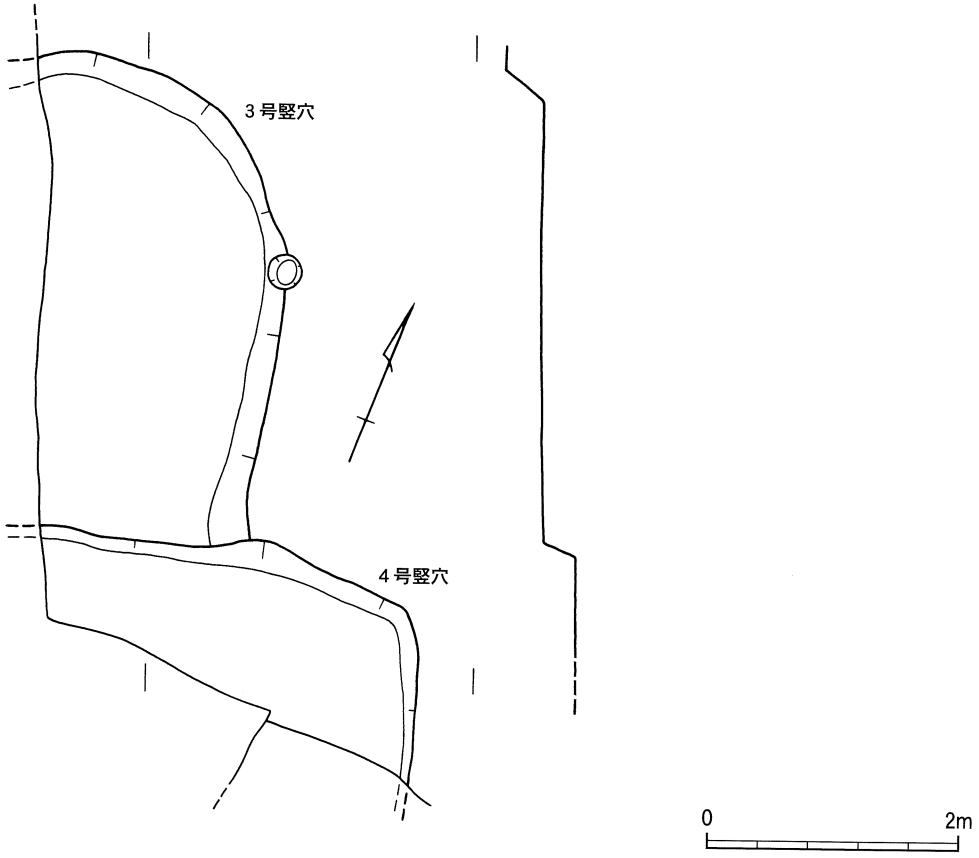
3号竪穴は、調査区中央西側に位置する。

調査区中央西側では、3号竪穴、4号竪穴、13号竪穴が重複してみられる。3号竪穴は4号竪穴により切られ、その大半が調査区外に及ぶ。平面プランは方形を呈すると思われるが、全体の規模などは不明である。検出した部分はコーナー部分であるが、隅丸を呈する。竪穴内から目立った出土遺物はなかった。

### 4　4号竪穴（第15図）

3号竪穴、13号竪穴とともに調査区中央西側に位置する。

4号竪穴は、3号竪穴を切り、13号竪穴により切られる。平面プランは方形を呈すると思われるが、竪穴の大半が調査区外に及ぶため3号竪穴同様全体の規模は不明である。検出した部分は、北東のコーナー部であるが、3号竪穴に比べ角張ったコーナーである。検出面からの竪穴の深さは、約60㎝を測る。出土遺物としては、土器がわずかに出土した。



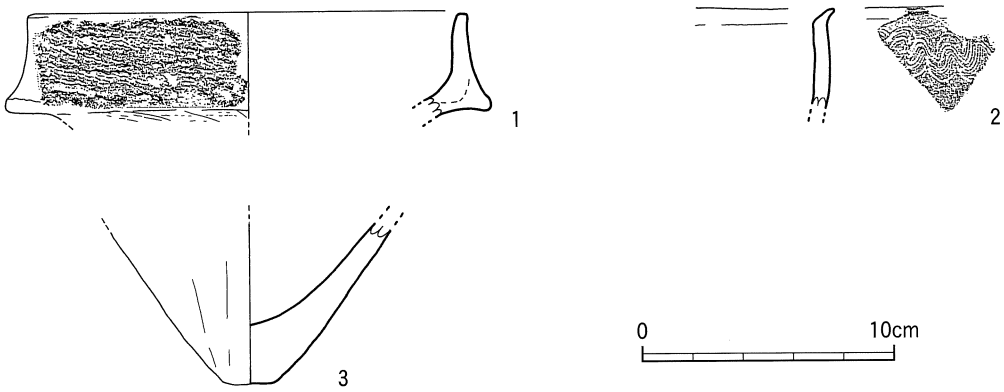

第15図　利光遺跡脇ノ津留地区3・4号竪穴実測図（1／60）

出土土器（第16図）には、壷、甕、鉢がある。

１は二重口縁壷である。口縁がやや外反しながら直立気味に立ち上がる。口縁部外面には、櫛描波状文が施される。口径は17.6㎝を測る。

２は小破片であるが、鉢と思われる。口径は復元できないが、比較的小型の器形と推定される。口縁部は、緩やかに立ち上がる胴部から短くくの字状に折れる。頸部下に櫛描波状文がみられる。

３は甕の底部である。底部はわずかに平底を残すもので、外面には板状工具によるナデが縦方向に施される。




**第16図　利光遺跡脇ノ津留地区４号竪穴出土土器実測図（1／3）**

## 5　５号竪穴（第17図）

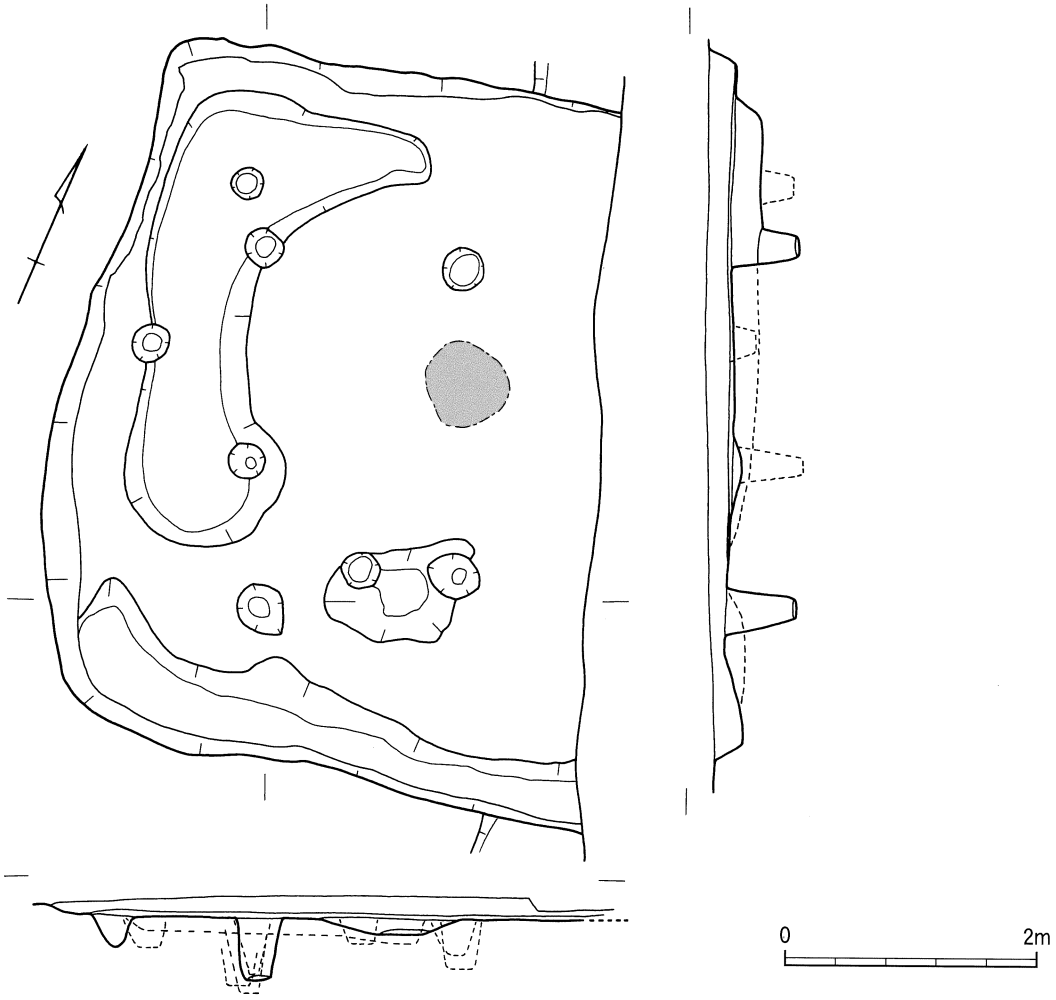
５号竪穴は重複する竪穴群の中央にあり、７号竪穴、８号竪穴を切るが、10号竪穴との関係は明らかにできなかった。

竪穴は、東半分が調査区外に及ぶため全形は不明であるが、平面プラン方形と考えられる。残存する西側の一辺から、一辺約5.5mを呈するものと推定される。主柱穴は４本と考えられるが、西側と北側の柱穴間にも柱穴が１本ずつ配される。炉跡と思われる焼土は、竪穴の中央に位置する。焼土はほぼ円形を呈し、径約0.6mを測る。このほか、土壙がいくつかみられる。炉跡の南側の柱穴間には、長方形基調の土壙が位置する。土壙と重複して、主柱穴よりもやや浅い柱穴が２本みられる。土壙の規模は、長辺約1.0m、短辺0.6mである。これとは別に、不定形の土壙が西から北側の壁沿いと南側の壁沿いにみられる。

出土土器（第18～20図）には、壷、甕、高坏、鉢がある。

１から４は壷である。１は口縁部上面に粘土を貼り付けており。口径は約31㎝を測る。口縁端部外面には、ヘラ状工具による連続山形文がみられる。また、口縁帯上面には浮文が２列にわたり付される。２は二重口縁壷である。端部を欠くが口縁部が内傾気味に立ち上がる。頸部下には、断面三角形の突帯が付される。突帯には、指によるツマミが連続して施される。口縁外面は縦方向の粗いハケメ後櫛描波状文が、頸部内外面にはハケメが各々施される。３は頸部下半の資料である。頸部下には、断面三角形の突帯が２条付されている。頸部外面には縦方向のハケメがみられる。４は壷の頸部である。頸部にはベルト状の突帯が１条付され、突帯にはヘラ状工具による斜格子目文が施される。

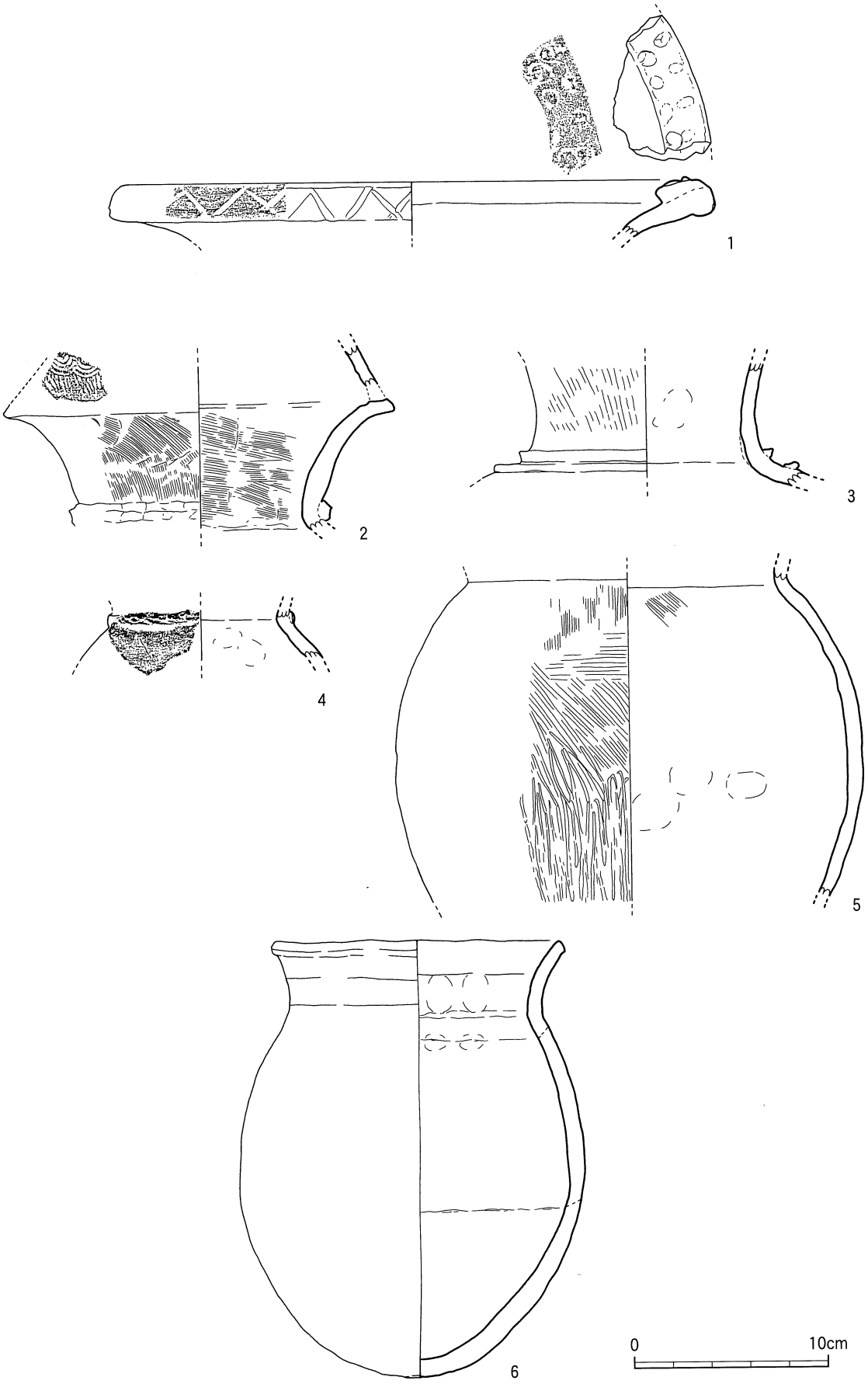
５～11は甕である。５は口縁部と胴部下半を欠く。外面はハケメ調整の後、下半部に縦方向のヘラ状工具によるナデが施される。また、内面は一部にハケメがみられるものの、大部分はナデと指オサエである。６は口径15㎝、高さ22.4㎝の比較的小型のものである。口縁部は頸部から、緩や



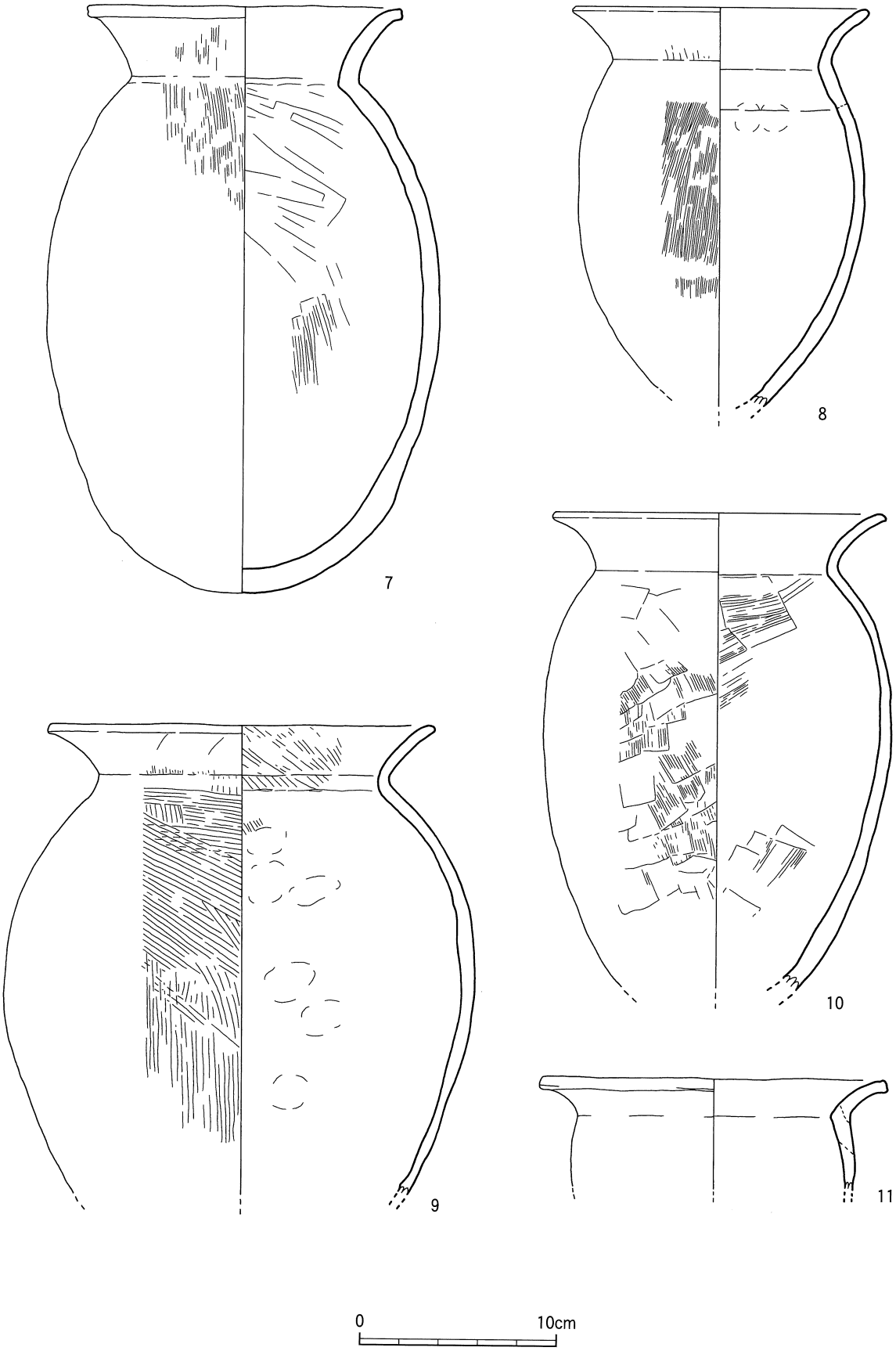

第17図　利光遺跡脇ノ津留地区５号竪穴実測図（1／60）

かに外反する。胴部は球形にちかい感じで、底部は丸底である。調整は内外面ともナデ調整で、外面にはスス状付着物がみられる。７は口径16㎝、高さ29.6㎝を測る。口縁部は頸部から緩やかに外側に折れ、端部は角張る。胴部は最大径が中程にあり、長胴気味を呈する。底部はわずかに平底の痕跡を残す。外面の調整は、頸部と肩部が縦方向のハケメ、胴部の大半がナデ。また、内面は頸部が斜方向のハケメ、胴部上半が板状工具によるナデ、胴部下半がハケメ後ナデである。８は底部を欠く資料で、口径は15.2㎝を測る。調整は、外面の頸部と胴部上半にハケメが施され、内面はていねいなナデである。９は口径19.6㎝で、胴部下半を欠く。口縁部は頸部から外方にくの字状に折れ、胴部は球形にちかい感じである。外面の調整は、頸部から口縁にかけてがハケメ後ヨコナデ、胴部上半が主として横ないしは斜方向のハケメ、胴部下半が縦方向のハケメである。また、内面については、頸部から口縁にかけてが斜方向のハケメ、胴部が指オサエとナデである。10は口径17㎝で、底部を欠く。口縁部は頸部から外反気味に折れ、胴部は長胴である。調整は、口縁部内外面がヨコナデあるいはナデ。胴部外面が縦方向のハケメ。そして胴部内面がハケメとナデである。外面底部ちかくは二次焼成のため変色が認められ、外面にはスス状付着物がみられる。11は口縁部から胴部上半の資料である。口径は17.8㎝を測り、口縁は頸部から強くくの字状に折れる。調整は内外面ともナデである。

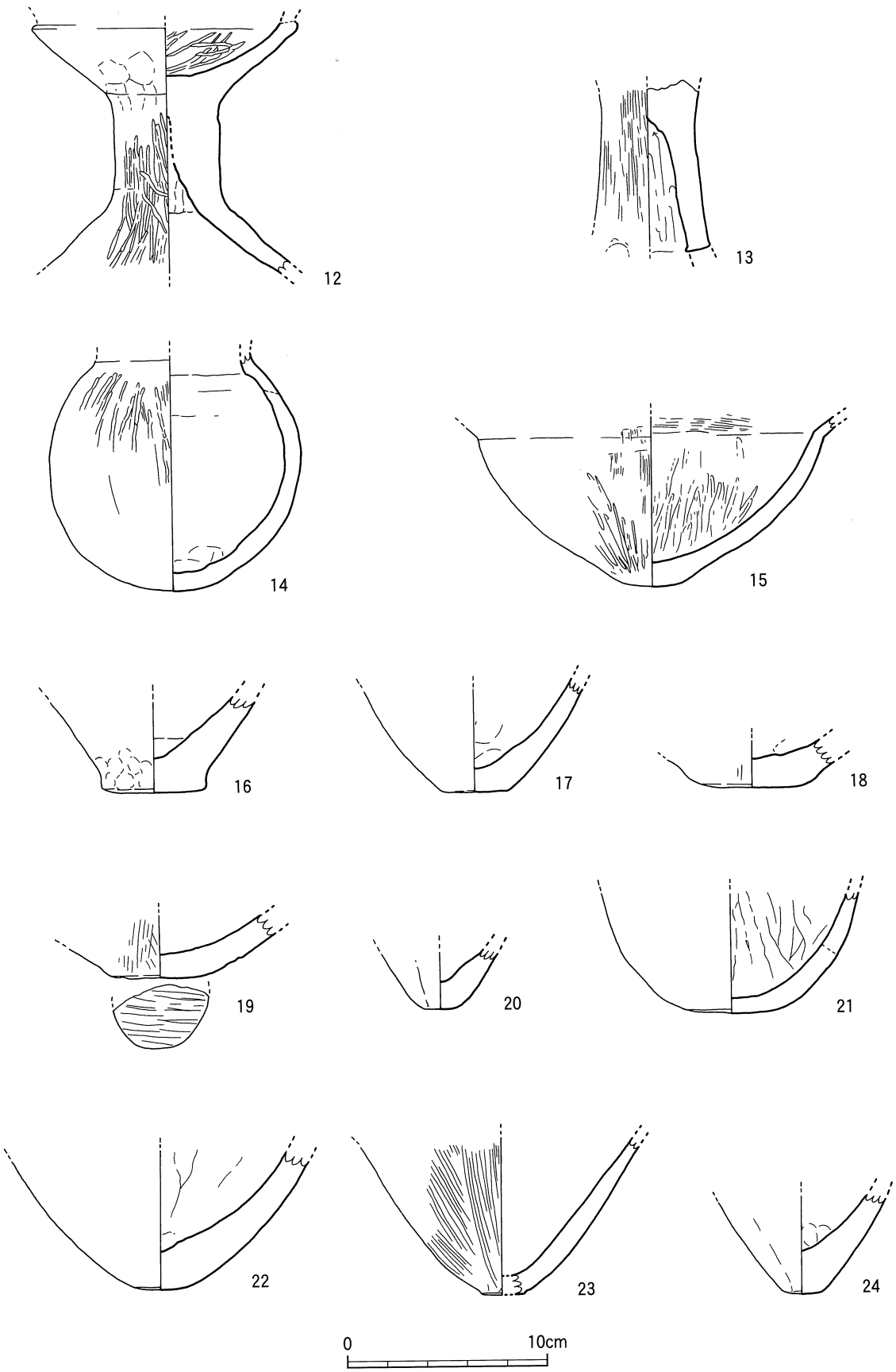
12、13は高坏である。12は口縁部と脚部端部を欠く。坏部は脚部より斜方向に立ち上がりいったん稜をなす。上半を欠くが、稜の部分から大きく外反しながら口縁にいたるものと思われる。脚




第18図　利光遺跡脇ノ津留地区５号竪穴出土土器実測図１（1／3）




第19図　利光遺跡脇ノ津留地区５号竪穴出土土器実測図２（1／3）




第20図　利光遺跡脇ノ津留地区５号竪穴出土土器実測図３（1／3）

部は筒状部がややあって、裾部に向かい大きく開く。調整は、外面坏部から脚部にかけてがヨコナデ、脚部が粗い縦方向のハケメ後ヘラミガキが施される。内面は坏部がヘラミガキ、脚部がナデなどである。13は脚部の筒状にのびた部分である。円形の透かし穴が３ヶ所認められ、いずれも焼成前に外から内へ向かい穿孔されている。調整は、外面が縦方向のハケメ、内面が指あるいはヘラによるナデである。

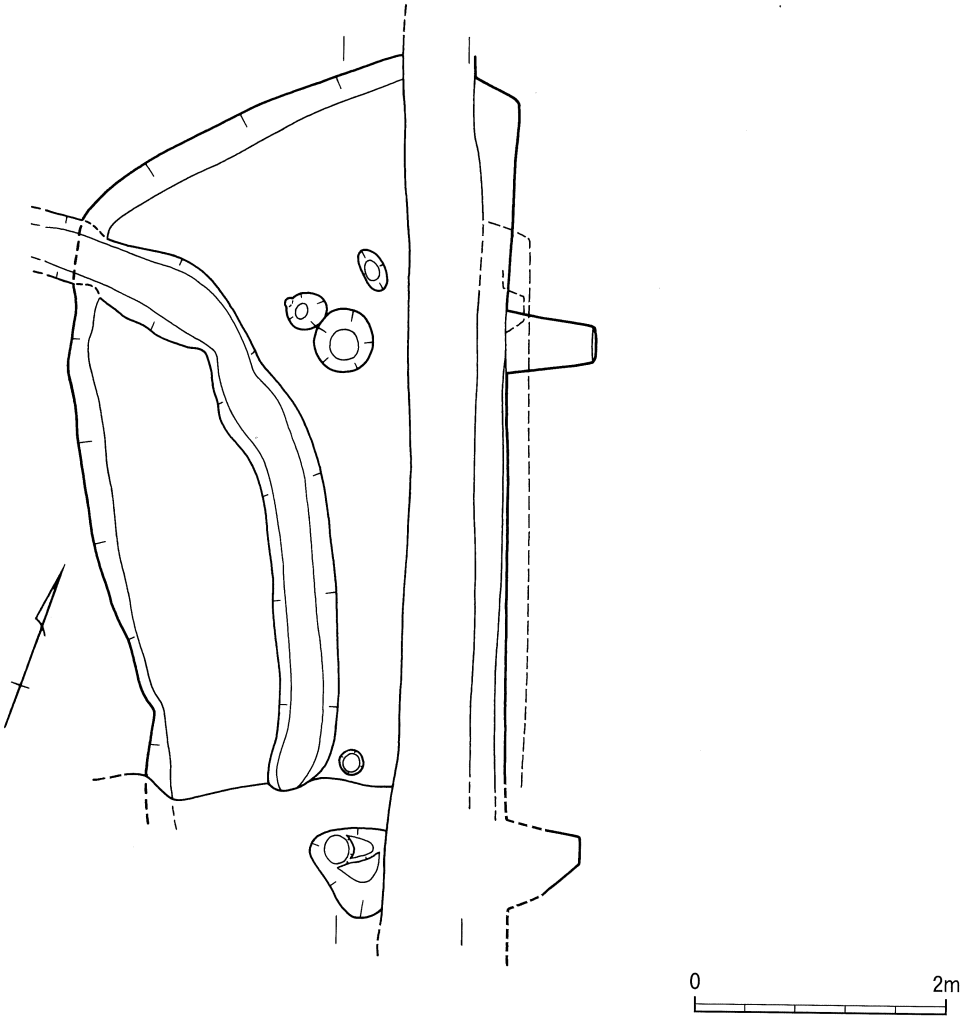
14は小型の壷と思われる。口縁部を欠くが、胴部は球状を呈する。調整は、外面胴部上半が部分的なハケメ後ヘラミガキ。胴部下半がナデである。内面はナデと指オサエである。

15は鉢で、口縁部を欠く。レンズ状の底部から胴部が斜方向に立ち上がり、頸部から口縁部が短く折れる。調整は、外面上半が縦方向のハケメで、下半が縦方向のヘラミガキ。内面は、口縁部付近が横方向のハケメ、胴部が縦方向のヘラミガキである。16～24は壷や甕の底部である。

### 6　６号竪穴（第21図）

６号竪穴は１号竪穴の南側に位置するもので、複雑に重複する竪穴群の最も北側にあたる。１号竪穴を切り、２号竪穴に切られる。

竪穴は平面プラン方形を呈すると思われるが、南側が２号竪穴により切られ、東側が調査区外に及ぶため全形は不明である。主柱穴は４本柱と推定され、西側の２本が確認されている。両柱穴間の心々距離は約４ｍである。北側の柱穴が壁から約２ｍの位置にあることを考えれば、主柱穴間の

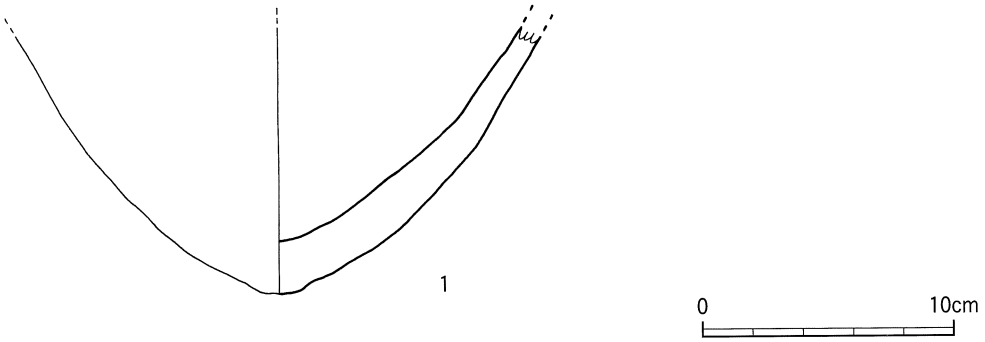



第21図　利光遺跡脇ノ津留地区６号竪穴実測図（1／60）

心々距離と併せ、竪穴の一辺がおおむね６m程であることが推定される。また、竪穴の深さは検出面から約35cmである。炉跡など竪穴内の遺構については全く不明である。竪穴内には１号竪穴に伴う溝がみられるが、本竪穴に伴うような壁際の溝などはみられない。

竪穴内からの出土遺物は少なく、土器がわずかに出土したのみである。

出土土器（第22図）のうち図化できたものは１点のみである。１は胴部下半の資料で、底部はわずかに平底の痕跡を残す丸底気味のものである。調整をみてみると、外面はナデにより平滑にされており、内面もナデによる仕上げが行われている。

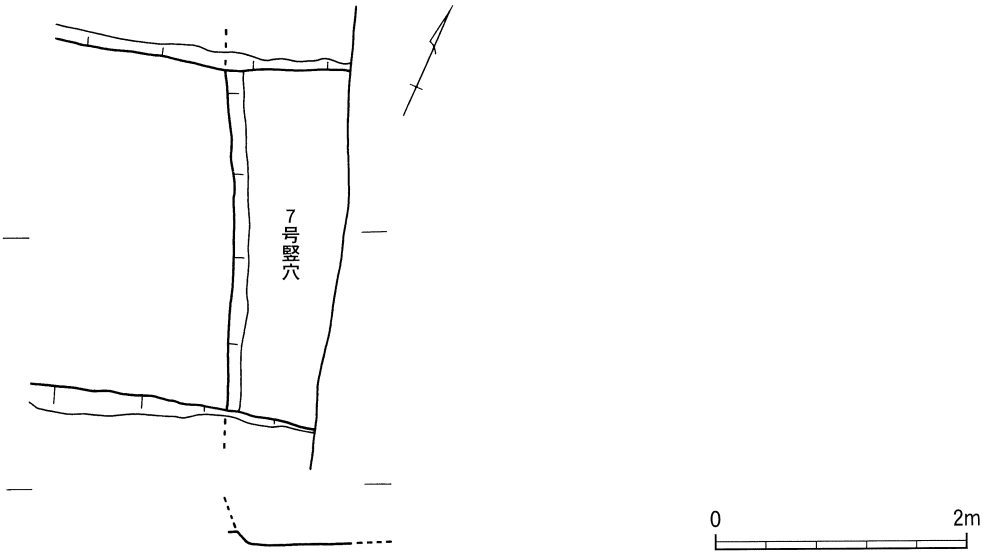



第22図　利光遺跡脇ノ津留地区６号竪穴出土土器実測図（1／3）

## 7　７号竪穴（第23図）

７号竪穴は、11基が複雑に重複する竪穴群の中央に位置する。

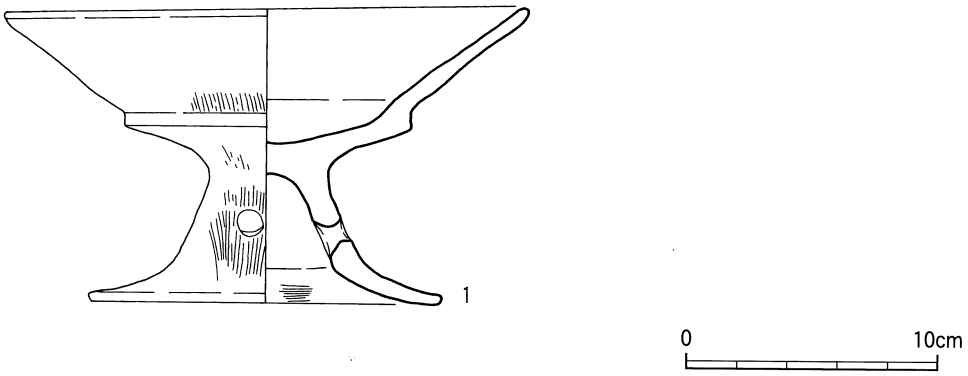
竪穴は８号竪穴を切り、北側を２号竪穴に、南側を５号竪穴により切られる。また、東側が調査区外に及ぶため、全形を復元するのは困難である。しかし、８号竪穴を切った西側の壁が直線的であることから、平面プラン方形を呈するものであろうことが分かる。竪穴内の主柱穴配置、炉跡や土壙の有無などについては、その手がかりを得ることができなかったが、西側の壁に沿って溝が掘られていないことは確認できた。出土遺物については、面積が少ないためもあるが非常に散発的である。




第23図　利光遺跡脇ノ津留地区７号竪穴実測図（1／60）

出土土器（第24図）のうち図化できたものは図示した高坏１点のみである。

法量は、口径20.8㎝、高さ13.6㎝、底径14.0㎝を測る。坏部は、脚部からいったん斜めに立ち上がる。そこで段を形成し、改めて口縁へ向かい斜方向に直線的にのびる。脚は比較的低脚で、ハの字状に開く筒状部から裾に向かい大きく開く。脚上部には、円形の透かし穴がみられる。次に調整をみてみると、外面は口縁部から坏部上半がヨコナデ、坏部下半がハケメ後ヨコナデ、脚部が縦方向のハケメ、裾部がヨコナデである。内面は坏部がナデ、脚部もナデで一部にハケメがみられる。




**第24図　利光遺跡脇ノ津留地区７号竪穴出土土器実測図（1／3）**

## ８　８号竪穴（第25図）

８号竪穴は、１号竪穴のすぐ南側に位置する。竪穴がいくつも重複しており、その切り合い関係は複雑である。８号竪穴は、２号竪穴、５号竪穴、７号竪穴、10号竪穴により切られる。

竪穴は、平面プラン方形を呈するものであるが、北東隅を２号竪穴に、東側を７号竪穴に、南東隅を５号竪穴に、東側を10号竪穴に各々切られる。重複を受けていない西側の一辺から、その規模を一辺約8.3mと推定することができる。竪穴の規模からみると、８号竪穴は本遺跡でも大型のものといえる。竪穴の深さは、検出面から30㎝程である。

主柱穴の配置については、４本柱を基調とすると考えられるが、加えて北側柱列、西側柱列、南側柱列の間と中央に各々１本ずつ柱穴が配される。北側柱列は心々距離が5.4mであるが、西側の柱穴から2.4mの位置に柱穴を配する。西側柱列では心々距離が4.8mを測り、北側柱穴から2.8mの位置に柱穴がある。また、南側柱列では心々の距離が5.1mで、西側柱穴から1.9mの位置に柱穴を配する。中央の柱穴は、中央部西よりに位置する。しかし、以上の柱穴は深さの面において顕著な差は認められない。

炉跡については、２ヶ所の焼土が竪穴内で確認されたものの、必ずしも明確ではない。２ヶ所の焼土はいずれも径約30㎝で、他の竪穴の炉跡と推定される焼土に比べるとかなり小さいものである。本竪穴は南東の約４分の１が５号竪穴により切られており、この部分に炉跡が存在した可能性も考えられる。

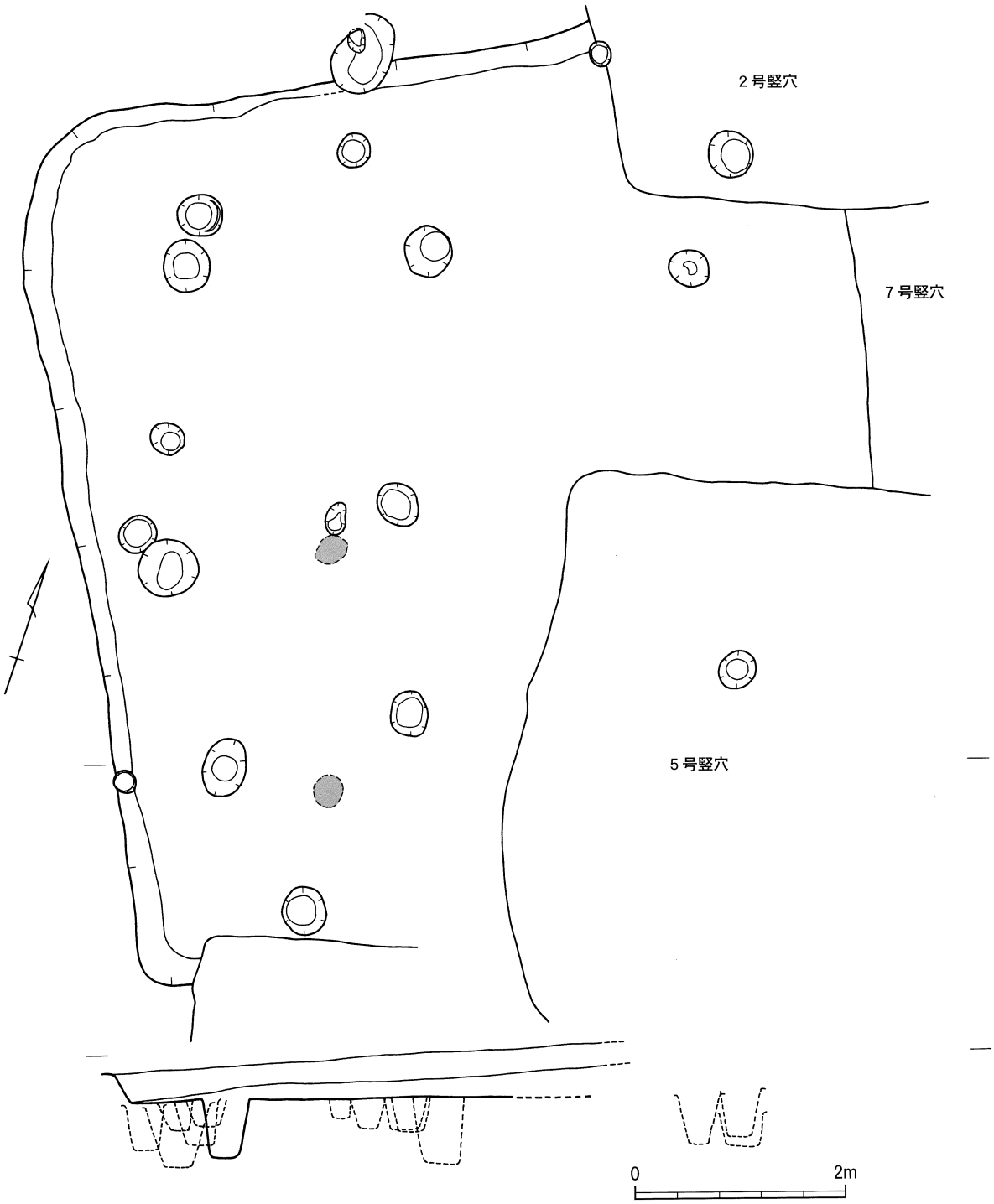
また、本遺跡の多くの竪穴では、炉跡の南側に長方形基調の土壙がみられる。しかし、本竪穴ではこれに相当するものが確認されていない。炉跡と同様に、５号竪穴により切られた部分に存在した可能性がある。

出土土器（第26図）には、壷、甕、鉢、脚付き壷などがある。

１は二重口縁壷で、口径15.6㎝を測る。口縁部は、やや内傾して直線的に立ち上がる。頸部は短めで大きく外反する。二重口縁立ち上がり部と頸部の長さの比は、１：１である。頸部下には断面

三角形の突帯が貼り付けられる。突帯には指でつまんだような痕跡が認められる。口縁部外面には、斜方向のハケメの後に櫛描波状文が施される。また、頸部外面には縦方向のハケメがみられる。一方内面の調整は、口縁部が粗い斜方向のハケメ、頸部が粗い斜方向ないしは横方向のハケメが施される。

２は甕で、口径20.2㎝を測る。口縁部は頸部からくの字状に折れ、端部は平坦面を形成する。胴部は下半を欠くが、球状を呈する感じである。調整は、口縁部外面が粗い縦方向のハケメの後ヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケメである。内面は口縁部がナデで、胴部には板状工具によるナデが



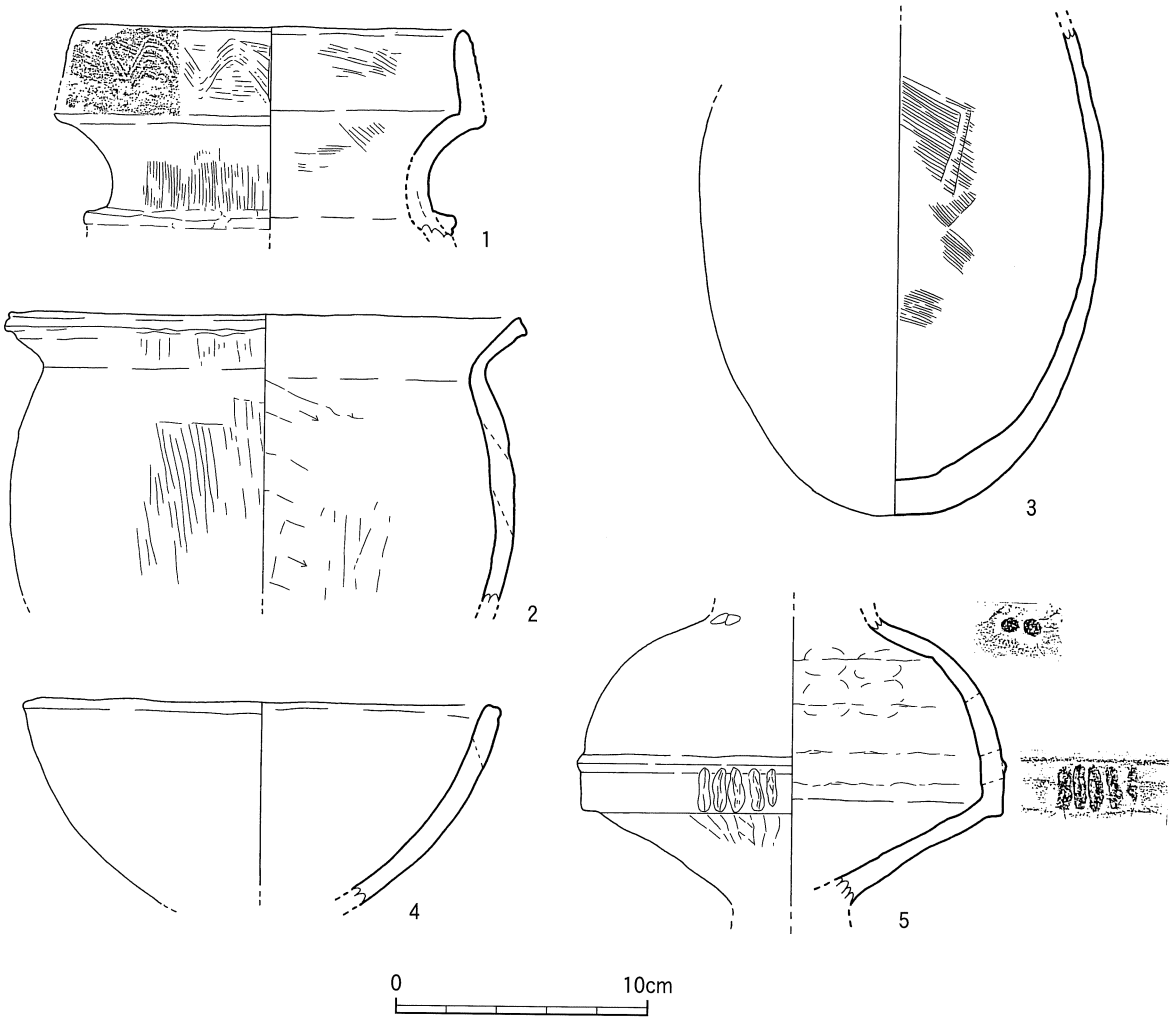

第25図　利光遺跡脇ノ津留地区８号竪穴実測図（1／60）

施される。

３は甕の胴部で口縁部を欠くものである。長胴の器形を呈し、底部は丸底をなす。底部は二次焼成のための変色が認められる。調整は、外面が板状工具によるナデ、内面がハケメ及びナデである。

４は鉢で、口径19cmを測る。底部を欠くが、椀状を呈する。調整は、口縁部内外面がヨコナデ、外面が丁寧なナデ、内面がナデである。

５はあまり類例をみない器形であるが、脚付きの壷であると考える。頸部より上と脚部を欠くもので、胴部のみの資料である。胴部下部は、脚部から直線的に斜方向に外反する。ここでいったん稜を形成し、やや直立した後に内湾しながら頸部にいたる。胴部中程には、断面三角形の比較的低い貼り付け突帯が付される。また、肩部に円形の浮文が２個、胴部中程の突帯下部に棒状の貼り付けか５本みられる。調整は、外面上半がヨコナデ及びナデ、下半が縦方向のヘラミガキである。また、内面は頸部下に指オサエがみられるほかはナデである。




第26図　利光遺跡脇ノ津留地区８号竪穴出土土器実測図（1／3）

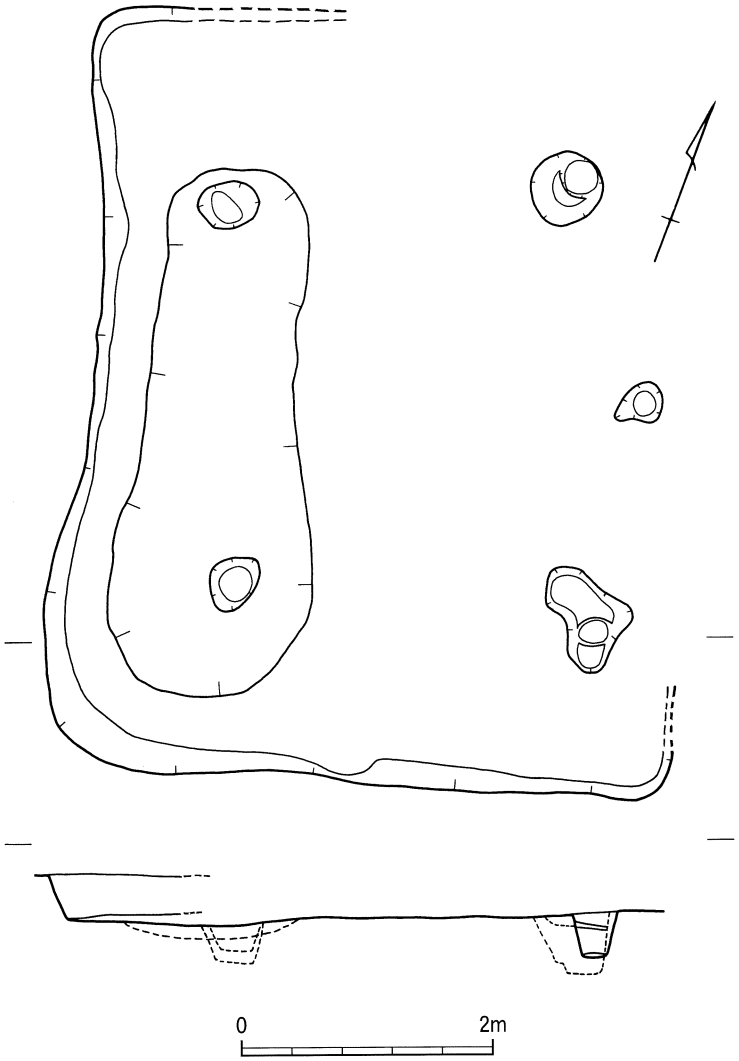
## 9　9号竪穴（第27図）

9号竪穴は、8号竪穴の南側に位置し10号竪穴や15号竪穴と重複する。15号竪穴よりは後出するが、10号竪穴との前後関係は確認できなかった。

竪穴は、長方形基調の方形プランを呈する。10号竪穴との重複部分でその全形が必ずしも明らかではないが、長辺約6m、短辺約5mを測る。竪穴の深さは、遺構検出面から約40cmである。主柱穴は4本柱である。柱穴の心々距離は、北側柱列が2.8m、西側柱列が3.0m、南側柱列が3.0m、東側柱列が3.6mを測る。炉跡については、これに相当する焼土もみられず、不明である。また、炉跡の南に位置する長方形土壙についても確認できなかった。竪穴内の遺構については、西側柱列に沿い長径4.2m、短径1.6m、深さ0.1mの長楕円形土壙がみられるのみである。

出土土器（第28図）は壷、甕、高坏がある。

1,2は壷である。1は口径18cmを測る二重口縁壷である。口縁部は内傾気味に短く立ち上がる。外面には、粗い櫛描波状文が施される。口縁端部上面には、竹管状工具による連続刺突文が施される。調整は、口縁内面がヨコナデで、外面の口縁立ち上がり部に指オサエがみられる。2は畿内系の二重口縁壷である。筒状の頸部から開き、口縁部が外反気味に立ち上がる。調整は、口縁外面が横あるいは斜方向のハケメ、頸部が縦方向のハケメ。内面は口縁部が斜方向のハケメ、立ち上がり部が横方向のハケメ、頸部が縦方向のハケメである。

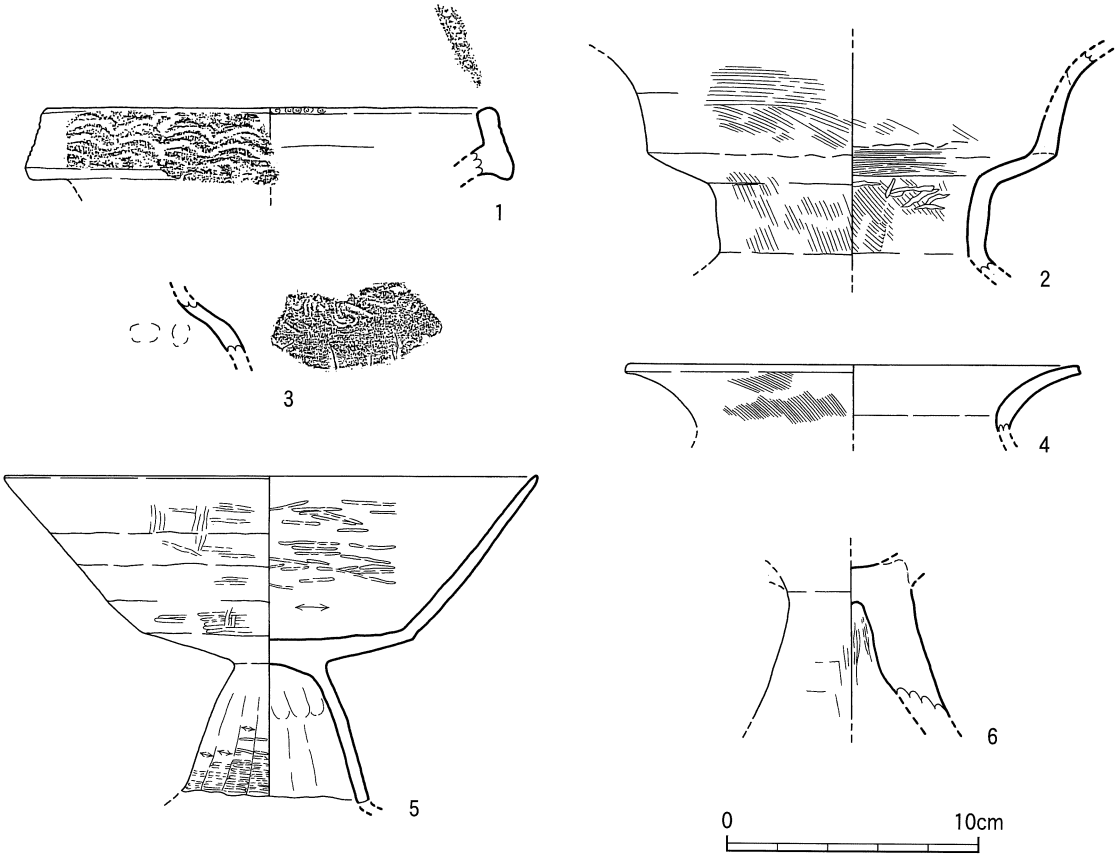



第27図　利光遺跡脇ノ津留地区9号竪穴実測図（1／60）

３は小型の壷か鉢の肩部で、外面に櫛描波状文がみられる。

４は甕の口縁部で、口径18cmである。

５、６は高坏である。５は口径21.2cmで、脚部は意識的に打ち欠かかれている。坏部は深めで、ほぼ水平な内底面から口縁部に向かい斜方向に立ち上がる。脚部は筒状部のみ残り、裾部に向け開く部分から打ちかかれている。調整は、坏部内外面にヘラミガキが施される。また、脚部は外面がヘラミガキ、内面がナデとシボリである。６は脚部で、坏部から筒状部が斜方向にのびる。調整は外面がナデで、内面にシボリがみられる。




**第28図　利光遺跡脇ノ津留地区９号竪穴出土土器実測図（1／3）**

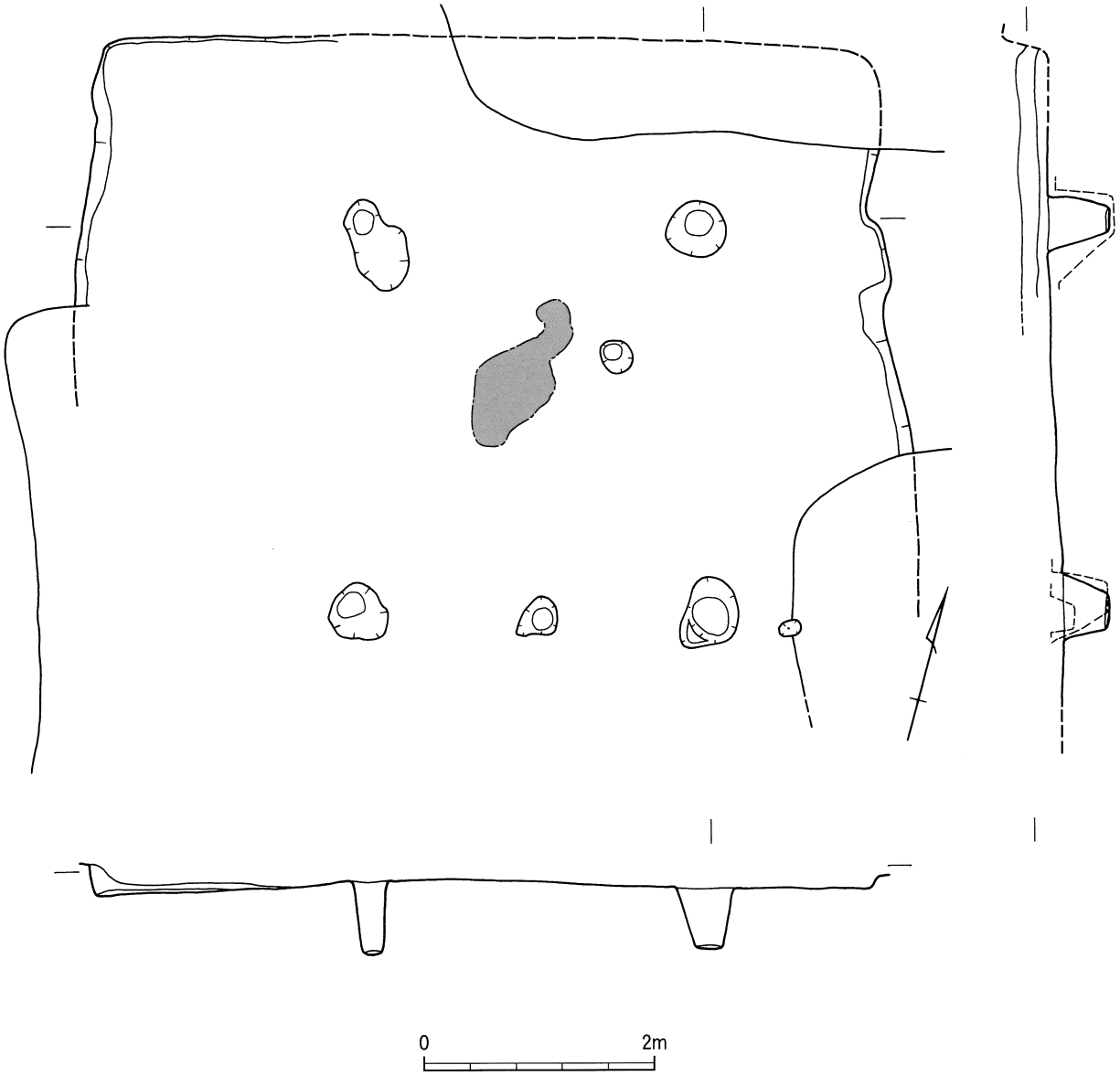
## 10　10号竪穴（第29図）

10号竪穴は８号竪穴の南側に位置する。８号竪穴を切るが、５号竪穴、９号竪穴、11号竪穴、12号竪穴との前後関係は不明である。

竪穴は平面プラン方形を呈するもので、一辺約７m程の規模と推定される。主柱穴は４本柱で、柱穴間の心々距離は、北側柱列が2.9m、西側柱列が3.4m、南側柱列が3.0m、東側柱列が3.4mである。南側柱列の間には、補助柱と思われる浅い柱穴が見られる。また、竪穴の中央には、炉跡と思われる不定形の焼土がある。焼土は1.6m×0.7mの規模をもつ。炉跡南側の長方形土壙や、その他の土壙、壁際の溝などは確認することができなかった。

出土土器（第30、31図）には壷、甕、高坏、鉢、ジョッキ形土器などがある。

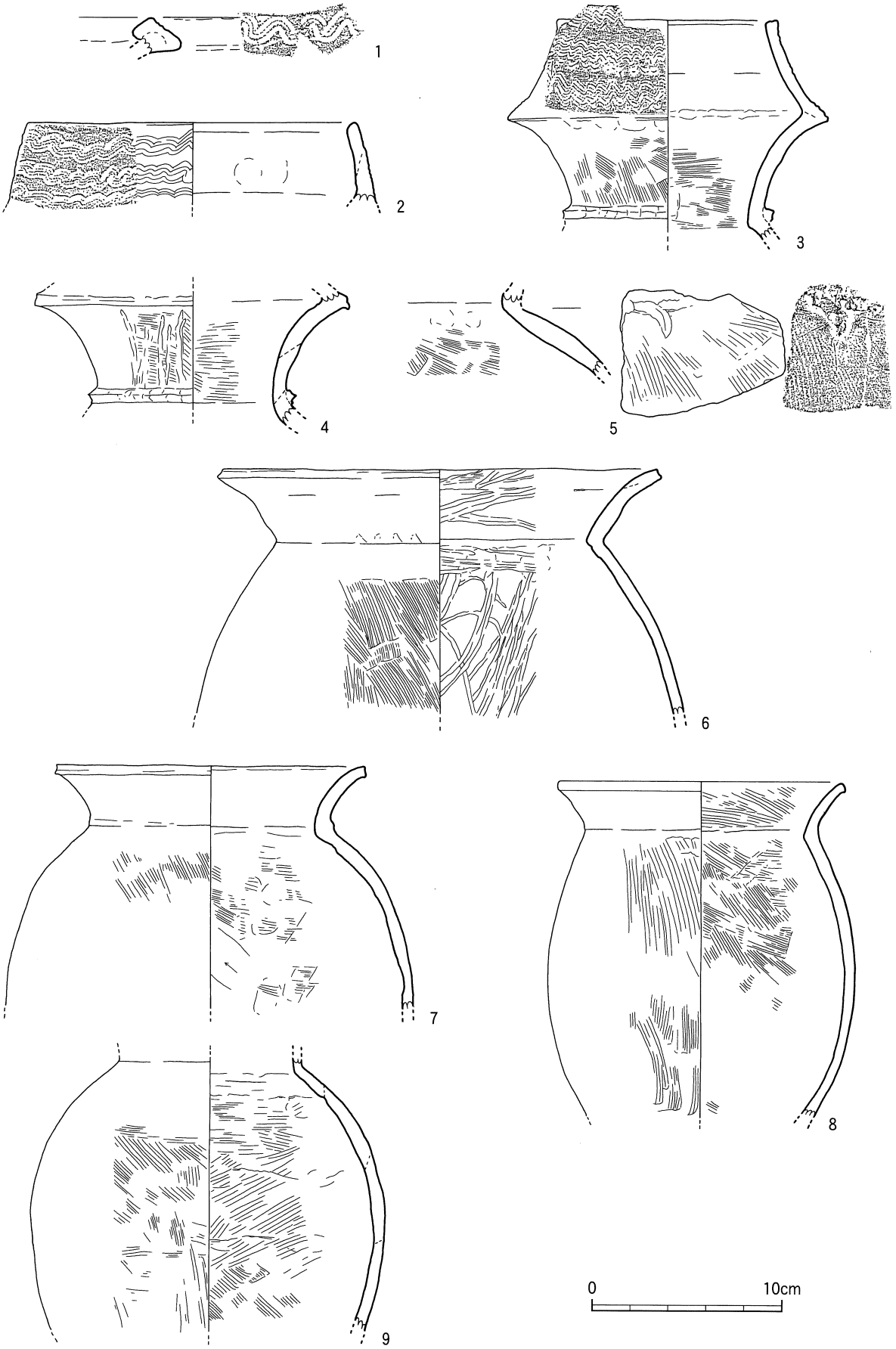
１～５は壷である。１は二重口縁壷で、口縁が内傾し短く立ち上がる。外面には櫛描波状文がみられる。２は二重口縁壷の口縁で、口径17.4cmを測る。口縁部はやや内傾して立ち上がり、外面には櫛描波状文が３段にわたり施される。３は二重口縁壷の頸部より上の資料で、口径11.6cmを測る。口縁部と頸部の高さの比は、１：１である。口縁部は内傾して立ち上がり、外面に櫛描波状文



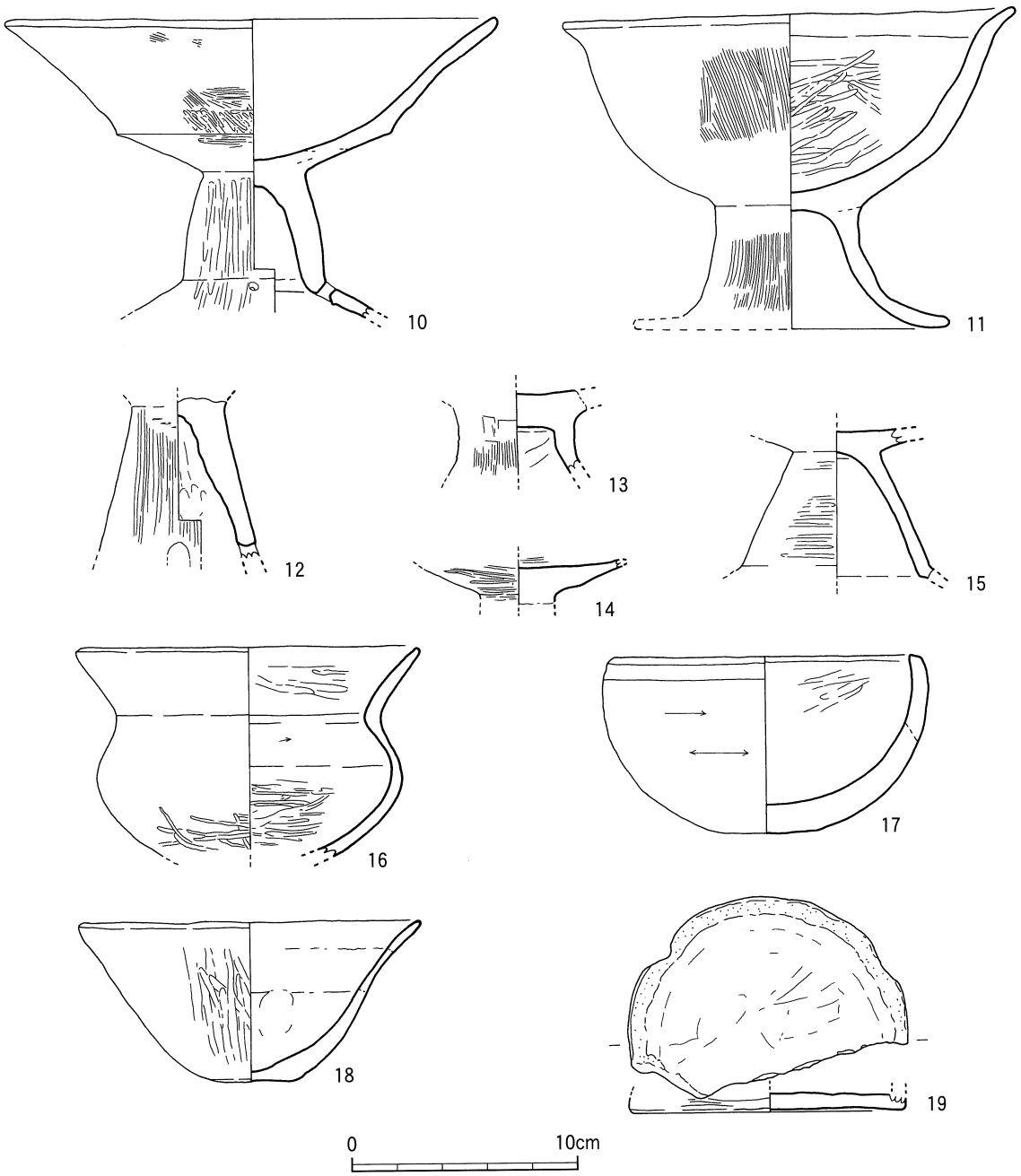

第29図　利光遺跡脇ノ津留地区10号竪穴実測図（1／60）

が３段にわたり施される。頸部下には断面三角形の突帯が貼り付けられており、指によるツマミがみられる。調整は、頸部外面が縦方向のハケメ、内面口縁がナデ、内面頸部が横方向のハケメである。４は二重口縁壷の頸部である。頸部下には、指によるツマミがみられる断面三角形の突帯が付される。外面は、斜方向のハケメの後に縦方向のヘラミガキが施される。また、内面は横方向のハケメがみられる。５は頸部から肩部にかけての破片で、ノ字状の貼り付けがみられる。

６～９は甕である。６は口径23.4cmを測る。口縁部は頸部からくの字状に立ち上がるが、中程で外方にやや折れる。胴部の肩はあまり張らない。外面は、口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向のハケメである。内面は、口縁部が粗い横方向のハケメ後ヘラミガキ、胴部はナデの後ヘラミガキが施される。７は口径16.4cmである。口縁部は、頸部からくの字状に外反気味に折れる。胴部は肩が張り気味である。胴部外面は、ハケメの後平滑なナデが施される。また、内面は横方向のハケメで、一部にヘラケズリがみられる。８は口径15.2cmで、胴部は中程に最大径がくる。胴部は内外面ともハケメ調整、口縁部は、外面がヨコナデ、内面がハケメとナデである。９は胴部上半の資料である。やや丸みをもつもので、内面には接合痕が残る。内外面ともハケメ調整である。




第30図　利光遺跡脇ノ津留地区10号竪穴出土土器実測図１（1／3）




第31図　利光遺跡脇ノ津留地区10号竪穴出土土器実測図２（1／3）

10～15は高坏である。10は口径21.8㎝を測る。坏部は脚部から斜方向に立ち上がり、下部で稜をもつ。口縁部へは、やや外反しながら長く伸びる。内底面は凹み気味である。脚部は筒状部がややふくらみをもち、裾部へ向かい大きく開く。筒状部から大きく開く部分に、円形の透かし穴がみられる。透かし穴は、４ヶ所にあるものと考えられる。調整は、坏部上半外面が斜方向のハケメ、坏部下半と脚部がヘラミガキである。内面は、坏部及び脚部ともナデである。11は口径20㎝、高さ13.5～14㎝、底径14.2㎝を測る。坏部は、脚部から丸みをもち内湾状に立ち上がり、口縁部が短く外反する。脚部は比較的低いもので、太目の筒状部から緩やかに端部にいたる。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、坏部上半が縦方向のハケメ、坏部下半がヨコナデ、脚部が縦方向のハケメである。内面は、口縁部がヨコナデ、坏部が斜め方向のヘラミガキ、脚部がナデである。12は脚部上半の資料で、筒状部がやや開き気味に長めにのびる。下部に円形の透かし穴がみられる。調整は、外面が縦方向のハケメ、内面がシボリ痕とナデである。13、14は坏部と脚部の接合部である。13は、脚が開き気味にのびる。脚部外面は縦方向のハケメ、内面は指オサエとナデがみられる。14は水平な坏部内底面がみられる。調整は内外面とも横方向のハケメである。15は脚部上部で、太目の筒状部が開き気味にのび、下部で屈曲をもち開きはじめる。脚部外面には、ナデの後横方向のハケメがみられる。

16～18は鉢である。16は口径15.4㎝を測る。扁球形の胴部を呈し、口縁部が外方にむかい直線的にのびる。外面の調整は、ヘラミガキが施される胴部下半をのぞきヨコナデあるいはナデである。また、内面は胴部上半に横方向のヘラケズリがみられる以外は、すべてヘラミガキである。17は口径13.6㎝、高さ８㎝を測る。底部から内湾状に口縁にいたる。内外面にヘラミガキがみられる。18は口径15.2㎝、高さ７㎝、底径４㎝を測る。底部は平底で、胴部が斜方向に立ち上がり口縁にいたる。調整は、外面が縦方向のヘラミガキ、内面がナデと指オサエである。

19は破片のため明確さを欠くが、ジョッキ形あるいはコップ形土器の底部と思われる。底径は12.4㎝を測り、比較的薄手である。調整は、外面胴部に横方向のハケメ状のものがみられるほかは、内面及び底面ともナデである。

### 11　11号竪穴（第32図）

11号竪穴は、複雑に重複する竪穴群の最も南に位置する。しかし、重複する10号竪穴、12号竪穴との関係は明確にすることができなかった。

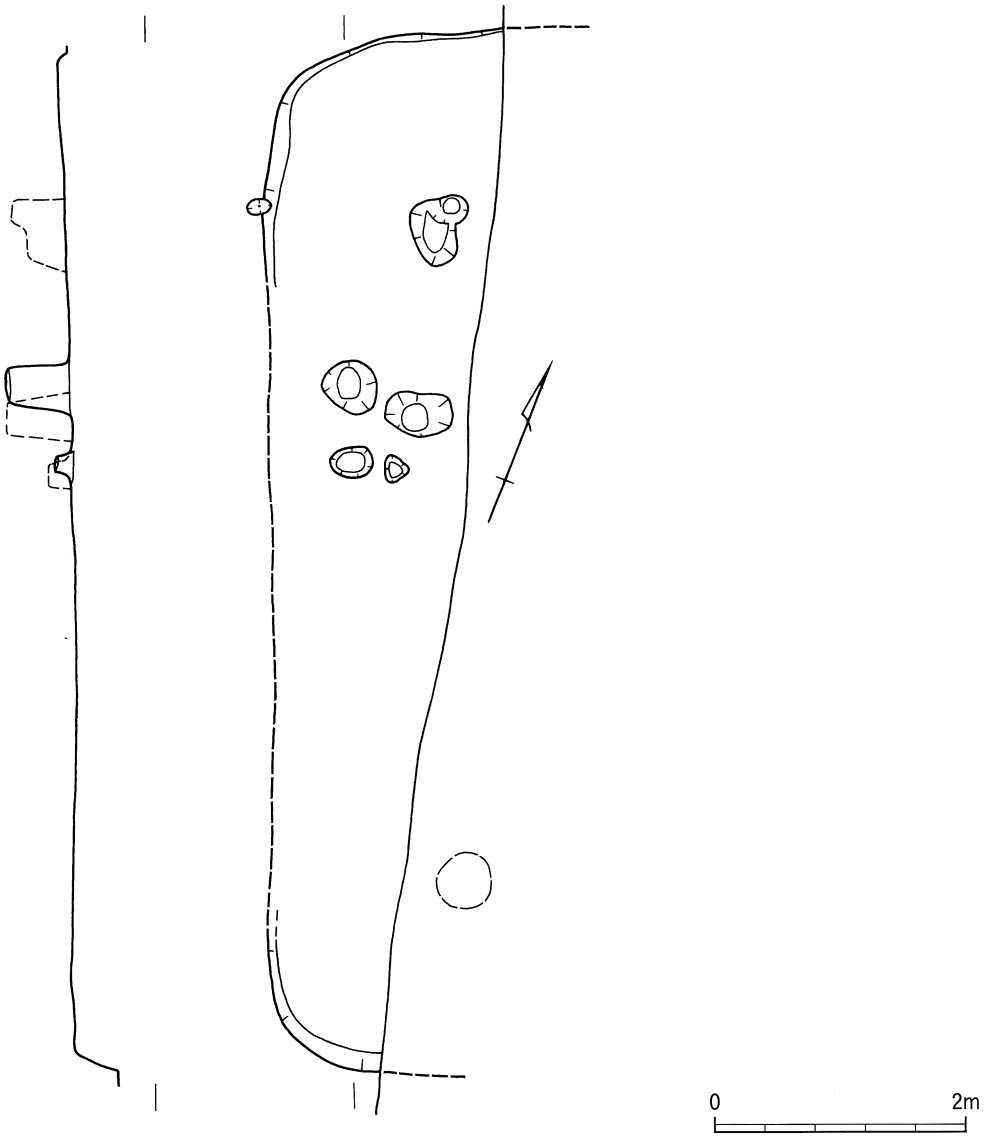
竪穴は、平面プラン方形を呈すると思われるが、大部分は調査区外に及ぶ。確認できた北西と南西のコーナーから、一辺約８ｍの規模を有するものであることが分かる。柱穴は北西部にいくつかみられるが、全体の配置は必ずしも明らかではない。

また、炉跡や土壙についても、調査区内では検出されていない。壁際の溝についても、確認にいたってない。

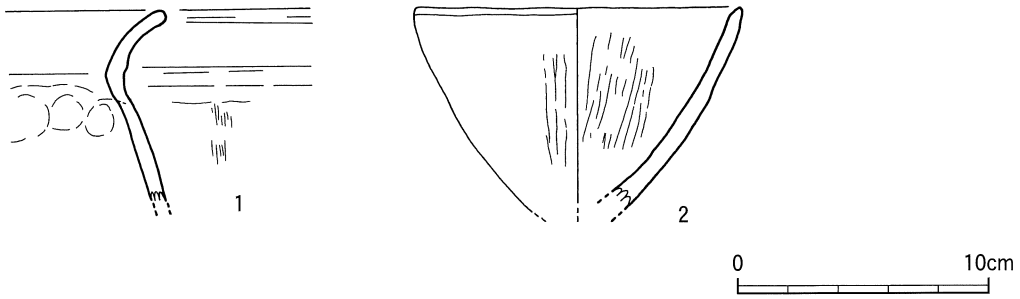
出土土器（第33図）は甕と鉢がある。

１は甕である。小破片のため口径は復元できない。胴部の肩はあまり張らず、長胴気味になるものと推定される。口縁部は、外反気味に緩やかに外方に折れる。口縁端部は丸みをもつ。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向のハケメ後ナデである。また、内面は口縁部がヨコナデで、胴部は頸部下に指オサエがみられほかはナデである。

２は鉢で、口径13㎝を測る。底部を欠くものであるが、器形は全体的に砲弾型を呈するものと思われる。調整は、口縁部がヨコナデで、胴部は内外面ともヘラ状工具による縦方向のナデである。ヘラの幅は３～４㎜で、比較的幅広の工具を使用している。




第32図　利光遺跡脇ノ津留地区11号竪穴実測図（1／60）




第33図　利光遺跡脇ノ津留地区11号竪穴出土土器実測図（1／3）

## 12　12号竪穴（第34図）

12号竪穴は、11号竪穴と重複する位置にある。このほか、９号竪穴、10号竪穴、12号竪穴と切り合うと思われるが、その前後関係は明らかにできなかった。

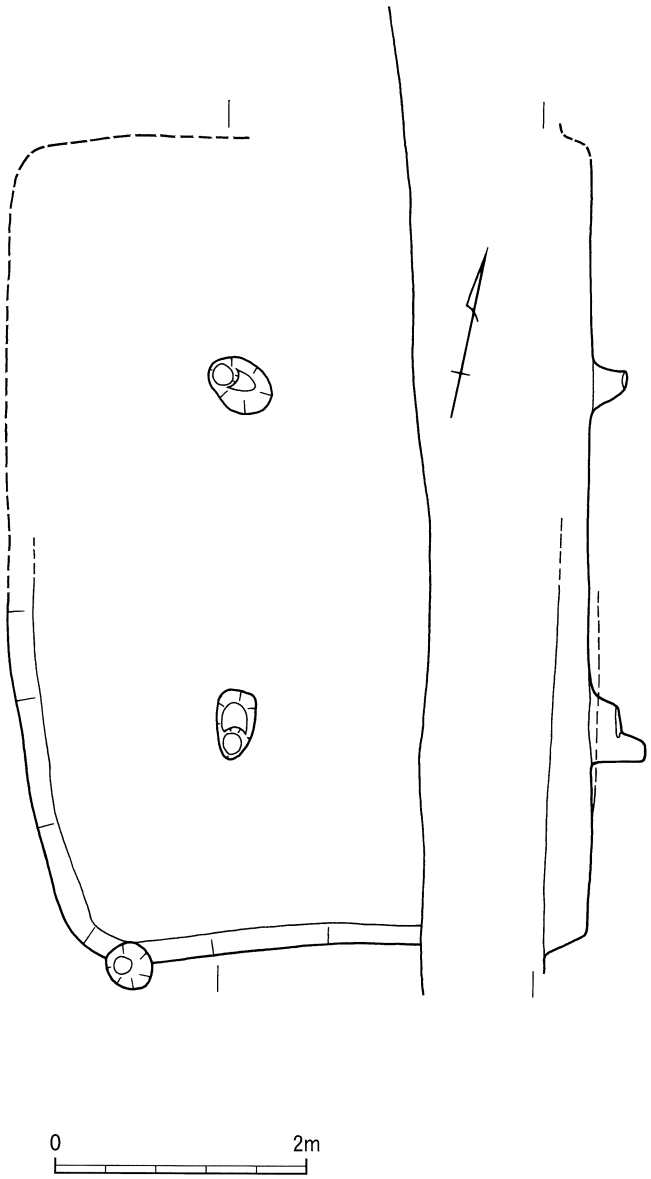
竪穴は大半が調査区外に及び、加えて他の竪穴と複雑に重複することから全形は明らかではない。南西のコーナーが確認されることから、平面プランは方形を呈するものと考えられる。主柱穴と思われるものが２本検出されており、その心々距離は2.9mである。残存するコーナーと２本の主柱穴から竪穴の規模を復元すると、一辺約６mほどであると推定される。

この他の竪穴内の遺構についてみてみると、炉跡と思われる焼土、炉跡南側にある長方形土壙、壁際の溝などは全く確認されていない。

また、出土遺物も少量で、壷や甕などの土器片がわずかに出土したのみである。

出土土器（第35図）には、壷、甕がある。

１,２は壷である。１は口縁部の資料であるが、端部を欠く。口縁立ち上がり部の径は、20.4㎝

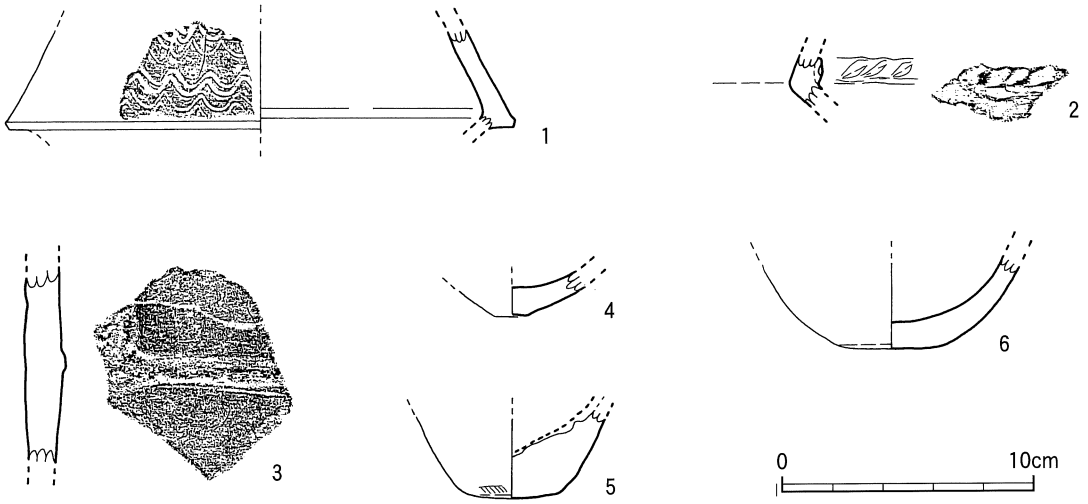



第34図　利光遺跡脇ノ津留地区12号竪穴実測図（1／60）

を測る。口縁は内傾しながら直線的に立ち上がるもので、外面には櫛描波状文が２段以上にわたり施される。内面はヨコナデ調整である。２は頸部で、ベルト状の突帯が１条貼り付けられている。突帯には、ヘラ状工具による刻みが施される。

３は甕の胴部である。器壁が厚く、大型の製品と思われる。外面には低い突帯が付され、突帯は横方向のものに加え縦方向のものもみられる。

４～６は底部である。いずれも、わずかに平底が残るものである。




**第35図　利光遺跡脇ノ津留地区12号竪穴出土土器実測図（1／3）**

## 13　13号竪穴（第36図）

13号竪穴は、３号竪穴と４号竪穴の南側に位置し、４号竪穴を切る。

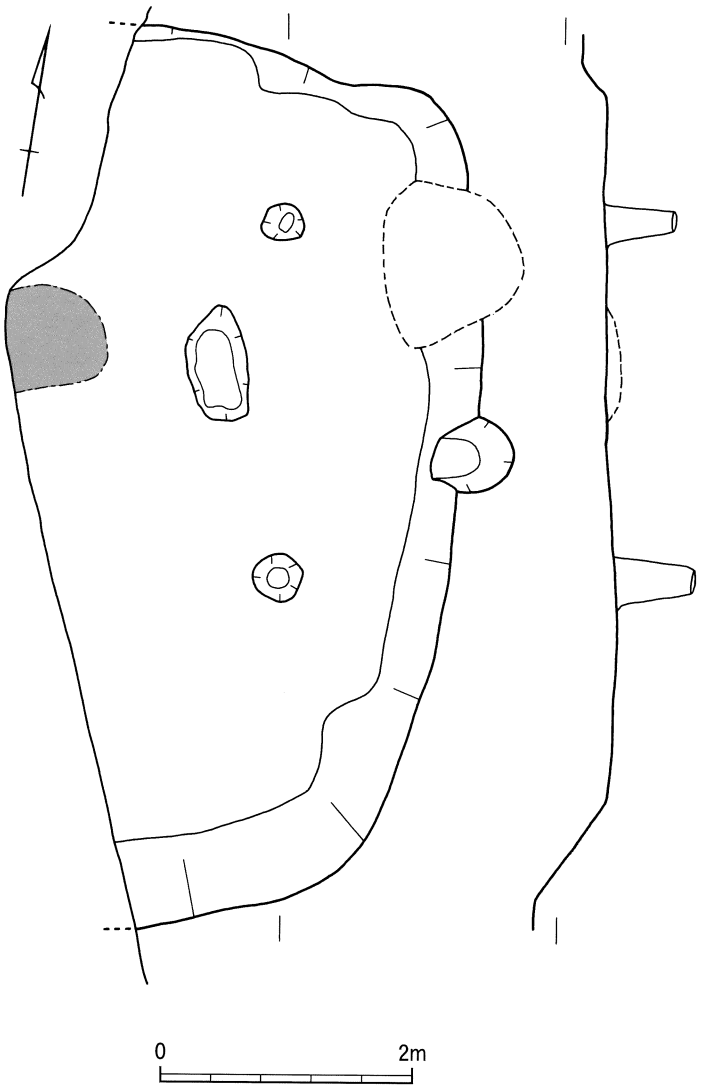
竪穴は平面プラン方形を呈するが、西半分が調査区外に及ぶ。調査区内で確認された東側の一辺から、竪穴の規模は一辺約6.6mと推定される。主柱穴の配置は、４本柱と思われる。東側柱列の心々距離は、2.8mを測る。

また、竪穴中央やや北寄りには、炉跡と思われる焼土がみられる。焼土は一部が調査区外に及ぶが、長径0.8m以上、短径0.8mの規模を有する。炉跡の東側には、土壙が１基みられる。土壙は長方形基調を呈し、その規模は長辺0.9m、短辺0.5mである。

出土土器（第37、38図）には壷、甕、高坏、鉢などがある。

１～７は壷である。１はやや小型の二重口縁壷で、端部を欠く。口縁立ち上がり部が外方に突出し、口縁は内傾し立ち上がる。外面にはヘラ状工具による連続山形文が施される。２も小型の二重口縁壷で、口径10.8cmを測る。口縁の立ち上がりは内傾気味で、外面にヘラ状工具による山形文がみられる。３は口縁端部を欠くもので、立ち上がり部の径が20cmを測る。口縁は内傾して、直線的に立ち上がる。外面には、櫛描波状文が２段にわたり施文される。４は長くのびた頸部から、口縁部が内傾してやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部を欠くが、立ち上がり部の径は18.2cmを測る。口縁部外面は、剥落が著しく文様の施文等は不明である。５は口径19cmである。口縁の立ち上がりは比較的短くわずかに外反し、内傾し立ち上がる。口縁部外面には櫛描波状文が施され、頸部外面には横方向のハケメがみられる。６はやや小型の資料で、立ち上がり部の径は15.6cmを測る。口縁部は内湾気味に内傾して立ち上がる。口縁外面には櫛描波状文が２段にわたり施される。

７は１～６とは異なった器形を呈する。口径10.8cmと小型ながら、器壁は比較的厚めである。胴

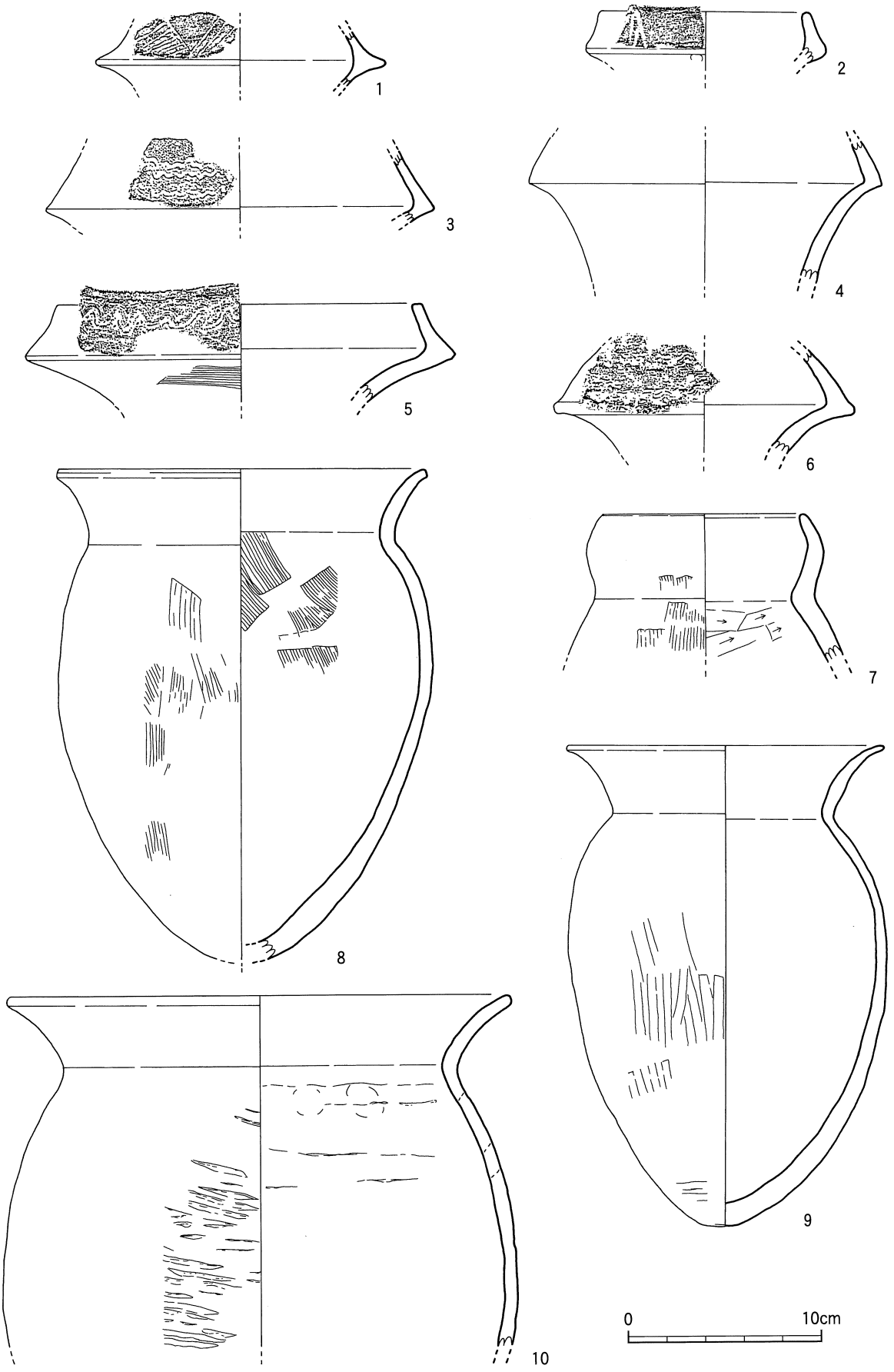



**第36図　利光遺跡脇ノ津留地区13号竪穴実測図（1／60）**

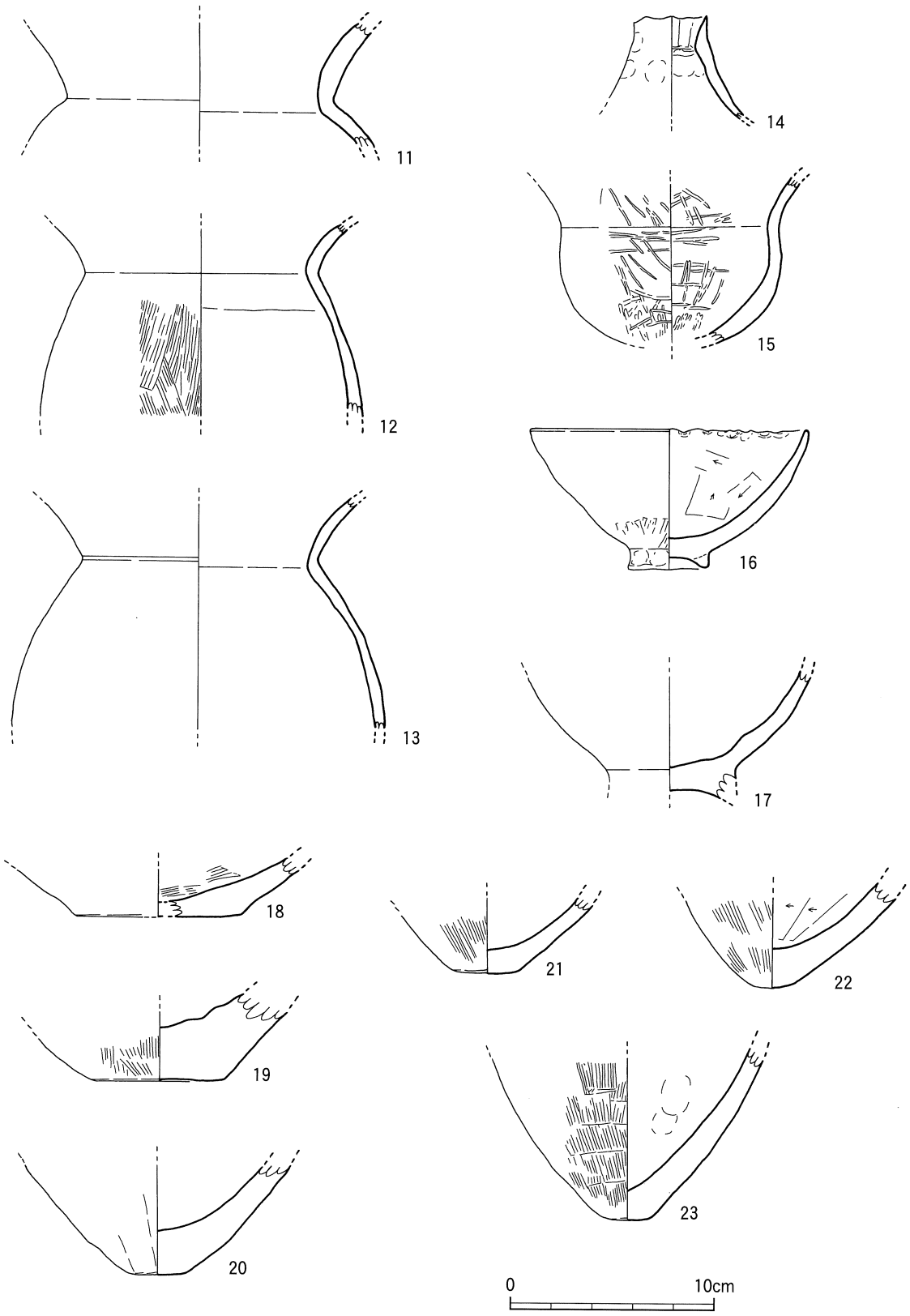
部はあまり肩がはらずにいったん頸部でしまり、頸部から外方にやや立ち上がり、緩やかに内湾するように口縁部にいたる。外面の調整は、口縁部がナデ、頸部付近から胴部にかけてが縦方向のハケメである。内面は、口縁部がナデ、胴部にはヘラケズリがみられる。

８～13は甕である。８は底部付近をわずかに欠くものである。口径19.2㎝、高さは推定で約25.6㎝を測る。胴部は中程よりやや上部に最大径をもち、肩部があまり張らず長胴気味に底部にいたる。口縁部は比較的緩やかに外方に折れ、端部は角張る。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向のハケメ後に平滑なナデである。

９は口径16.6㎝、高さ24.8㎝を測るもので、口径と胴部最大径がほぼ等しい。口縁部は頸部から緩やかに折れ、端部付近でさらに反り気味になる。胴部は長胴気味で、底部はわずかに平底の痕跡を残す。10は口径26.0㎝を測る。胴部外面には横方向のタタキ後ナデが施される。また、内外面はヨコナデ、胴部内面はナデである。11は口縁端部を欠くものである。12はなで肩を呈する胴部で、頸部から外反気味の口縁部が折れる。胴部外面には縦方向のハケメがみられる。13も口縁端部を欠く資料である。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデである。




第37図　利光遺跡脇ノ津留地区13号竪穴出土土器実測図１（1／3）




第38図　利光遺跡脇ノ津留地区13号竪穴出土土器実測図２（1／3）

14は高坏の脚部で、ハの字状に開く。

15～17は鉢である。15は半球形の胴部から、口縁部が開く。内外面にヘラミガキが施される。16は口径13.8㎝、高さ3.4㎝、底径4.0㎝である。胴部は椀状を呈し、底部に粘土紐を貼り付け、高台状の底部を形成する。外面の調整はナデで、胴下部にハケメがみられる。また、内面はナデで一部にヘラケズリ状のものがある。17は口縁部と底部を欠く。

18～23は底部である。明らかな平底やわずかに平底が残るものがある。

### 14　14号竪穴（第39図）

14号竪穴は調査区の南端にある。他の竪穴が複雑に重複しているのに対し、14号竪穴は他の竪穴群から離れて位置する。

竪穴は平面プラン方形を呈するもので、西側と南側が調査区外に及ぶ。そのため全形は不明だが、検出した部分から推定して一辺８m以上になるものと思われる。規模的にみれば、本遺跡で最も大型の竪穴である。

主柱穴の配置は、北側柱列が３本、東側柱列が３本、西側柱列が２本であると推定される。基本的には４本柱で、北側柱列と東側柱列の間に柱が１本ずつ配される。北側柱列の心々距離は東から2.3m、2.7m、東側柱列は北から3.1m＋αである。このほか、竪穴中央の焼土北側と中央南側の土壙両脇にあわせて４本の柱穴がみられる。以上のように、本竪穴は他の竪穴と主柱穴配置が異なる。これは、竪穴規模が大きいということとも関連すると考えられ、上屋構造が注目される。

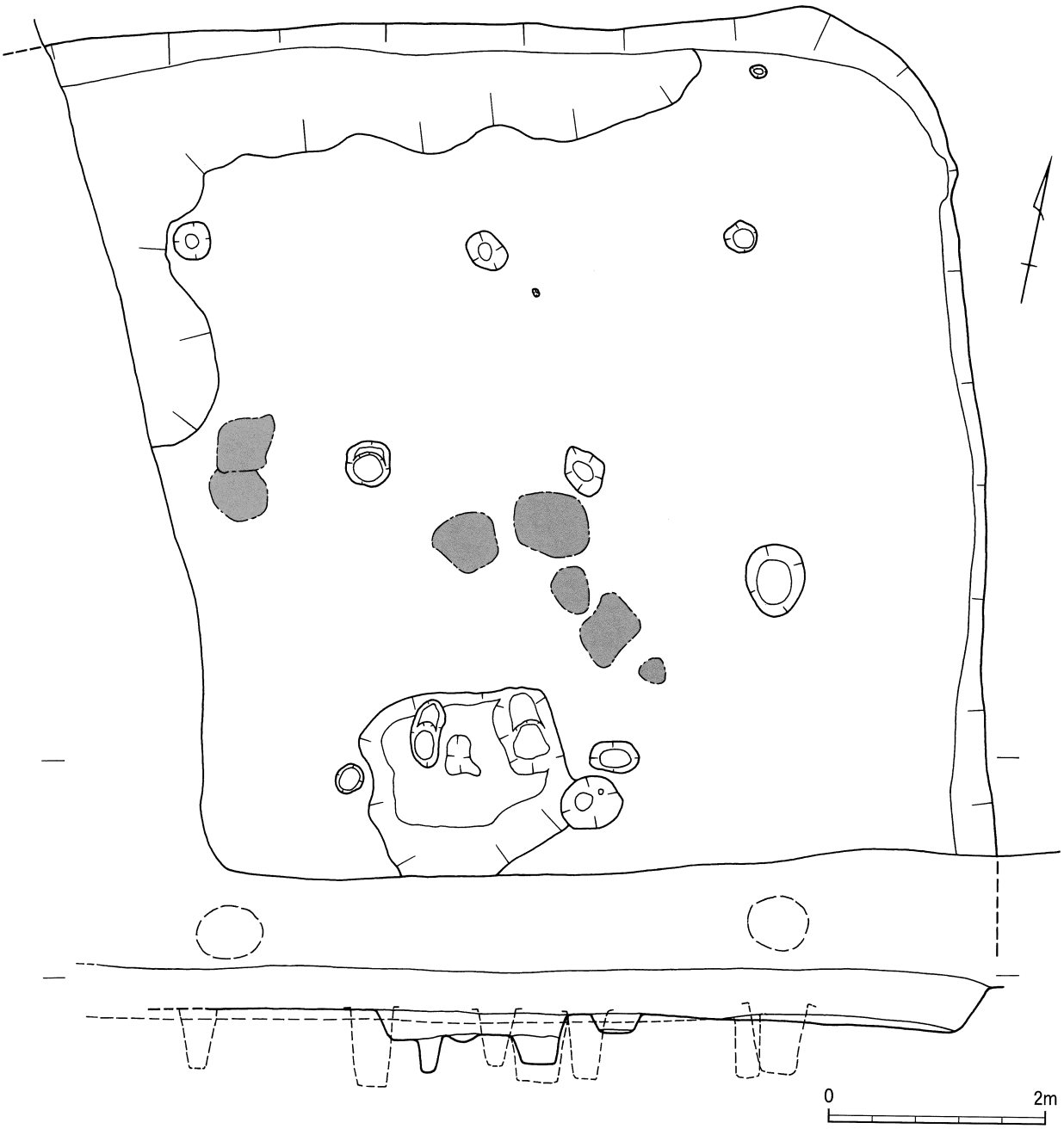
炉跡と推定される焼土は、中央及び中央西側にいくつかみられる。焼土は径40～70㎝の楕円形または不定形を呈する。このほか、中央南側の柱穴間には長方形の土壙がみられる。土壙は長辺1.8m、短辺1.6m、深さ0.2～0.3mである。また、北側から西側の壁にかけ落ち込みがみられる。

出土土器（第40、41図）には、壷、甕、高坏、鉢がある。

１～３は壷である。１は口径14.2㎝の二重口縁壷である。外面に櫛描波状文が施文される。２も二重口縁壷で、口径12.6㎝を測る。口縁端部は角張り、外面に櫛描波状文がみられる。３は壷の胴部である。ベルト状の突帯が１条付され、ヘラ状工具による斜格子文が施される。

４～10は甕である。４は口径15㎝を測るものである。口縁部は頸部から比較的緩やかに立ち上がり、端部は丸みをもつ。外面の調整は、口縁部が縦方向のハケメ後ヨコナデであるが、胴部は摩滅のため不明である。内面は、口縁部がヨコナデ、胴部が斜方向のハケメである。５は口縁部が外反気味に折れる。口径は15.6㎝を測る。６は口径19.8㎝を測るものである。口縁部はやや外反気味に折れる。調整は、外面が縦方向のハケメ後ヨコナデ、内面が横方向のハケメである。７は口径15.0㎝を測る。口縁部は比較的長めで、頸部から外方に緩やかに折れる。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、頸部から胴部にかけては一部に縦方向のハケメが残るもののナデである。内面は口縁部がヨコナデ、胴部がナデである。８は口径13.4㎝を測る。胴部は球状を呈し、口縁部は頸部からわずかに外方に折れる。口縁端部はやや尖り気味である。外面の調整は、口縁部がハケメ後ナデ、胴部が縦方向のハケメである。内面は、口縁部が斜方向のハケメ後ナデ、胴部はナデで仕上げられる。９は口径13.8㎝の小型品である。胴部はなで肩を呈し、口縁部が頸部から外方に折れる。口縁端部は角張る。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部が内外面ともナデである。10は口径16.0㎝を測る。口縁部は頸部から強くくの字状に折れ、端部をやや上方に引き上げる。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部は外面が横方向のタタキ、内面がヘラケズリである。

11、12は高坏である。11は脚の上部である。坏部との接合部から、筒状部がのびる。外面は斜方向のハケメ後ヨコナデ、内面はナデである。12も脚の上部である。筒状部がややハの字状に開き、裾部にむかい大きく開く部分に円形の透かし穴が配される。調整は、外面が縦方向のヘラミガキ、



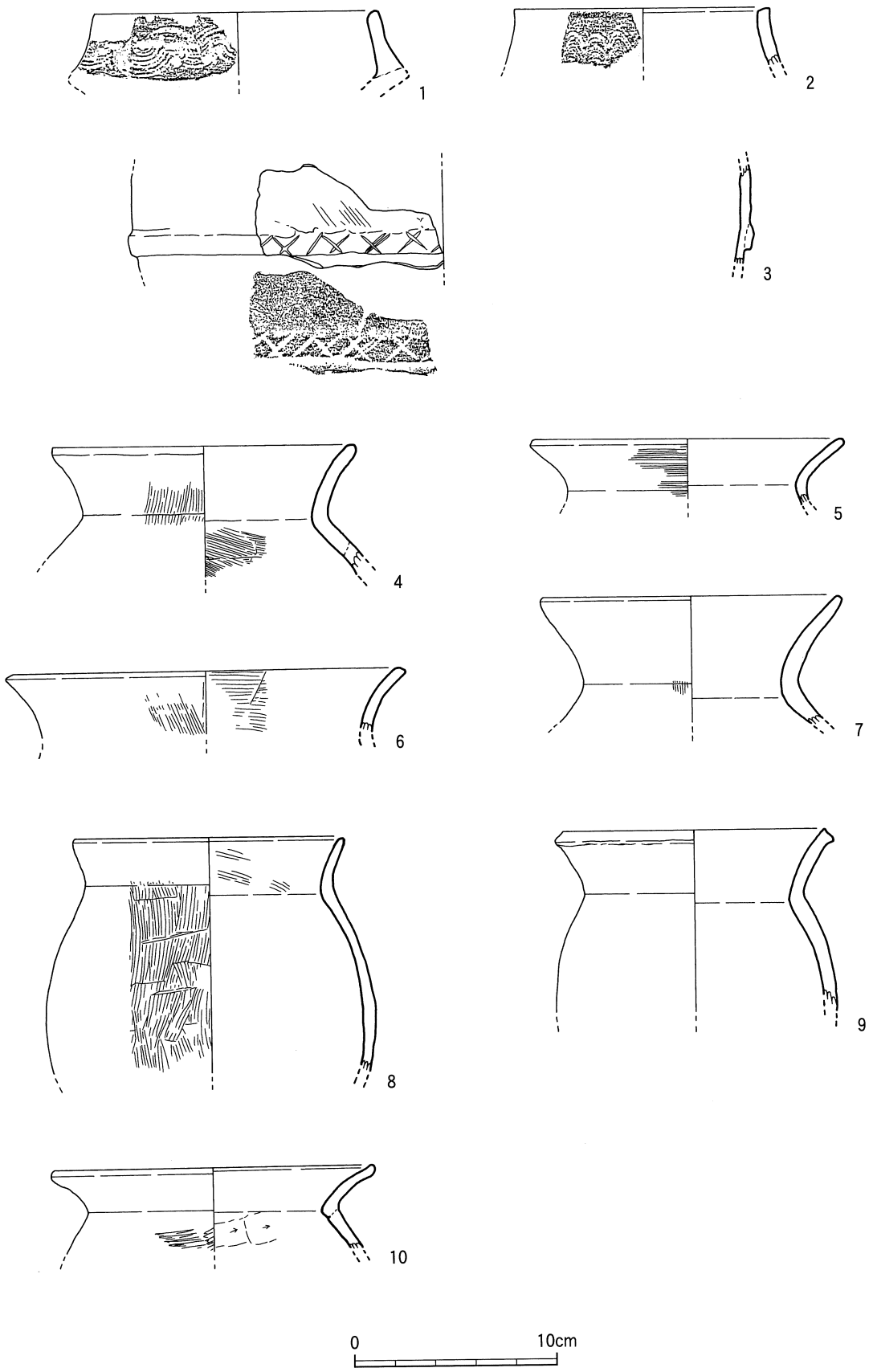

第39図　利光遺跡脇ノ津留地区14号竪穴実測図（1／60）

内面がシボリである。

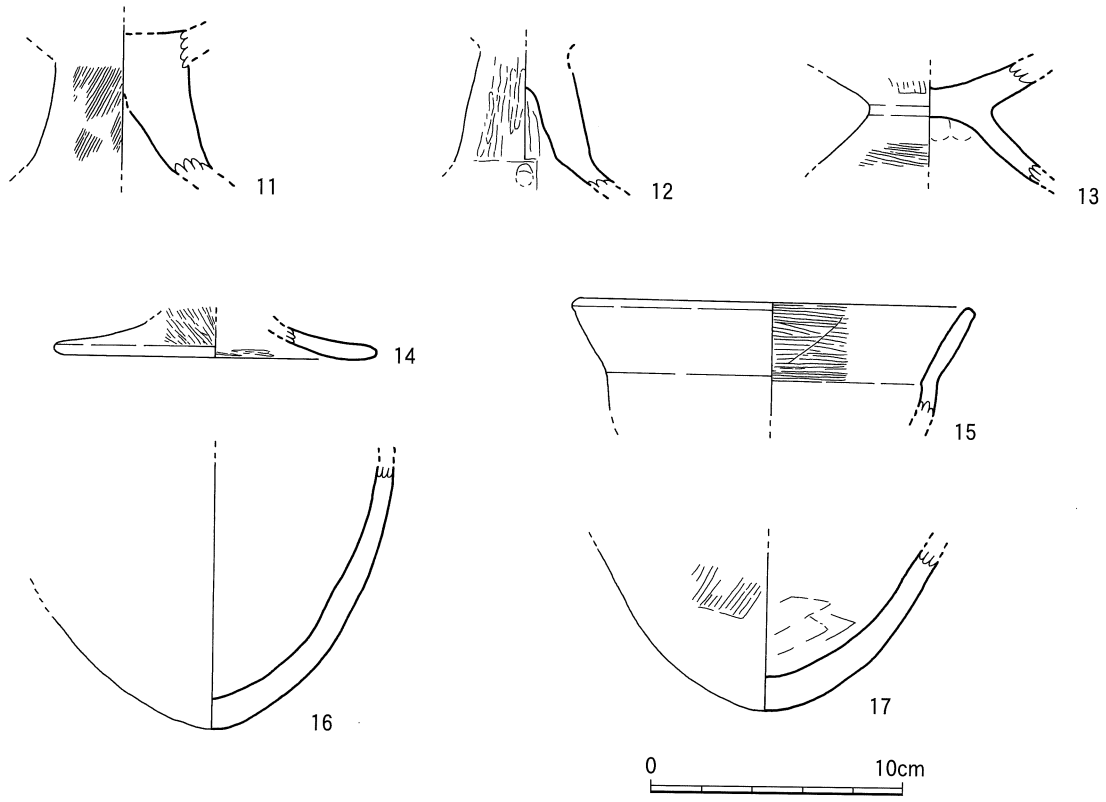
13は脚付き鉢の可能性をもつ。脚部は大きくハの字状に開くもので、比較的短い。外面の調整は、鉢部が縦方向のハケメ、脚部が横方向のハケメである。内面は、鉢部がナデ、脚部がオサエとナデに加え板状工具のあたった痕跡がみられる。14は脚の端部である。底径は12.8cmを測る。外面には縦方向のヘラミガキが、また内面にも横方向のヘラミガキがみられる。

15は鉢で、口径16.0cmを測る。半球形の胴部から口縁部がわずかに外方に折れるものである。外面はヨコナデにより仕上げられる。また、内面は口縁部が横方向のハケメ、胴部はナデである。

16、17は底部である。16は丸底を呈するもので、内外面ともナデ調整である。17はやはり丸底で、外面に斜方向のハケメとナデ、内面にナデと板状工具によるナデがみられる。




第40図　利光遺跡脇ノ津留地区14号竪穴出土土器実測図１（1／3）




第41図　利光遺跡脇ノ津留地区14号竪穴出土土器実測図２（1／3）

## 15　15号竪穴（第42図）

15号竪穴は複雑に重複する竪穴群の最も南に位置する。９号竪穴には切られるが、接するように隣接する12号竪穴との前後関係は不明である。

竪穴は、平面プラン方形を呈する。９号竪穴などに切られる部分もあるが、一辺約６m強の規模をもつものであることが分かる。主柱穴の配置は４本柱である。柱穴間の心々距離は、北側柱列が2.5m、西側柱列が3.1m、南側柱列が3.0m、東側柱列が3.2mである。

焼土は西側の壁際に１ヶ所みられるのみである。位置的にみて、この焼土が本竪穴の炉跡とは考えにくい。土壙は、南側柱列のやや中央寄りに長方形のものがみられる。土壙の規模は、長辺1.2m、短辺0.5m、深さ0.1mである。また、西側から南側の壁にかけても落ち込みがみられる。

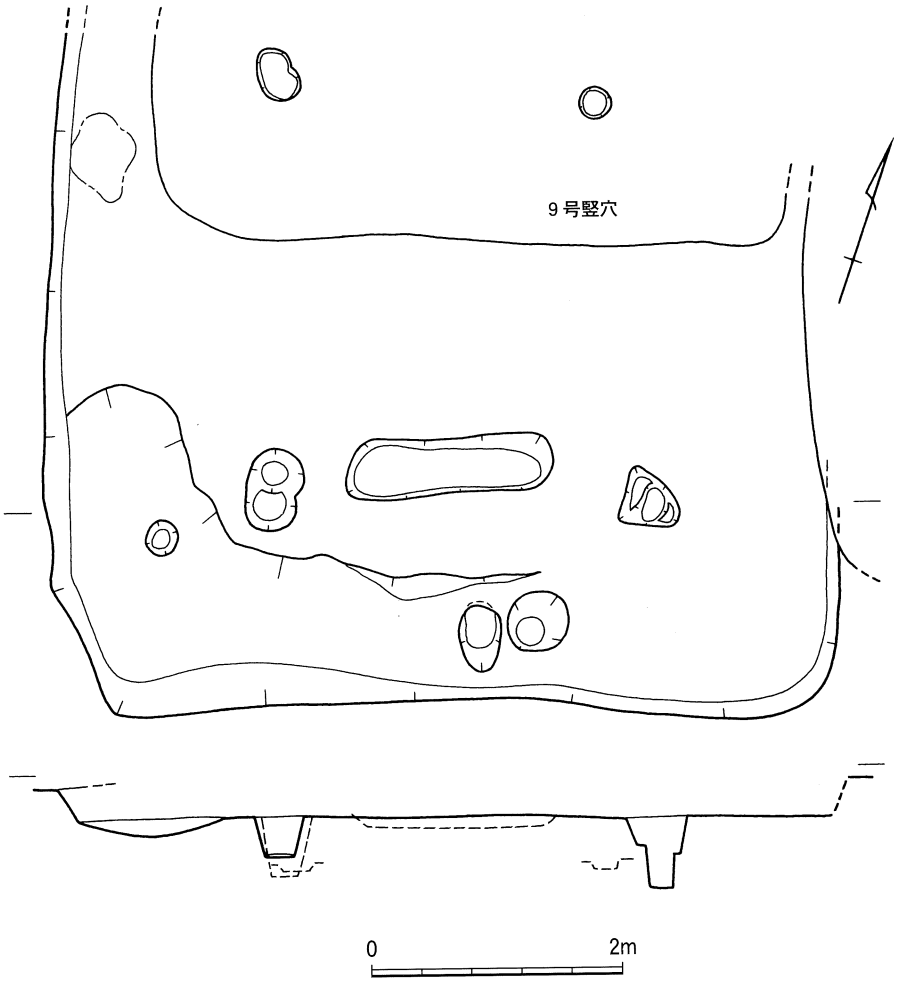
出土土器（第43図）は壷、甕、鉢がある。

１は二重口縁壷である。口縁端部を欠くが、口縁がくの字状に内傾し立ち上がる。外面には櫛描波状文が施される。２も二重口縁壷の口縁と思われる。口径14.2㎝を測るもので、口縁が短く外傾しながら立ち上がる。調整は、口縁部内外面がヨコナデ、その他がナデである。３は壷の頸部である。頸部下にベルト状の突帯が付され、ヘラ状工具による刻みが施される。

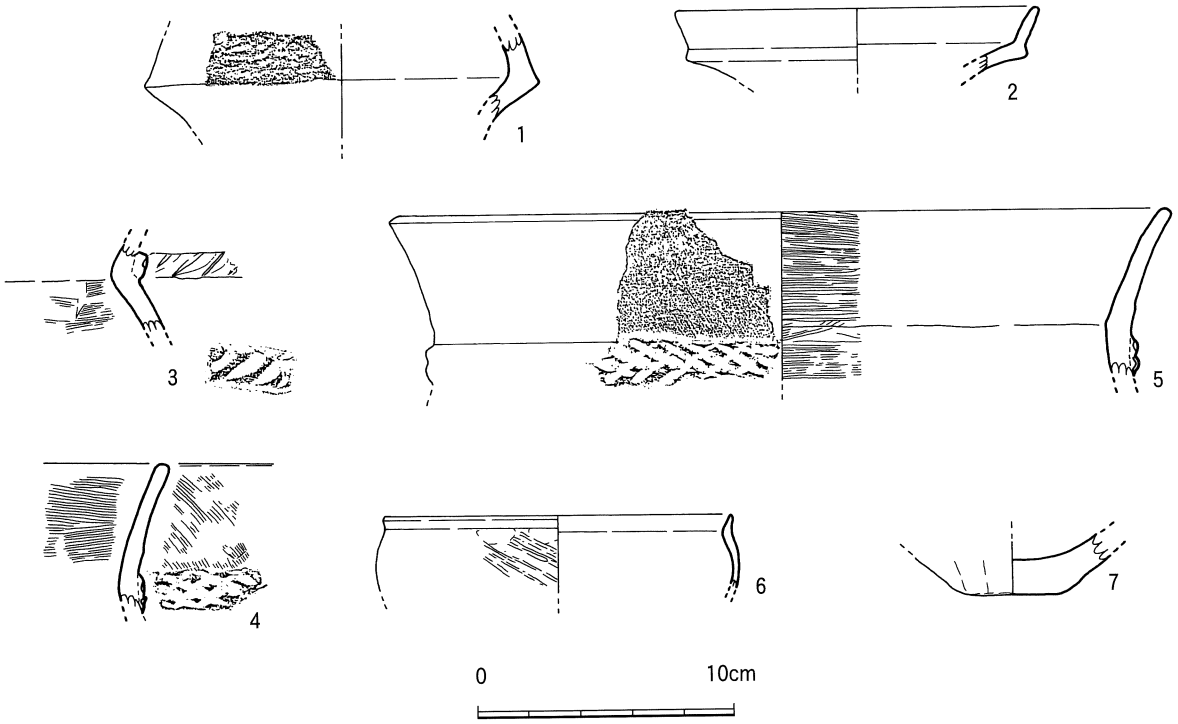
４、５は甕である。いずれも、口縁部が頸部からやや外傾して立ち上がる。頸部にはベルト状の突帯が付され、ヘラ状工具による斜格子文が施される。外面には斜方向のハケメが、また内面も横方向のハケメがみられる。５は口径30.5㎝を測る。

６は鉢である。口径13.6㎝を測り、口縁部はわずかに外方に折れる。外面はヘラミガキ、内面はナデである。

７は底部で、平底を呈する。




第42図　利光遺跡脇ノ津留地区15号竪穴実測図（1／60）




第43図　利光遺跡脇ノ津留地区15号竪穴出土土器実測図（1／3）

b）土坑

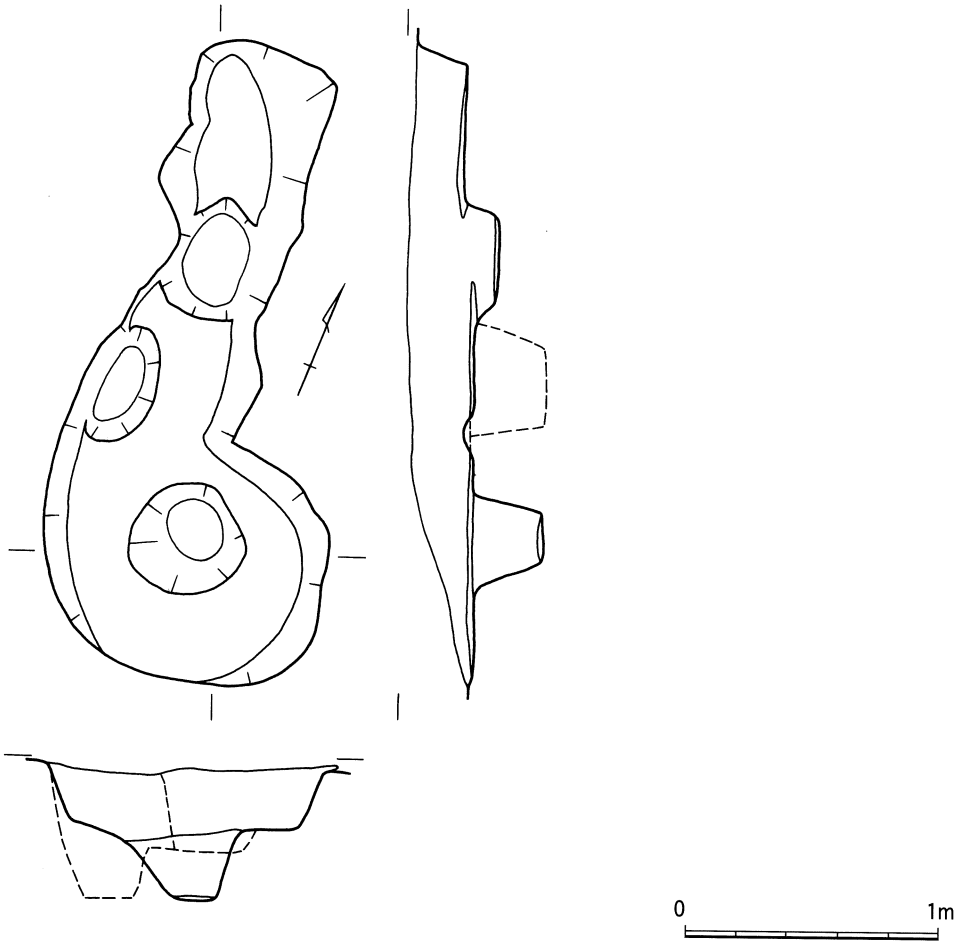
1　1号土壙（第44図）

1号土壙は、14号竪穴と15号竪穴の間に位置する。竪穴は不定形を呈するもので、長さ約5mを測る。また、床には凹凸があり、床面は一定ではない。土壙内の遺物の多くは破片で、主に土壙の南端から出土した。これらの破片の多くは接合し、結果的に完形ちかくまで復元できたものもある。出土土器に甕が多い点が注目される。

出土土器（第45図）は壷と甕がある。

1は長頸壷で、口径14.0cmを測る。胴部は下半を欠くが、中程に最大径がくるものと思われる。口縁部は、胴部からくの字状に折れ直線的にのび、端部ちかくでわずかに外に開く。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向のハケメである。内面は、口縁部が横方向のハケメ後ヨコナデ、胴部は斜方向のハケメである。

2～5は甕である。2は口径19.8cmを測る。胴部は長胴気味で、口縁部は胴部から外反気味に折れる。外面の調整は、口縁部が縦方向のハケメ後ヨコナデ、胴部が縦あるいは斜方向のハケメである。内面は、口縁部と胴上部が横方向のハケメで一部指オサエ、胴部の大部分が丁寧なナデである。3は小型品で、口径13.6cmを測る。胴部は長胴を呈し、口縁部は外反気味に胴部から折れる。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向のハケメである。また内面は、口縁部がヨコナデ、胴部が指オサエ及びナデである。4は口径22.0cmを測るものである。胴部は長胴で、中程に最大径が




第44図　利光遺跡脇ノ津留地区1号土坑実測図（1／30）

第45図　利光遺跡脇ノ津留地区１号土坑出土土器実測図（1／3）

ある。口縁は、胴部から外反気味に折れるもので、端部は角張る。調整は、外面口縁部がハケメ後ヨコナデ、外面胴部が縦方向のハケメである。また、内面口縁部が横ないしは斜方向のハケメ、胴部内面がナデである。５は口径21.3㎝、高さ27.4㎝を測る。胴部はやや球形にちかい感じで、底部は丸底である。口縁部は、胴部から外反気味に折れる。調整は、外面口縁部が粗い縦方向のハケメ、外面胴上部がナデ、胴中程以下が縦方向のハケメ後ナデである。また、内面口縁部がナデ、胴部内面上半が斜方向のハケメ及び指オサエ、胴部内面下半がナデである。

### c）その他の出土品

#### 1　土器片加工品（第46図）

各竪穴から出土した土器片加工品を一括し記述する。これらはいずれも弥生時代から古墳時代にかけての土器片を利用したもので、形態等から以下のように分類される。

Ⅰ類（1,2）は円形基調のものである。１が打ち欠きにより形を整えただけであるのに対し、２は縁の大半が磨られている。

Ⅱ類（５～９）は鋸歯状の刻みを有するものである。このうち５～８は半月形のもので、弦状部に刻みを配する。弧状部は、一部が打ち欠きのままであるが、基本的に縁を磨る。９は半月形を呈さず、縁辺は両方とも弧状をなし、その一辺に刻みをいれる。

Ⅲ類（10～27）は半月形を呈するものである。大きさは、長さ2.8㎝の小型品から７㎝の大型品まである。このうちの多くが、全周に磨りが及んでいる。

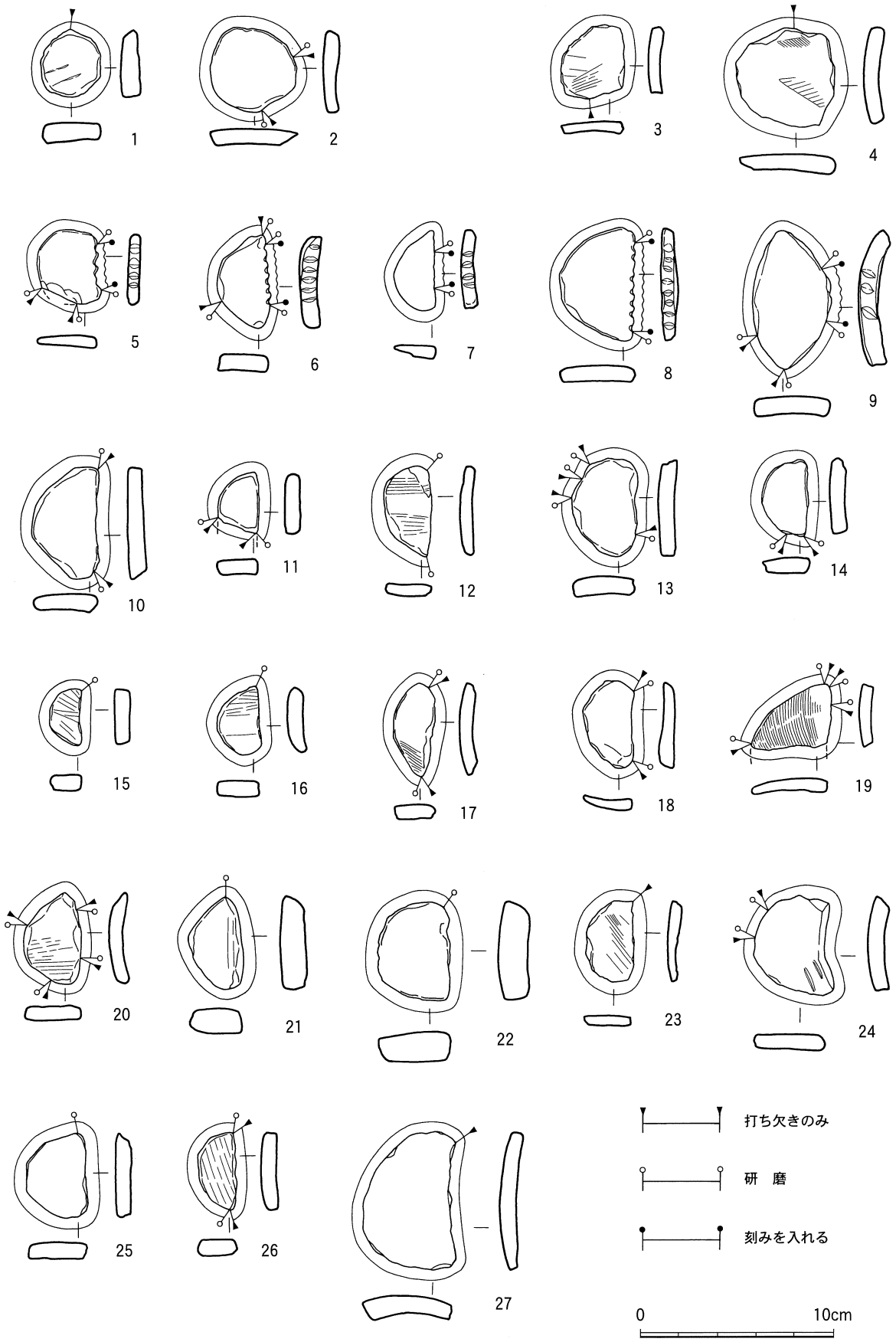
また、３,４については、半月形にちかいがやや角張った形状を呈する。いずれも打ち欠きのみで形を整えており、Ⅱ類及びⅢ類の未製品である可能性をもつ。

以上の土器片加工品のうち、13号竪穴からの出土が12点と最も多く、次いで14号竪穴の５点である。

**表３　利光遺跡脇ノ津留地区出土土器片加工品計測表**

長径、短径:cm　　重量:g

| 番号 | 出土遺構 | 長径 | 短径 | 重量 | 番号 | 出土遺構 | 長径 | 短径 | 重量 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 6号竪穴 | 3.5 | 3.1 | 12.1 | 15 | 13号竪穴 | 2.9 | 1.6 | 5.1 |
| 2 | 10号竪穴 | 4.5 | 4.3 | 17.8 | 16 | 13号竪穴 | 3.4 | 2.2 | 7.7 |
| 3 | 2号竪穴 | 3.4 | 3.25 | 10.4 | 17 | 13号竪穴 | 4.8 | 2.2 | 7.9 |
| 4 | 14号竪穴 | 5.1 | 4.95 | 28.6 | 18 | 13号竪穴 | 4.4 | 2.5 | 7.7 |
| 5 | 14号竪穴 | 3.6 | 3.1 | 8.8 | 19 | 13号竪穴 | 5.0 | 3.1 | 9.6 |
| 6 | 14号竪穴 | 4.7 | 2.7 | 11.7 | 20 | 13号竪穴 | 4.6 | 3.0 | 13.2 |
| 7 | 13号竪穴 | 4.0 | 2.2 | 6.2 | 21 | 13号竪穴 | 4.8 | 2.75 | 19.2 |
| 8 | 13号竪穴 | 5.8 | 3.9 | 21.4 | 22 | 13号竪穴 | 5.0 | 3.8 | 39.0 |
| 9 | 13号竪穴 | 7.2 | 4.0 | 34.1 | 23 | 13号竪穴 | 4.2 | 2.5 | 6.3 |
| 10 | 1号竪穴 | 5.7 | 3.3 | 18.6 | 24 | 14号竪穴 | 4.9 | 3.75 | 19.9 |
| 11 | 5号竪穴 | 5.1 | 2.1 | 6.2 | 25 | 14号竪穴 | 4.2 | 3.0 | 14.3 |
| 12 | 5号竪穴 | 4.1 | 2.5 | 8.8 | 26 | 15号竪穴 | 4.0 | 1.9 | 7.9 |
| 13 | 6号竪穴 | 4.95 | 3.2 | 19.1 | 27 | 表　採 | 7.1 | 4.6 | 36.6 |
| 14 | 8号竪穴 | 3.9 | 2.4 | 9.3 | | | | | |




第46図　利光遺跡脇ノ津留地区出土土器片加工品実測図（1／3）

## C. 近世の遺構

### a）溝

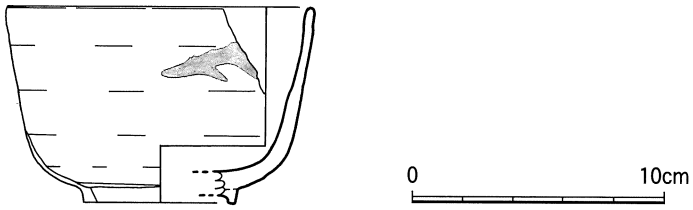
#### 1　溝１（第47図）

溝１は14号竪穴の北側に位置し、東西方向に走る。しかし、調査区西側から10m程きたところで終息する。溝の終息した部分の東側には土壙墓２、土壙墓３があり、溝はこれらの土壙墓に規制されたものと推定される。また、溝の北側では、１号土壙と土壙墓１が溝と重複する。溝は１号土壙を切るが、土壙墓１との前後関係は明らかにできなかった。

溝の規模は、幅２～2.5m、深さ0.5mを測り、その方向は磁北の東西よりわずかに北に振る。しかし、溝の掘り方や下場の線は直線的ではなく、あまりきちんとした溝ではない印象を受ける。

溝からの出土遺物は少なく、破片も含めてわずかな近世陶磁器が出土したのみである。

出土土器（第47図）のうち図示できたものは１点だけである。１は腰の張った陶胎の碗で、復元口径12.2㎝、復元底径6.0㎝、高さ7.7㎝を測る。外面高台部を除き内外面とも施釉される。全体の色調は浅黄色で、釉には貫入がはいる。体部外面には染付けによる文様がみられる。




第47図　利光遺跡脇ノ津留地区溝出土遺物実測図（1／3）

### b）土壙墓

#### 1　土壙墓１（第48図）

土壙墓１は、溝と一部が重複する。平面プランは方形で、一辺約0.9mを測る。深さは、検出面から約0.5mである。骨片や土器などの遺物は確認されなかったが、土壙墓２及び土壙墓３の状況や土質と類似することから、同様な性格をもつものと判断した。しかし、土壙墓２及び土壙墓３の平面プランが円形基調であるのとは大きく異なる。時期的には近世の所産と推定される。

#### 2　土壙墓２（第48図）

土壙墓２は、溝が終息した部分の東側1.4m余に位置する。土壙墓３と重複しており、土壙墓３を切る。

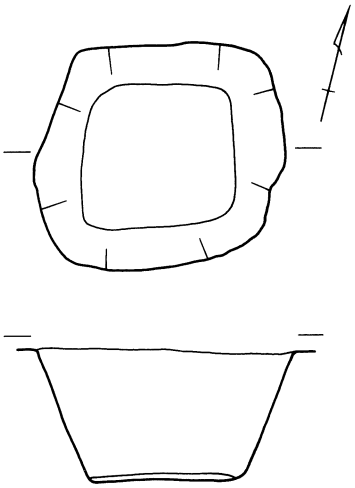
平面プランは円形で、径約1.0mを測る。また、深さは検出面から約0.2mである。土壙墓内からは、頭蓋骨及び四肢骨の一部と推定される骨片が出土した。骨片はいずれも非常に脆く、取り上げは困難な状況であった。副葬品については、全く検出されなかった。時期的には、近世と考えられる。

#### 3　土壙墓３（第48図）

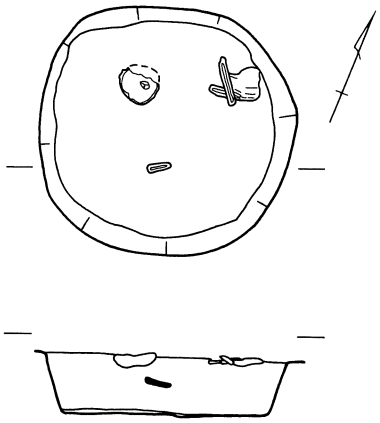
土壙墓３は、土壙墓２のやや北側に位置し、土壙墓２により切られる。

平面プランは楕円形で、長径約1.5m、短径約1.0mを測る。また、深さは、検出面から約0.3mである。土壙墓内からは、やはり非常に脆い骨片がわずかに出土したが、副葬品は確認されなかった。時期的には、土壙墓１及び土壙墓２同様近世の所産と思われる。

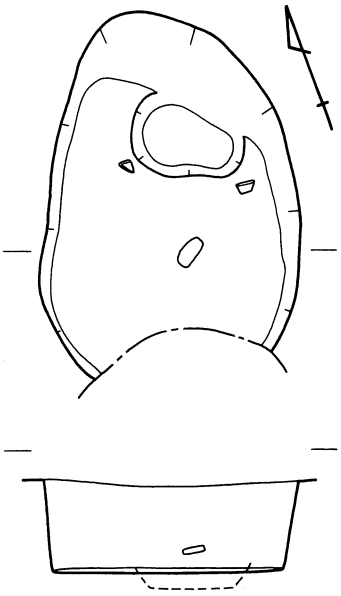
土壙墓1

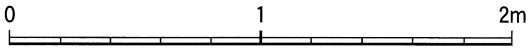


土壙墓2



土壙墓3






第48図　利光遺跡脇ノ津留地区土壙墓実測図（1／30）

## D. 小結

脇ノ津留地区は、近世の遺構が一部認められるが弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけ営まれた集落が主体となる遺跡である。利光遺跡は大野川の右岸に南から北へ細長く展開する。しかし、その間に脇ノ津留川などの小河川が２本はいり、遺跡は自然地形により大きく３ヶ所に分断される。遺跡の立地する場所は、広い意味での大野川の自然堤防と考えられる。現在大野川は川幅百mを越え、河床もかなり下がっており、自然堤防の形成は古いものと考えられる。このことは、弥生時代遺構面のさらに下層、現地表面から約３mの深さで縄文時代早期の包含層が確認されていることでも分かる。遺跡の東側は山塊までややあり、大野川に向かって開くように緩傾斜の平坦面が広がる。遺跡は最も大野川に近い部分に展開するが、遺跡のすぐ東側は遺跡が立地する場所より標高が１～２m低くなっている。

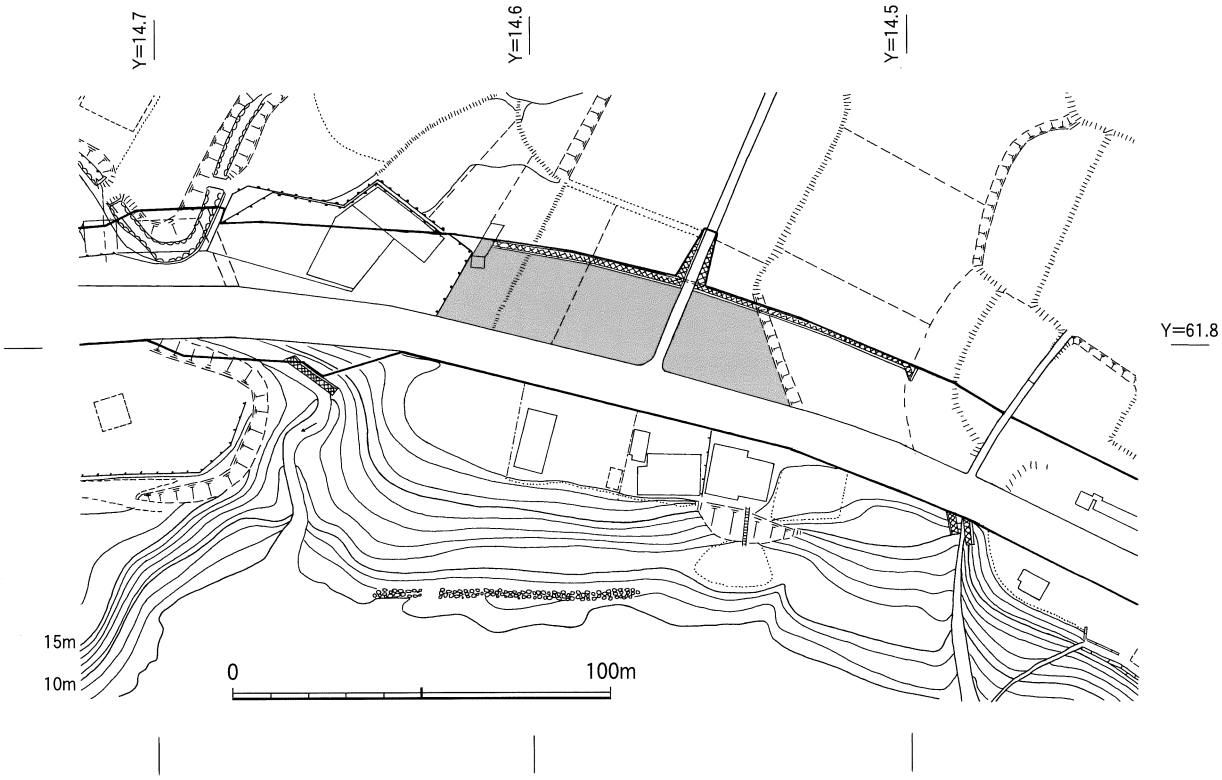
脇ノ津留地区からは合計15基の竪穴が確認された。これらの多くは複雑に重複しており、限られた集落地に繰り返し竪穴が形成されたことを物語る。前述したように利光遺跡は自然地形により３ヶ所に分断されるが、弥生・古墳時代の遺構が確認されたのは最も下流側の脇ノ津留地区とその隣の鵜ノ木地区である。鵜ノ木地区は脇ノ津留地区とほぼ同時代の竪穴が確認されているが、遺跡全体には広がらず脇ノ津留地区に比べると散発的な印象を受ける。弥生・古墳時代における集落の中心は脇ノ津留地区で、鵜ノ木地区は集落の末端的な位置付けにあったものと推定される。これらの違いは、集落を支える水田の状況からきたものと考えられる。すなわち、脇ノ津留地区の東側から北側にかけては標高の低い部分が広がる。この地区の山際は地下水位が高いことが予想され、脇ノ津留川など小河川からの原初的な灌漑も加えて、ある程度まとまった面積の水田経営が可能であったと思われる。これに対し鵜ノ木地区東側は標高の低い部分が狭く、おのずと水田面積も少なかったと推定される。利光遺跡の最も上流側にある久保地区では、背後の山塊まで緩傾斜地が続き初期水田形成の適地がない。脇ノ津留地区や鵜ノ木地区とは集落周辺の環境が異なる。これに起因してか、久保地区には弥生・古墳時代の集落は形成されていない。

脇ノ津留地区の竪穴はいずれも方形を呈する。確認された15基のうち調査区外に及び全形が不明なものもあるが、一辺８mを越える大型の竪穴が４基みられる。14号竪穴は西側と南側が調査区外に及ぶが現状で一辺８mあり、本遺跡で最も大型である。鵜ノ木地区の竪穴がすべて一辺６m程であったのに比べると、その差は明らかである。また、特異な形態の竪穴として１号竪穴がある。時期は弥生時代後期終末で、一辺約8.4mの規模を有する。柱穴は各壁から約２mの位置に方形に16本を配する。中央の１本と併せ計17本の柱穴で上屋を支えていることになる。１号竪穴は本遺跡においても規模の大きい方であるが、１号竪穴と同規模あるいはこれ以上の規模をもつ８号竪穴や14号竪穴でも、各辺に３本あるいは２本を配するのみである。よって、建物規模の大小と必ずしも関連するものではないことが分かる。１号竪穴では、方形に巡らした柱穴列と各壁の間に溝も配されており、どのような建物構造であるのか注目される。

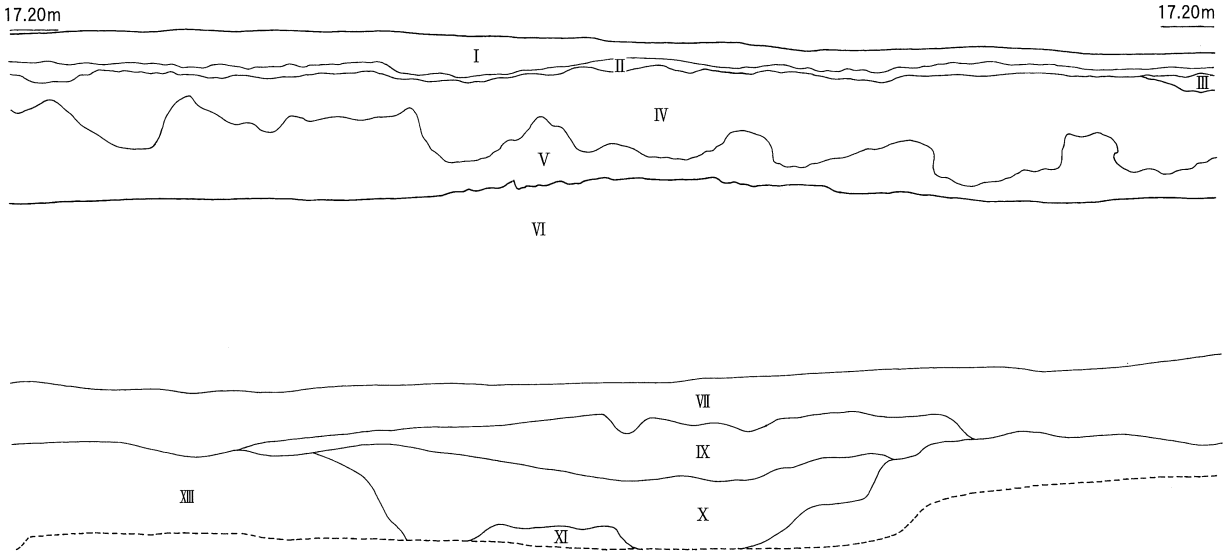
## 4．利光遺跡鵜ノ木地区

利光遺跡鵜ノ木地区は、利光遺跡のほぼ中央に位置する。調査は平成６年度から用買の済んだ地区から順に行い、南からA・B・C区とした。

調査区は耕作土・床土（第50図　Ⅰ・Ⅱ層）の下に、約70㎝程度の洪水による砂泥層（Ⅲ～Ⅴ層）が厚く堆積している。この層を除去すると、暗茶褐色の粘質土層（Ⅵ層）となり、この上面が遺構検出面で、近世の柱穴群・土坑・掘立柱建物跡・溝等を確認した。




第49図　利光遺跡鵜ノ木地区周辺地形図（1／2000）




| | | | |
|---|---|---|---|
| Ⅰ　黒褐色砂泥土層 | 耕作土 | Ⅱ　赤褐色砂泥土層 | 床土　マンガン混入 |
| Ⅲ　暗赤褐色砂質土層 | 洪水等による堆積土 | Ⅳ　暗茶褐色砂質土層 | 砂粒多量 |
| Ⅴ　茶褐色砂泥土層 | 洪水等による堆積土 | Ⅵ　暗茶褐色土層 | 粘質　縄文時代の遺物含む |
| Ⅶ　茶褐色土層 | 粘質　縄文時代の遺物含む | Ⅷ　黒褐色土層 | 粘質　礫含み上面で多量の遺物出土 |
| Ⅸ　暗黄褐色土層 | 粒子細かく粘質　自然流路か | Ⅹ　黄褐色土層 | 粒子細かく粘質　自然流路か |
| Ⅺ　暗茶褐色土層 | 砂礫層 | | |

第50図　利光遺跡鵜ノ木地区基本土層図（1／40）

A区は南から南西方向に緩やかに下降する。検出遺構は柱穴群で、北側に集中している。

B区は東から西に向かってやや緩やかに傾斜下降している。検出した遺構は近世の土坑墓２基・土坑９基・柱穴群、掘立柱建物跡15棟である。

C区は北から南に向かって緩やかに下降する。検出した遺構は近世の溝１条・柱穴群・土坑９基・掘立柱建物跡１棟である。この層を掘り下げると、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡６棟が確認された。

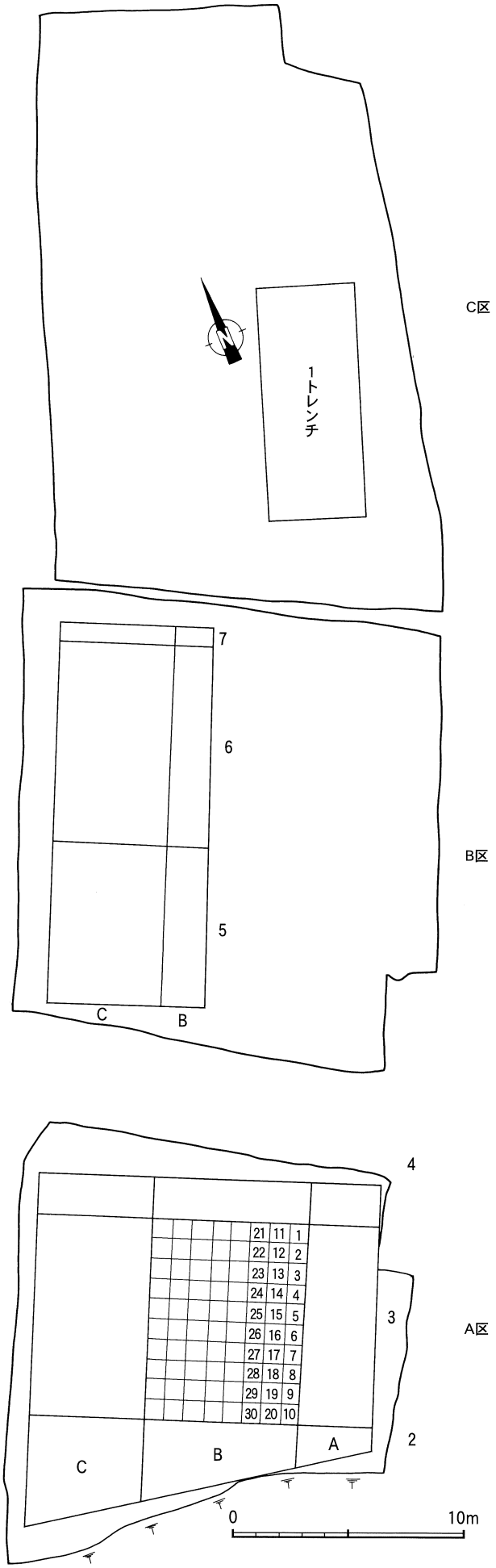
利光遺跡鵜ノ木地区においては、近世遺構検出面下は弥生時代～縄文時代の遺物包含層である。Ⅵ層は若干の弥生時代遺物とともに、縄文時代早期～晩期の遺物を含む。Ⅶ・Ⅷ層は縄文時代の遺物を含む。Ⅸ・Ⅹ層は砂粒を多量に含む黄褐色土の堆積土で、自然流路と考える。Ⅺ層は砂礫層で遺物の出土はない。基盤層と考えられる。

これらのことから、鵜ノ木地区は弥生時代から古墳時代にかけての集落跡と、近世の集落が展開していたことが窺える。また、当遺跡の東側には縄文時代の大集落が展開していたと思われる。

## A. 縄文時代

縄文時代の調査は、A・B区の近世遺構調査面から縄文土器が確認されたことから、A区内にトレンチ２本、グリッド４カ所を設定して掘り下げを行った。この結果、各層で縄文土器が出土した。このため、近世遺構調査後、掘り下げを実施した。A区では全面の掘り下げを行った。東側は堆積が浅く、遺物の出土量は少ない。西側は堆積は厚く、最深で1.8m掘り下げ、遺物も多量に出土した。B区ではA区の状況をふまえ、西側部分の掘り下げを行った。土器の取り上げは10×８mの調査区を１m毎に細分化し、北東から順に1・2‥と小分類し、取り上げを行った。C区はトレンチ１本を設定し、掘り下げを行った。

この結果、遺構の検出はなかったが、膨大な量の縄文土器・石器が出土した。




第51図　利光遺跡鵜ノ木地区縄文時代調査区位置図

### a）縄文早期土器

利光遺跡鵜ノ木地区から出土した縄文時代早期の土器は、これまでの研究史に従い、文様や器形、器壁の厚さなどから以下のように分類し、報告する。

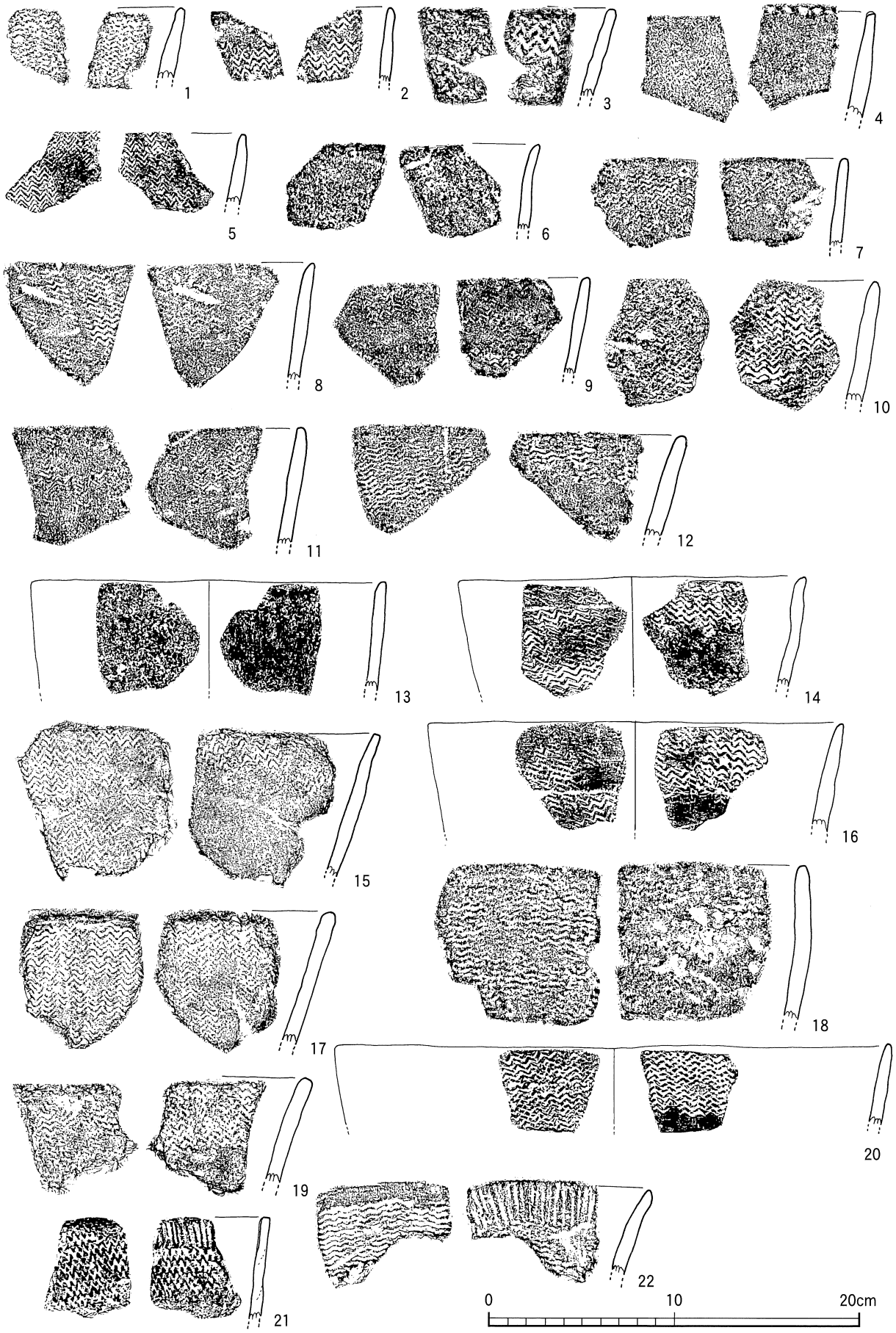
出土した縄文早期の土器は、この時期に特徴的な回転押型文が施文されている有文土器と、器面を撫でのみで仕上げた文様の無い土器群がある。前者をA類、後者はB類とする。A類には、山形文・楕円文・格子目文・撚糸文があり、それぞれ、ＡⅠ類・ＡⅡ類・ＡⅢ類・ＡⅣ類とする。これらは、さらに口縁部が直口し、横回転の押型文が外面の全面と、内面の口縁沿いに施文された土器をＡⅠa類・ＡⅡa類・ＡⅢa類・ＡⅣa類とする。また、口縁部内面に原体条痕を施文し、さらにその下位に横回転の押型文を加えるものがある。これを、ＡⅠb類・ＡⅡb類とする。そして、外反する口縁部の外面に大粒の縦回転の楕円文を施文し、内面は原体条痕のみのＡⅡc類、外反する口縁部の外面に大粒の楕円文のみを施文し、内面無文のＡⅡd類がある。

B類については、境界が不明なものが含まれるが、器壁が１㎝以下の薄手のものと、１㎝以上ある厚手のものがある。前者をＢⅠ類、後者をＢⅡ類とする。ＢⅡ類には口縁部外面に、粘土で帯状又は瘤状の突起が施文されるものがある。

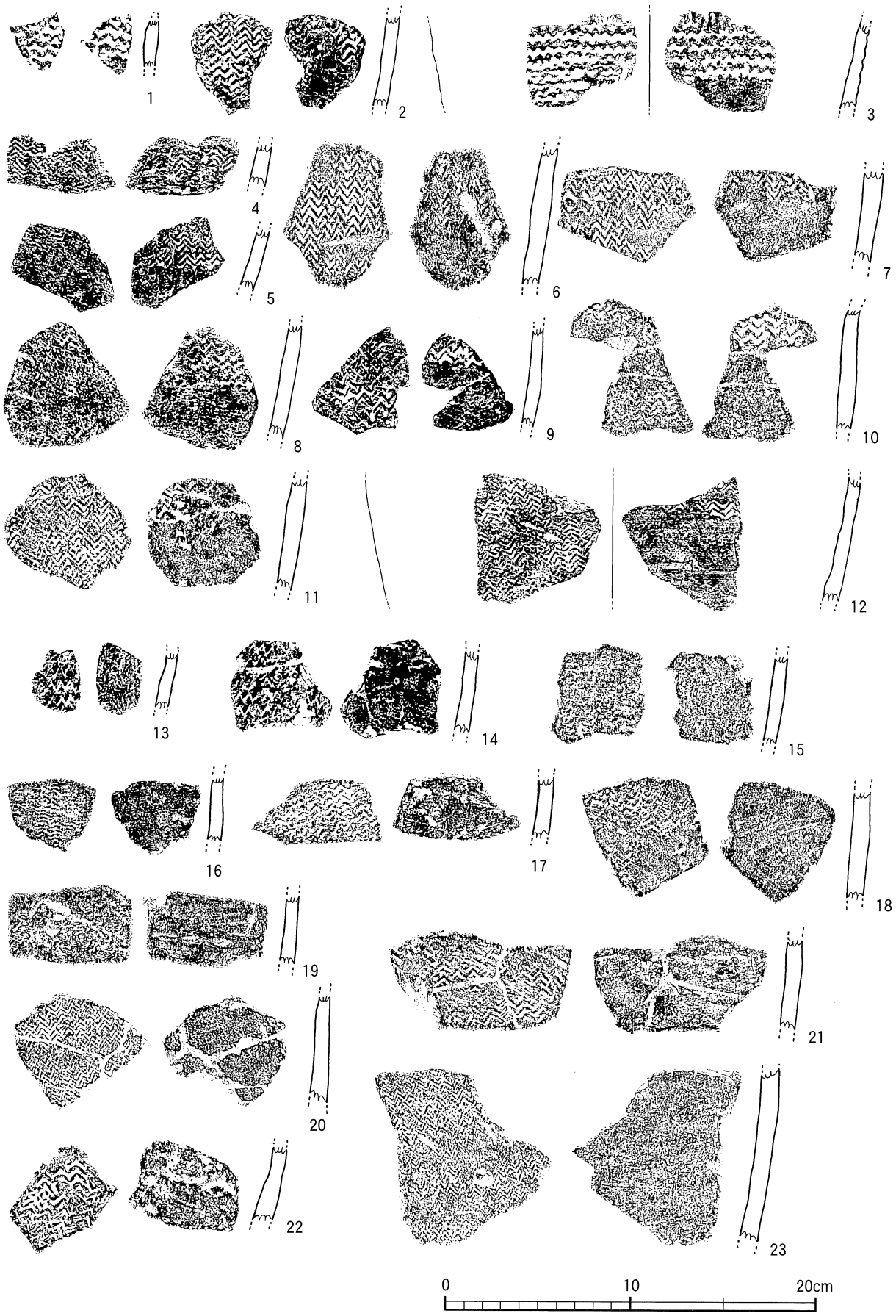
これらの土器の底部は、尖底が基本であるが、一部に小さな平坦面を持つものがある。

これを系統図にし、九州の押型文土器の土器型式に当てはめると、次のとおりになる。

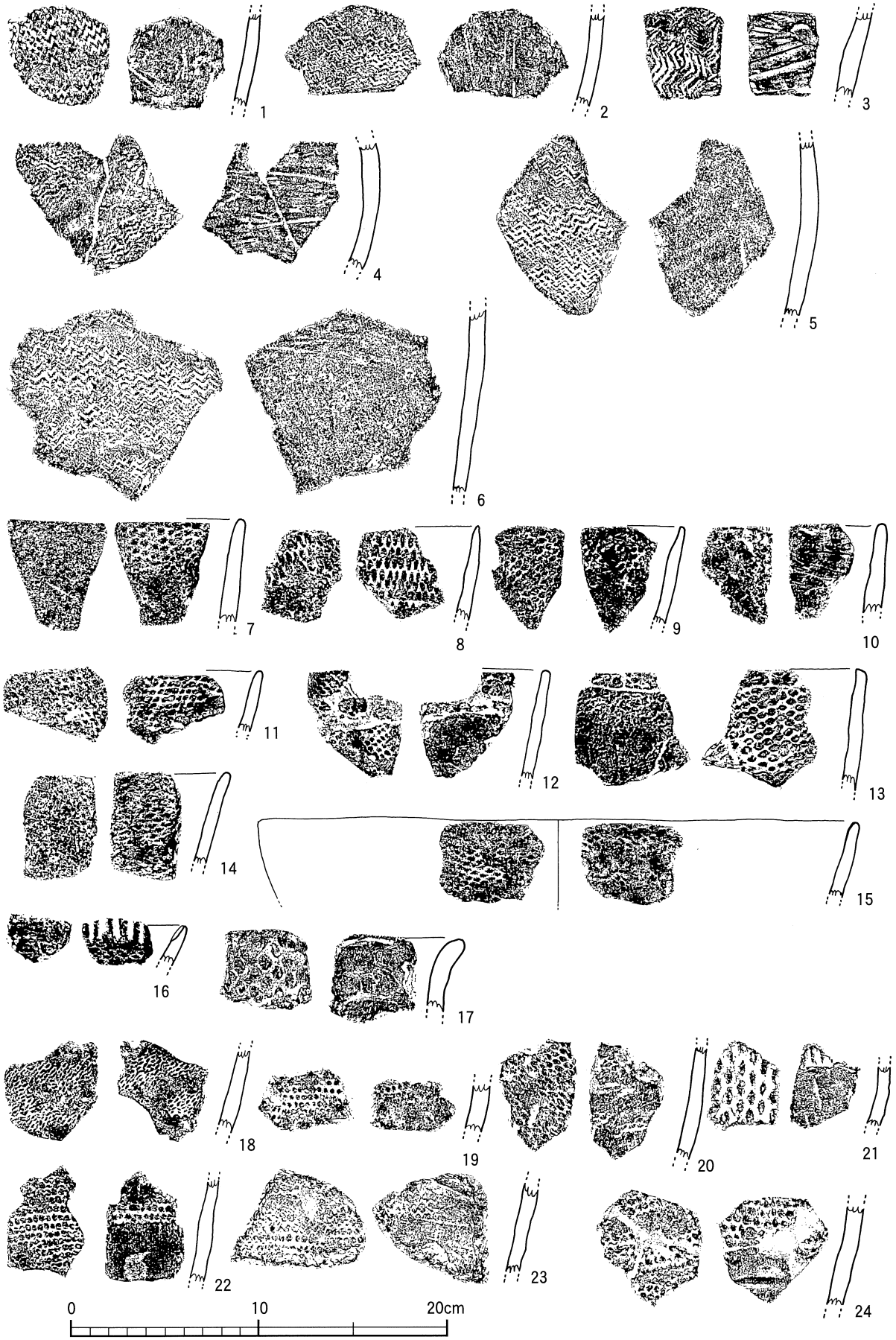
- 有文土器(A類)
  - ＡⅠ類（山形文）
    - ＡⅠa類（稲荷山式土器）
    - ＡⅠb類（早水台式土器）
  - ＡⅡ類（楕円文）
    - ＡⅡa類（稲荷山式土器）
    - ＡⅡb類（早水台式土器）
    - ＡⅡc類（田村式土器）
    - ＡⅡd類（ヤトコロ式土器）
  - ＡⅢ類（格子目文）
  - ＡⅣ類（撚糸文）
- 無文土器(B類)
  - ＢⅠ類（薄手）
  - ＢⅡ類（厚手）



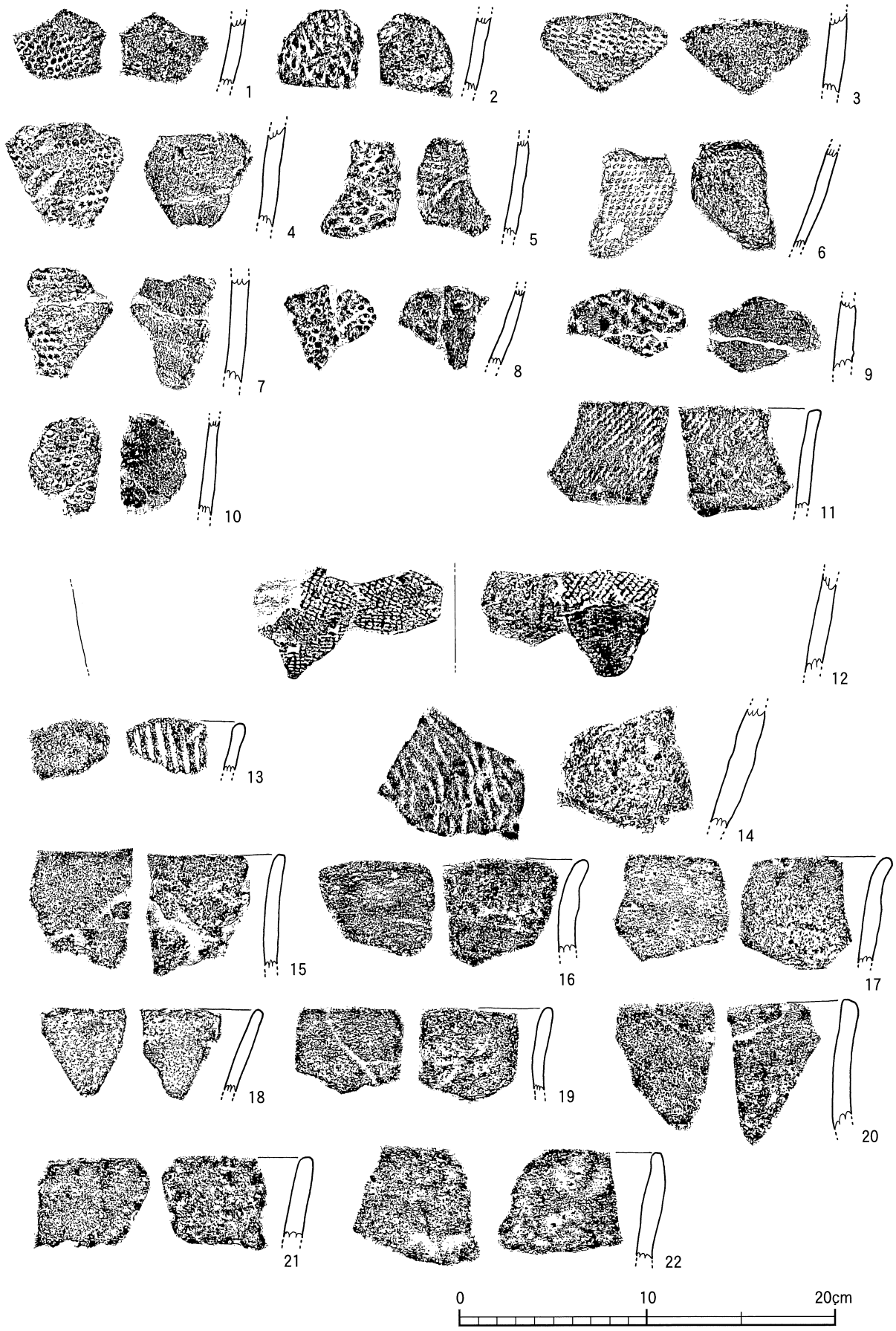

第52図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図１（1／3）



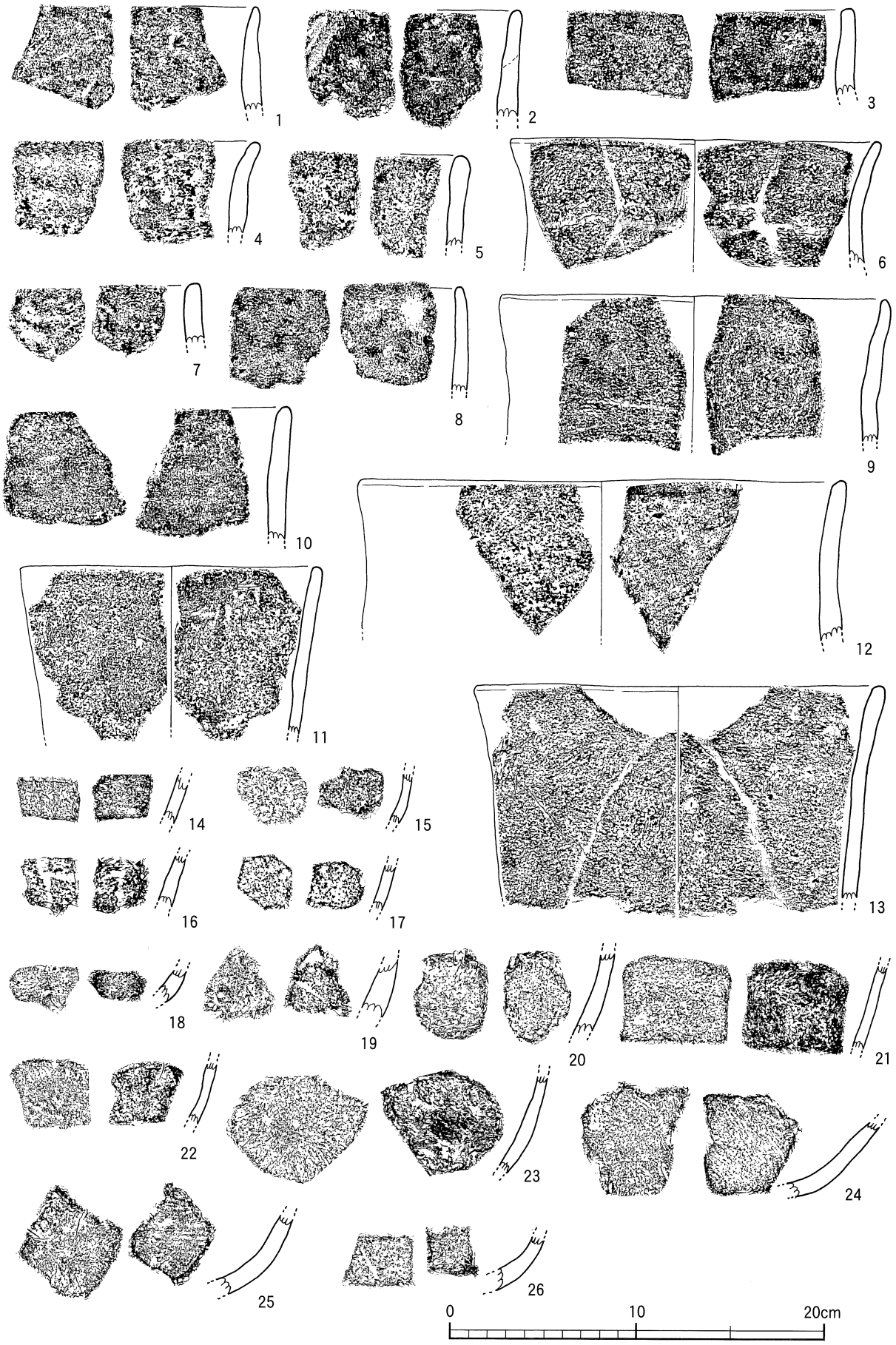

第53図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図２（1／3）



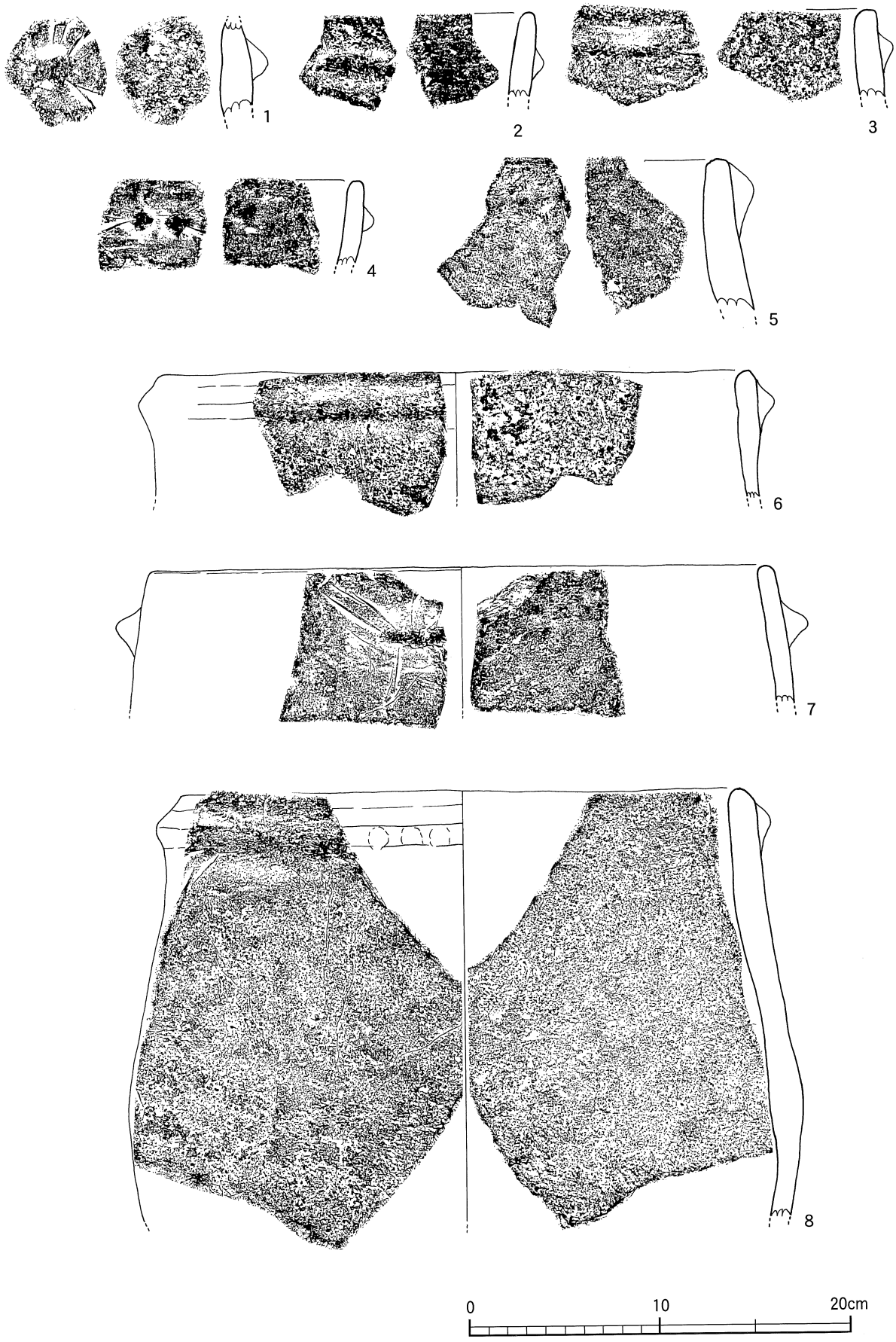

第54図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図３（1／3）



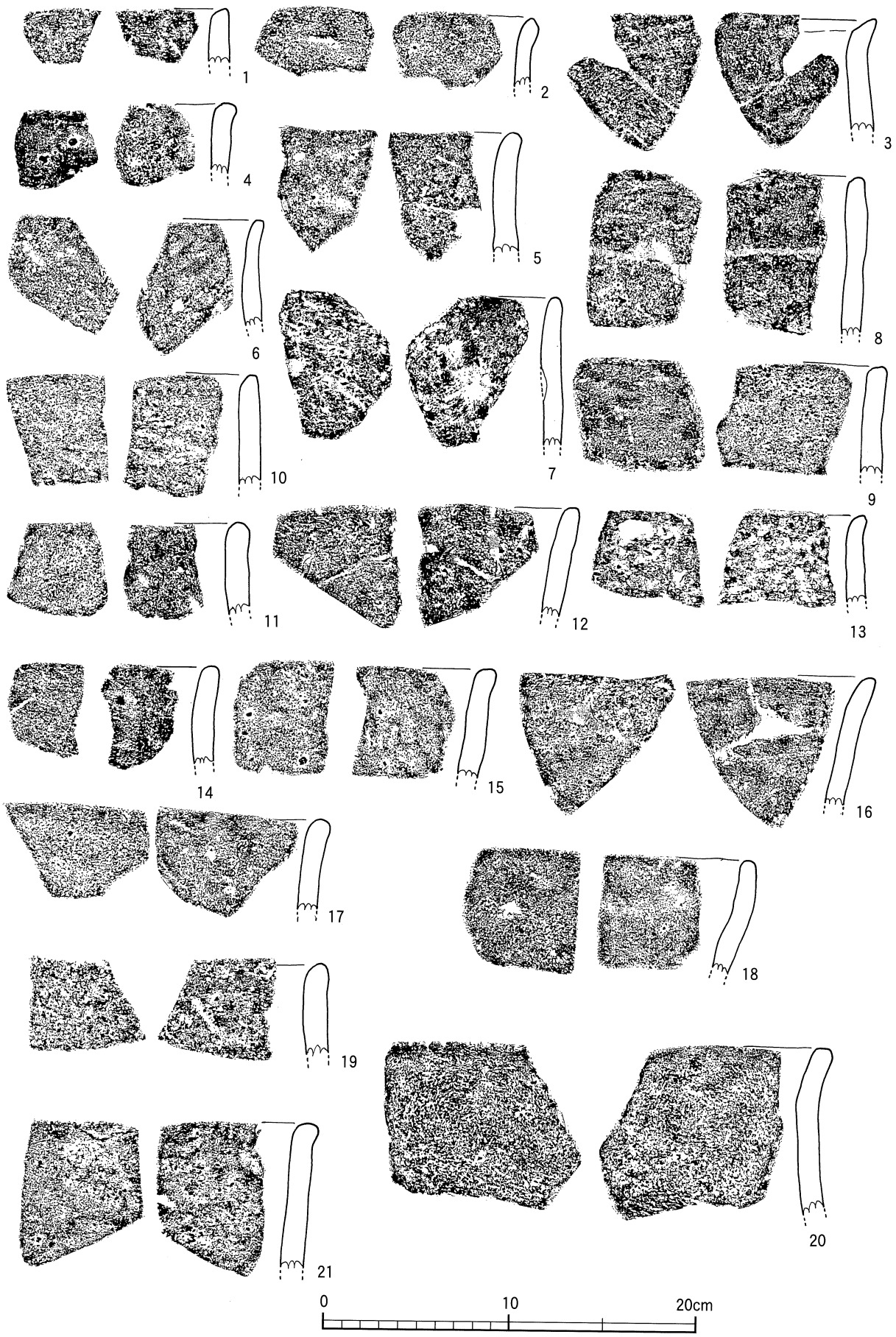

第55図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図４（1／3）



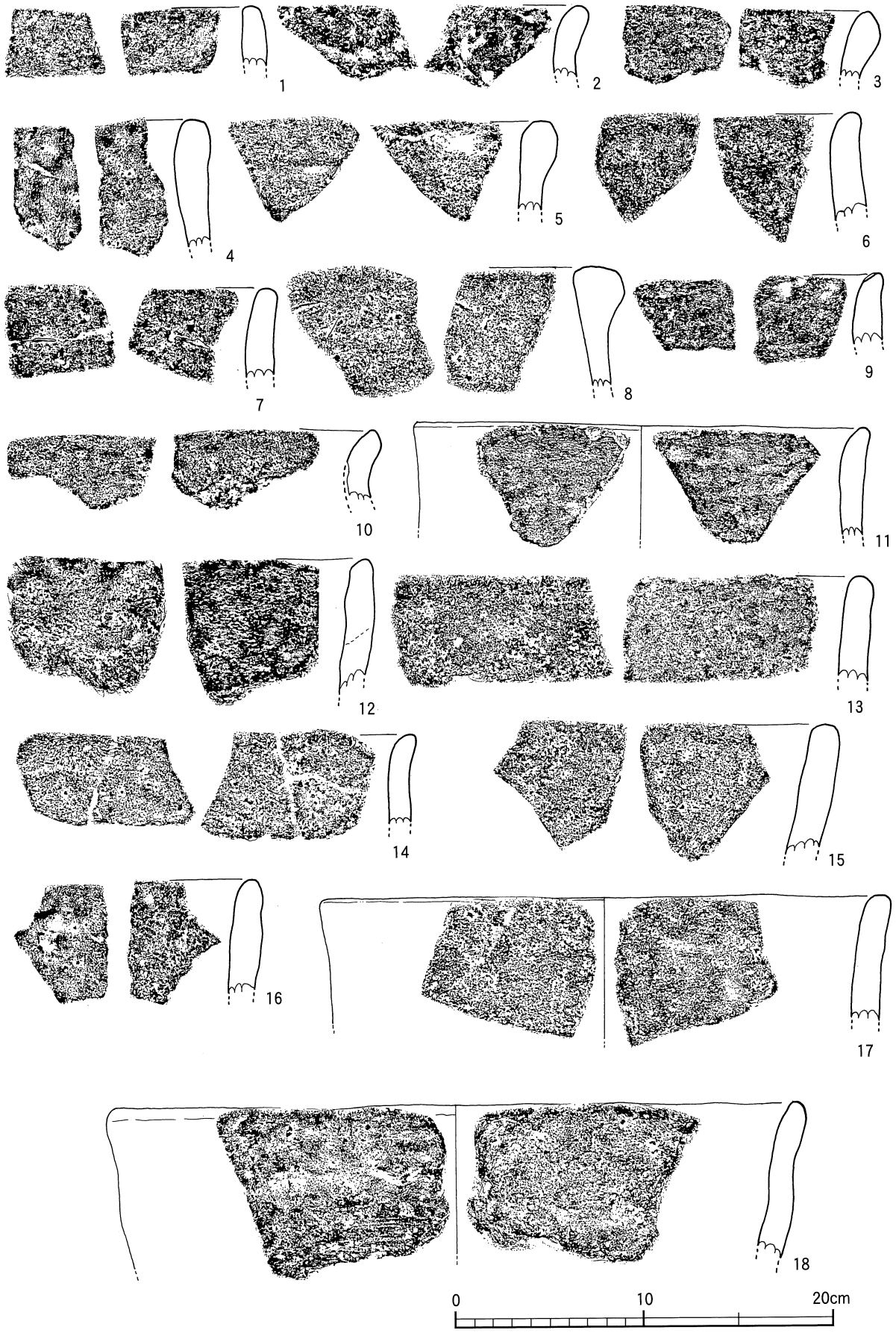

第56図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図５（1／3）



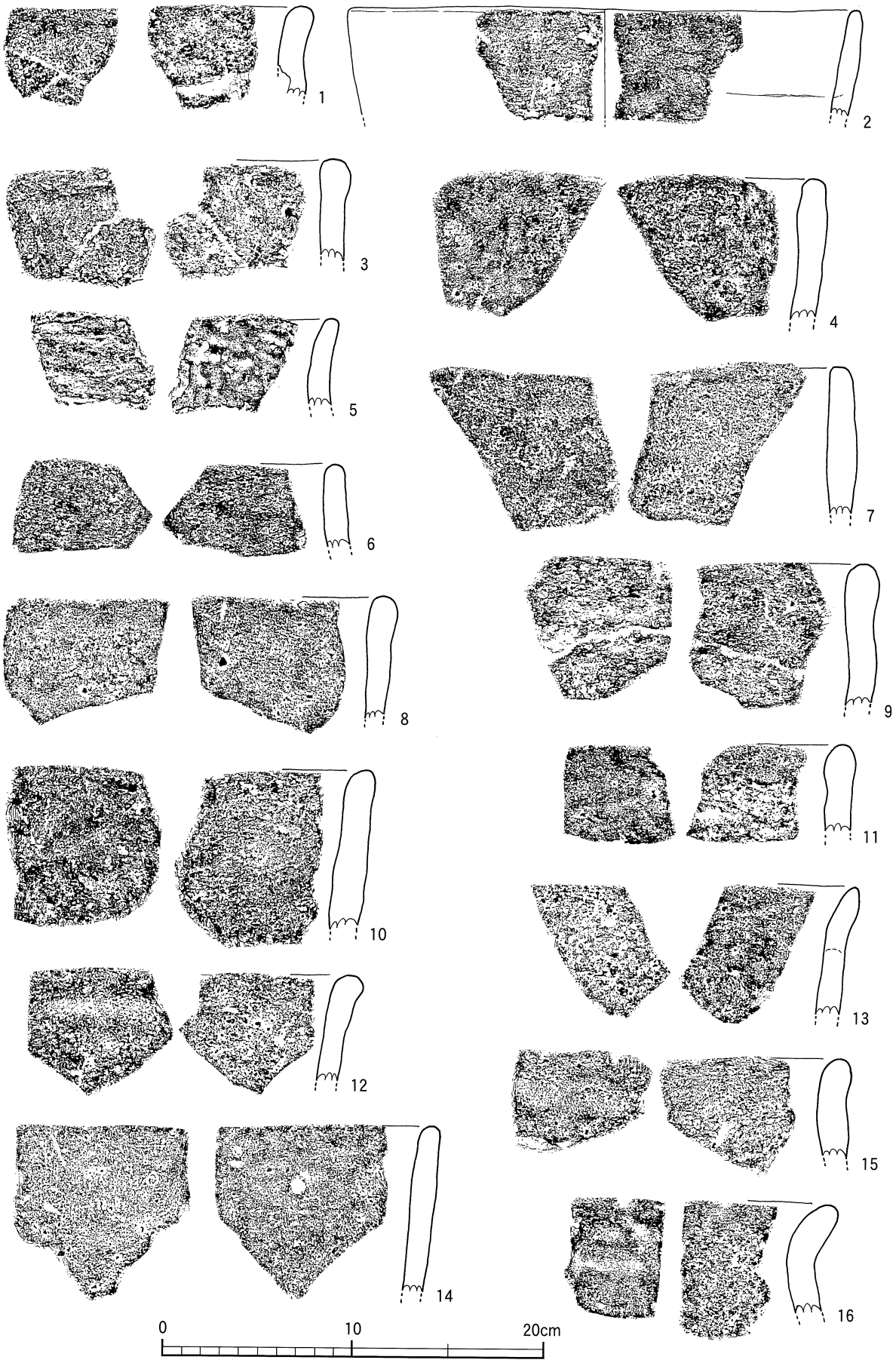

第57図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図６（1／3）



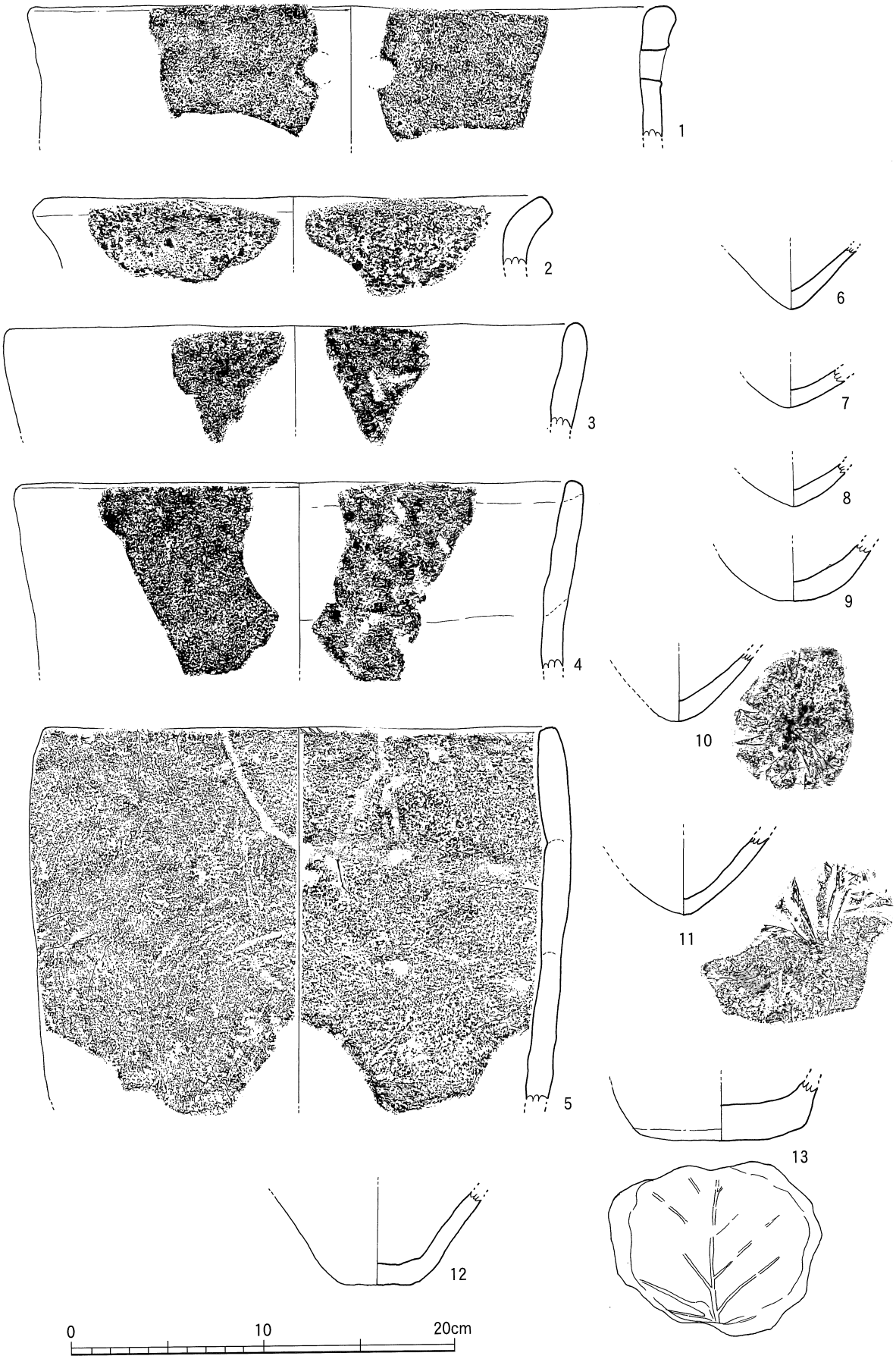

第58図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図７（1／3）




第59図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図８（1／3）




第60図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図９（1／3）




第61図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器実測図10（1／3）

## 表４　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器観察表１

| 挿図 | 遺物 | 出土位置 | 分類 | 文様の特徴と面調整の方法 外面 | 色調 | 内面 | 色調 | 胎土 角閃石 | 長石 | 石英 | その他 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 52図 | 1 | C2-26-⑨ | AIa | 横回転の山形文 | 明褐色 | 横回転の山形文 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 2 | C5-23-④ | | 横回転の山形文。口縁部周辺撫で | 茶褐色 | 横回転の山形文 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 3 | C2-48-⑧ | | 横回転の山形文の後撫で | 赤褐色 | 横回転の山形文 | 赤褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 4 | C3-11-① | | 横回転の山形文。口唇部に刻目 | 茶褐色 | 横撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 5 | C3-54-⑥ | | 横回転の山形文 | 暗褐色 | 横回転の山形文 | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | C5- 3-① | | 横回転の山形文。摩滅 | 黄褐色 | 横回転の山形文。摩滅 | 黄褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 7 | C5-50-④ | | 横回転の山形文 | 茶褐色 | 横回転の山形文 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 8 | B3 トレ1① | | 横回転の山形文 | 茶褐色 | 横回転の山形文 | 暗褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 9 | C5-70一括 | | 横回転の山形文　撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 横回転の山形文　撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 10 | C3-22-⑤ | | 横回転の山形文　撫で | 黄褐色 | 横回転の山形文　撫で | 黄褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 11 | C5-20-④ | | 横回転の山形文　撫で | 暗褐色 | 横回転の山形文　撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 12 | C5-14-③ | | 横回転の山形文 | 暗褐色 | 横回転の山形文　下位は無文 | 褐色 | ○ | ○ | ○ | 砂粒 | |
| | 13 | C3-27-④ | | 横回転の山形文。摩滅 | 黄褐色 | 横回転の山形文。摩滅 | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 14 | C3-44-⑤ | | 横回転の山形文 | 橙色 | 横回転の山形文 | 黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 15 | C2-53 | | 横回転の山形文 | 黄褐色 | 横回転の山形文 | 暗褐色 | ○ | | ○ | | |
| | 16 | C3-44-⑤ | | 横回転の山形文　撫で | 赤褐色 | 横回転の山形文　撫で | 赤褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 17 | C2-58-⑩ | | 横回転の山形文　口唇部は撫で | 黒褐色 | 横回転の山形文 | 暗橙色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 18 | C3-23-③ | | 横回転の山形文 | 黄褐色 | 横回転の山形文 | 黄褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 19 | C2-10-⑦ | | 横回転の山形文 | 橙色 | 横回転の山形文 | 暗橙色 | ○ | ○ | | 赤色粒 | |
| | 20 | C3-34-③ | | 横回転の山形文 | 黄橙色 | 横回転の山形文 | 黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 21 | C3-17-③ | AIb | 横回転の山形文 | 橙色 | 原体条痕　横回転の山形文 | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 22 | B3-41-⑥ | | 口縁部無文　横回転の山形文 | 淡褐色 | 原体条痕　横回転の山形文 | 淡褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| 53図 | 1 | C3-75 | AI | 横回転の山形文 | 橙褐色 | 横回転の山形文 | 褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 2 | C3-47-④ | | 横回転の山形文 | 橙褐色 | 横回転の山形文 | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | C3-37-③ | | 横回転の山形文 | 黄橙色 | 横回転の山形文 | 黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | 径約22、 |
| | 4 | C3-65-② | | 横回転の山形文 | 褐色 | 横回転の山形文 | 橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 5 | C3-27-⑤ | | 横回転の山形文　撫で | 淡褐色 | 横回転の山形文 | 淡褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | C5-49-③ | | 横回転の山形文 | 橙褐色 | 横回転の山形文　撫で | 橙褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 7 | C5-48-④ | | 横回転の山形文　撫で | 橙褐色 | 横回転の山形文　撫で　指圧痕 | 橙褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 8 | C3-31-⑤ | | 横回転の山形文　撫で | 橙褐色 | 横回転の山形文　撫で | 淡褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 9 | C3-42-⑤ | | 横回転の山形文　撫で | 褐色 | 横回転の山形文　撫で | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 10 | C3-38-③ | | 横回転の山形文　撫で | 橙褐色 | 横回転の山形文　撫で | 褐色 | ○ | ○ | | | C3-16-⑤と接合 |
| | 11 | C5-39-④ | | 横回転の山形文 | 褐色 | 横回転の山形文　撫で | 褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 12 | C3-44-⑥ | | 横回転の山形文　撫で | 暗褐色 | 横回転の山形文　撫で | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 13 | C5-44-⑧ | | 横回転の山形文 | 橙色 | 横回転の山形文　撫で | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | 14と同一個体 |
| | 14 | C5-33-⑧ | | 横回転の山形文　撫で | 橙色 | 横回転の山形文　撫で | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 15 | C3-34-⑤ | | 横回転の山形文　撫で | 橙褐色 | 横撫で | 褐色 | ○ | ○ | | 金雲母 | |
| | 16 | C3-36-④ | | 横回転の山形文　撫で | 暗褐色 | 横撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 17 | C3-62-② | | 横回転の山形文　撫で | 橙褐色 | 横撫で | 橙褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 18 | C3-33-④ | | 横回転の山形文　撫で | 暗褐色 | 条痕の後横撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 19 | C3-32-⑤ | | 横回転の山形文　撫で　磨滅 | 淡褐色 | 条痕の後横撫で | 淡褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 20 | C3-14-⑤ | | 横回転の山形文　撫で | 暗褐色 | 横撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 21 | C3-33-⑤ | | 横回転の山形文　撫で | 黄褐色 | 条痕の後横撫で | 黄褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 22 | C2-40-⑥ | | 横回転の山形文　撫で | 暗褐色 | 条痕の後横撫で　剥落 | 暗褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 23 | C2-43-⑨ | | 横回転の山形文　撫で | 黒褐色 | 横撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| 54図 | 1 | C3-49-③ | AI | 横回転の山形文　撫で | 黄褐色 | 横撫で | 黒褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 2 | C5-34-③ | | 横回転の山形文　撫で | 茶褐色 | 縦撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | C5-69-① | | 縦回転の山形文　撫で | 黄褐色 | 条痕　篦撫で | 褐色 | | ○ | ○ | | |
| | 4 | C3-45-④ | | 横回転の山形文　撫で | 褐色 | 条痕の後横撫で | 褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 5 | C3-34-⑤ | | 横回転の山形文　撫で | 黄褐色 | 横撫で | 黄褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 6 | C3-44-⑥ | | 横回転の山形文　撫で | 黄褐色 | 条痕の後横撫で | 黄褐色 | ○ | ○ | | | |

## 表５　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器観察表２

| 挿図 | 遺物 | 出土位置 | 分類 | 文様の特徴と面調整の方法 外面 | 色調 | 内面 | 色調 | 胎土 角閃石 | 長石 | 石英 | その他 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 54図 | 7 | C5-68中層 | AIIa | 横回転の楕円文　磨滅 | 橙色 | 横回転の楕円文 | 淡褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 8 | C3-47-④ | | 横回転の楕円文 | 褐色 | 横回転の楕円文　横撫で | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 9 | C3-23-④ | | 横回転の楕円文　横撫で | 暗褐色 | 横回転の楕円文　横撫で | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 10 | C3-33-⑤ | | 横回転の楕円文　磨滅 | 暗褐色 | 条痕 | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 11 | C3-65-② | | 横回転の楕円文　横撫で | 橙色 | 横回転の楕円文　横撫で | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 12 | C3-42-⑤ | | 横回転の楕円文　横撫で | 褐色 | 横回転の楕円文　横撫で | 暗褐色 | ○ | | ○ | | |
| | 13 | C3-27-④ | | 横回転の楕円文　横撫で | 暗褐色 | 横回転の楕円文 | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 14 | C3- 2-⑤ | | 横回転の楕円文　磨滅 | 明橙色 | 横回転の楕円文　磨滅 | 明橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 15 | C3-43-④ | | 横回転の楕円文　横撫で | 黄褐色 | 横回転の楕円文 | 黄褐色 | ○ | ○ | ○ | | 口径約31cm |
| | 16 | C3-32-③ | AIIb | 横回転の楕円文　磨滅 | 橙色 | 原体条痕 横回転の楕円文 | 橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 17 | C3-25-③ | AIId | 縦回転の楕円文　口縁外反 | 橙色 | 横撫で | 褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 18 | C3-45-⑤ | AII | 異方向の楕円文　撫で | 暗褐色 | 異方向の楕円文 | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 19 | C2-48-⑦ | | 横回転の楕円文　横撫で | 茶褐色 | 横回転の楕円文　横撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 20 | C3-32-⑤ | | 斜め回転の楕円文　横撫で | 暗褐色 | 横回転の楕円文　横撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 21 | C3-2トレ上 | AIIc | 縦回転の楕円文 | 橙褐色 | 原体条痕　撫で | 橙褐色 | | ○ | ○ | | 田村式土器 |
| | 22 | C5-64-② | AII | 横回転の楕円文　横撫で | 褐色 | 横回転の楕円文　横撫で | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 23 | C2- 9-⑫ | | 横回転の楕円文　横撫で | 赤褐色 | 横回転の楕円文　横撫で | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 24 | C3-43-⑥ | | 横回転の楕円文　横撫で | 茶褐色 | 横回転の楕円文　横撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| 55図 | 1 | C5-33-⑧ | AII | 横回転の楕円文　横撫で | 暗褐色 | 横撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 2 | C2-18-④ | | 縦回転の楕円文 | 褐色 | 横撫で | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | C3-42-⑤ | | 横回転の楕円文 | 暗褐色 | 横撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | | 赤色粒 | |
| | 4 | C3- 4-④ | | 横回転の楕円文　横撫で | 茶褐色 | 横撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | チャート | |
| | 5 | C2-58-⑤ | | 横回転の楕円文 | 黄褐色 | 横撫で | 黄褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 6 | C2-60-⑥ | | 横回転の楕円文 | 茶褐色 | 横撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 7 | C3-37-④ | | 横回転の楕円文 | 茶褐色 | 横撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | 金雲母 | |
| | 8 | C2-60-⑦ | | 横回転の楕円文　横撫で | 淡褐色 | 横撫で | 淡褐色 | ○ | | ○ | | |
| | 9 | C3-34-④ | | 楕円文　横撫で | 橙褐色 | 横撫で | 褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 10 | C2-35-⑩ | | 横回転の楕円文　横撫で | 茶褐色 | 横撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | 赤色粒 | |
| | 11 | C5-26-④ | AIV | 撚糸文 | 暗褐色 | 撚糸文　撫で | 黄褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 12 | C3-19 3層 | AIII | 格子目文　斜め方向 | 黄褐色 | 格子目文　撫で | 黄褐色 | ○ | | ○ | | 径約48cm |
| | 13 | C3-25-③ | BI | 撫で | 茶褐色 | 原体条痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 14 | B5-80 | | 撚糸文 | 茶褐色 | 撫で | 黒褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 15 | C2 | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 16 | C3-27-⑤ | | 撫で | 茶褐色 | 撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 17 | C2-57-⑧ | | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 18 | B2-62-② | | 撫で | 黄褐色 | 撫で | 淡褐色 | ○ | ○ | ○ | 砂粒 | |
| | 19 | C2-35-⑨ | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 20 | C3-41-⑨ | | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 21 | C5-34-① | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 22 | C3-19-② | | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| 56図 | 1 | C2-40-③ | BI | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 2 | C3-638 | | 撫で | 茶褐色 | 撫で | 茶褐色 | ○ | | | | |
| | 3 | C3-48 | | 撫で | 茶褐色 | 撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 4 | C2-25 | | 撫で　指圧痕 | 暗褐色 | 撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 5 | C2-44-⑩ | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 6 | C3-48-④ | | 撫で　磨滅 | 暗褐色 | 撫で　磨滅 | 暗褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 7 | C4-41-① | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 8 | C2-40-⑧ | | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 9 | C3-25-⑥ | | 撫で　指圧痕 | 暗褐色 | 撫で　指圧痕 | 暗褐色 | ○ | | | 砂粒 | 口径約22cm |
| | 10 | C6-63 | | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | ○ | | ○ | | |
| | 11 | C3-25-⑤ | | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | 口径約15cm |
| | 12 | C2-39-⑦ | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | 口径約25cm |
| | 13 | C3-11-① | | 撫で　磨滅 | 暗褐色 | 撫で　磨滅 | 暗褐色 | ○ | ○ | | 雲母 | 口径約21cm |
| | 14 | B2-57-④ | | 撫で | 暗褐色 | 撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 15 | C2- 8-⑤ | | 撫で | 橙色 | 撫で | 橙色 | ○ | | | | |
| | 16 | C3- 6-⑤ | | 撫で | 黒褐色 | 撫で | 黒褐色 | ○ | | | | |
| | 17 | C2-41-⑤ | | 撫で | 暗褐色 | 撫で | 黄褐色 | ○ | ○ | ○ | 砂粒 | |
| | 18 | C2- 4-⑪ | | 撫で　磨滅 | 赤褐色 | 撫で　磨滅 | 黒褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 19 | B2-69-② | | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | ○ | ○ | ○ | 砂粒 | |
| | 20 | C2-60-⑧ | | 撫で　磨滅 | 橙色 | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | ○ | | | 赤色粒 | |

## 表６　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器観察表３

| 挿図 | 遺物 | 出土位置 | 分類 | 文様の特徴と面調整の方法 外面 | 色調 | 内面 | 色調 | 胎土 角閃石 | 長石 | 石英 | その他 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 56図 | 21 | C2-43-⑩ | BI | 撫で | 黄褐色 | 撫で | 淡褐色 | ○ | ○ | ○ | 赤色粒 | |
| | 22 | C2-20-⑧ | | 撫で　磨滅 | 茶橙色 | 撫で | 茶橙色 | | | ○ | | |
| | 23 | C2-25-⑧ | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | 低部近く |
| | 24 | C2-59-⑧ | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 25 | C2-60-⑥ | | 撫で　磨滅 | 暗褐色 | 撫で　磨滅 | 暗褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 26 | C2-21-⑩ | | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | ○ | | | 金雲母 | |
| 57図 | 1 | C3-607 | BII | 撫で　瘤状突起 | 茶褐色 | 撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 2 | C6-63 | | 撫で　磨滅　瘤状突起 | 茶褐色 | 撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | C3-21-① | | 撫で　指圧痕　瘤状突起 | 茶褐色 | 撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 4 | C6-64 中層 | | 撫で　瘤状突起2ヶ所 | 茶褐色 | 撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 5 | C3-43-⑦ | | 撫で　瘤状突起 | 暗褐色 | 撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | C2-36-⑨ | | 撫で　磨滅　帯状突起 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | 口径約30cm |
| | 7 | C3-476 | | 撫で　瘤状突起 | 茶褐色 | 撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | | 口径約31cm |
| | 8 | C2-58-⑩ | | 撫で　指頭痕　帯状突起 | 茶褐色 | 撫で　指頭痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | 口径約28cm |
| 58図 | 1 | C5-66下層 | BII | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 2 | B3-270 | | 撫で　磨滅 | 黒褐色 | 撫で　磨滅 | 黒褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 3 | C5-50-③ | | 撫で | 茶褐色 | 撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 4 | C3-27-① | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 5 | C6-55-② | | 撫で　指頭痕　磨滅 | 灰褐色 | 撫で　磨滅 | 灰褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 6 | C2-40-④ | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 7 | C4-31-② | | 撫で　磨滅 | 橙褐色 | 撫で　磨滅 | 橙褐色 | ○ | ○ | ○ | 赤色粒 | |
| | 8 | C6-22-② | | 撫で | 灰褐色 | 撫で | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 9 | C3一括 | | 撫で　擬口縁？ | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 10 | C2-45-⑨ | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 11 | C3- 6-③ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 12 | C3-14-⑤ | | 撫で　磨滅 | 黒褐色 | 撫で　磨滅 | 黒褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 13 | C3-19-② | | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 14 | C6-63 | | 撫で | 黒褐色 | 撫で | 黒褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 15 | C6-46-② | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 16 | C3- 6-③ | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 17 | C3-44-⑥ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 18 | B2-68-② | | 撫で　磨滅 | 褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 19 | C3- 7-④ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 20 | C3-15-① | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 21 | C6-42-② | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| 59図 | 1 | C2- 7-② | BII | 撫で | 黄褐色 | 撫で | 黄褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 2 | C5-66-② | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 3 | C5-39-① | | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 4 | C6-46-③ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 5 | C4-76-① | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 6 | C3-25-② | | 撫で　磨滅 | 黒褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 7 | C6-41-⑤ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 8 | B2-79-⑧ | | 撫で　磨滅　瘤状突起 | 黒褐色 | 撫で　磨滅 | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 9 | C3- 5-③ | | 撫で　磨滅　口唇部に指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 10 | C3-17-⑤ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 11 | C2- 9-③ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | 口径約23cm |
| | 12 | C3-24-④ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 13 | C5-17-③ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 14 | C4-41-② | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 15 | B3-72-① | | 撫で　磨滅 | 黒褐色 | 撫で　磨滅 | 黒褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 16 | C3-45-⑤ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 17 | C3- 4-⑥ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 暗褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 暗褐色 | ○ | ○ | | | 口径約28cm |
| | 18 | C6-33-⑥ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 橙褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 橙褐色 | ○ | ○ | ○ | | 口径約37cm |

## 表７　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文早期土器観察表４

| 挿図 | 遺物 | 出土位置 | 分類 | 文様の特徴と面調整の方法 外面 | 色調 | 内面 | 色調 | 胎土 角閃石 | 長石 | 石英 | その他 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 60図 | 1 | C4-14-① | BII | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 2 | C3-645 | | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | 口径約26cm |
| | 3 | B2-78-⑧ | | 撫で | 茶褐色 | 撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 4 | C3-15-⑥ | | 撫で　指圧痕 | 暗褐色 | 撫で　指圧痕 | 暗褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 5 | C3-14-② | | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | C3-14-① | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 7 | C2-50-⑦ | | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | 撫で　磨滅 | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | 砂粒 | |
| | 8 | C2-58-⑧ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 暗褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 暗褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 9 | C3-44-⑥ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 10 | C3-47-④ | | 撫で | 茶褐色 | 撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 11 | C2-29-② | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 暗褐色 | 撫で　剥離 | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | 砂粒 | |
| | 12 | C3-39-② | | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | ○ | 砂粒 | |
| | 13 | C2-42-⑥ | | 撫で | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 14 | C6-63 中層 | | 撫で　磨滅 | 暗褐色 | 撫で　磨滅 | 黒褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| | 15 | C3-23-③ | | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　磨滅　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 16 | C2-38-③ | | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | |
| 61図 | 1 | C3-11-① | BII | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | | 口径約33cm |
| | 2 | C2-36-⑨ | | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | 口径約27cm |
| | 3 | | | 撫で | 暗褐色 | 撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | | | 口径約30cm |
| | 4 | C3-32-⑦ | | 撫で | 暗褐色 | 撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | 口径約29cm |
| | 5 | C2-59-⑨⑩ | | 撫で　指圧痕　口唇部刻目 | 茶褐色 | 撫で　指圧痕 | 茶褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 | 口径約27cm |
| | 6 | C3- 7-② | BI | 撫で | 茶褐色 | 撫で | 茶褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 7 | C3-615 | | 撫で | 黄褐色 | 撫で | 黄褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 8 | C3- 6-⑤ | | 撫で | 暗褐色 | 撫で | 暗褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 9 | C3- 9-③ | | 撫で | 黄褐色 | 撫で | 黄褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 10 | C2-25-⑪ | | 撫で | 褐色 | 撫で | 褐色 | ○ | ○ | | | |
| | 11 | C2- 9-⑫ | | 撫で | 褐色 | 撫で | 褐色 | | ○ | | | |
| | 12 | C3-56-③ | | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | 撫で　磨滅 | 黄褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 13 | C3-45-④ | | 撫で　磨滅　広葉樹の木葉圧痕 | 明褐色 | 撫で | 明褐色 | ○ | ○ | ○ | | |

## 小結

利光遺跡鵜ノ木地区から出土した縄文時代早期の土器群は、わずかに早水台式土器や田村式土器・ヤトコロ式土器を含むが、その主体となるものは、稲荷山式土器と言える。そこで、この土器型式の特徴を、標識となった大分県杵築市稲荷山遺跡の1970年に刊行された報告書でみる。

有文土器である押型文土器には、山形文・楕円文・格子目文・撚糸文があり、山形押型文と楕円押型文で約98％を占め、両者の比率は７：３で前者が多い。また文様施文方法は、外面全体に横回転の押型文、内面には口縁部に沿った横回転の押型文が施文され、口縁部内面に原体条痕が無いことを最大の特徴とする。さらに、器形は、尖底になる底部から、直口する口縁部にかけて、直線的に続くため、側面観が、二等辺三角形状となる。

無文土器は、約4500点出土しており、先に述べた押型文土器が約1700点であるのに対し、圧倒的に多く、73％を占める。その様相は、器壁が５㎜前後の無文薄手土器と、１㎝以上ある無文厚手土器が見られる。さらに、口縁部に粘土瘤や、帯状の瘤が付くものも、一定量出土している。器形は、底部が尖底になり、口縁部は、内湾するものも見られる。

こうした、土器群は、1980年の大分県九重町二日市洞穴の報告書で、橘昌信が、早水台式土器に先行する土器型式であることを明らかにした。その大きな理由は、二日市洞穴の調査で、早水台式土器と稲荷山式土器が層位的に確認されたことによる。

こうして、川原田式土器と呼ばれる押型文を口縁部に並行に無文帯を挟みながら帯状に施文する押型文土器と、口縁部内面に原体条痕がある早水台式土器の間を埋める土器型式が設定された。

そこで、利光遺跡鵜ノ木地区出土の土器を口縁部の出土数で見ることにより、稲荷山遺跡と比較する。出土した口縁部の数は121点で、A類とした有文土器33点、B類とした無文土器は、88点で、その比率は、27％：73％である。次に押型文土器の比率を見ると、ＡⅠ類とした山形文、ＡⅡ類とした楕円文で96％を占め、その割合はほぼ７：３で山形文が多い。

文様の施文方法も　ＡⅠa類・ＡⅡa類として延べたように、稲荷山式土器そのものであり、B類とした無文土器の構成には、ＢⅠ類の無文薄手土器、ＢⅡ類の無文厚手土器が明らかに存在する。また、口縁部外面に粘土瘤が付く土器も一定量含まれる。

以上、利光遺跡鵜ノ木地区出土の土器は、わずかに縄文早期土器の新出型式を含むものの、全体としては、稲荷山式土器の標識遺跡である杵築市稲荷山遺跡と極めて類似する土器構成を見せることが判明した。

b）縄文後期・晩期土器及び勾玉

利光遺跡鵜ノ木地区からは、縄文時代後期・晩期の土器及び縄文時代に伴うと考えられる勾玉が出土している。後期初頭から晩期後半にかけての諸型式がみられるが、出土量が最も多いのは、後期中葉の西平式系深鉢形土器である。これまでの研究史に従い、以下のように分類して後期初頭から順に報告する。

**第62図１・２　縄文時代後期初頭の在地系深鉢形土器**

１は波状口縁を呈し、胴部から緩やかに外反して口縁部に至る。波頂部と口縁下に連続する刺突文を施す。外面は条痕調整ののちナデを施し、内面はヘラ状のもので整形する。２も同様の形態を呈する。口縁部～頸部外面に２条の沈線をめぐらせ、沈線間に連続する刺突文を施す。内外面ともナデ調整を施す。

**第62図３～５　凹線文系の深鉢形土器**

凹線や沈線による文様を省略し、口唇部の刻目のみ残ったものである。３は、胴部からほぼ垂直に立ち上がって口縁部に至り、口唇部に刻目を施す。内外面に条痕調整を施す。４は胴部から緩やかに外反して口縁部に至る。口唇部には浅く刻目を施す。内外面とも条痕調整を施したのち、ヘラ状のもので整形する。５は、３・４と同様の形態の胴部片であると考えられる。内外面とも条痕調整を施す。

**第63図１・２　縄文時代後期前葉の磨消縄文系深鉢形土器**

１は、全体形が不明であるが、波状口縁になると考えられる。口縁端部は面をなし、口縁部下端に縄文を施す。頸部以下は磨消縄文が展開すると考えられ、沈線幅は約４㎜である。内外面とも丁寧な研磨を施す。２は、小池原上層式の土器である。丸みのある胴部から一旦内傾し、頸部は緩やかに外反して口縁部に至る。波状口縁を呈する。口縁部外面に粘土帯を貼付して肥厚させ、１条の沈線と沈線下に縄文を施す。頸部から胴部にかけては、磨消縄文が展開する。沈線幅は約５㎜である。外面はナデ、内面はヘラ研磨を施す。

**第63図３～第67図10　縄文時代後期中葉の西平式系深鉢形土器**

第63図３～第64図14は口縁部片で、その特徴から２つ（ａ・ｂ類）に分類できる。ａ類は第63図３～７である。緩やかに外反する頸部から、内湾気味に口縁部が立ち上がる。口縁部外面がわずかに肥厚し、２～３条の沈線がめぐる。沈線間には縄文を充填する。６・７は擬似縄文である。ｂ類は、第63図８～第64図14である。ａ類よりもやや直線的に頸部が外反し、逆くの字状に短く屈曲して口縁部が立ち上がる。口縁部外面には沈線をめぐらせる。ｂ類は、さらに３つ（ｂ１～ｂ３類）に細分できる。ｂ１類は第63図８～10である。口縁部外面に２～３条の沈線をめぐらせ、沈線間に縄文を充填する。ｂ２類は第63図11～第64図10である。口縁部外面に２～３条の沈線をめぐらせ、沈線間に縄文は施さない。ｂ３類は第64図11～13である。口縁部外面に２条の沈線をめぐらせ、口縁部内面屈曲部にも１条沈線がめぐる。沈線間に縄文を充填しない。14は口縁端部が欠損しているが、その特徴からｂ２類にあたると考えられる。

第64図15～第67図７は口縁部～胴部片である。第64図15・16以外は、口縁部を欠いているため、胴部形態と文様構成の特徴から２つ（Ⅰ・Ⅱ類）に分類した。Ⅰ類は、第64図15～第66図３である。丸みのある胴部と頸部の境は曖昧で、胴部から緩やかなＳ字状のカーブを描いて頸部が立ち上がり口縁部に至る。頸部と胴部の境に刺突文を連続して施し、胴部に文様を展開する。文様構成の点でさらに３つ（Ⅰ-１・Ⅰ-２・Ⅰ-３類）に分類できる。Ⅰ-１類は第64図15～第65図６である。胴部には横走する沈線で角の丸い三角形や長楕円形を描き、沈線の結節点には竹管状の刺突文や鉤の手状の文様を配す。文様は磨消縄文で構成する。第64図15は口縁部まで残存するが、その口縁部形態は先細り気味におさめるものである。口縁端部には縄文を施す。16は外反する頸部か

ら口縁部が直立気味に立ち上がる形態を呈する。口縁部外面に縄文や沈線は施さない。第65図２は、胴部から頸部にかけての屈曲が他のものに比べて若干強く、内面に緩い稜が入る。Ⅰ-２類は第65図７である。胴部文様は、両端が鉤状に折れた直線を逆三角形状に配し、その中心にＳ字状の文様を３つ縦に並べる。文様は磨消縄文で構成する。Ⅰ-３類は第65図８～11であるが、８・９はⅠ-１またはⅠ-２類になる可能性もある。平行する２条の沈線をめぐらせ、その下に波状沈線と直線を交互に配し、沈線間に縄文を充填する。第66図１～３は胴部下半の破片で、Ⅰ-１～Ⅰ-３類のいずれに該当するかは不明である。第66図４は形態上次のⅡ類にあたるが、文様構成はⅠ類に近いものである。５は屈曲部が欠けているが、楕円形の文様からⅠ-１類に、また沈線が直線化し、波状沈線がみられるところからⅡ類の可能性も考えられる。

Ⅱ類は第66図６～第67図７である。張りの強い胴部から一旦内傾し、くの字状に屈曲して頸部が外反する。胴部と頸部の境には明瞭な稜ができる。胴部と頸部の境に刺突文を連続して施すが、Ⅰ類の刺突文は丸みをもった工具によりスタンプ状に施文するのに対し、Ⅱ類のそれは、鋭く斜め方向に刻むように施文する。刺突文の下には、２条の平行沈線と１条の波状沈線をめぐらせる。さらにその下に２条以上の平行沈線をめぐらせる。８は、波状沈線間にのみ部分的に縄文を充填する。Ⅰ類は土器の色調が黄橙色～黒褐色を呈するのに対して、Ⅱ類は概ね灰白色を呈する。また、器面調整はⅠ・Ⅱ類とも研磨またはナデによる。

第67図８・９は、同一個体の可能性がある。わずかに内湾しながら頸部が外反し、逆くの字状に屈曲して口縁部が立ち上がる。波状口縁を呈し、波頂部外面に粘土を貼付して肥厚させる。口縁部外面には２条の平行沈線がめぐり、波頂部で文様を描く。沈線間には縄文を充填する。口縁部内面屈曲部にも１条沈線がめぐる。底部は凹レンズ状に窪む上げ底で、底部外面にはナデの痕跡が明瞭に残る。土器の色調は灰白色を呈する。前述した口縁部片（ａ・ｂ類）が、全て外湾気味に開くのに対して、８は内湾気味に開く。また器壁も薄く、色調も異なるところから、８を前述の分類に含めなかった。

第67図10は無文であるが、胴部と頸部の境は明瞭で、Ⅱ類に伴うものと考えられる。ほぼ直線的に開く頸部から、直立気味に口縁部が立ち上がる形態である。内外面とも研磨を施す。

**第67図11～第68図４　縄文時代後期後葉の三万田式系深鉢形土器**

第67図11～21は口縁部片である。直線的に開く頸部から、逆くの字状に短く屈曲して口縁部が立ち上がる。口縁部内面屈曲部に１条の沈線をもたないもの（11～16）ともつもの（17～21）に分けられる。口縁部外面に文様は施さない。内外面とも研磨またはナデ調整を施す。第68図１は口縁部～胴部片である。丸みのある胴部は内傾しないでそのまま立ち上がり、くの字に屈曲して直線的に頸部が開き口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめるが、ナデにより浅い沈線状の窪みが１条めぐる。胴部と頸部の境の内面には、明瞭な稜ができる。口縁部外面と胴部内面屈曲部付近には、ナデ調整に用いた工具の痕が残る。また、胴部と頸部の境には粘土成形の際の指頭圧痕が明瞭に残る。第68図２～４は胴部片である。丸みのある胴部から一旦内傾し、屈曲して外反する。胴部外面の屈曲は緩やかであるが、内面の屈曲は強く、明瞭な稜ができる。胴部外面に文様は施さない。内外面とも研磨またはナデ調整を施す。

**第68図５～11　縄文時代後期に伴う深鉢形土器**

外面口縁部と胴部上半に縄文を施すことを特徴とする。５は丸みのある胴部から一旦内傾し、Ｓ字状のカーブを描いて緩やかに外反しながら頸部が立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は、先細り気味におさめる。６は頸部が短く外反し、口縁部はナデにより面取りする。７～９は口縁部の破片で、外反する頸部から口縁部が直立気味に立ち上がる。口縁部外面に粘土を貼付して肥厚させ、縄文を施す。10・11は胴部片である。10は、内面頸部の器表面が剥離している。

**第69図１～８　縄文時代後期に伴う深鉢形土器**

１・２は、丸みのある胴部から一旦内傾し、頸部が緩やかに外反して立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は、先細り気味におさめる。内外面ともに、条痕調整ののち研磨を施す。２は、口縁部に径約１㎝の穿孔を両面から施し、波状口縁を呈する。３～７は内外面に条痕を施す。３と４は同一個体の可能性がある。直立気味に口縁部が開き、口縁端部はナデにより面をなす。５・６は口縁部が緩やかに外反する。７は、外反する頸部から逆くの字状に口縁が屈曲する。口縁部は指でつまみあげて成形したため、指頭圧痕が内外面に明瞭に残る。８は口縁部から内湾気味にすぼまる鉢形の器形で、外面に部分的に縄文を施す。内面はナデ調整である。

**第70図１～第71図９　縄文時代晩期前半の深鉢形土器**

緩やかに外反する頸部から、屈曲して直立気味に口縁部が立ち上がる。口縁部の外面には、５～６条の粗い平行沈線をめぐらせる。口縁部の下端は強いナデにより肥厚する。口縁部の形態は、内湾するもの（第70図１・４，第71図８）と外反するもの（第70図２・４・６・７）、ほぼ直立するもの（第70図３・５）がある。口縁端部は面取りするものが多いが、丸くおさめるものもある。内外面とも研磨またはナデ調整を施す。

**第71図10～第72図15　縄文時代後期または晩期に伴う無文土器**

口縁部のみの破片のため全体形は不明である。第71図10～15は、口縁部から内湾気味にすぼまる鉢形の形態を呈する。10は、径42㎝を測る大型のものである。内面には指頭圧痕が残る。11は内外面とも丁寧な研磨を施す。第72図１は、器壁が厚く、頸部は緩やかに外反して口縁部に至る。内外面ともナデ調整を施す。２・３は直線的に外反して口縁部が開く。口縁部に指ナデの痕跡が残る。４は頸部が緩やかに外反して口縁部に至る。５・６は、口縁部が短く外反し、波状口縁を呈する。７はナデによって口縁部外面が肥厚する。８・９は外反する口縁部の下端をなでることで、わずかに段を形成する。10～12は、器壁が薄く緩やかに外反して口縁部が開く。内外面ともに丁寧な研磨を施す。13・14は直線的に口縁部が開く。内外面とも研磨を施す。15は緩やかに外反して口縁部に至る。波状口縁を呈する。内外面とも板状の工具によるナデの痕跡が残る。

**第72図16～18　縄文時代晩期後半の浅鉢形土器**

16は、直線的に開く頸部から口縁部が逆くの字状に屈曲して立ち上がる。口縁外面には１条沈線がめぐる。内外面とも丁寧な研磨を施す。17は、直線的に口縁部が開き、口縁部内面に粘土帯を貼付し段を形成する。内外面とも丁寧な研磨を施す。18は、外反する口縁部の外面に粘土を貼付して突帯を形成する。口縁部内面はナデにより段を形成する。

**第73図１～22　底部**

**１～11　縄文時代後期の底部**

１～５は、接地面から一旦内傾して立ち上がり体部に至る上げ底である。１は、底部接地面が面をなし、高台状を呈する。他は、接地面を丸くおさめる。外面立ち上がり部分は、指ナデの痕跡が明瞭に残る。内面は、研磨またはナデ調整を施す。７～11は、接地面から内傾しないでそのまま丸みをもって立ち上がる形態である。底部は凹レンズ状に窪む上げ底を呈する。内外面とも研磨またはナデ調整を施す。11は、内面に指でなでたような窪みがめぐっており、体部の粘土を接合しやすくするためのものであると考えられる。

**12～22　縄文時代晩期の底部**

接地面からそのまま立ち上がり、平底を呈する。12～14は同一個体と考えられ、内面はともに黒褐色を呈する。内外面とも研磨またはナデ調整を施す。21は、他のものに比べて器壁が薄い。22は、上げ底である。内面の形態等は欠損しているため不明である。

**第73図23　縄文時代に伴うと考えられる勾玉**

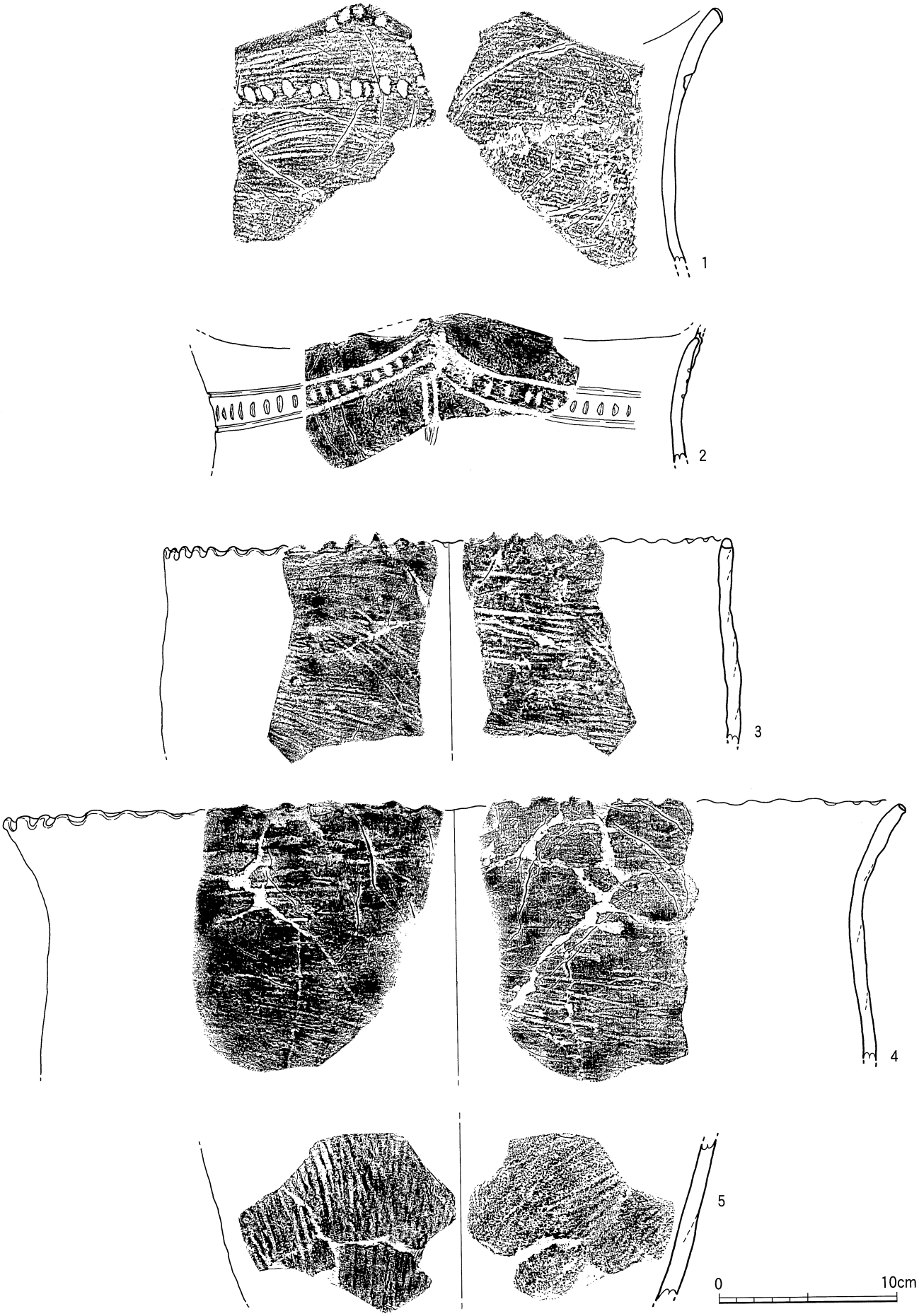
長さ1.4㎝を測る。濃青緑色を呈し、材質はヒスイであると考えられる。背部は緩やかに湾曲し、「し」の字形を呈する。頭部と尾部はほぼ同じ大きさであるが、頭部の方がやや偏平なため若干大きく見える。先端は、両側とも丸みをもたせるように丁寧に研磨する。穿孔のある頭部背面は特に偏平になっており、ヒモずれの痕跡かとも考えられる。穿孔は円筒状に片側から施す。

**補足**

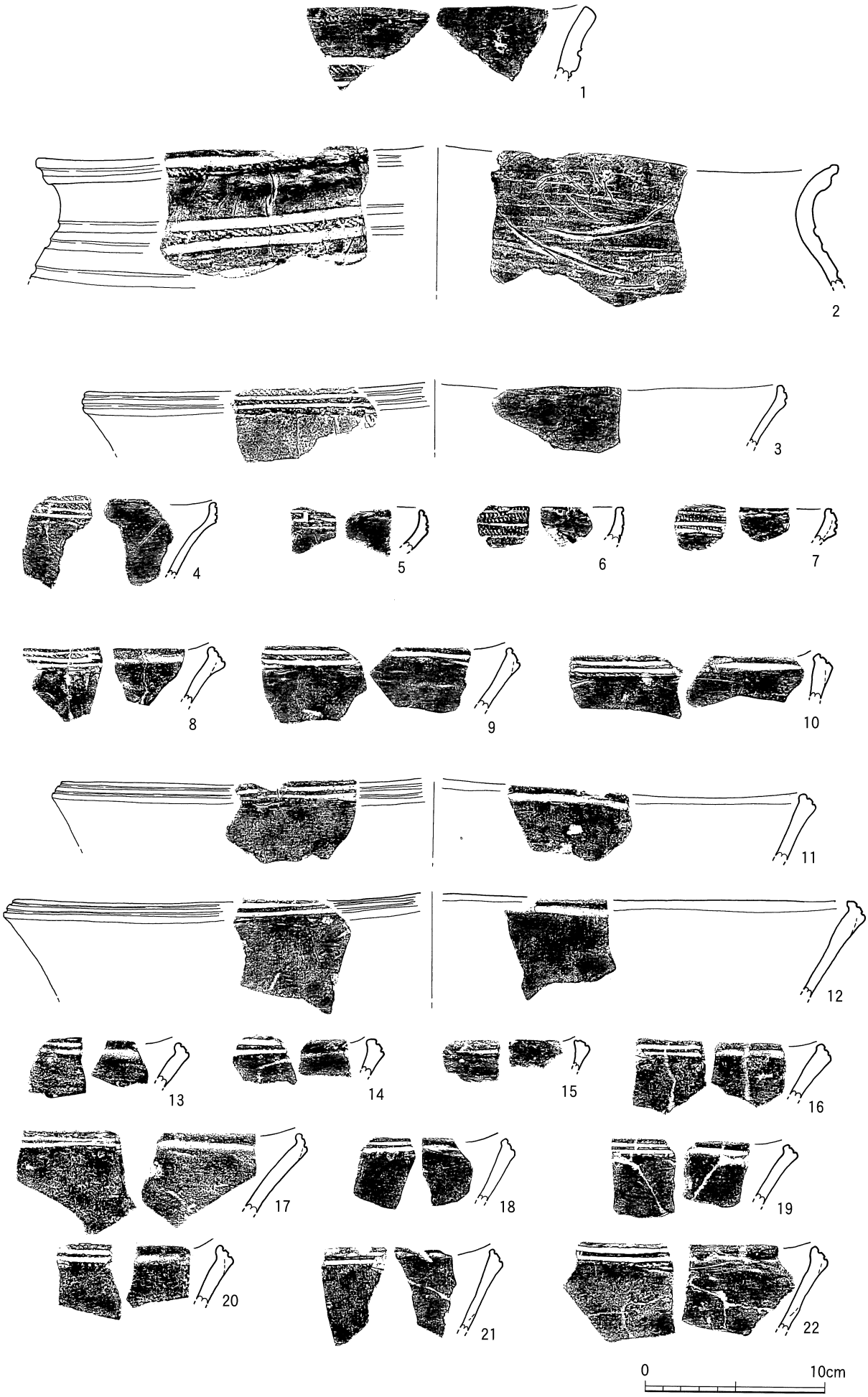
利光遺跡鵜ノ木地区からは出土量の多寡はあるものの、縄文時代後期～晩期にかけての諸型式が確認できた。これらは包含層出土の資料であるため、形質的特徴から分類を行い、時期的変遷については研究史に従った。しかしながら、一型式あたりの出土量は少なく各型式内で変遷を追うことはできなかった。したがってここでは、最も出土量が多くその形質的変化を追うことが可能な、後期中葉西平式系土器のみ変遷を検討した。

後期中葉西平式系土器は、口縁部形態からは大きく二段階に、また胴部形態からも二段階に分けることができる。口縁部はａ類→ｂ類への変遷が考えられる。形態上は、緩やかに内湾して立ち上がる口縁から短く逆くの字状に屈曲する口縁へと変遷する。また、属性上からは、口縁部外面に縄文を充填するものからしないものへと変遷する。縄文を充填しないもののうち、口縁部内面にも１条の沈線をめぐらせるものをより後出のものと考える。よって口縁部はａ類→ｂ１類→ｂ２類→ｂ３類の順に変遷するものと考える。胴部は、Ⅰ類→Ⅱ類への変遷が考えられる。形態上は、頸部と胴部の境が曖昧なものから、くの字状に屈曲し稜ができるものへと変遷する。属性上からは、磨消縄文手法を用いるものから用いないものへ変遷する。また文様を構成する沈線も曲線的なものから直線的なものへと変化する。Ⅰ類の文様には３種類あるがこれらは同一時期内のバリエーションと捉える。よって胴部はⅠ類→Ⅱ類の順に変遷するものと考える。口縁部・胴部ともに二段階を想定できるが、口縁部のどの段階と胴部のどの段階が併行するかは、良好な資料がないため断定できない。第64図15と16は口縁部～胴部まで残存するが、両者ともその口縁部形態はあまり類例がみられないものである。同一時期内の他型式または別器種との折衷形と想定する。第67図８・９は、口縁部の形態上ｂ３類との併行を想定する。底部は同一個体のものと考えられるが、深鉢としての復元は難しく、浅鉢の可能性もある。

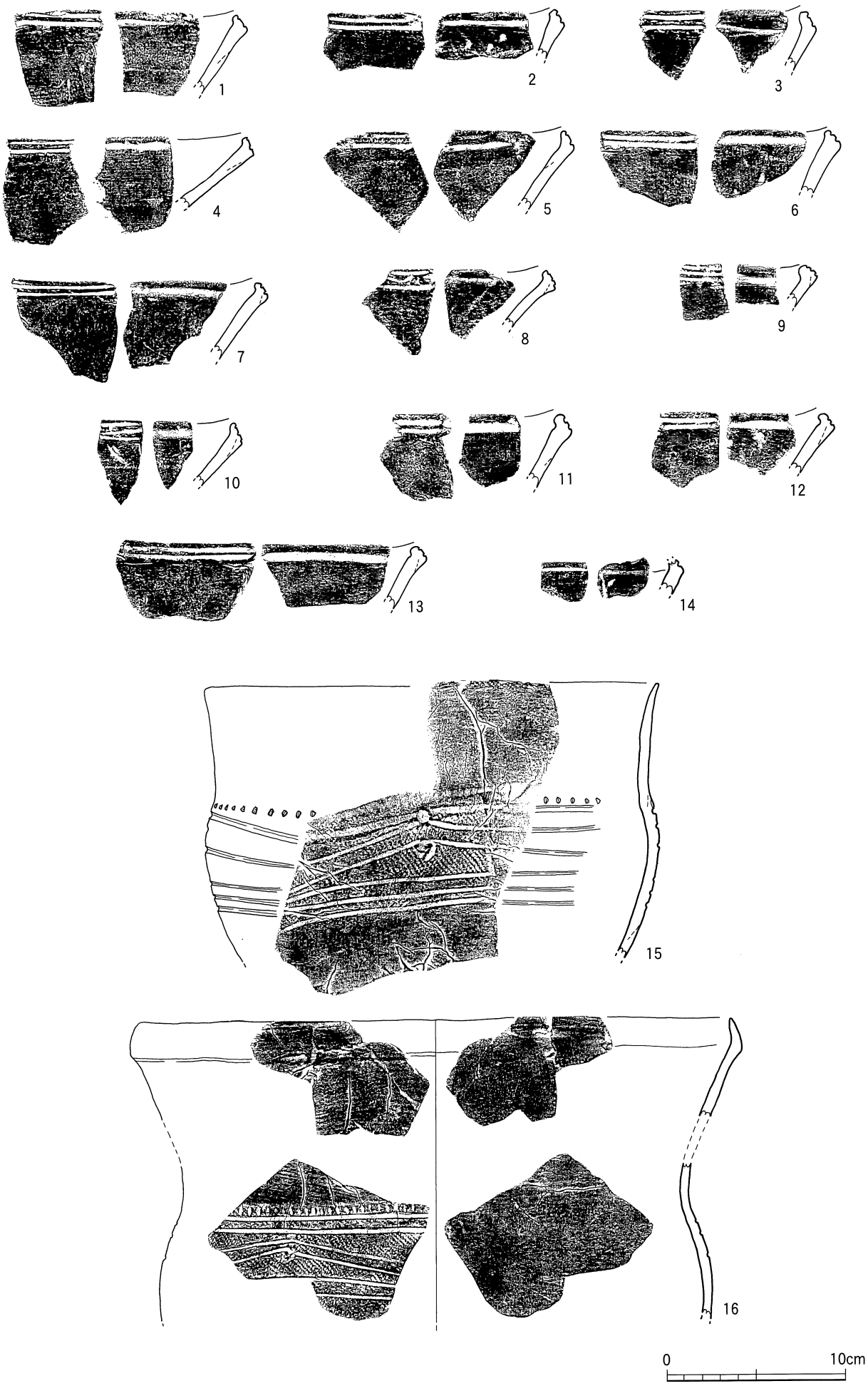
これらの変化の方向をその前後型式から考えると、口縁部・胴部とも、形態上は緩いカーブをもつものから屈曲が強くなるものへ、属性上は沈線が曲線から直線へ、また縄文があるものから部分的または全くないものへと変遷することが考えられる。



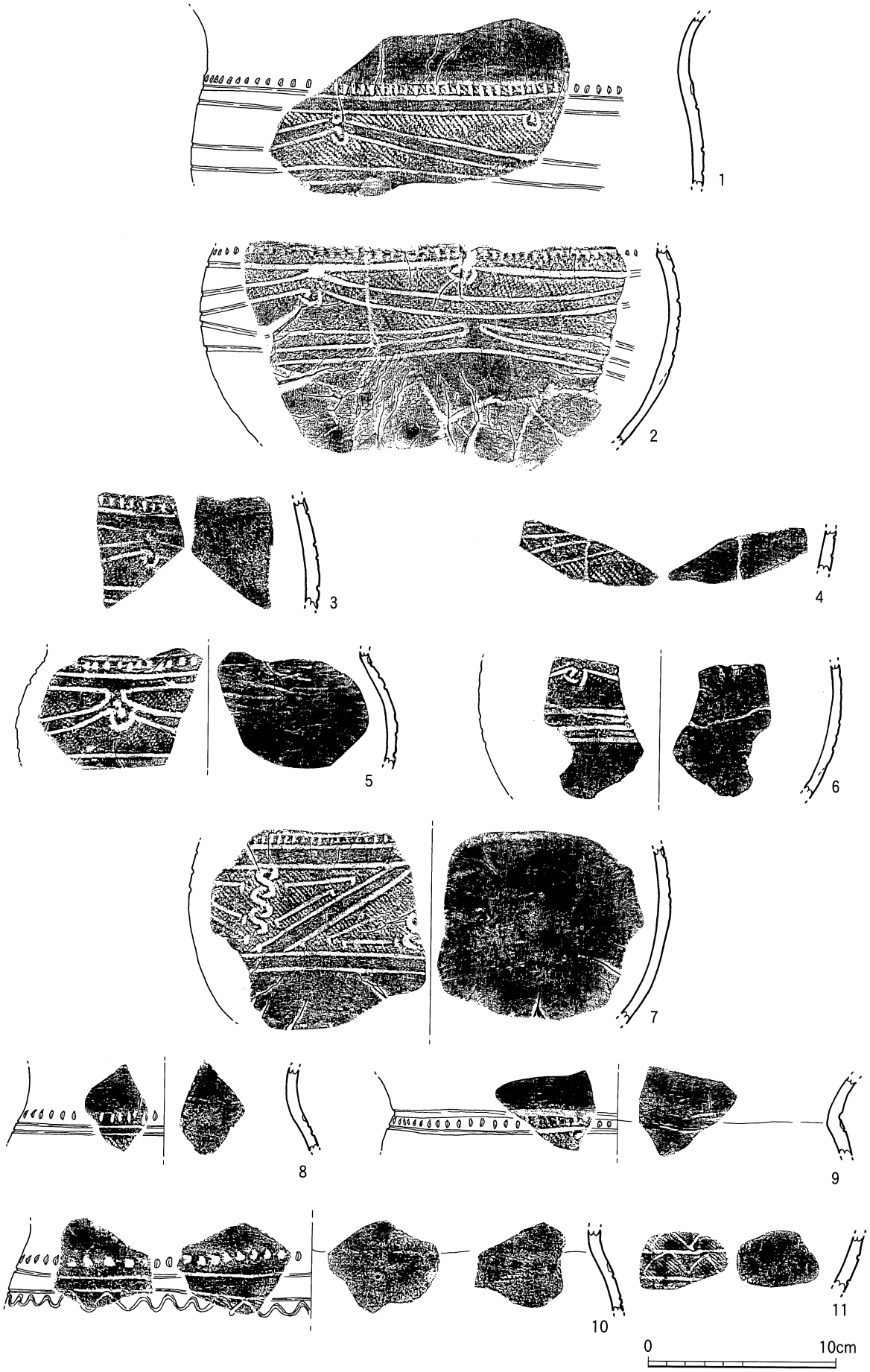

第62図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図１（1／3）



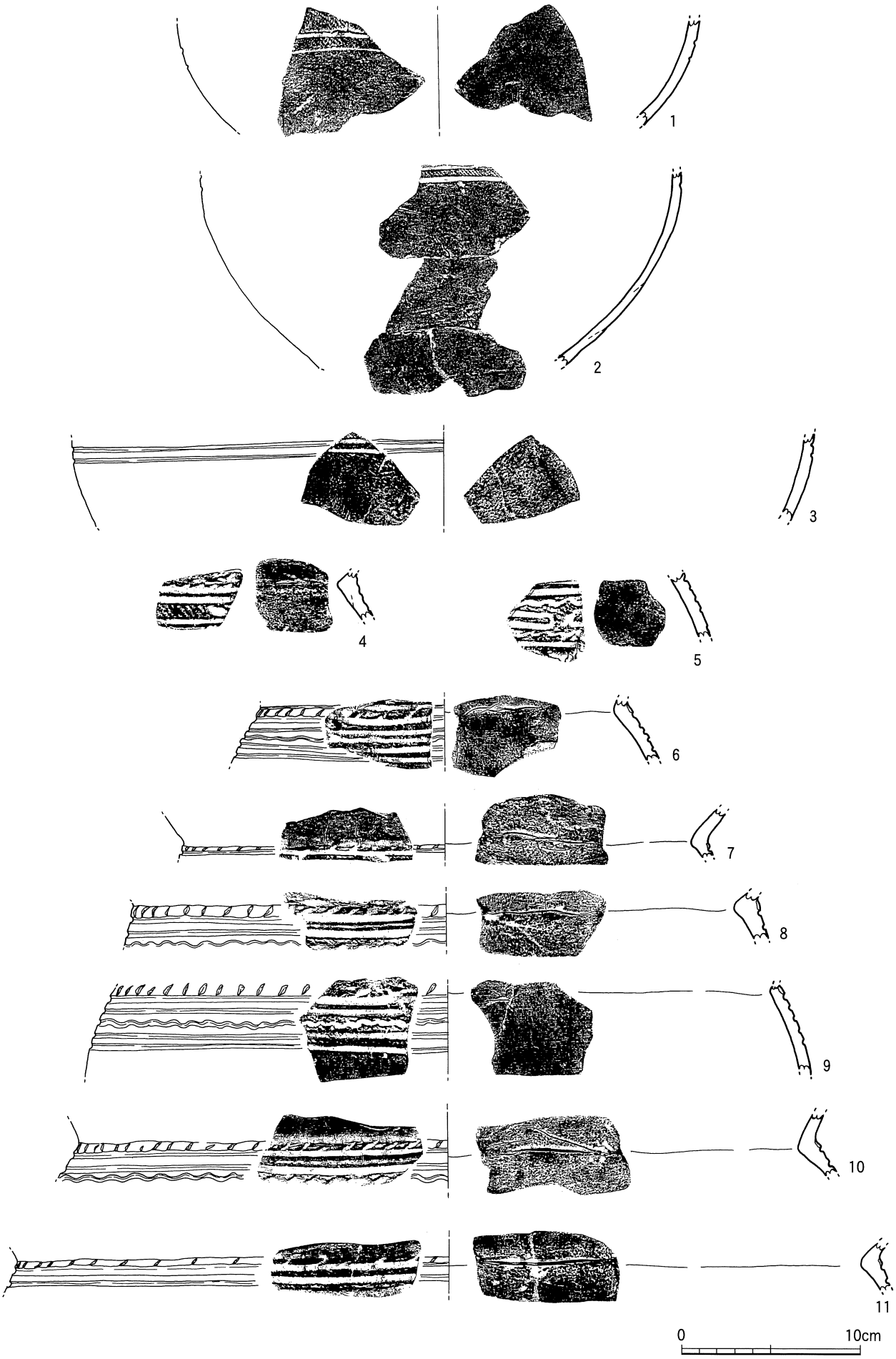

第63図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図２（1／3）



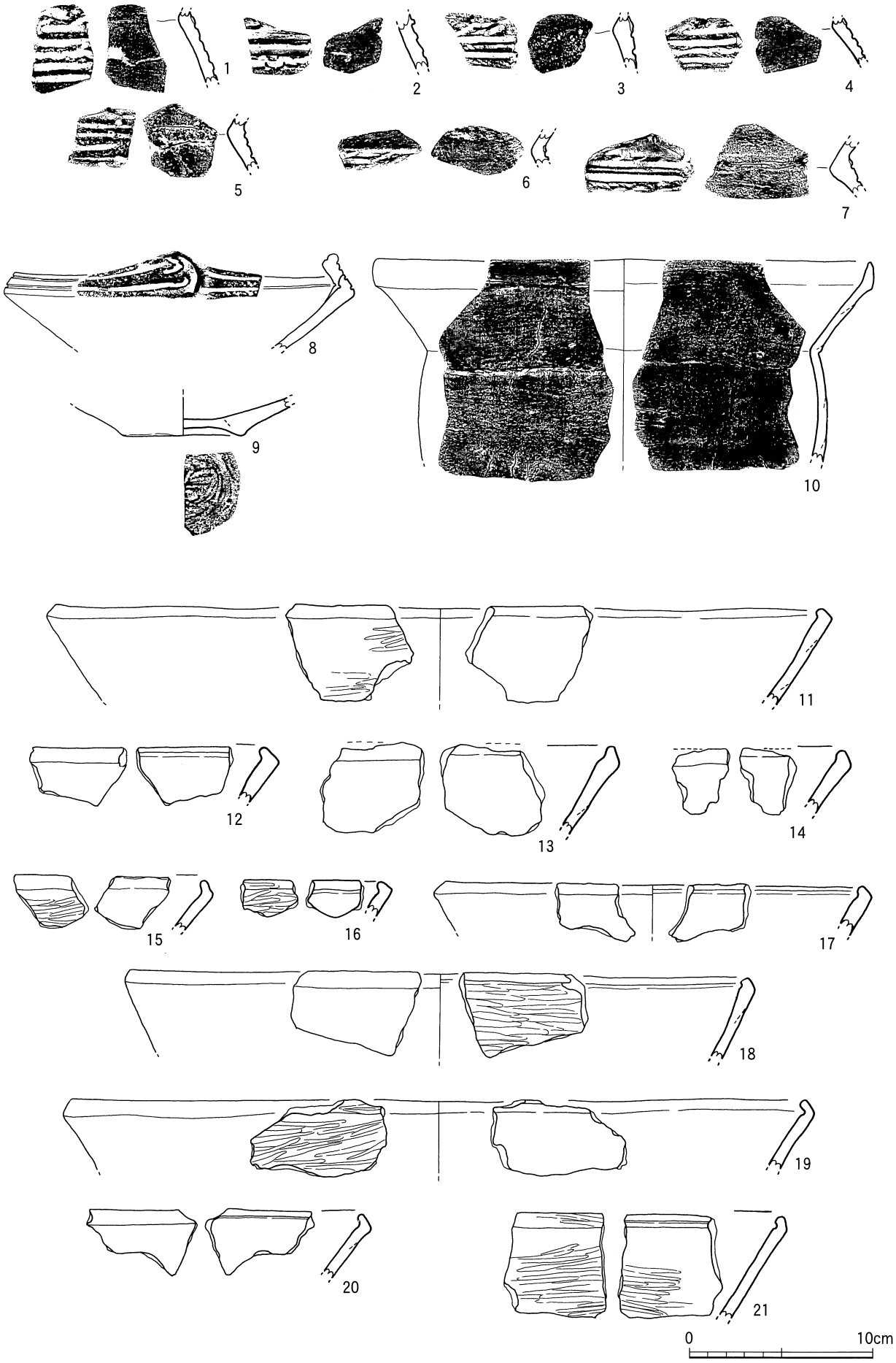

第64図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図３（1／3）



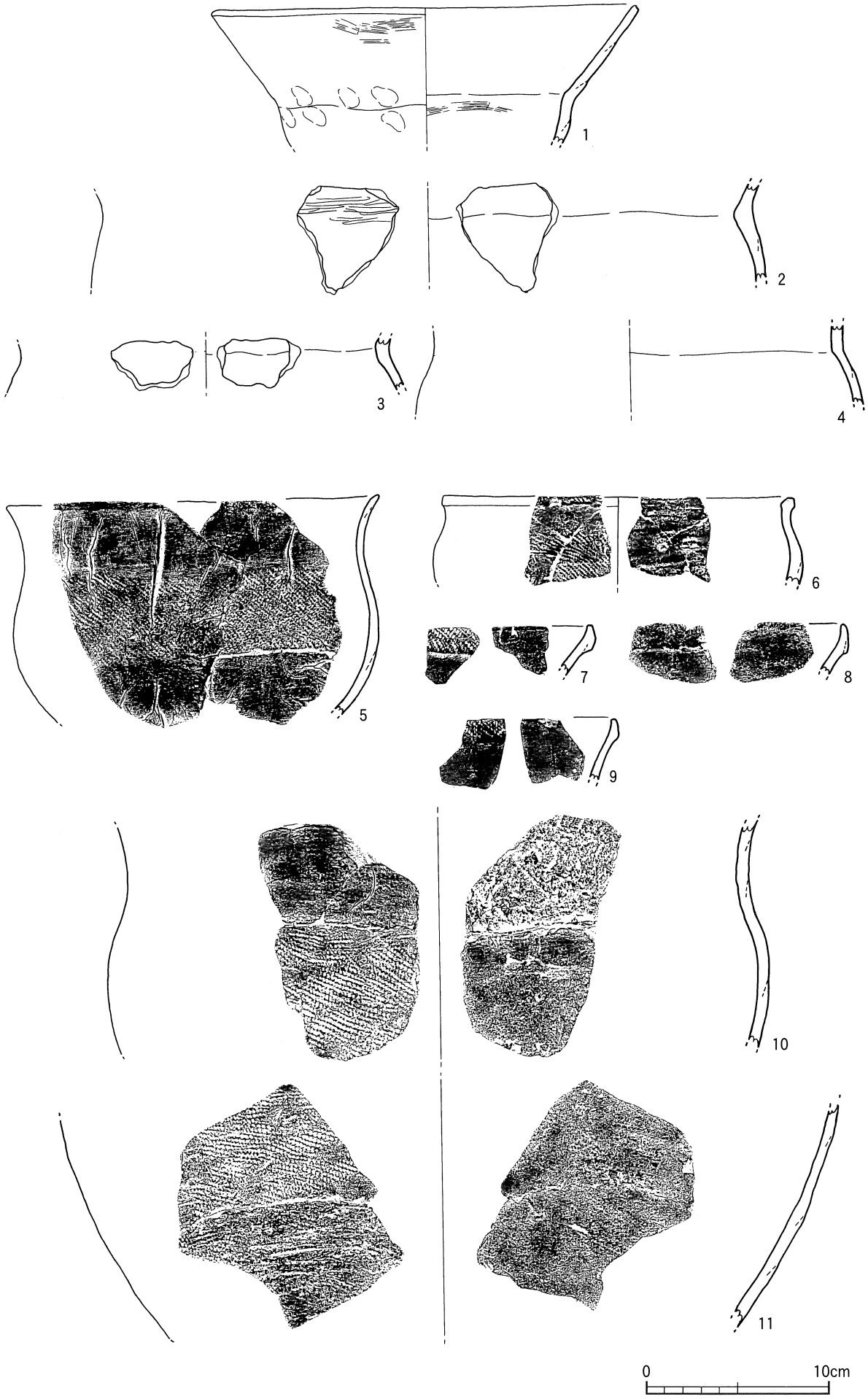

第65図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図４（1／3）



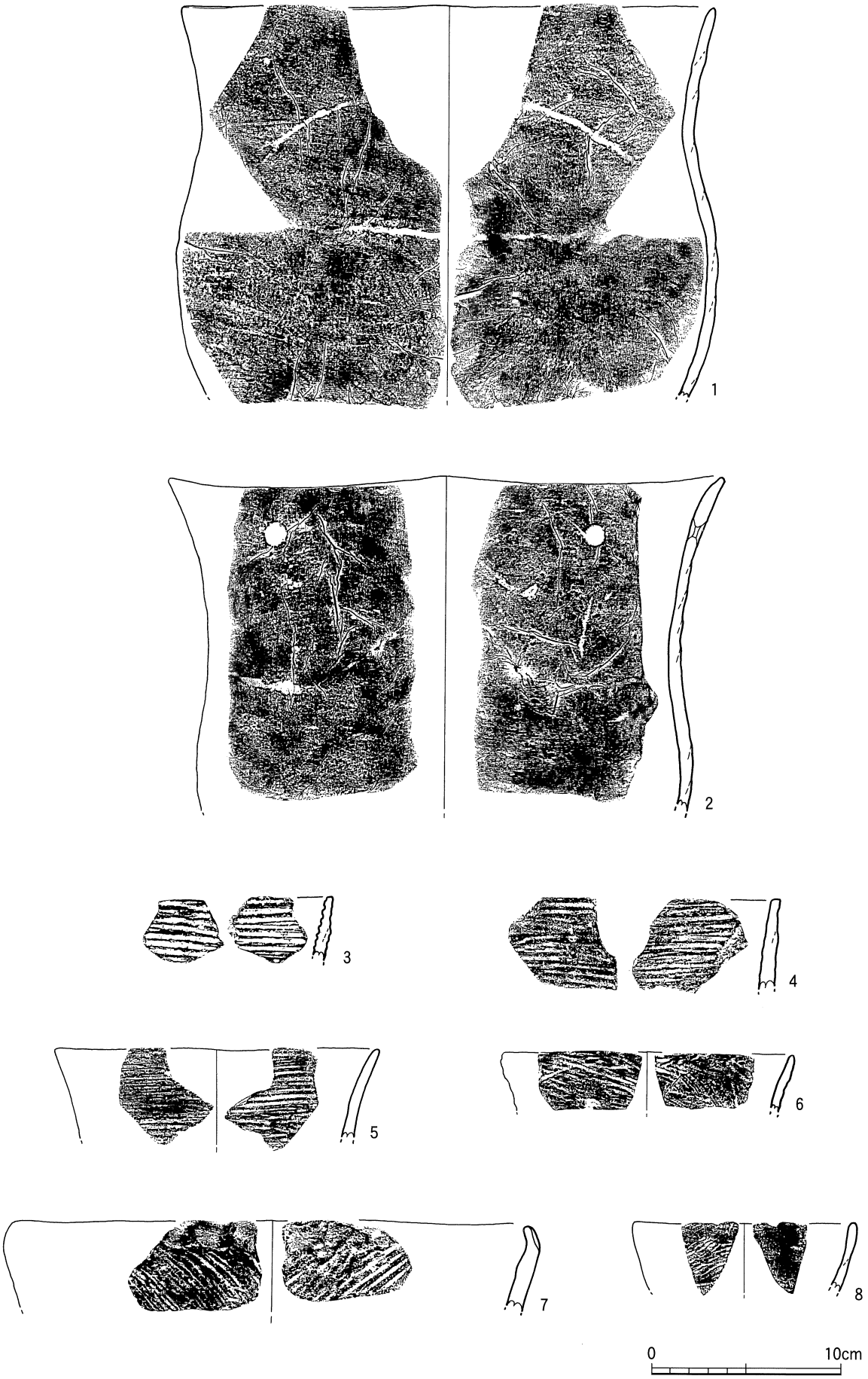

第66図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図５（1／3）



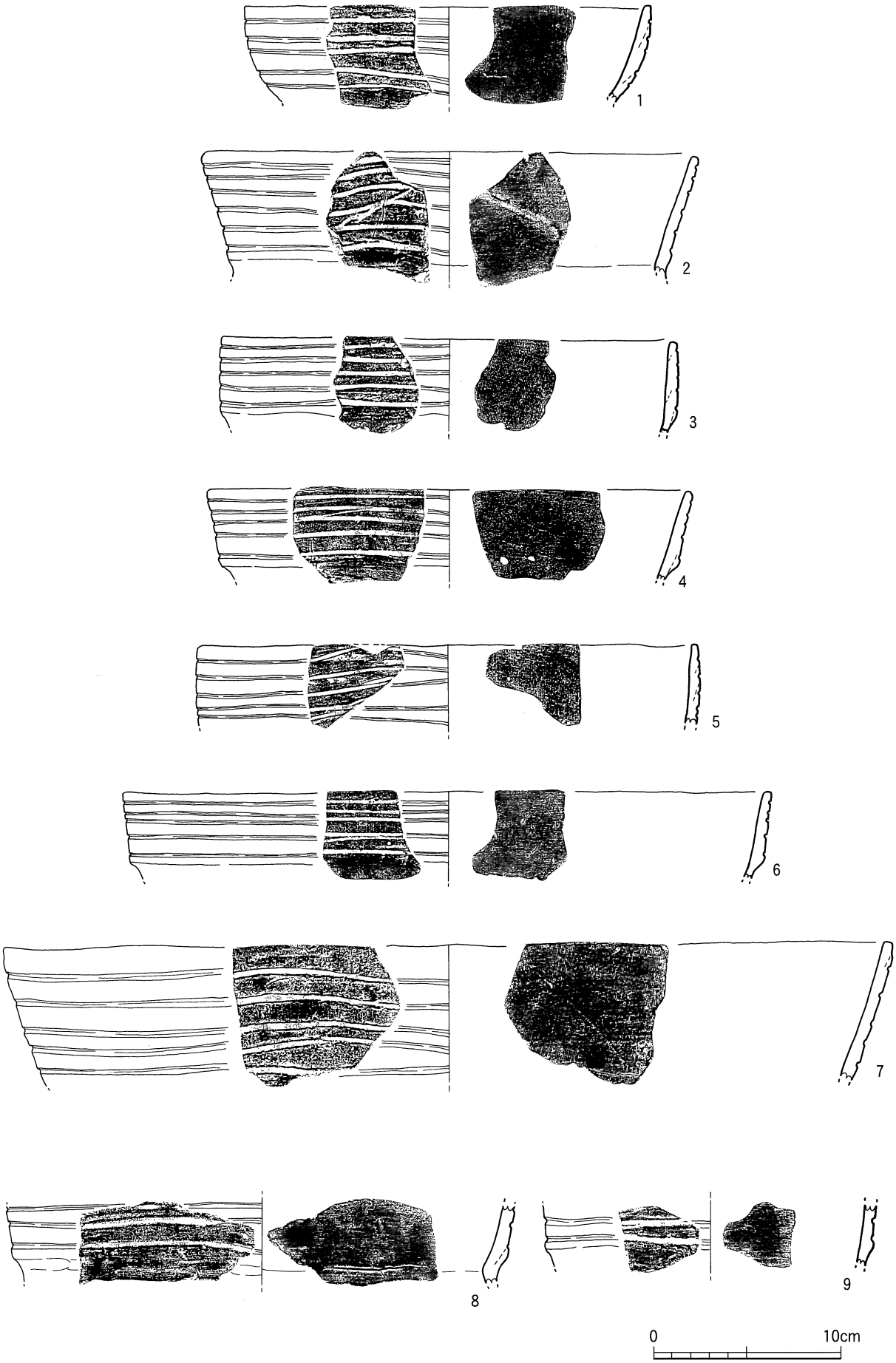

第67図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図６（1／3）



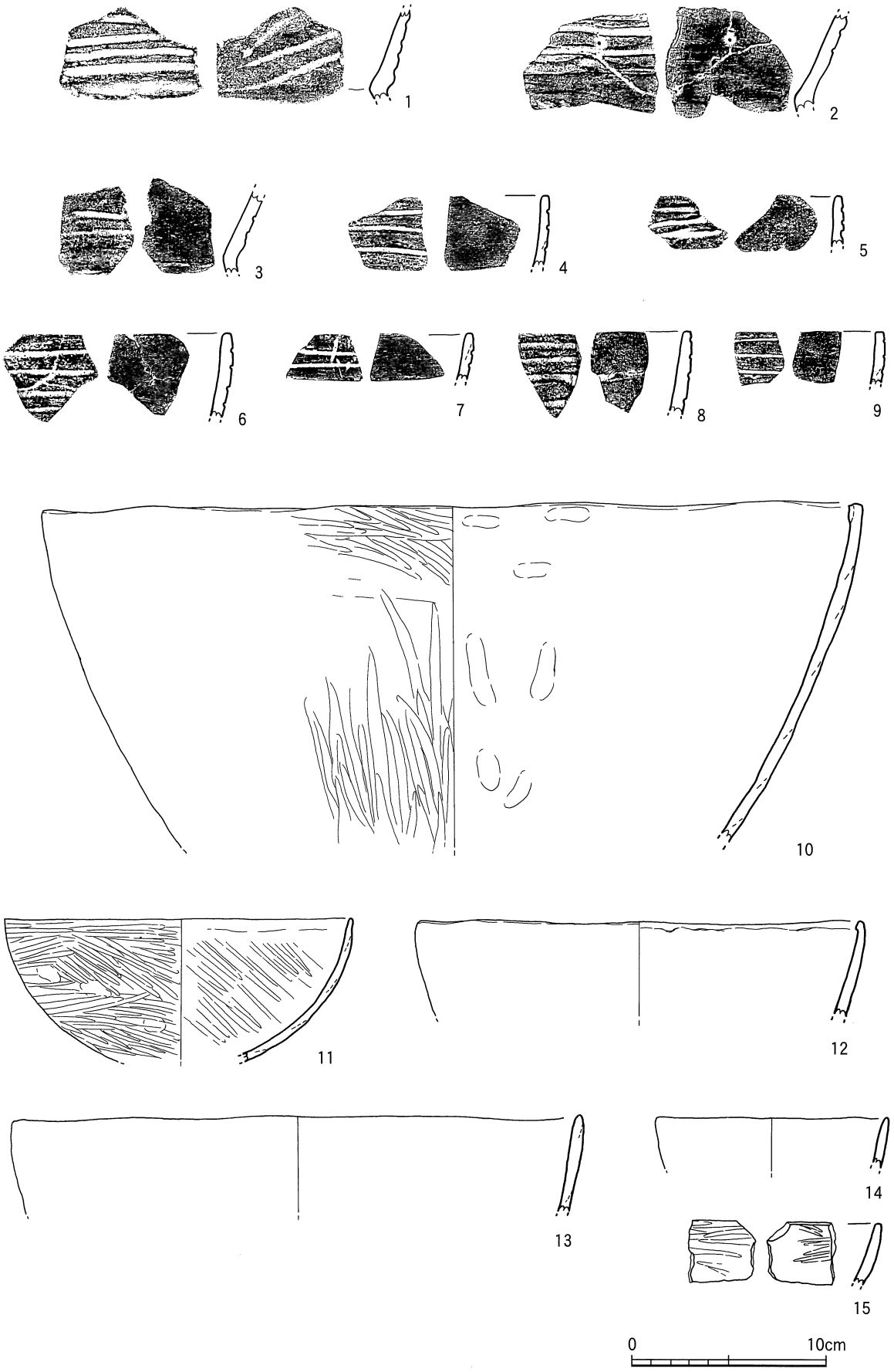

第68図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図７（1／3）



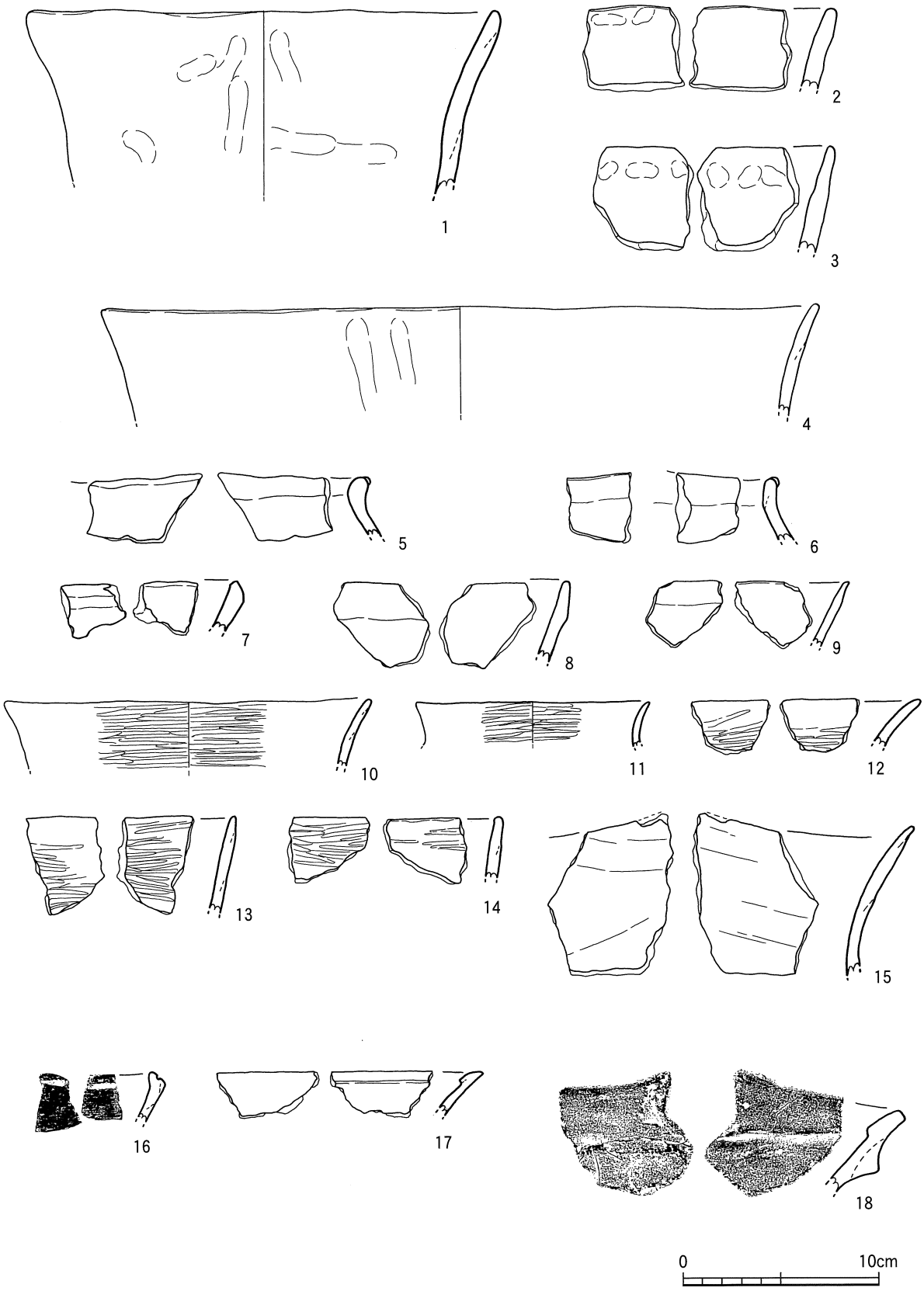

第69図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後期土器実測図８（1／3）



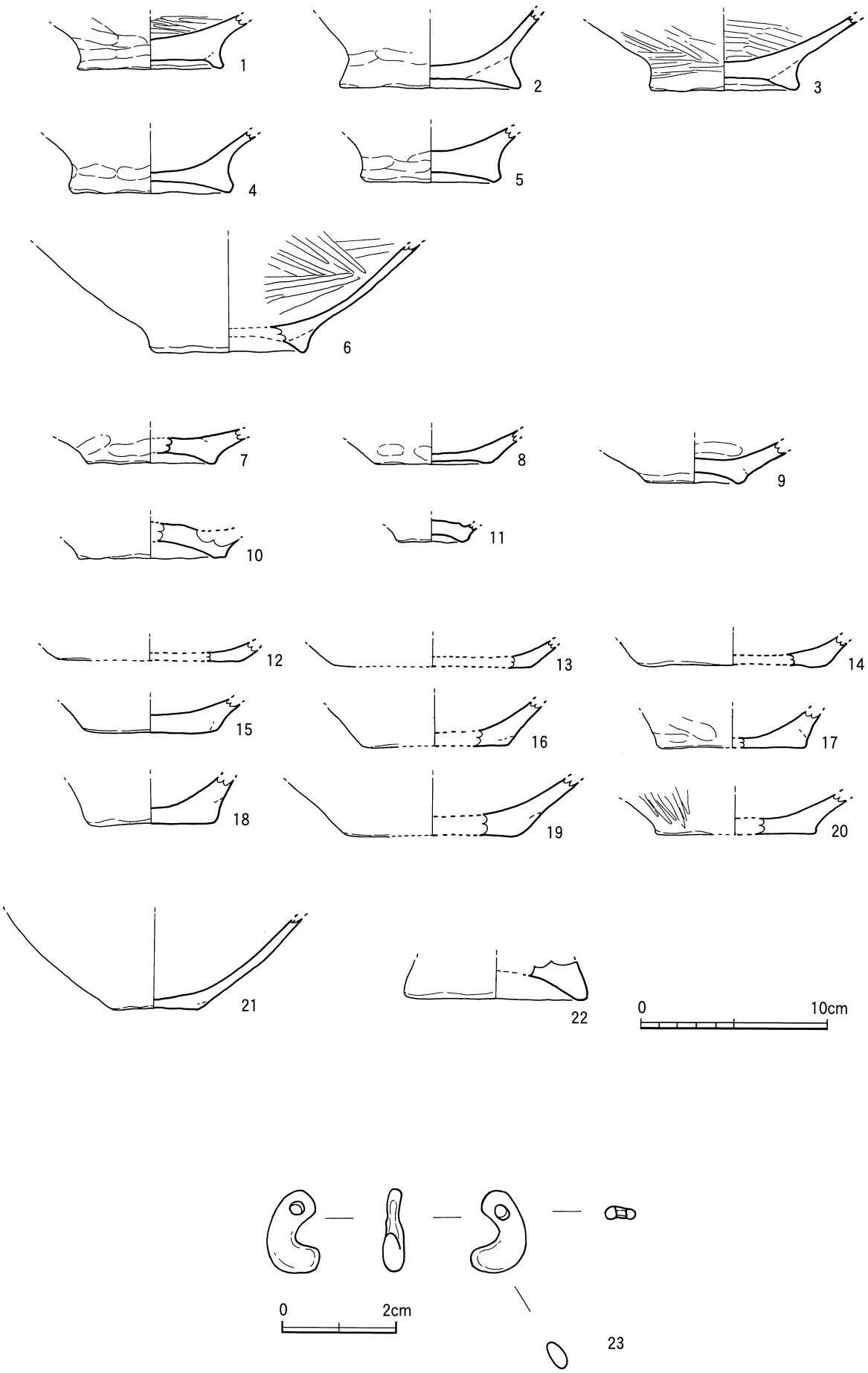

第70図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文晩期土器実測図１（1／3）




第71図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器実測図１（1／3）




第72図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器実測図２（1／3）




第73図　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器及び玉類実測図（1／3・実大）

## 表８　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器観察表１

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土位置 | 文様の特徴と器面調整の方法 | | | | 胎土 | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 色調 | 内面 | 色調 | 角閃石 | 長石 | 石英 | その他 | |
| 62図 | 1 | 3トレンチ 1387 | 条痕，口唇部・口縁部刻目 | 橙色 | 条痕 | 明黄褐色 | | | ○ | 砂粒 赤色粒 | |
| | 2 | 1トレンチ Ⅲ層 | ナデ，沈線間刺突 | 明橙色 | ナデ | にぶい褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | C-2-28 | 条痕→ナデ，口唇部刻目 | 暗褐色 | 条痕→ナデ | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 4 | B-3-199 | 条痕→口縁部研磨，口唇部刻目 | 橙色 | 条痕→口縁部研磨 | 橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 5 | 3トレンチ 800 | 条痕 | にぶい橙色 | 条痕 | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| 63図 | 1 | B-3 1トレンチ　中 | 研磨，口唇部・頸部縄文 | にぶい褐色 | 研磨 | にぶい褐色 | | ○ | ○ | | |
| | 2 | 1トレンチ Ⅲ層 | ナデ，磨消縄文 | 暗褐色 | 研磨 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | C-2-14 | ナデ，口縁部縄文→2条沈線 | にぶい橙色 | 研磨 | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 4 | C-2-14 | 研磨，口縁部縄文→3条沈線 | 暗褐色 | 研磨 | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 5 | C-2-15 | 研磨，口縁部縄文→沈線文様 | にぶい褐色 | 研磨 | にぶい褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | 住居址埋土 | 研磨，口縁部擬縄文→3条沈線 | にぶい橙色 | 研磨 | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 7 | C-2-23 | 研磨，口縁部擬縄文→3条沈線 | 暗褐色 | 研磨 | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 8 | B-2-46 | ナデ，口縁部縄文→3条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 9 | B-3-129 | 研磨，口縁部縄文→2条沈線 | 灰褐色 | 研磨 | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 10 | A-3-12　中 | ナデ，口縁部縄文→2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 11 | A-3-20　上 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 12 | B-3-108 | 研磨，口縁部2条沈線 | にぶい褐色 | 研磨 | にぶい褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 13 | 1トレンチ Ⅲ層 | ナデ，口縁部2条沈線 | 暗褐色 | ナデ | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 14 | B-3-85 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | 研磨 | にぶい褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 15 | B横トレンチ 一括 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 16 | A-3-7　上 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 17 | A-3-20　上 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 18 | A-3-16　中 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 19 | B-3-118 | 研磨，口縁部2条沈線 | にぶい褐色 | 研磨 | にぶい褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 20 | 中層一括 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 21 | A-3-16　中 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 22 | B-3-154 | 研磨，口縁部2条沈線 | 浅黄橙色 | 研磨 | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| 64図 | 1 | A-3-15　上 | 研磨，口縁部2条沈線 | 明褐色 | ナデ | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 2 | A-4-20 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい褐色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | B-3-162 | 研磨，口縁部2条沈線 | にぶい灰褐色 | 研磨 | にぶい灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 4 | B-2-78 | ナデ，口縁部2条沈線 | 灰褐色 | 研磨 | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 5 | A-3-7　上 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | A-3-3　中 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 7 | A-3-19　上 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | 砂粒 赤色粒 | |
| | 8 | B-2-65 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | 灰色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 9 | A-3-3　中 | ナデ，口縁部3条沈線 | 褐色 | 研磨 | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |

表９　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器観察表２

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土位置 | 文様の特徴と器面調整の方法 | | | | 胎土 | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 色調 | 内面 | 色調 | 角閃石 | 長石 | 石英 | その他 | |
| 64図 | 10 | B-2-24 | ナデ，口縁部3条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 11 | A-3-12 中層 | ナデ，口縁部2条沈線 | 灰白色 | ナデ，口縁部1条沈線 | 灰白色 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 12 | B-3 1トレンチ　上 | 研磨，口縁部2条沈線 | にぶい褐色 | ナデ，口縁部1条沈線 | にぶい褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 13 | A-3-16　上 | ナデ，口縁部2条沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ，口縁部1条沈線 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 14 | A-3-16　中 | ナデ，口縁部2条以上の沈線 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 15 | C-2-5 C-2-14 | 口縁部ナデ，口縁部縄文 胴部研磨，胴部磨消縄文 | 灰褐色 | 口縁部ナデ 胴部研磨 | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 16 | C-2-23 C-2-24 | 研磨，磨消縄文 | 褐色 | 研磨 | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| 65図 | 1 | C-2-15 | 研磨，磨消縄文 | 黄橙色 | 研磨 | 黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 2 | C-2-12・15・23 | 研磨，磨消縄文 | にぶい褐色 | 研磨 | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | C-2-6-1 | 研磨，磨消縄文 | 褐色 | 研磨 | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 4 | C-2-15 | 研磨，磨消縄文 | 浅黄橙色 | 研磨 | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 5 | C-2-23 | ナデ，磨消縄文 | にぶい黄橙色 | 研磨 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | C-2-14 | ナデ，磨消縄文 | 灰褐色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 7 | C-2-15 | ナデ，磨消縄文 | にぶい橙色 | ナデ | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 8 | C-2-15 一括 | 研磨，磨消縄文？ | 灰褐色 | 研磨 | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 9 | C-2-14 | 研磨，磨消縄文？ | にぶい黄橙色 | 研磨 | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 10 | C-2-14 | 研磨，縄文地沈線 | 暗褐色 | 頸部研磨，胴部ナデ | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 11 | C-2-15 | 研磨，縄文地沈線 | 暗褐色 | 研磨 | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| 66図 | 1 | C-2-25 | ナデ，縄文地沈線？ | 明橙色 | 研磨 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 2 | C-2-14 | 研磨，縄文地沈線？ | にぶい黄橙色 | 研磨 | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | A-3-20　上 | ナデ，縄文地沈線？ | 橙色 | ナデ | 黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 4 | 2トレンチ Ⅲ層 | ナデ，縄文地沈線？ | にぶい灰白色 | ナデ | にぶい灰白色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 5 | B-3-20　上 | 研磨，一部縄文地沈線 | 灰色 | 研磨 | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | A-3-11　中 | ナデ，沈線文様 | 灰褐色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 7 | A-3-20　上 | ナデ，沈線文様 | 灰色 | ナデ | にぶい灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 8 | A-3-15　上 | ナデ，一部縄文地沈線 | 灰褐色 | ナデ | 黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 9 | A-3-19　上 | 研磨，一部縄文地沈線 | にぶい灰褐色 | 研磨 | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 10 | B-3-142 | 研磨，一部縄文地沈線 | 灰褐色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 11 | A-3-19　上 | ナデ，沈線文様 | にぶい灰褐色 | ナデ | にぶい灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| 67図 | 1 | A-3-19　中 | ナデ，沈線文様 | 灰褐色 | ナデ | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 2 | C-5-65 上一括 | 研磨，沈線文様 | にぶい灰褐色 | 研磨 | にぶい褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | A-3-19　上 | ナデ，沈線文様 | にぶい灰褐色 | 研磨 | にぶい灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 4 | A-3-15 | ナデ，沈線文様 | にぶい灰褐色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 5 | A-4-3 | ナデ，沈線文様 | 灰白色 | ナデ | にぶい灰白色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | A-3-20　上 | ナデ，沈線文様 | 灰褐色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 7 | A-3-11　上 | ナデ，沈線文様 | 灰褐色 | ナデ | 黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | 挿図66，8と同一個体か? |

表10　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器観察表３

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土位置 | 文様の特徴と器面調整の方法 | | | | 胎土 | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 色調 | 内面 | 色調 | 角閃石 | 長石 | 石英 | その他 | |
| 67図 | 8 | C-5-69 中層一括 | ナデ，口縁部縄文→2条沈線 波頂部肥厚し文様 | 灰白色 | ナデ，口縁部1条沈線 | 灰白色 | ○ | ○ | ○ | | 挿図67，9と同一個体 |
| | 9 | C-5-70 上一括 | ナデ | 灰白色 | ナデ | 灰白色 | ○ | ○ | ○ | | 挿図67，8と同一個体 |
| | 10 | C-2-5 | 研磨 | 灰褐色 | 研磨 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 11 | A-3-19　中 | 研磨 | 灰褐色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 12 | A-3　一括 | ナデ | 暗褐色 | ナデ | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 13 | A-3-20　上 | ナデ | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 14 | A-3-20　中 | ナデ | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 15 | B-2-53 | 口縁部ナデ 頸部研磨 | 明橙色 | ナデ | 明橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 16 | B-3-126 | 研磨 | にぶい灰褐色 | ナデ | にぶい灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 17 | A-4-27 | ナデ | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 18 | A-3-12　中 | ナデ | 浅黄橙色 | 研磨 | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 19 | B-3-393 | 研磨 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 20 | C-2-6 | ナデ | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 21 | B-3-189 | 研磨 | 浅黄橙色 | 研磨 | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| 68図 | 1 | C-5-70 中一括 | ナデ | にぶい橙色 | ナデ | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 2 | A-3-7　中 | 研磨 | にぶい黄橙色 | 研磨 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | A-3-11　中 | ナデ | 褐色 | ナデ | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 4 | A-3-3　中 | ナデ | 明褐色 | ナデ | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 5 | C-2-24　一括 C-2-15 | 研磨，口縁部・胴部上半縄文 | 灰褐色 にぶい黄橙色 | 研磨 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | 住居址埋土 | 研磨，口縁部・胴部上半縄文 | にぶい黄橙色 | 研磨 | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 7 | C-3-331 | ナデ，口縁部縄文 | 灰褐色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 8 | C-2-14 | ナデ，口縁部縄文 | 暗褐色 | ナデ | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 9 | B-3-51 | 研磨，口縁部縄文 | 黒褐色 | 研磨 | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 10 | C-2-14 | 研磨，胴部上半縄文 | にぶい橙色 | ナデ | 橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 11 | C-2-14 | ナデ，胴部上半縄文 | 褐色 | ナデ | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| 69図 | 1 | C-2-15 C-2-14 | 条痕→研磨 | にぶい橙色 | ナデ | 橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 2 | C-2-14 | 研磨 | 灰褐色 | 研磨 | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | 口縁部に穿孔 |
| | 3 | A-3-7　中 | 条痕 | 橙色 | 条痕 | 橙色 | ○ | ○ | ○ | | 挿図69，4と同一個体か? |
| | 4 | A-3-11　中 | 条痕 | 浅黄橙色 | 条痕 | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | 挿図69，3と同一個体か? |
| | 5 | C-2-19 | 条痕 | 黒褐色 | 条痕 | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | C-3-340 | 条痕 | にぶい橙色 | 条痕 | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 7 | 3トレンチ 342 | 口唇部指ナデ 口縁部条痕 | 黒褐色 | 口唇部指ナデ 口縁部条痕 | にぶい褐色 | ○ | ○ | ○ | | 口唇部指頭圧痕が明瞭 |
| | 8 | C-2-5 一括 | ナデ，一部縄文 | にぶい褐色 | ナデ | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| 70図 | 1 | C-2-6 | ナデ，5条沈線 | 暗褐色 | 研磨 | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 2 | A-3-20　上 | 研磨，6条沈線 | 灰褐色 | 研磨 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | C-3 2トレンチ 中一括 | 研磨，5条沈線 | にぶい黄橙色 | 研磨 | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | |

表11　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器観察表４

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土位置 | 文様の特徴と器面調整の方法 | | | | 胎土 | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 色調 | 内面 | 色調 | 角閃石 | 長石 | 石英 | その他 | |
| 70図 | 4 | C-3-219 | ナデ，5条沈線 | 灰褐色 | 研磨 | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 5 | C-3-199 | ナデ，5条以上の沈線 | 暗褐色 | ナデ | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | C-4-52 | 研磨，5条沈線 | 明橙色 | 研磨 | 灰色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 7 | B-2-49 | ナデ，5条沈線 | 暗褐色 | 研磨 | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 8 | B-3-100 | ナデ，3条以上の沈線 | 浅黄橙色 | 板状工具によるナデ | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 9 | C-2-19 | ナデ，2条以上の沈線 | 褐色 | ナデ | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| 71図 | 1 | C-3-15　下 | ナデ，4条以上の沈線 | 淡褐色 | ナデ | 淡褐色 | ○ | ○ | ○ | 金雲母 | |
| | 2 | C-2-43 | ナデ，3条以上の沈線 | 浅黄橙色 | 板状工具によるナデ | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | C-2-2 | ナデ，2条以上の沈線 | 浅黄橙色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 4 | C-2-16 | ナデ，3条以上の沈線 | にぶい橙色 | 研磨 | にぶい褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 5 | A-3-20　上 | ナデ，3条以上の沈線 | 灰褐色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | C-2-65 | ナデ，4条以上の沈線 | 淡白色 | ナデ | 灰色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 7 | B-3-38 | ナデ，2条以上の沈線 | 暗褐色 | 研磨 | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 8 | B-2-67 | ナデ，4条以上の沈線 | 浅黄橙色 | ナデ | 淡褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 9 | B-2-79 | ナデ，3条以上の沈線 | 褐色 | ナデ | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 10 | B-2-79 | ナデ→研磨 | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 11 | B-2-57 | 研磨 | にぶい橙色 | 研磨 | 淡橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 12 | A-3-19　中 | ナデ | 灰白色 | ナデ | 灰白色 | ○ | ○ | ○ | 赤色粒 | |
| | 13 | A-3-20　上 | ナデ | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 14 | B-3-33 | ナデ | 浅黄橙色 | ナデ | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 15 | B-2-67 | 研磨 | 灰褐色 | 研磨 | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| 72図 | 1 | C-2-38 | ナデ | にぶい橙色 | ナデ | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 2 | 3トレンチ875 | ナデ | 暗褐色 | ナデ | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 3 | 3トレンチ807 | ナデ | 暗褐色 | ナデ | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 4 | C-2-14 | ナデ | 浅黄橙色 | ナデ | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 5 | A-3-16　中 | ナデ | にぶい黄橙色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 6 | A-3-20　中 | ナデ | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 7 | 3トレンチ141 | ナデ | にぶい灰褐色 | ナデ | にぶい灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 8 | C-2-23 | ナデ | 橙色 | ナデ | 橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 9 | 3トレンチ | ナデ | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 10 | C-2-4・5・9 | 研磨 | にぶい黄橙色 | 研磨 | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 11 | C-2-14 | 研磨 | にぶい褐色 | 研磨 | にぶい褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 12 | C-2-15 | 研磨 | にぶい褐色 | 研磨 | にぶい褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 13 | B-3-378 | 研磨 | にぶい褐色 | 研磨 | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 14 | C-2-15 | 研磨 | にぶい褐色 | 研磨 | 暗褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 15 | C-3-299 | ナデ | 灰白色 | ナデ | 灰白色 | ○ | ○ | ○ | | |

## 表12　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文後・晩期土器観察表５

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土位置 | 文様の特徴と器面調整の方法 | | | | 胎土 | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 色調 | 内面 | 色調 | 角閃石 | 長石 | 石英 | その他 | |
| 72図 | 16 | A-3-12　中 | 研磨 | 黒褐色 | 研磨 | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 17 | 3トレンチ 83 | 研磨 | 黒褐色 | 研磨 | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 18 | A-6-P-2 | ナデ→研磨 | 黄茶褐色 | ナデ | 黄褐色 | ○ | ○ | | 砂粒 赤色粒 | |
| 73図 | 1 | B-2-47・67 | ナデ | にぶい黄橙色 | 研磨 | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | 上げ底 |
| | 2 | B-3-403 | ナデ | 橙色 | ナデ | 黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | 上げ底 |
| | 3 | B-2-73 | 研磨 | 明橙色 | 研磨 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | 上げ底 |
| | 4 | B-2-67 | ナデ | にぶい橙色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | 上げ底 |
| | 5 | A-3-15　上 | ナデ | 黄橙色 | ナデ | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | 上げ底 |
| | 6 | B-2-69 | ナデ | 橙色 | 研磨 | にぶい橙色 | ○ | ○ | ○ | | 上げ底 |
| | 7 | A-3-11　上 | ナデ | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | 凹レンズ状の上げ底 |
| | 8 | C-2-14 | ナデ | 橙色 | ナデ | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | 凹レンズ状の上げ底 |
| | 9 | B-3-108 | ナデ | 明橙色 | ナデ | 浅黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | 凹レンズ状の上げ底 |
| | 10 | A-3-7　中 | ナデ | にぶい黄橙色 | ナデ | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | 凹レンズ状の上げ底 |
| | 11 | A-3-38 | ナデ | 浅黄橙色 | ナデ | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | 凹レンズ状の上げ底 |
| | 12 | C-2-14 | ナデ | 橙色 | ナデ | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | 平底. 挿図73，13・14と同一個体 |
| | 13 | C-2-14 | ナデ | 橙色 | ナデ | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | 平底. 挿図73，12・14と同一個体 |
| | 14 | C-2-14 | ナデ | 橙色 | ナデ | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | 平底. 挿図73，12・13と同一個体 |
| | 15 | A-3-16　中 | ナデ | 黄橙色 | ナデ | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | 平底 |
| | 16 | C-2-14 | ナデ | 橙色 | ナデ | 褐色 | ○ | ○ | ○ | | 平底 |
| | 17 | C-2-23 | ナデ | にぶい黄橙色 | ナデ | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | 平底 |
| | 18 | C-2-24 | ナデ | にぶい橙色 | ナデ | 黄橙色 | ○ | ○ | ○ | | 平底 |
| | 19 | C-2-14 | ナデ | 橙色 | ナデ | 橙色 | ○ | ○ | ○ | | 平底 |
| | 20 | C-2-15 | 研磨 | 橙色 | ナデ | 黒褐色 | ○ | ○ | ○ | | 平底 |
| | 21 | C-2-24　一括 | 研磨 | にぶい黄橙色 | 研磨 | 灰褐色 | ○ | ○ | ○ | | 平底 |
| | 22 | 3トレンチ 30 | ナデ | にぶい黄橙色 | — | — | ○ | ○ | ○ | | 上げ底 |

## 表13　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代玉類計測表

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土位置 | 器種 | 材質 | 残存状況 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重量 (g) | 孔径 (cm) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 73図 | 23 | C-3-40 | 勾玉 | ヒスイ? | 完形 | 1.4 | 0.5～1.1 | 0.2～0.3 | 0.5 | 0.2 | |

C）縄文時代の石器

**石鏃（第74図１～52・第75図53～58）**

縄文時代早期を中心とする多数の石鏃が出土している。形態は凹基式が主体である。

１～20は、抉りの深い鍬形鏃。その中で、長身のもの（１・２）、短身のもの（５～15）、中間のもの（３・４）がある。21～32はやや開脚する凹基式のもの。33～39は抉りの浅いものである。41・42・47は平基のもの。56は剥片に簡単な加工を加えた凹基式のもの。57・58は、平基の五角形をなすもので、縄文時代後晩期に属するものとみられる。53はいわゆる早期に特徴的な小型のトロトロ石器といわれるものである。

**尖頭状石器（第75図１～24，第76図27・30・31）**

１～12は略三角形の尖頭状石器。周辺からの両面加工がなされている。用途はスクレイパーと共通するものとみられるが、石鏃の未製品も含まれているとみられる。13～24・27・30・31は、杏仁形もしくは砲弾形のもので、加工は１～12と同様である。これについても石鏃の未製品も含むと思われるが、用途はスクレイパーと共通するものとみられる。

**スクレイパー類（第76図25・26・28・29・32～47，第77図48～51・54・55）**

スクレイパー類は、形態上はほとんど削器とされるもので、掻器とされるものは皆無に等しい。25・28・29・32～35は、剥片の形状をよく残しているもの。35は、刺突具状のもの。36は漆黒色の良質の黒曜石を使用した片面加工のもの。37は略短冊形、32・33・39・40は略三角形のもの。41～44・49・50は略楕円の形状のものである。54は比較的大まかな二次加工による肉厚のものである。55は旧石器時代のホルンフェルスの剥片を二次使用したもので、加工部の面だけが新しい。

**彫器類（第77図52・53）**

尖頭状石器の先端の斜め方向からフルーティングを施したもので、一応彫器に分類されるものである。52は両面加工のもの、53は片面加工のものである。２回の加撃が認められる。

**石核（第77図１～４）**

石鏃等の小型の剥片石器素材の母材となったものである。１・３・４は両面加工の石器に近い形態となっており、最後はスクレイパーとして利用されたものであろう。２は略円錐状のもので、打面はよく調整されている。石材はいずれもチャート製である。

**鵜ノ木地区出土の石器（第78・79図）**

**削器（第78図１）**

大型の剥長剥片の周縁を両面加工したもので、刃部には入念な調整を行っている。穂摘具の機能が考えられる。

**磨製石斧（第78図２・第79図17）**

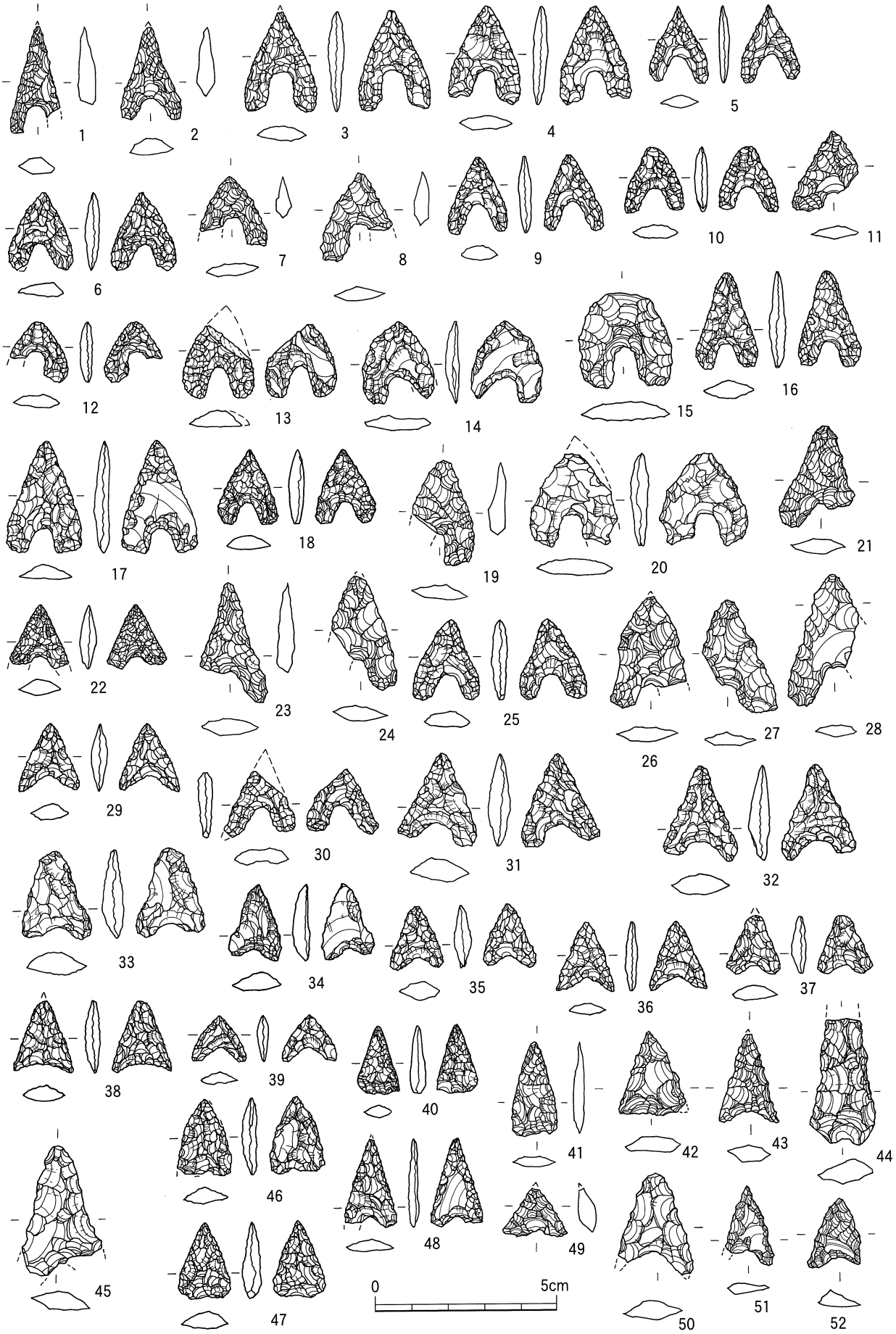
頁岩製の剥片を素材とするもので、刃部の周辺は入念な研磨を行っている。縦断面がやや湾曲するもので、小型の手斧とみてよい。17は、石斧の頭部で、蛇紋岩製である。

**扁平打製石斧（第78図３～７・12・13，第79図16）**

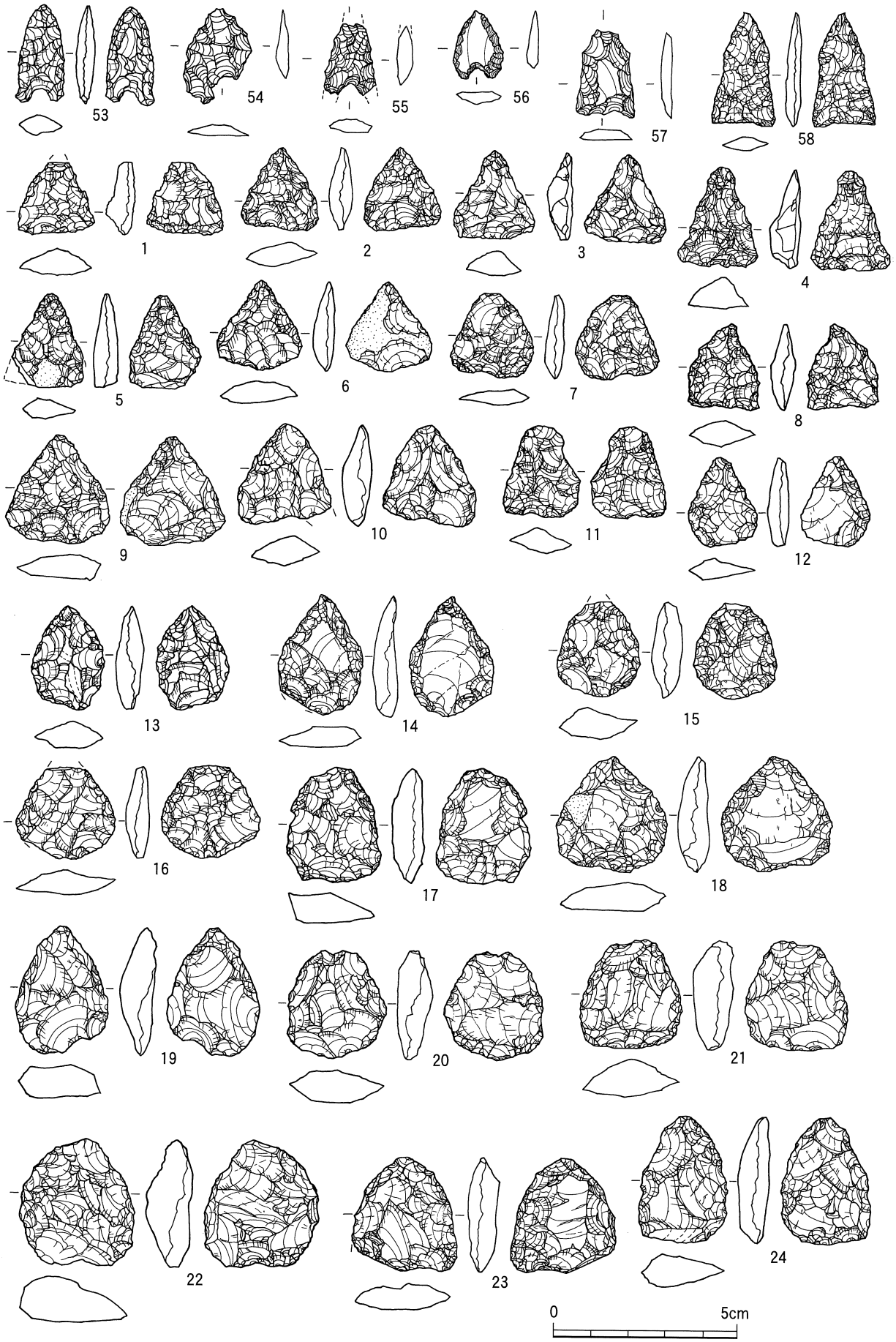
蛇紋岩質の結晶片岩の板状素材を加工したもの。厚い方の端部に使用による磨耗痕がみられる。４～７・12・13は、火山岩の横長剥片を素材とするもの。自然の曲面を巧に利用している。16は、頁岩製で両面ともに加工が入念な小型のもの。

**石錘（第78図11・14・15）**

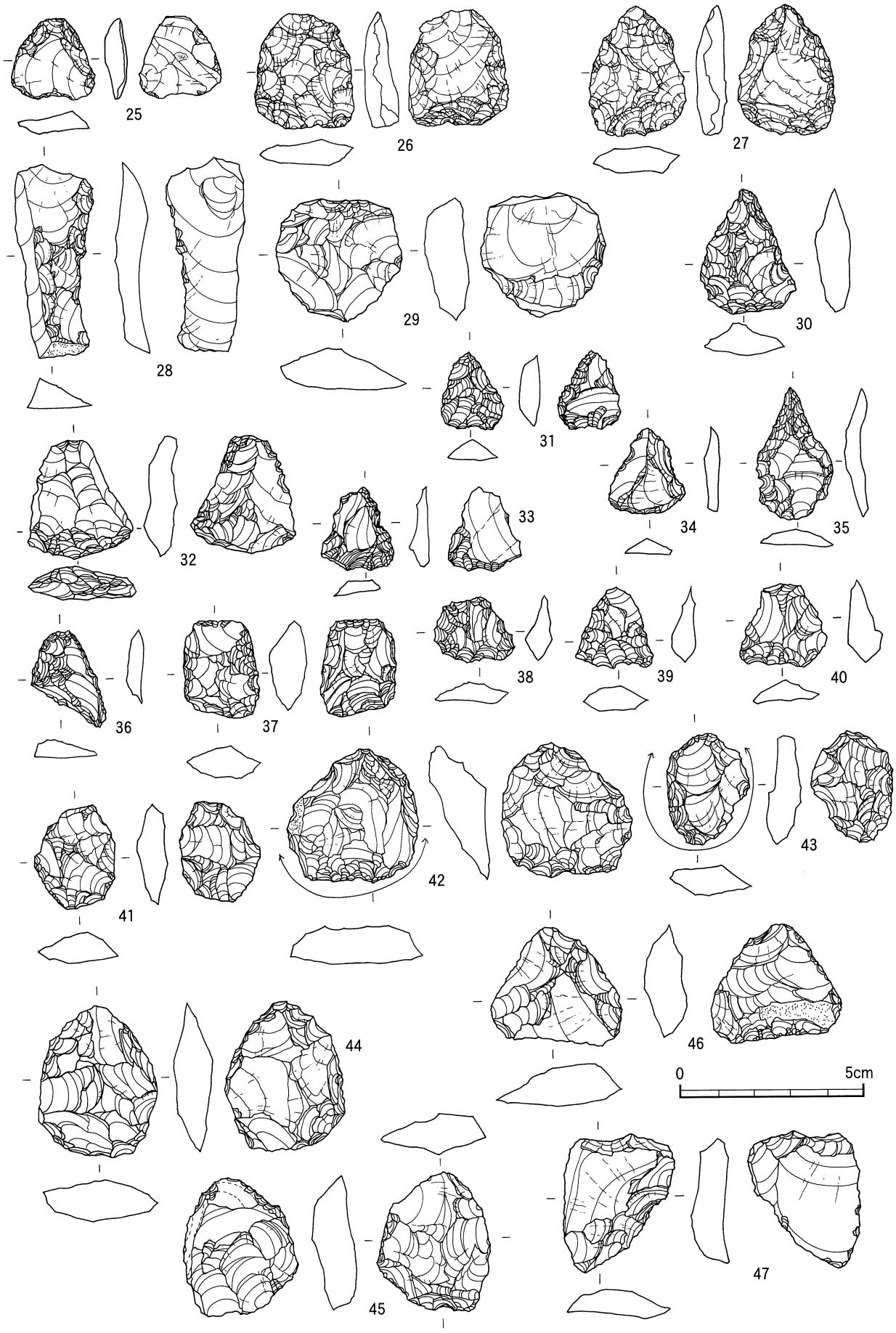
11は安山岩製、14・15は扁平な結晶片岩の礫を使用している。いずれも長軸の両端部を打ち欠いている。



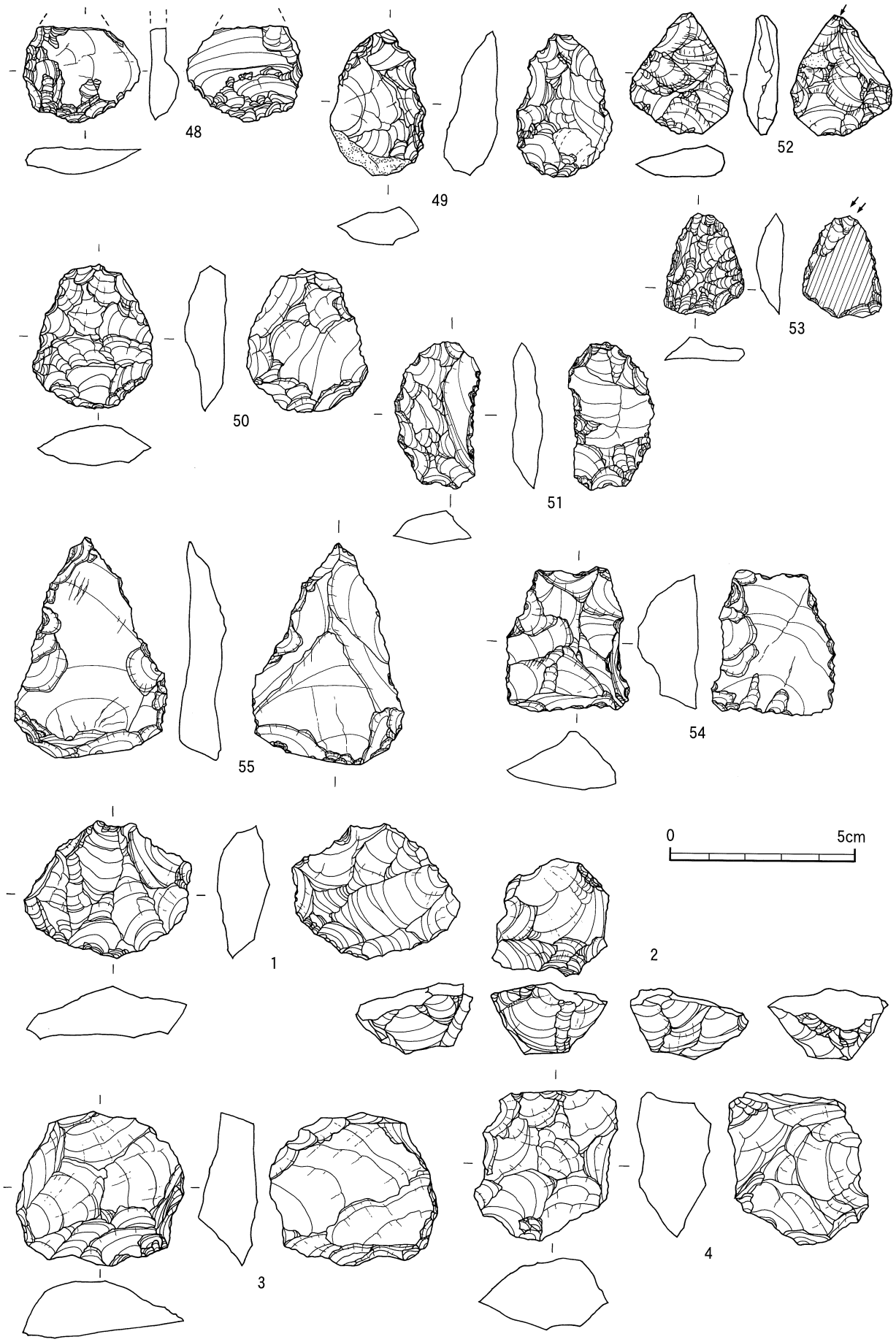

第74図　利光遺跡鵜ノ木地区出土石鏃実測図（2／3）




第75図　利光遺跡鵜ノ木地区出土石鏃・剥片石器実測図１（2／3）




第76図　利光遺跡鵜ノ木地区出土剥片石器実測図２（2／3）




第77図　利光遺跡鵜ノ木地区出土剥片石器・石核実測図（2／3）

表14　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代石器計測表１

| 遺物番号 | 出土地区 | 出土地点 | 器　種 | 石　材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚み(cm) | 重量(g) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鵜ノ木 | 横トレンチ一括 | 石鏃 | 姫島産黒曜石 | 2.9 | 1.35 | 0.45 | 1.1 | |
| 2 | 鵜ノ木 | C3-23 | 石鏃 | チャート | 2.55 | 1.7 | 0.4 | 1.3 | |
| 3 | 鵜ノ木 | C4-33 | 石鏃 | チャート | 2.75 | 2 | 0.4 | 1.6 | |
| 4 | 鵜ノ木 | A3-7-上層 | 石鏃 | チャート | 2.7 | 2 | 0.4 | 1.7 | |
| 5 | 鵜ノ木 | C6-63中層下面 | 石鏃 | チャート | 2.1 | 1.6 | 0.35 | 0.6 | |
| 6 | 鵜ノ木 | C4-31 | 石鏃 | チャート | 2.15 | 1.8 | 0.4 | 1.2 | |
| 7 | 鵜ノ木 | C3-27 | 石鏃 | ｶﾞﾗｽ質安山岩 | 1.9 | 1.8 | 0.35 | 0.6 | 石材？(角閃石?) |
| 8 | 鵜ノ木 | C3-544 | 石鏃 | サヌカイト | 2.4 | 2 | 0.45 | 1.1 | |
| 9 | 鵜ノ木 | C5-43 | 石鏃 | チャート | 2.1 | 1.6 | 0.4 | 0.9 | |
| 10 | 鵜ノ木 | C2-10 | 石鏃 | チャート | 1.8 | 1.6 | 0.35 | 0.8 | |
| 11 | 鵜ノ木 | A3-16G・中 | 石鏃 | チャート | 2.2 | 1.85 | 0.4 | 1 | |
| 12 | 鵜ノ木 | C6-69中層下面 | 石鏃 | チャート | 1.7 | 1.6 | 0.4 | 0.6 | |
| 13 | 鵜ノ木 | C2-40 | 石鏃 | チャート | 2 | 2 | 0.45 | 1.5 | |
| 14 | 鵜ノ木 | B3-96 | 石鏃 | チャート | 2.25 | 1.95 | 0.4 | 1.3 | |
| 15 | 鵜ノ木 | C3-19 | 石鏃 | チャート | 2.55 | 2.5 | 0.45 | 3.1 | |
| 16 | 鵜ノ木 | C3-36 | 石鏃 | チャート | 2.65 | 1.7 | 0.45 | 1.4 | |
| 17 | 鵜ノ木 | A3-15中層 | 石鏃 | チャート | 3.1 | 2.1 | 0.35 | 2 | |
| 18 | 鵜ノ木 | C4-41 | 石鏃 | チャート | 2.1 | 1.65 | 0.4 | 1 | |
| 19 | 鵜ノ木 | C3-29 | 石鏃 | チャート | 2.85 | 1.7 | 0.45 | 1.6 | |
| 20 | 鵜ノ木 | C3-197 | 石鏃 | チャート | 2.55 | 2.4 | 0.45 | 2.2 | |
| 21 | 鵜ノ木 | 一括 | 石鏃 | チャート | 2.8 | 2.1 | 0.4 | 1.7 | |
| 22 | 鵜ノ木 | A3-15中層 | 石鏃 | チャート | 1.75 | 1.6 | 0.45 | 0.8 | |
| 23 | 鵜ノ木 | C2-16 | 石鏃 | 姫島ｶﾞﾗｽ質安山岩 | 3.25 | 1.9 | 0.45 | 1.7 | |
| 24 | 鵜ノ木 | C3-25 | 石鏃 | 姫島産黒曜石 | 3.1 | 1.8 | 0.4 | 1.6 | |
| 25 | 鵜ノ木 | C4-22 | 石鏃 | チャート | 2.2 | 1.85 | 0.4 | 1.4 | |
| 26 | 鵜ノ木 | C5-48 | 石鏃 | チャート | 3.1 | 2.1 | 0.45 | 2.2 | |
| 27 | 鵜ノ木 | C5-34 | 石鏃 | チャート | 3.1 | 2.1 | 0.4 | 2.2 | |
| 28 | 鵜ノ木 | B3-46 | 石鏃 | サヌカイト | 3.55 | 2.05 | 0.4 | 2.1 | |
| 29 | 鵜ノ木 | ５号住居跡一括 | 石鏃 | 姫島産黒曜石 | 1.85 | 1.7 | 0.45 | 0.7 | |
| 30 | 鵜ノ木 | C5-56 | 石鏃 | チャート | 1.8 | 1.95 | 0.4 | 0.9 | |
| 31 | 鵜ノ木 | B3-392 | 石鏃 | チャート | 2.55 | 2.15 | 0.6 | 2.1 | |
| 32 | 鵜ノ木 | A3-3-中層 | 石鏃 | チャート | 2.65 | 2.05 | 0.6 | 1.9 | |
| 33 | 鵜ノ木 | 1トレンチⅡ層 | 石鏃 | 角閃石安山岩 | 2.45 | 1.9 | 0.6 | 1.9 | |
| 34 | 鵜ノ木 | A3-78 | 石鏃 | 姫島産黒曜石 | 2.1 | 1.45 | 0.5 | 0.9 | |
| 35 | 鵜ノ木 | B3-284 | 石鏃 | チャート | 1.75 | 1.5 | 0.5 | 0.8 | |
| 36 | 鵜ノ木 | C4-22 | 石鏃 | チャート | 1.9 | 1.6 | 0.3 | 0.7 | |
| 37 | 鵜ノ木 | (C5-6)横トレンチ一括 | 石鏃 | 黒色黒曜石 | 1.6 | 1.5 | 0.4 | 0.7 | |
| 38 | 鵜ノ木 | C6-66上層一括 | 石鏃 | チャート | 2 | 1.6 | 0.4 | 1 | |
| 39 | 鵜ノ木 | 2トレンチⅢ層 | 石鏃 | 姫島産黒曜石 | 1.25 | 1.5 | 0.3 | 0.3 | |
| 40 | 鵜ノ木 | C6-12 | 石鏃 | チャート | 1.9 | 1.15 | 0.4 | 0.7 | |
| 41 | 鵜ノ木 | C3-332 | 石鏃 | チャート | 2.6 | 1.25 | 0.3 | 1 | |
| 42 | 鵜ノ木 | C7-51 | 石鏃 | 姫島産黒曜石 | 2.3 | 1.8 | 0.45 | 1.6 | |
| 43 | 鵜ノ木 | 3トレンチ | 石鏃 | 姫島産黒曜石 | 2.45 | 1.65 | 0.45 | 1.1 | |

表15　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代石器計測表２

| 遺物番号 | 出土地区 | 出土地点 | 器　種 | 石　材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚み(cm) | 重量(g) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 44 | 鵜ノ木 | C3-7 | 石鏃 | チャート | 3.5 | 1.8 | 0.55 | 4 | |
| 45 | 鵜ノ木 | C3-43 | 石鏃 | 姫島ｶﾞﾗｽ質安山岩 | 3.55 | 2.2 | 0.55 | 2.8 | |
| 46 | 鵜ノ木 | C3-431 | 石鏃 | チャート | 2.1 | 1.5 | 0.4 | 1.2 | |
| 47 | 鵜ノ木 | B2-46 | 石鏃 | チャート | 2.1 | 1.45 | 0.5 | 1.3 | |
| 48 | 鵜ノ木 | C3-354 | 石鏃 | 姫島産黒曜石 | 2.4 | 1.4 | 0.3 | 0.6 | |
| 49 | 鵜ノ木 | C5-46 | 石鏃 | チャート | 1.35 | 1.8 | 0.5 | 0.8 | |
| 50 | 鵜ノ木 | C5-46 | 石鏃 | 金山産ｻﾇｶｲﾄ | 2.8 | 2.1 | 0.5 | 1.9 | |
| 51 | 鵜ノ木 | C5-45 | 石鏃 | チャート | 2.25 | 1.4 | 0.35 | 0.8 | |
| 52 | 鵜ノ木 | C6-68中 | 石鏃 | 姫島産黒曜石 | 1.9 | 1.5 | 0.5 | 0.9 | |
| 53 | 鵜ノ木 | C2-23 | 石鏃 | チャート | 2.7 | 1.35 | 0.5 | 1.8 | |
| 54 | 鵜ノ木 | A3-12中 | 石鏃 | チャート | 2.1 | 1.85 | 0.4 | 1.6 | |
| 55 | 鵜ノ木 | 3トレンチ | 石鏃 | 姫島産黒曜石 | 1.9 | 1.4 | 0.4 | 0.9 | |
| 56 | 鵜ノ木 | A3-11中 | 石鏃 | チャート | 1.85 | 1.35 | 0.3 | 1.2 | |
| 57 | 鵜ノ木 | 2トレンチⅢ層 | 石鏃 | サヌカイト | 2.4 | 1.65 | 0.3 | 1.2 | |
| 58 | 鵜ノ木 | B2-15 | 石鏃 | 姫島産黒曜石 | 3.1 | 1.7 | 0.4 | 1.7 | |
| 75-1 | 鵜ノ木 | C5-37 | 尖頭状石器 | チャート | 1.95 | 2.05 | 0.7 | 2.6 | |
| 2 | 鵜ノ木 | 3トレンチ-298 | 尖頭状石器 | チャート | 2.25 | 2.1 | 0.65 | 2.6 | |
| 3 | 鵜ノ木 | C3-293 | 尖頭状石器 | チャート | 2.4 | 2.2 | 0.65 | 2.9 | |
| 4 | 鵜ノ木 | A3-15中層 | 尖頭状石器 | チャート | 2.7 | 2.15 | 0.85 | 2.9 | |
| 5 | 鵜ノ木 | C5-68上層一括 | 尖頭状石器 | チャート | 2.55 | 1.95 | 0.65 | 2.9 | |
| 6 | 鵜ノ木 | B2-45 | 尖頭状石器 | 姫島産黒曜石 | 2.4 | 2.3 | 0.6 | 2.3 | |
| 7 | 鵜ノ木 | C2-23 | 尖頭状石器 | チャート | 2.3 | 2.3 | 0.5 | 2.2 | |
| 8 | 鵜ノ木 | C5-68中層一括 | 尖頭状石器 | チャート | 2.3 | 1.95 | 0.7 | 2.6 | |
| 9 | 鵜ノ木 | C5-56 | 尖頭状石器 | チャート | 2.95 | 2.85 | 0.7 | 5.7 | |
| 10 | 鵜ノ木 | C5-67中層 | 尖頭状石器 | ガラス質安山岩 | 2.7 | 2.55 | 0.8 | 4.2 | |
| 11 | 鵜ノ木 | C6-48 | 尖頭状石器 | チャート | 2.5 | 2.1 | 0.7 | 3.4 | |
| 12 | 鵜ノ木 | B6-68 | 尖頭状石器 | 角閃石安山岩 | 2.4 | 1.9 | 0.55 | 2.1 | |
| 13 | 鵜ノ木 | C6-67一括 | 尖頭状石器 | チャート | 2.8 | 2 | 0.7 | 3.9 | |
| 14 | 鵜ノ木 | C5-55 | 尖頭状石器 | チャート | 3.25 | 2.3 | 0.65 | 5.3 | |
| 15 | 鵜ノ木 | C3-66中層下面 | 尖頭状石器 | チャート | 2.55 | 2.25 | 0.85 | 4.8 | |
| 16 | 鵜ノ木 | C3-483 | 尖頭状石器 | チャート | 2.5 | 2.7 | 0.65 | 4.3 | |
| 17 | 鵜ノ木 | C3-46 | 尖頭状石器 | チャート | 3.1 | 2.6 | 0.8 | 7.4 | |
| 18 | 鵜ノ木 | C5-64中層 | 尖頭状石器 | チャート | 2.9 | 3.05 | 0.85 | 8.5 | |
| 19 | 鵜ノ木 | C5-47 | 尖頭状石器 | チャート | 3.5 | 2.5 | 0.9 | 7.6 | |
| 20 | 鵜ノ木 | A3-20中層 | 尖頭状石器 | チャート | 2.95 | 2.8 | 1 | 7.5 | |
| 21 | 鵜ノ木 | 3トレンチ一括 | 尖頭状石器 | チャート | 2.95 | 2.8 | 1.1 | 9.4 | |
| 22 | 鵜ノ木 | C5-68下層 | 尖頭状石器 | チャート | 3.45 | 3.15 | 1.25 | 13.3 | |
| 23 | 鵜ノ木 | C6-68上層一括 | 尖頭状石器 | チャート | 3.1 | 2.85 | 0.8 | 7.6 | |
| 24 | 鵜ノ木 | C5-69中層一括 | 尖頭状石器 | チャート | 3.45 | 2.45 | 0.95 | 7.8 | |
| 25 | 鵜ノ木 | B3-72 | スクレイパー | ガラス質安山岩 | 2.2 | 2.25 | 0.6 | 2.7 | |
| 26 | 鵜ノ木 | C3-32 | スクレイパー | チャート | 3.1 | 2.7 | 0.9 | 8.3 | |
| 27 | 鵜ノ木 | 3トレンチ一括 | 尖頭状石器 | チャート | 3.5 | 2.7 | 0.8 | 8.5 | |
| 28 | 鵜ノ木 | C2-15 | スクレイパー | 姫島産黒曜石 | 5.25 | 2.15 | 1.1 | 8.5 | |

表16　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代石器計測表３

| 遺物番号 | 出土地区 | 出土地点 | 器　種 | 石　材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚み(cm) | 重量(g) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 29 | 鵜ノ木 | C5-24 | スクレイパー | ホルンフェルス | 3.35 | 3.4 | 1.2 | 14.2 | |
| 30 | 鵜ノ木 | C3-4 | 尖頭状石器 | チャート | 3.35 | 2.6 | 0.9 | 6.9 | |
| 31 | 鵜ノ木 | 一括 | 尖頭状石器 | 姫島産黒曜石 | 2.15 | 1.75 | 0.6 | 1.8 | |
| 32 | 鵜ノ木 | C3-63上一括 | スクレイパー | チャート | 3.25 | 2.85 | 1 | 7.4 | |
| 33 | 鵜ノ木 | 一括 | スクレイパー | チャート | 2.3 | 2.05 | 0.5 | 2 | |
| 34 | 鵜ノ木 | C4-31 | スクレイパー | 姫島産黒曜石 | 2.3 | 2.15 | 0.5 | 1.9 | |
| 35 | 鵜ノ木 | トレンチ | スクレイパー | チャート | 3.6 | 2.1 | 0.6 | 3.4 | |
| 36 | 鵜ノ木 | C3-11 | スクレイパー | 黒曜石 | 2.6 | 2.05 | 0.45 | 1.7 | |
| 37 | 鵜ノ木 | C5-69中一括 | スクレイパー | ホルンフェルス | 2.6 | 2.05 | 1.1 | 6.7 | |
| 38 | 鵜ノ木 | C5-64中 | スクレイパー | チャート | 1.75 | 2.2 | 0.7 | 2.1 | |
| 39 | 鵜ノ木 | C2-56 | スクレイパー | 姫島産黒曜石 | 2.2 | 2.15 | 0.7 | 2.5 | |
| 40 | 鵜ノ木 | B3-120 | スクレイパー | サヌカイト | 2.3 | 2.4 | 0.85 | 3.9 | |
| 41 | 鵜ノ木 | ３号住居跡 | スクレイパー | チャート | 2.8 | 2.15 | 0.85 | 5 | |
| 42 | 鵜ノ木 | C3-5 | スクレイパー | チャート | 3.6 | 3.5 | 1.65 | 19.1 | |
| 43 | 鵜ノ木 | C3-6 | スクレイパー | チャート | 3.5 | 2.25 | 0.85 | 6.3 | |
| 44 | 鵜ノ木 | C5-70中一括 | スクレイパー | ホルンフェルス | 4.1 | 3.25 | 1.2 | 16.2 | |
| 45 | 鵜ノ木 | C5-65上一括 | スクレイパー | チャート | 3.75 | 3.15 | 1.15 | 13.5 | |
| 46 | 鵜ノ木 | C3-15 | スクレイパー | チャート | 3.25 | 3.55 | 1.35 | 12.5 | |
| 47 | 鵜ノ木 | C3-42 | スクレイパー | チャート | 3.75 | 3.05 | 1.15 | 11.3 | |
| 48 | 鵜ノ木 | C3-17 | スクレイパー | チャート | 2.6 | 3.2 | 0.75 | 6.9 | |
| 49 | 鵜ノ木 | C5-67中 | スクレイパー | チャート | 3.9 | 2.6 | 1.25 | 1.4 | |
| 50 | 鵜ノ木 | 1トレンチⅡ層 | スクレイパー | チャート | 3.9 | 3.25 | 1.15 | 14.4 | |
| 51 | 鵜ノ木 | C2-24 | スクレイパー | チャート | 3.95 | 2.35 | 0.9 | 8.6 | |
| 52 | 鵜ノ木 | C5-54 | 彫器 | チャート | 3.3 | 2.8 | 0.9 | 8.2 | |
| 53 | 鵜ノ木 | C3-25 | 彫器 | チャート | 2.75 | 2.15 | 0.7 | 4.5 | |
| 54 | 鵜ノ木 | C3-519 | スクレイパー | チャート | 4 | 3.35 | 1.55 | 20.8 | |
| 55 | 鵜ノ木 | B3-167 | スクレイパー | ホルンフェルス | 6 | 4.1 | 1.1 | 27.7 | |
| 77-1 | 鵜ノ木 | C2-6 | 石核 | チャート | 3.7 | 4.55 | 1.45 | 21.9 | |
| 2 | 鵜ノ木 | C3-21 | 石核 | チャート | 19 | 3.15 | 3.2 | 15.6 | |
| 3 | 鵜ノ木 | C3-332 | 石核 | チャート | 4.15 | 4.5 | 1.6 | 32.2 | |
| 4 | 鵜ノ木 | C6-22 | 石核 | チャート | 4.1 | 3.85 | 1.95 | 32.4 | |
| 78-1 | 鵜ノ木 | C3-15 | 削器 | サヌカイト | 6.9 | 9.7 | 1.65 | 114.8 | |
| 2 | 鵜ノ木 | A3-16中 | 磨製石斧 | 頁岩 | 9 | 4.5 | 1.1 | 68.2 | |
| 3 | 鵜ノ木 | C3-15 | 扁平打製石斧 | 結晶片岩 | 12.9 | 4.2 | 1.35 | 94.6 | |
| 4 | 鵜ノ木 | B3-176 | 扁平打製石斧 | 火山岩 | 14.1 | 6.35 | 2.45 | 272.8 | |
| 5 | 鵜ノ木 | C2-41 | 扁平打製石斧 | 火山岩 | 12.9 | 5.8 | 2.2 | 210.3 | |
| 6 | 鵜ノ木 | B2-79 | 扁平打製石斧 | 火山岩 | 9.2 | 7.8 | 1.95 | 168.7 | |
| 7 | 鵜ノ木 | C5-9 | 扁平打製石斧 | 火山岩 | 12.85 | 8.8 | 2.1 | 299.5 | |
| 8 | 鵜ノ木 | B3-66 | 加工扁平礫 | 結晶片岩 | 7.45 | 5.5 | 0.8 | 48.1 | |
| 9 | 鵜ノ木 | B3-1一括 | 敲石 | 結晶片岩 | 10.9 | 2.6 | 1.6 | 66.6 | |
| 10 | 鵜ノ木 | C5-44 | 凹石 | 安山岩 | 7.6 | 6.7 | 4.5 | 303 | |
| 11 | 鵜ノ木 | 包含、中層 | 石錘 | 安山岩 | 6.4 | 5 | 2.6 | 116.5 | |
| 12 | 鵜ノ木 | A3-11上A | 扁平打製石斧 | 火山岩 | 13 | 5.2 | 2.7 | 207.3 | |

表17　利光遺跡鵜ノ木地区出土縄文時代石器計測表４

| 遺物番号 | 出土地区 | 出土地点 | 器　種 | 石　材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚み(cm) | 重量(g) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13 | 鵜ノ木 | C2-22 | 扁平打製石斧 | 火山岩 | 9.7 | 7.2 | 1.95 | 174 | |
| 14 | 鵜ノ木 | 中層一括 | 石錘 | 結晶片岩 | 9.75 | 6.95 | 1.6 | 151.8 | |
| 15 | 鵜ノ木 | 中層一括 | 石錘 | 結晶片岩 | 10.65 | 6.1 | 1.1 | 112.5 | |
| 16 | 鵜ノ木 | 3トレンチ-56 | 扁平打製石斧 | 頁岩 | 9.9 | 6 | 1.4 | 106.3 | |
| 17 | 鵜ノ木 | 3トレンチ-322 | 磨製石斧 | 蛇紋岩 | 11.7 | 4.8 | 3.1 | 257.7 | |
| 18 | 鵜ノ木 | 3トレンチ-333 | 敲石 | 安山岩 | 11.4 | 8.65 | 4.7 | 613.8 | |
| 19 | 鵜ノ木 | 13号住居跡-59 | 敲石 | 粘板岩 | 13.5 | 13.8 | 3.4 | 203.5 | |
| 20 | 鵜ノ木 | 3トレンチ-1056 | 掻器 | 玄武岩 | 7.9 | 10.3 | 4.75 | 334.7 | |
| 21 | 鵜ノ木 | 3トレンチ-1176 | 礫器 | 安山岩 | 9.85 | 12.25 | 3.95 | 631.5 | |
| 22 | 鵜ノ木 | 3トレンチ-273 | 礫器 | 砂岩 | 21.75 | 8.55 | 6.55 | 2100 | |
| 80-1 | 久　保 | B13-96 | 磨製石斧 | 蛇紋岩 | 12 | 5.2 | 1.6 | 128.6 | |
| 2 | 久　保 | B12-33 | 磨製石斧 | 結晶片岩 | 9.7 | 5.75 | 1.75 | 139.4 | |
| 3 | 久　保 | 一括 | 打製石斧 | 火山岩 | 13.4 | 5.5 | 1.85 | 166.9 | |
| 4 | 久　保 | B12-43 | 打製石斧 | 火山岩 | 12.5 | 6 | 2.3 | 186.2 | |
| 5 | 久　保 | B15-63 | 打製石斧 | 火山岩 | 12.1 | 6.3 | 2.3 | 173.3 | |
| 6 | 久　保 | C-3 | 打製石斧 | 火山岩 | 12 | 6.35 | 1.55 | 124.1 | |
| 7 | 久　保 | B14-53 | 打製石斧 | 火山岩 | 11 | 6 | 1.65 | 143.7 | |
| 8 | 久　保 | B13-包含層 | 打製石斧 | 火山岩 | 12.2 | 7.5 | 1.6 | 197 | |
| 9 | 久　保 | C12-62 | 打製石斧 | 火山岩 | 9.2 | 5.3 | 1.3 | 84.8 | |
| 10 | 久　保 | 中世下層 | 打製石斧 | 火山岩 | 12.3 | 6.15 | 2.7 | 182.6 | |
| 11 | 久　保 | B13-41 | 打製石斧 | 結晶片岩 | 11.4 | 5.7 | 0.7 | 74 | |
| 12 | 久　保 | A14包含層下 | 打製石斧 | 結晶片岩 | 11.7 | 5.3 | 0.9 | 92.7 | |
| 13 | 久　保 | B2-43 | 打製石斧 | 結晶片岩 | 11.1 | 6.15 | 0.95 | 94.6 | |
| 14 | 久　保 | B13-34 | 打製石斧 | 結晶片岩 | 11.8 | 5 | 0.95 | 66.9 | |
| 15 | 久　保 | 土坑2-19 | 打製石斧 | 結晶片岩 | 12.4 | 5.9 | 1.5 | 157.5 | |
| 16 | 久　保 | B11-31 | 打製石斧 | 結晶片岩 | 13.05 | 6 | 1.25 | 134.5 | |
| 17 | 久　保 | C15-49 | 石ノミ未製品 | 緑泥片岩 | 12.05 | 3.95 | 1.85 | 181.2 | |
| 18 | 久　保 | B16-71 | 打製石斧 | 結晶片岩 | 10.55 | 5.4 | 0.6 | 57 | |
| 19 | 久　保 | B14-51 | 打製石斧 | 結晶片岩 | 10.1 | 5.15 | 0.95 | 64.6 | |
| 20 | 久　保 | C14-中世下部 | 打製石斧 | 火山岩 | 15.8 | 7.35 | 2.65 | 316.5 | |
| 21 | タンクワ | 24 | 打製石斧 | 火山岩 | 16.75 | 7.65 | 2.4 | 439 | |
| 22 | 久　保 | B-12 | 不明石器 | 結晶片岩 | 21.45 | 5.8 | 2.55 | 471.9 | |
| 23 | 久　保 | B11-12 | 円形石器 | 結晶片岩 | 6.75 | 7.65 | 1.15 | 87.5 | |
| 24 | 久　保 | B13包含層 | 打製石斧未製品 | 砂岩 | 11.6 | 8.3 | 2.5 | 315 | |
| 25 | 久　保 | C16-34 | 不明石器 | 結晶片岩 | 11.3 | 2.9 | 0.9 | 51.1 | |
| 26 | 久　保 | B13-59 | 不明石器 | 結晶片岩 | 10.7 | 3.8 | 1.35 | 84 | |
| 27 | 久　保 | １号土坑一括 | 砥石 | 頁岩 | 5.15 | 2.7 | 1.65 | 43.8 | |
| 28 | 久　保 | ３号土坑一括 | 砥石 | 凝灰岩 | 8.2 | 3.5 | 3.45 | 105.3 | |
| 29 | 久　保 | 中世下層 | 不明石器 | 結晶片岩 | 16.2 | 7.45 | 2.55 | 527 | |
| 30 | 久　保 | C13-3 | 敲石 | 結晶片岩 | 14.2 | 4.9 | 2.8 | 250.9 | |
| 31 | 久　保 | A14-包含層下 | 敲石 | 結晶片岩 | 12.45 | 5.25 | 2.25 | 223.1 | |
| 32 | 久　保 | C14一括中世下 | 不明石器 | 結晶片岩 | 15.6 | 6.8 | 1.9 | 357.1 | |
| 33 | 久　保 | C12-12 | 石錘 | 蛇紋岩 | 5.2 | 4.5 | 1.8 | 58.6 | |

**凹石（第78図10）**

両面に凹みをもつもの。周縁には敲打痕がみられる。

**敲石（第78図９，第79図18・19）**

９は結晶片岩の長円礫の両端部に敲打痕をもつもの。18は安山岩の主として一端部、19は粘板岩の側面を敲打したものである。

**加工扁平礫（第79図８）**

結晶片岩の扁平円礫の一側辺に加工したもの。

**掻器（第79図20）**

厚手大型の玄武岩剥片の縁辺部を片面加工した掻器である。かなり風化をうけている。縄文早期の所産とみられる。

**礫器（第79図21・22）**

21は、安山岩の扁平礫の二側辺を加工した両刃礫器。長辺を両面、短辺を片面加工している。また、短辺の一部を突起状に残している。縄文早期のものとみられる。22は、大型の砂岩の角礫を石核状に剥離したもの。用途不明。

**久保地区出土の石器（第80図・81図）**

**磨製石斧（第80図１・２）**

１は蛇紋岩製の薄手の手斧。刃部が丸ノミ状に湾曲している。頭半部の研磨はほとんどなされていない。縄文早・前期の所産とみられる。２は、刃部の両面を研磨しているが、磨耗によるのか刃部の稜は鈍い。用途は打製石斧と共通するものとみられる。材質は結晶片岩である。

**打製石斧（第80図３～16・18・19，第81図20・21）**

３～10・20・21は、火山岩の大型礫から剥離した横長剥片を素材とするもの。片面に大きく湾曲した自然面をもつのが特徴である。４・５のように、刃部が直線状のものと弧状もしくは尖頭状をなすものに分けられる。21は撥形の大型品である。11～16と18・19は結晶片岩の板状素材を周縁加工したものである。11は一端を尖らすとともに、基部を茎状に加工している。14は全体を短冊状に仕上げた入念に加工されたもの。18は、刃部の片面を少し研磨加工している。

**石ノミ未製品（第80図17）**

17は、蛇紋岩に近い石質の緑泥片岩を細長く加工し、身幅の狭い方の端部の両面に研磨を施したもので、局部研磨の石ノミの未製品とみられる。

**円形石器（第81図23）**

23は、結晶片岩の板状素材を円形に加工したもの。加工は両面のほぼ全周にわたっている。

**不明石器（第81図22・24～26・29・32）**

22・25・26は、結晶片岩の加工途中のものである。22は両面を研磨、両側面を敲打している。25は破片となっているが、両面と一側片に研磨が施され、また一部穿孔のあとがみられる。26は、一部に敲打加工がみられる。いずれも石棒・石刀に関するものかとみられる。24は砂岩製の荒い加工のもので、打製石斧の未製品と考えられる。同じく29・32は結晶片岩製の未製品とみられる。

**砥石（第81図27・28）**

27は、直方体をなす頁岩製で、全面を磨面としている。28は４面を磨面とする凝灰岩製のものである。

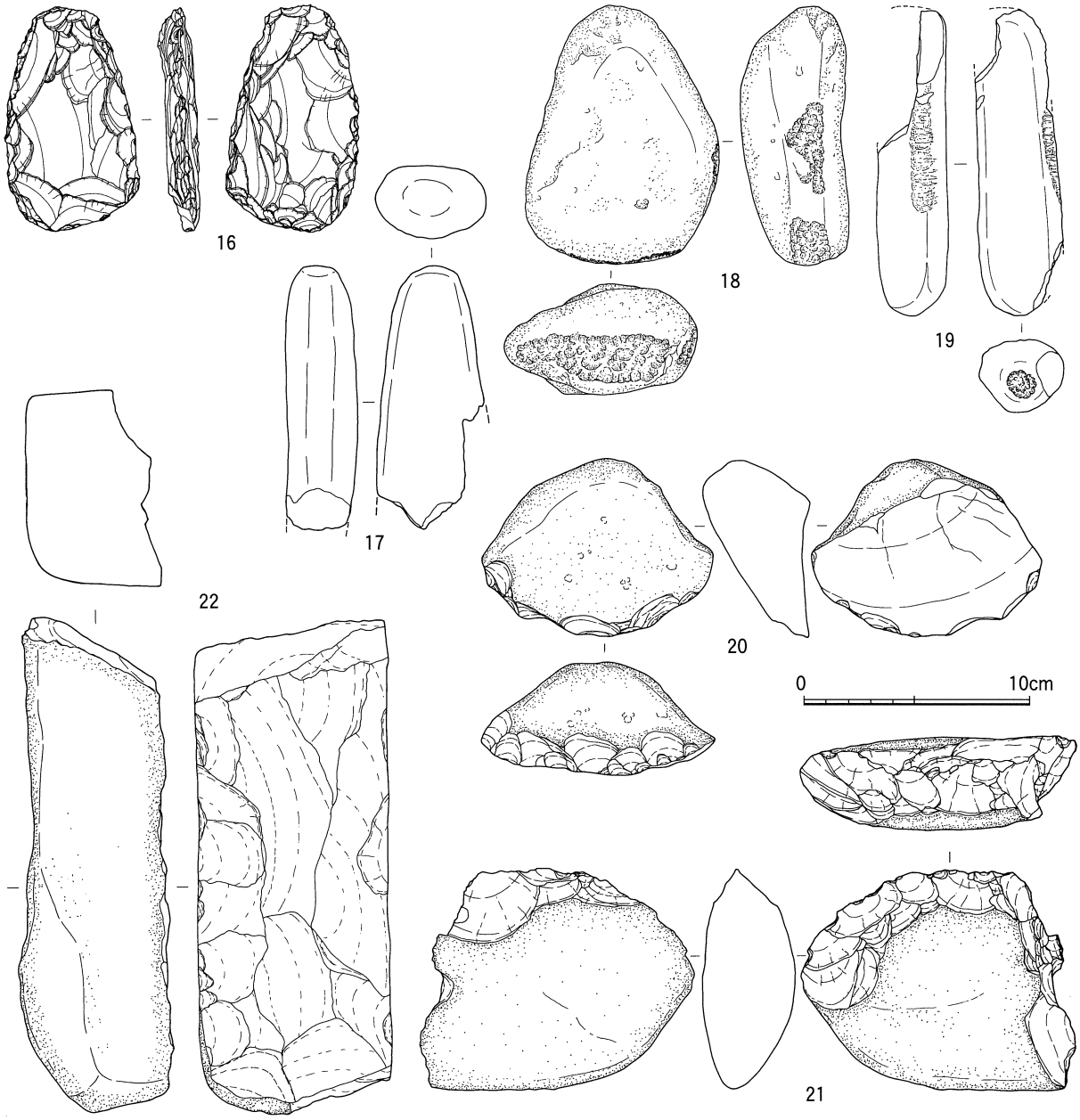
**敲石（第81図30・31）**

30・31は、結晶片岩製の棒状の敲石。30は主に側面を、31は端面を利用している。

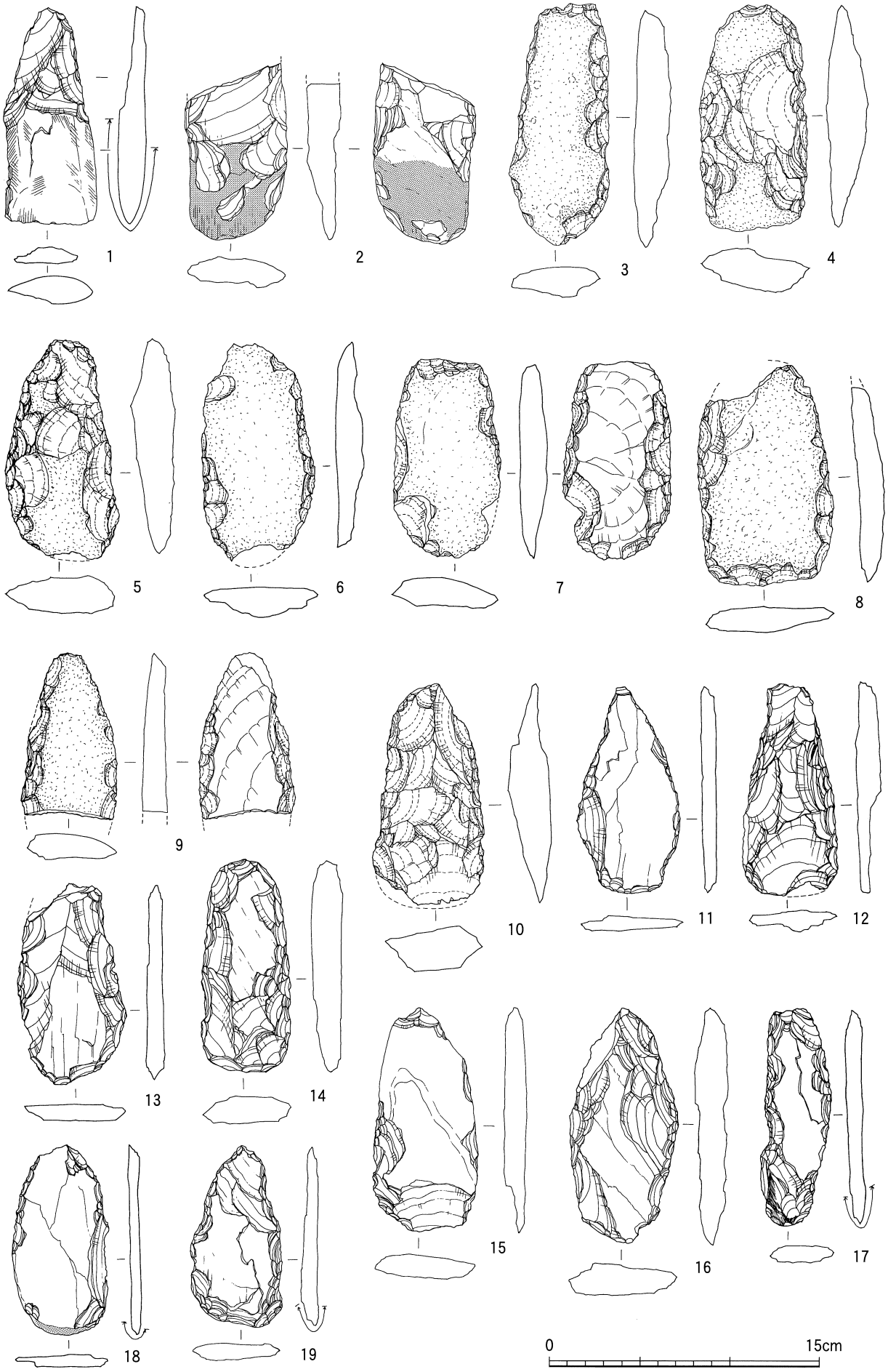
第78図　利光遺跡鵜ノ木地区出土磨製・打製石斧実測図（1／3）

**石錘（第81図33）**

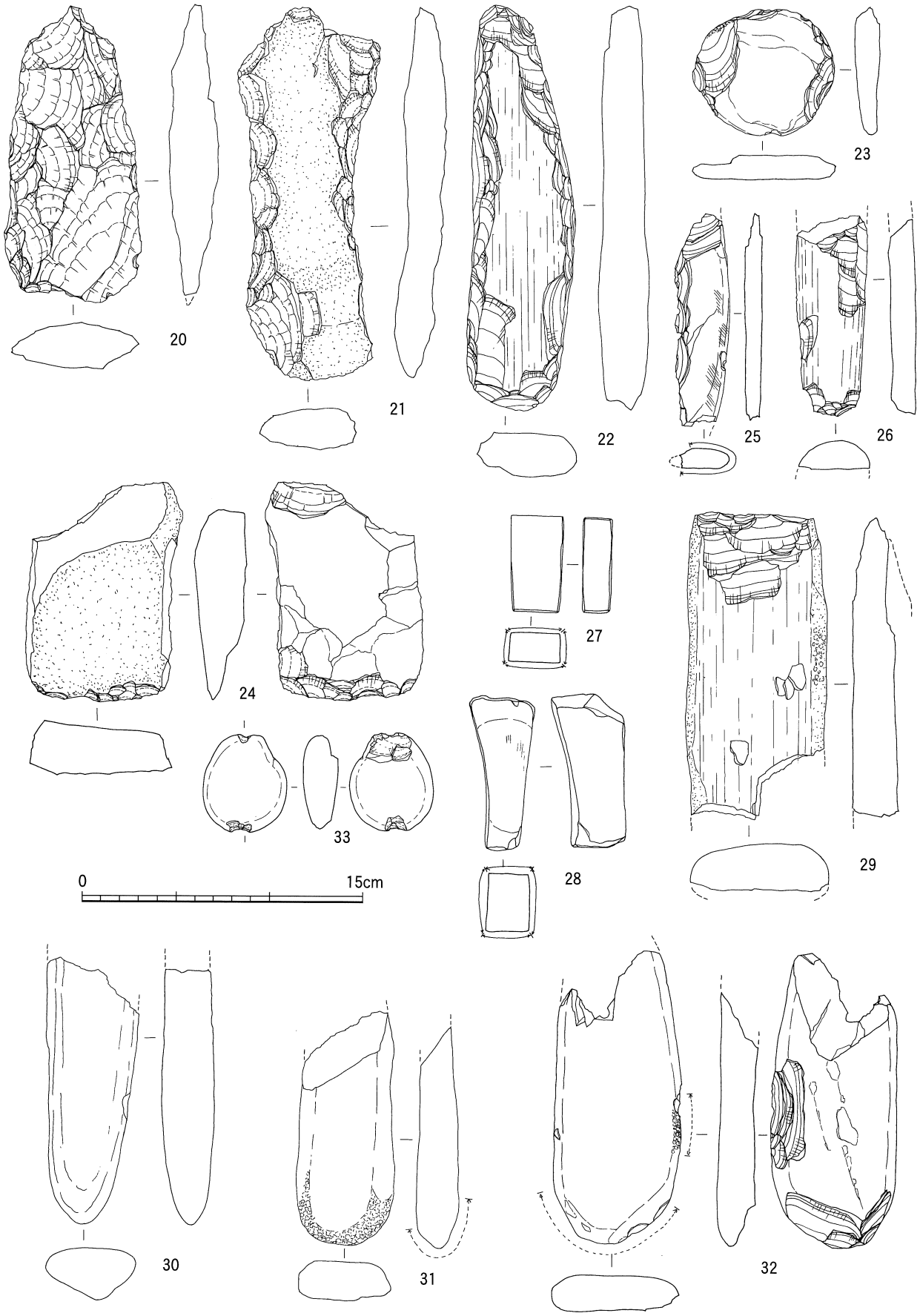
33は蛇紋岩製の扁平円礫の長軸端部を打ち欠いた石錘である。淡緑色の滑らかな美麗なものである。




第79図　利光遺跡鵜ノ木地区出土打製石斧・礫器実測図（1／3）




第80図　利光遺跡鵜ノ木地区出土礫器類実測図１（1／3）




第81図　利光遺跡鵜ノ木地区出土礫器類実測図２（1／3）

## まとめ

利光遺跡では、鵜ノ木地区を中心に縄文時代各期の石器が多数出土している。時代については、層位が明確に分けられないため、とくに石鏃については時期判別が難しいが、その形態から早期のものが大半を占めるものと思われる。石鏃の石材については、圧倒的にチャートが多く使用されており、次いで姫島産黒曜石、サヌカイト、姫島産ガラス質安山岩が用いられている。これは、尖頭状石器、スクレイパー類についても同じである。姫島産の石材については、黒曜石がガラス質安山岩より多くなっていることにその時代性が現れているとみられる。

姫島からほぼ同じ直線距離の臼杵市東台遺跡は、無文土器を主体とする早期の遺跡であるが、ここでは、姫島産黒曜石よりガラス質安山岩の方が３倍強多く使用されている。大分県内では、縄文前期になれば、ガラス質安山岩はほとんど使用されなくなり、姫島産黒曜石が完全に優位になってしまう。本遺跡は、その過渡的現象として捉えることができるのではないだろうか。

他の石材の産地について言及すれば、チャートは、大野川の中流～下流の河床にホルンフェルスの礫に混じってみられるものである。サヌカイトと黒色黒曜石については不明であるが、前者は讃岐地方、後者は西北九州産と推定される。

縄文早期に特徴的な尖頭状石器も多数出土している。その多くは、形態が略三角形もしくは杏仁状を呈すもので、その用途は明確でない。石鏃の未製品ないし失敗品も含まれるであろうが、スクレイパーとしての機能をもつ石器としてよいものが大半とみられる。そのスクレイパー類も多様な形である。

特記すべきものとして、彫器様の石器が２点確認されている。いずれもチャート製であり、早期の所産としてよい。他の遺跡の例では、前出の東台遺跡で出土している。

大型の石器類に関しては、各１点であるが早期の石器として両刃の礫器と礫器状の掻器が特徴ある石器として注目される。前者は緻密な硬質の火山岩、後者は風化がすすんでいるが玄武岩とみられる石材である。礫器に関していえば、早期遺跡は礫器を多数出土する遺跡、全く出土しない遺跡、１～数点出土する遺跡に分けられるであろう。県内では、日出町エゴノクチ遺跡、大分市古城山遺跡、佐伯市森ノ木遺跡では多数の両刃、片刃礫器が出土している。また日出町早水台遺跡、杵築市稲荷山遺跡では数点のみの出土である。鵜ノ木地区は、後者のタイプとされるものである。

久保地区で多く出土している縄文後期のものとみられる扁平打製石器は、石材によって大きく２つに分けられる。一つは火山岩の一種（淡緑色）の横長剥片を素材とするもので、これは、大野川上流域に産するものである。他は、佐賀関半島地方に産する結晶片岩の板状材を素材とするものである。この石材の区別は時期差によるものか、同一時期のものかは判別できない。

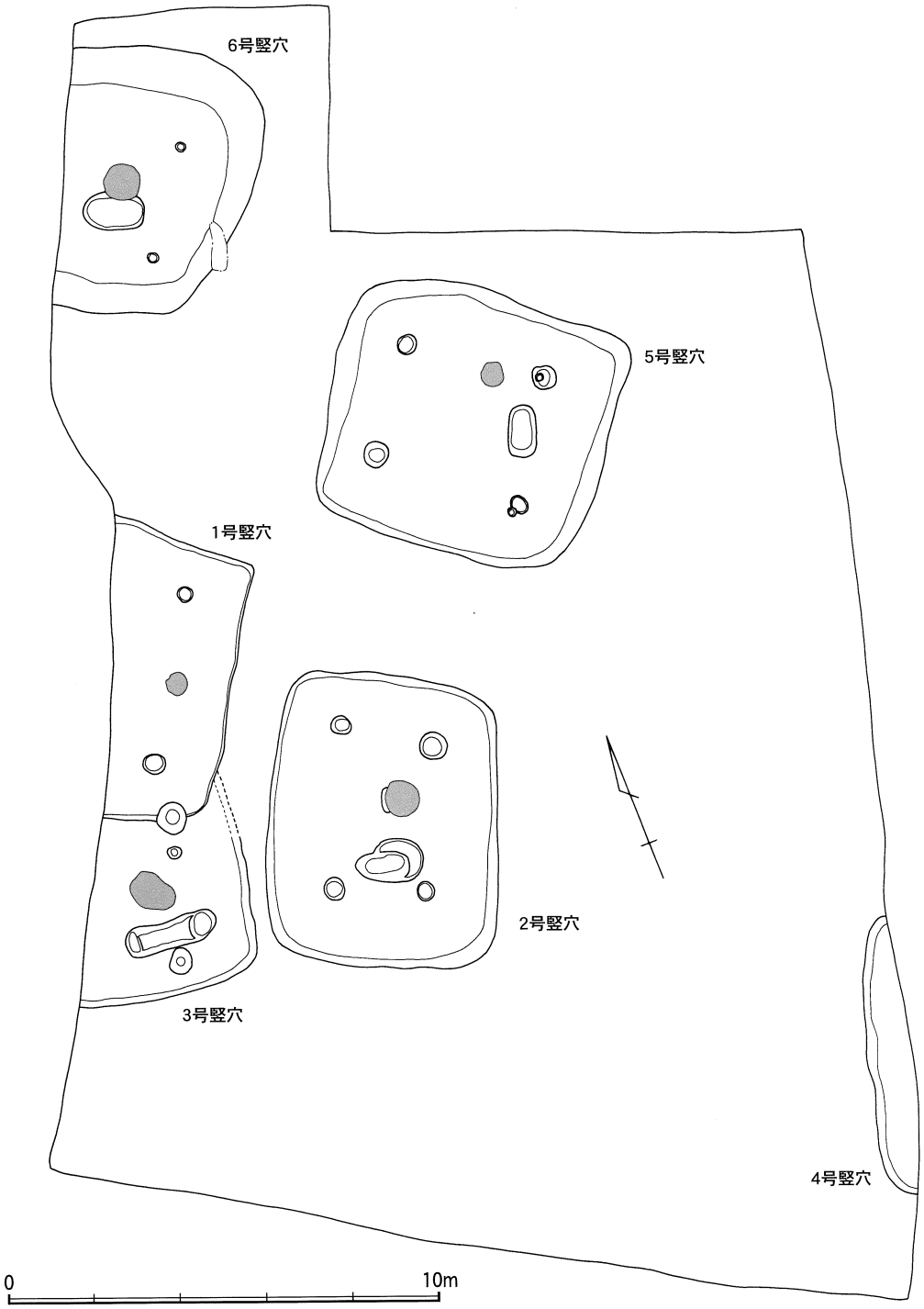
参考文献

清水宗昭　1982　「姫島産の黒曜石とガラス質安山岩の分布について」
『賀川光夫先生還暦記念論集』賀川光夫先生還暦記念論集刊行会
臼杵市教育委員会　1974　『東台遺跡』
賀川光夫　1961　「早水台の石器」『早水台』大分県文化財調査報告第３集　大分県教育委員会
大分県教育委員会　2000　『森ノ木遺跡』大分県文化財調査報告第109集　大分県教育委員会
大分県教育委員会　1995　『古城山』
橘昌信編　1970　『稲荷山遺跡緊急発掘調査報告』大分県文化財調査報告第20・21集

## B. 弥生・古墳時代

中世遺構の調査終了後、縄文時代遺物包含層調査のため掘り下げを行った。その際、弥生・古墳時代遺物とともに竪穴を確認した。竪穴検出面上を覆う砂質層は、南側が薄く、北側が厚い。北側の最も厚い部分で170㎝を測る。中世遺構検出面では調査区の北側から南側に向かい傾斜するのに対し、弥生・古墳時代遺構検出面では南側から北側に傾斜する。

竪穴は６基が確認されたが、そのうち４基は調査区外に及ぶ。竪穴の検出作業は困難をきわめ、各竪穴の平面プラン確認に時間をとられた。また、縄文時代包含層調査区掘り下げ時に、上層から弥生時代前期の遺物が出土したが遺構は確認できなかった。




第82図　利光遺跡鵜ノ木地区弥生・古墳時代遺構配置図

a）竪穴住居跡

1　1号竪穴（第83図）

1号竪穴は調査区の西側に位置し、3号竪穴を切る。本遺跡では竪穴の検出が困難をきわめたが、本竪穴の検出は比較的容易であった。

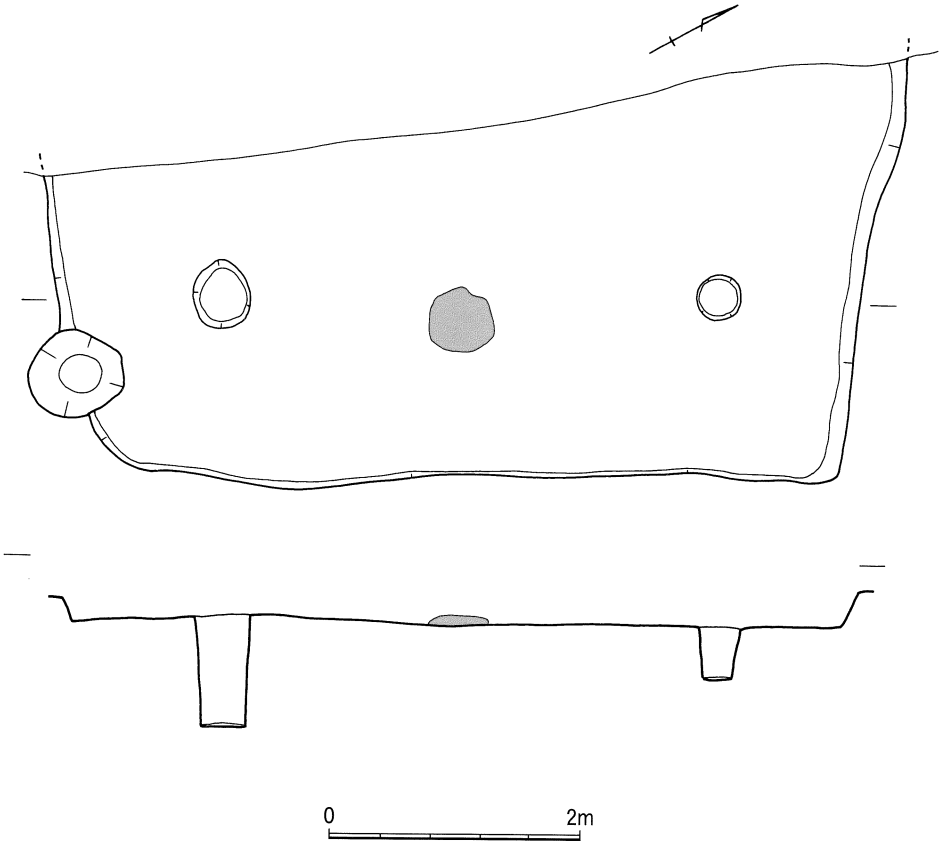
竪穴は西半分が調査区外に及ぶため全形は不明だが、平面プランは方形を呈するものと考えられる。残存する東側の一辺は約6mである。深さは、検出面より0.2～0.3mを測る。また、主柱穴の配置は4本と推定され、東側柱穴列の心々距離は約4mである。炉跡については、これに相当すると思われる焼土が東側柱穴の間にみられる。焼土は径約0.5mの円形を呈し、床面直上に形成される。しかし、炉跡は多くの場合、竪穴中央付近にみられることから、この焼土が竪穴の炉跡とすぐに認定できるかどうかは定かではない。このほかの竪穴内の遺構については、全く検出されていない。

出土土器（第84図）には、高坏、器台などがある。

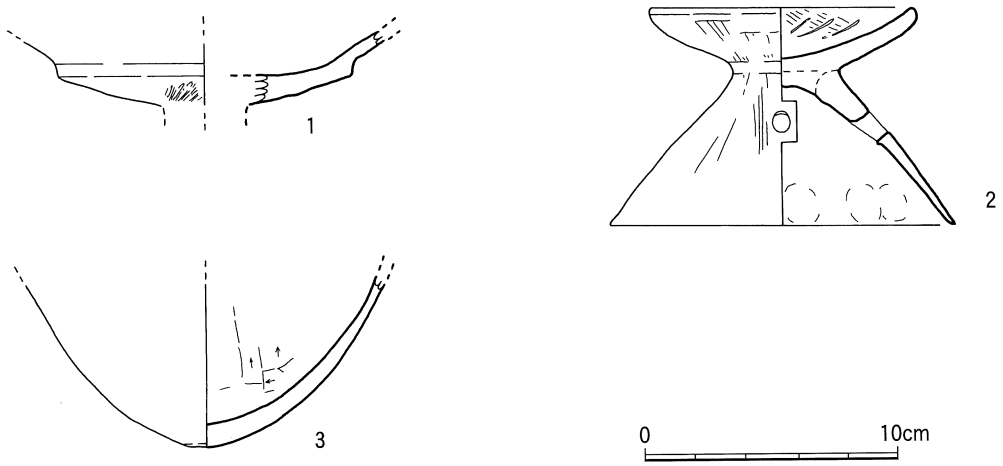
1は高坏の坏下部である。坏部は脚部から直角に折れるようにはじまり、ややあって段をもち、口縁部にむかい大きく外反しながら立ち上がるものである。内底面はほぼ水平を呈する。外面の調整は、上半部がハケメ後ナデ、下半部が縦方向のヘラミガキである。内面は、ナデにより仕上げられている。

2は器台で、口径10.4㎝、高さ8.5㎝、底径13.8㎝を測る。脚部は高く、大きくハの字状に開くもので、比較的高い位置に円形の透かし穴が施される。外面の調整は、縦方向のハケメ後ナデで仕上げられる。また、脚部内面はナデ及び指オサエである。

3は丸底の底部である。調整をみると、外面はナデにより仕上げられている。また、内面はナデで、一部にヘラケズリが施される。




第83図　利光遺跡鵜ノ木地区1号竪穴実測図（1／60）




第84図　利光遺跡鵜ノ木地区１号竪穴出土遺物実測図（1／3）

## 2　２号竪穴（第85図）

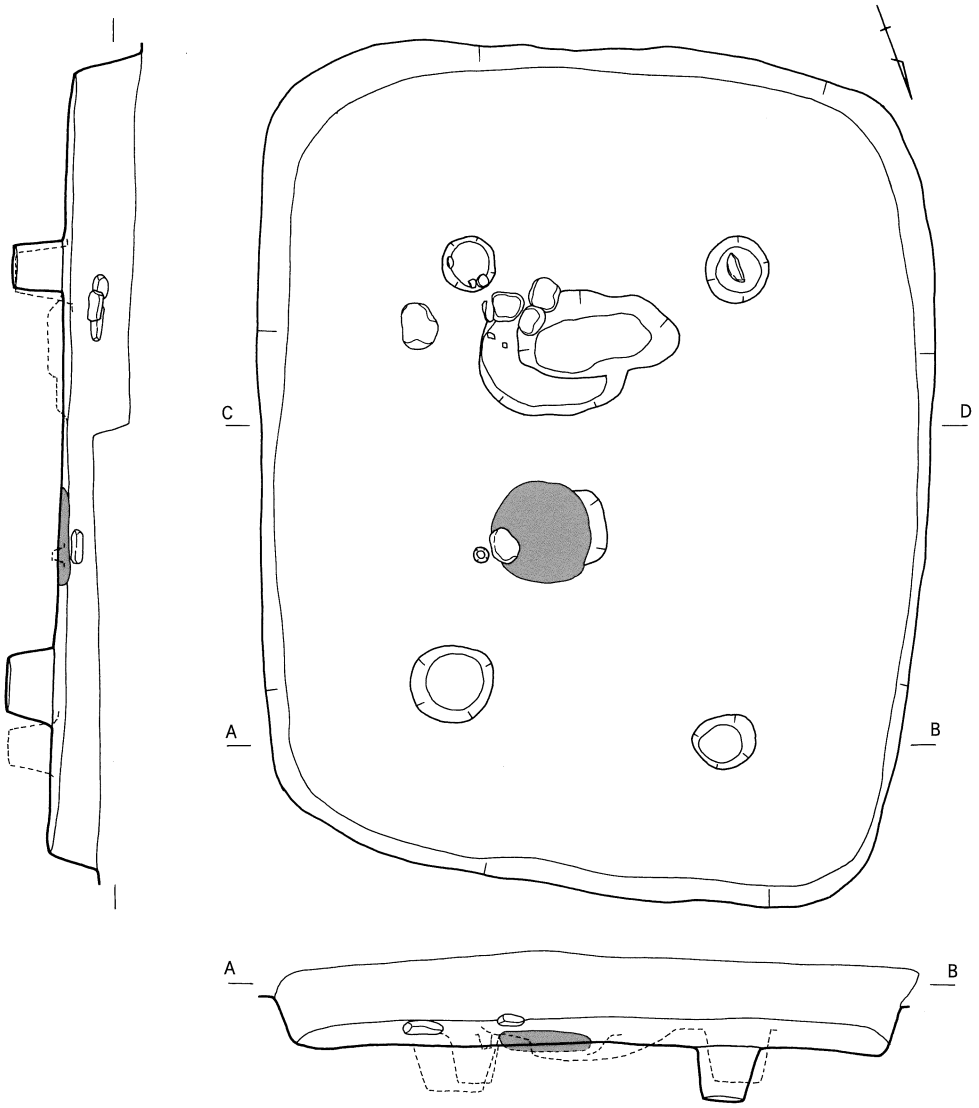
２号竪穴は、１号竪穴と３号竪穴の東側に位置する。本竪穴は、縄文時代包含層調査のため設けたサブトレンチ断面で最初に確認された。しかし、覆土と地山の違いが明瞭でなく、平面プランの確認は困難をきわめた。よって、北側半分については掘り下げを行い検出につとめた。そのため、竪穴の南側と北側では検出したレベルが異なることとなった。

竪穴は、南北に長い長方形を呈する。規模は長辺6.5m、短辺5.2m、深さ0.4mである。主柱穴の配置は４本柱で、北側柱列間の心々距離が2.1m、西側柱列間の心々距離が3.7m、南側柱列間の心々距離が2.1m、東側柱列間の心々距離が3.4mを測る。炉跡と推定される焼土は、竪穴のほぼ中央にある。焼土は円形を呈し、径約0.8mを測る。竪穴内の土壙は焼土の南側にみられる。土壙は楕円形基調のもので、２基が重複しているものと考えられる。規模は長径1.3m、短径0.7mである。

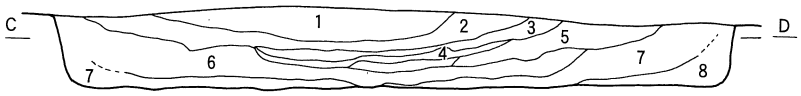
出土土器（第86、87図）には、壷、甕、高坏、鉢がある。

１は壷である。頸部下から胴部上半の資料で、肩部はあまり張らない。頸部にはベルト状の突帯が付され、突帯にはヘラ状工具による刻みが施される。調整は、外面がナデにより平滑に仕上げられ、内面には横方向のハケメがみられる。

２～８は甕である。２は口径16.6㎝を測るもので、口径と胴部最大径がほぼ等しい。口縁部は、頸部よりわずかに直立気味に立ち、その後大きく外反する。胴部は中程に最大径をもつもので、長胴を呈する。調整は、口縁部内外面がヨコナデである。胴部外面上半は斜方向ないしは横方向のハケメ、胴部下半はハケメ後ナデである。内面については、胴部上半に粗いハケメと細かいハケメの後ナデを施し、胴部下半はナデにより平滑に仕上げる。３は口径15.6㎝を測る。比較的球形にちかい胴部から口縁部が外反気味に折れる。外面の調整は、口縁部が縦方向のハケメ後ヨコナデ、胴部上半が縦方向のハケメ、胴部下半がヘラ状工具によるナデである。内面は、口縁部にヘラ状工具によるナデ、胴部上半に斜方向ないしは横方向のハケメ、胴部下半にナデが施される。４は口径16.6㎝を測るもので、球状の胴部から口縁部が外反して立ち上がる。外面の調整は、口縁部が縦方向のハケメ後ヨコナデ、胴部が縦方向のハケメである。また、内面は口縁部がナデ、胴部がナデと指オサエである。５は口縁端部と底部を欠く資料である。胴部は球状を呈し、口縁部が外方に大きく折



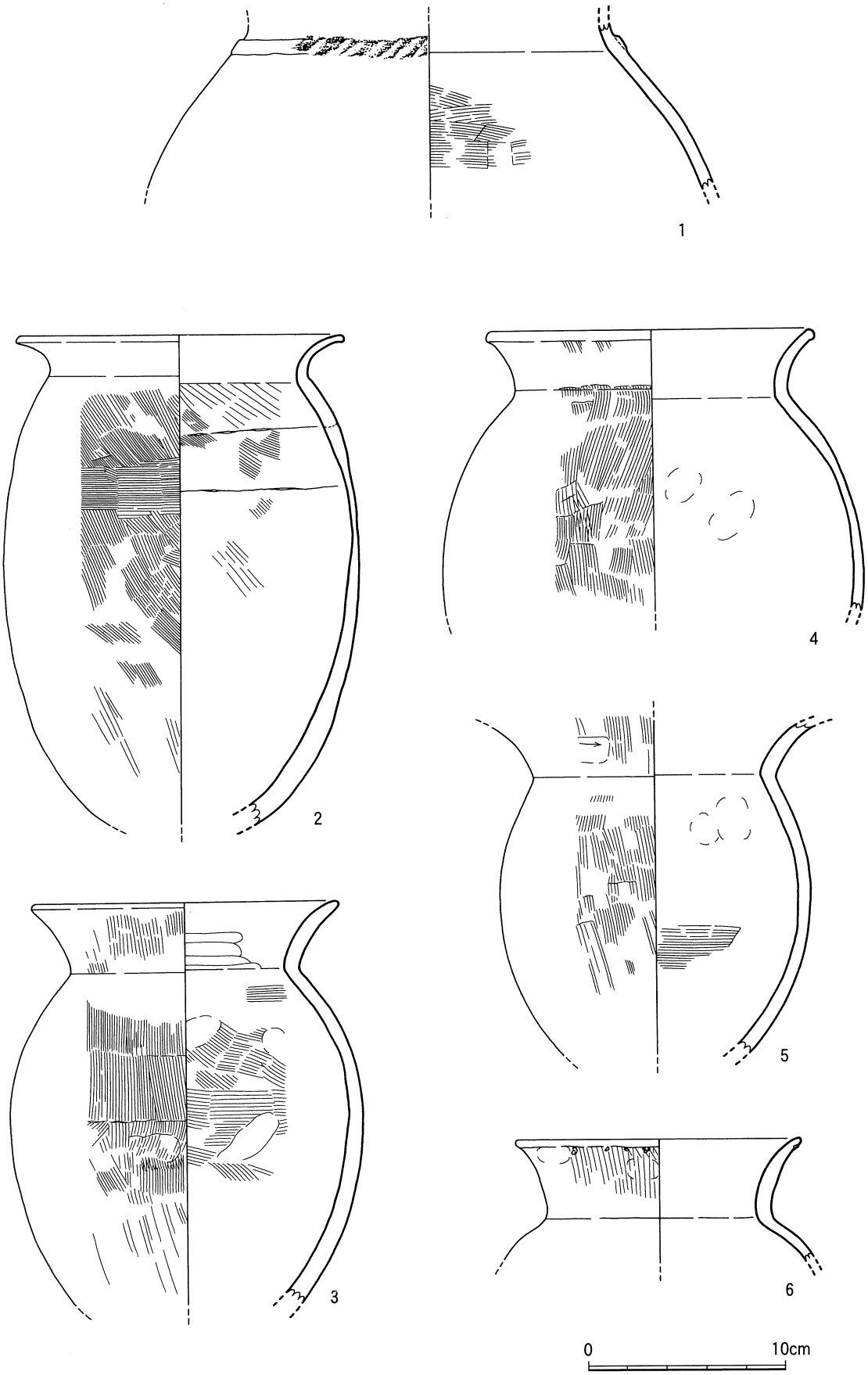

ＣＤ断面土層図



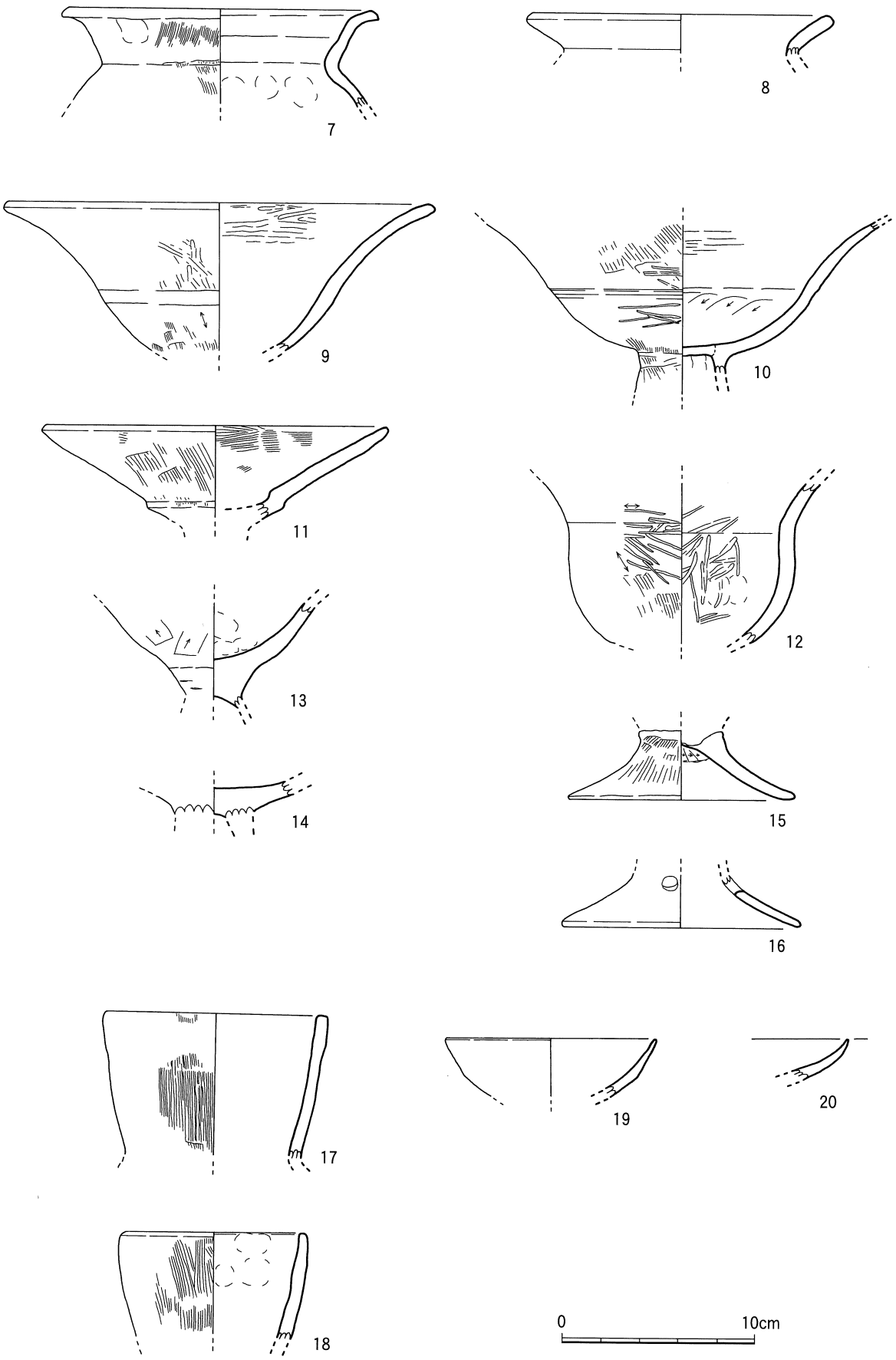

１層　黒茶色土層　比較的固くしまった土質である
２層　赤褐色土層　比較的固くしまった土質で、炭をわずかに含む
３層　赤褐色土層　２層と基本的に同じだが、炭の量などが異なる
４層　黒 色 土 層　固くしまった粘土質の土及び、炭、土器片などを含む
５層　黒 色 土 層　４層と基本的に同じだが、炭の量などが異なる
６層　赤褐色土層　固くしまった粘質の土で、土器片や炭を多く含む
７層　白灰色土層　固くしまった粘質の土で、床面で多くの土器片を含む
８層　白灰色土層　基本的に７層と同じ

0　2m

第85図　利光遺跡鵜ノ木地区２号竪穴実測図（1／60）




第86図　利光遺跡鵜ノ木地区２号竪穴出土遺物実測図１（1／3）




第87図　利光遺跡鵜ノ木地区２号竪穴出土遺物実測図２（1／3）

れる。外面口縁部は縦方向のハケメ後ヨコナデ、胴部は縦方向のハケメ後平滑なナデで仕上げる。内面は、口縁部がナデ、胴部が横方向のハケメとナデである。６の口縁部は頸部からあまり外方に折れない。口径は14.6㎝を測る。外面の調整は、口縁部が縦方向のハケメ、胴部がナデである。また、内面はナデにより仕上げられている。７は口径16.6㎝で、口縁部は頸部からくの字状に開き、さらに端部が外方に折れる。調整は、外面が口縁部及び胴部とも縦方向のハケメ、内面がナデとオサエである。８は口径15.8㎝を測る。

９～16は高坏である。９は坏部の資料で、口径22.4㎝を測る。坏下部は半球形状をなし、上半分は口縁部に向かい大きく外反する。口縁端部は角張り気味である。調整は、外面上半が縦方向のヘラミガキとナデ、下半が縦方向のハケメ後ヘラミガキである。内面は、口縁部ちかくが横方向のヘラミガキ、そのほかの部分がナデで仕上げられる。10は９と同様な器形を呈するもので、口縁端部と脚部を欠く。坏部は下半が半球形をなし、上半が口縁部にむかい大きく開く。脚は筒状を呈するものが坏部に付き、坏部内底面には円盤充填の痕跡がみられる。外面の調整は、坏部上半が縦方向のハケメ後ヘラミガキ、坏部下半がヘラミガキ、脚部は縦方向のハケメである。内面は、坏部がハケメ後ナデ、そして脚部にはシボリがみられる。11は口径18㎝を測る坏部の資料である。下部に段を有し、口縁部に向かい直線的に開く。調整は、外面がハケメ、内面がハケメとナデである。12も坏部の資料で、半球形の坏下半がいったん中程でしまり、口縁にむかい大きく外反しながら開く。調整は、外面がヘラミガキとハケメ、内面がヘラミガキである。13、14は坏下部の資料、また15、16は脚部の資料である。15については、脚付き鉢の脚部の可能性をもつ。

17は長頸壷の口縁部か。口径は11.6㎝で、外面には縦方向のハケメがみられる。18～20は鉢である。18は深めのもので、口径9.6㎝を測る。外面は縦方向のハケメで、内面はオサエとナデである。19、20は浅いものである。19は口径10.8を測る。調整は、内外面ともていねいなナデである。

### ３　３号竪穴（第88図）

３号竪穴は２号竪穴の西側に位置し、１号竪穴により切られる。

竪穴は平面プラン方形を呈するものであるが、１号竪穴により切られることと、西側が調査区外に及ぶことから全形は不明である。一辺の長さは約5.4m程と推定される。深さは、検出面から約0.4mを測る。

主柱穴の配置は４本柱と思われるが、東側の２本のみを確認した。柱穴間の心々距離は、約2.5mを測る。南側柱穴列をみてみると、確認された東側の柱穴から3.0mを測っても柱穴は確認されず、このことから考えると本竪穴は東西に長い長方形を呈する可能性が高い。柱穴の深さは、床面から測り0.6mである。

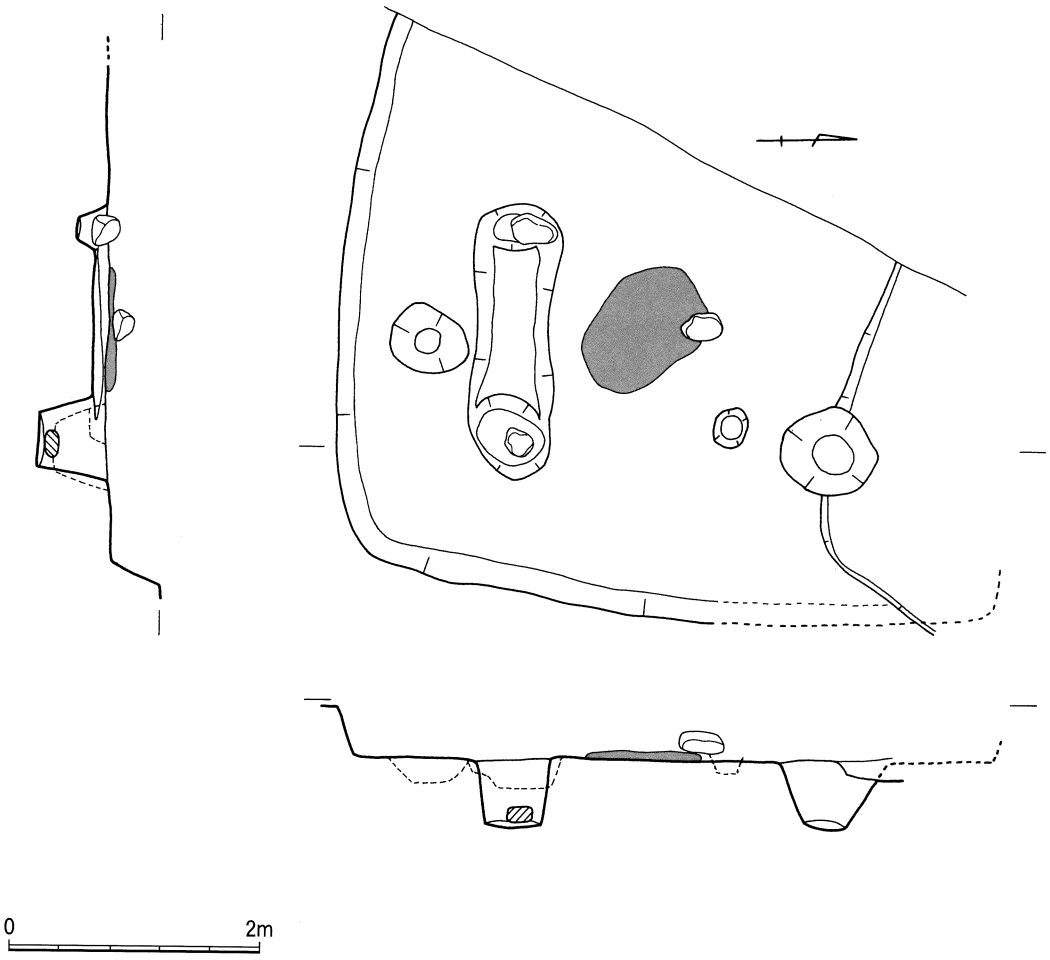
炉跡と推定される焼土は、柱穴列西側にみられる。焼土は床面上にあり、楕円形を呈する。規模は長径1.1m、短径0.8mである。

土壙は焼土の南側にみられる。主柱穴に接するように位置し、長径1.8m、短径0.5m、深さ0.2mの規模をもつ。

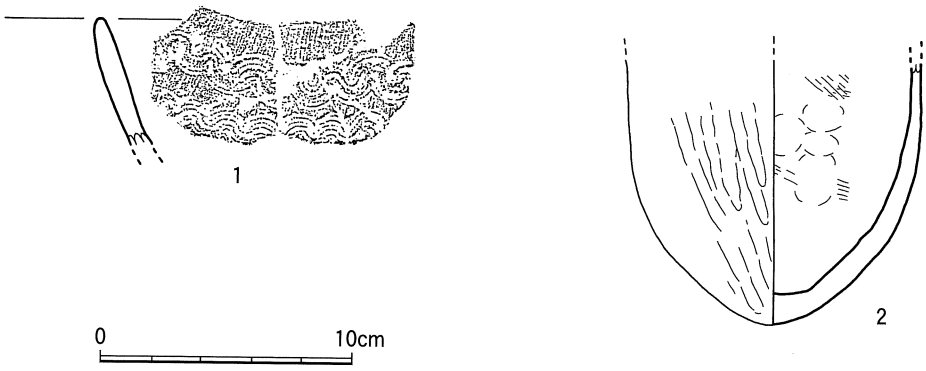
出土土器（第89図）は少なく、図示できたのは壷と鉢の各１点ずつである。

１は二重口縁壷の口縁部で、端部にむかい内傾する。外面には縦方向のハケメ後２段にわたり櫛描波状文が施される。２は鉢と考えられるが、口縁部を欠く。底部は丸底である。外面には縦方向のヘラナデが、また内面にはハケメ後ナデや指オサエが施される。

以上のほかに、竪穴床面上より鉄製の槍鉋が１点出土した。




第88図　利光遺跡鵜ノ木地区３号竪穴実測図（1／60）




第89図　利光遺跡鵜ノ木地区３号竪穴出土遺物実測図（1／3）

## 4　4号竪穴（第82図）

4号竪穴は調査区の東南部に位置する。

大部分は調査区外に及ぶが、平面プラン方形を呈するものと考えられる。確認された部分から一辺約5m程の規模を有するものと想定される。竪穴内からは、目立った遺物は出土していない。

## 5　5号竪穴（第90図）

5号竪穴は2号竪穴の北側に位置する。本竪穴も2号竪穴同様に平面プランの確認が非常に困難であった。わずかな色調の違いと遺物の集中は認められたが、プランを明確に確認するにはいたらなかった。そのため、様々に条件を変えての検出作業を行い、最終的に方形のプランを確認することができた。

竪穴は方形を呈し、その規模は一辺約6mを測る。深さは、検出面から0.4～0.6mである。主柱穴の配置は4本柱で、東側柱列間の心々距離は2.9m、北側柱列間の心々距離は3.2m、西側柱列間の心々距離は2.6m、南側柱列間の心々距離は3.5mである。

炉跡と思われる焼土は、北側柱列の東側柱穴寄りにある。焼土は円形を呈し、床面直上に形成される。規模は径0.5m程である。また、焼土の南東側である東側柱列間には長方形の土壙がみられる。土壙内には炭化物が多くみられ、炉跡との関連が注目される。土壙は、長辺1.2m、短辺0.6mの規模である。

このほか、南西の主柱穴（柱2）からは口縁部を打ち欠いた二重口縁壺と完形の甕が出土した（第91図）。これらの土器は、柱穴を抜き取った後に意識的に入れられたものと思われ、甕を下にして重なるように安置されている。壺、甕（第96図32、33）とも、底部ちかくや胴部に焼成後の穿孔がみられ、竪穴廃棄時の祭祀に使用されたことが分かる。また、東南の主柱穴からは鉄鏃が1本出土した。さらに、この柱穴に接するように胴部の大半を打ち欠いた二重口縁壺（第92図1）が、床面に安置されていた。

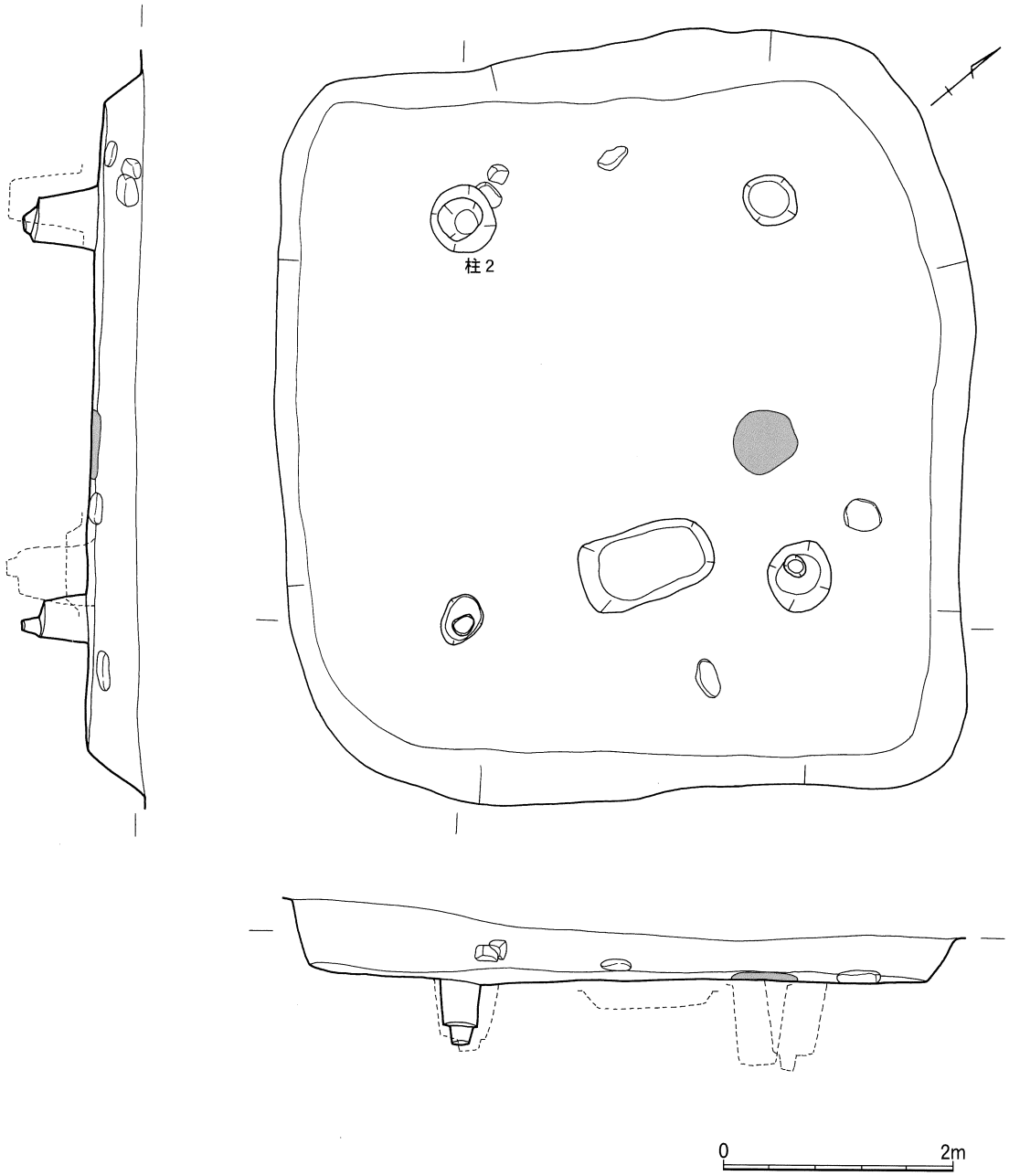
出土土器（第91～96図）は、壺、甕、高坏などがある。

1～4、32は二重口縁壺である。1は胴上部から口縁部にかけての資料で、口径16.8cmを測る。外傾して立つ頸部から、やや外反しながら口縁が内傾する。外面には3段の櫛描波状文がみられる。頸部下には、断面三角形の突帯が1条付され、突帯には刻みが施される。外面の調整は、頸部が縦方向のハケメ、胴部がナデ。また、内面は口縁部がヨコナデとオサエ、頸部がハケメとオサエ、胴部はナデである。2は小型のもので、口径12.4cmを測る。頸部と口縁部の長さの比がほぼ等しく、口縁外面には櫛描波状文が施される。3は小破片で、口縁外面に1条の櫛描波状文がみられる。4は口縁部を欠く頸部の資料である。頸部は外傾して立ち、下部にベルト状の突帯を付す。突帯には、板状工具による刻みが施される。外面の調整は、頸部が斜方向のハケメ、胴部がナデである。内面は頸部がヨコナデとハケメ、胴部がナデである。32は口縁部のみを欠く資料である。胴部は中程よりやや下位に最大径があり、下膨れ気味の球状を呈する。底部は丸底で、底部ちかくに焼成後の穿孔がみられる。また、頸部下には断面三角形の突帯が1条付される。外面の調整は頸部、胴部とも縦方向のハケメがみられる。内面は剥離のため不明な部分が多いが、胴部は横あるいは斜方向のハケメである。

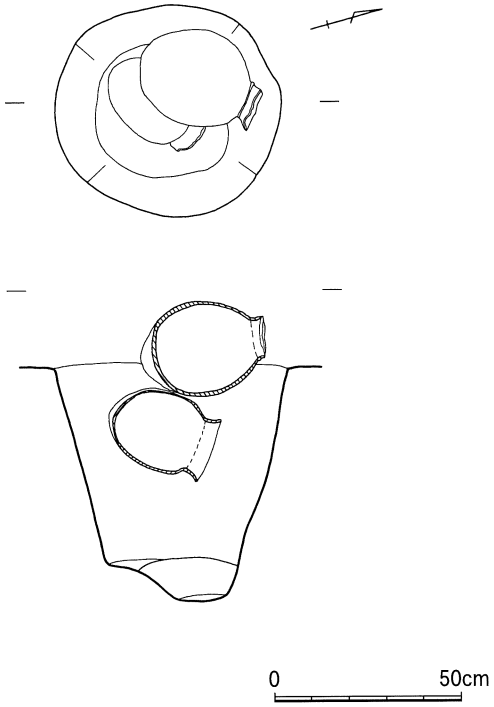
5は長頸壺と思われ、頸部下に断面三角形の突帯が付される。突帯は上下からオサエられている。

6～18、33は甕である。6,7は口径12cm、高さ20cmほどの小型品で、いずれも底部は丸底である。8は口径16.6cm、高さ29.6cmを測る。胴部は長胴気味で、底部丸底を呈する。口縁部は、頸部より外反気味に折れる。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケメ、胴部内面が一部に粗いハケメがあるものの全体としては丁寧なナデである。9は底部を欠く資料であ

る。胴部は中程に最大径をもつもので、底部は丸底を呈するであろう。口縁部は外反気味に頸部から折れる。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、頸部から胴部が縦方向のハケメである。内面は、口縁部がヨコナデ、胴部が細かいハケメと粗いハケメ、底部ちかくがナデである。10は球状の胴部から口縁がくの字状に折れる。口径は17.0㎝を測る。口縁端部は、外方に引き出される。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部外面がハケメ、胴部内面がヘラケズリである。11は口径15.8㎝、高さ24.4㎝を測る。胴部は球状を呈し、中程に最大径をもつ。底部は丸底である。外面の調整は、口縁部が縦方向のハケメ後ヨコナデ、胴部がハケメである。内面は口縁部がヨコナデ、胴部上半がハケメとオサエ、胴部下半がナデである。12は口径19.6㎝である。胴部内面は頸部までヘラケズリが施される。13は底部を欠く資料である。胴部は下膨れ気味の球状を呈する。口縁部は、頸部よ




第90図　利光遺跡鵜ノ木地区５号竪穴実測図（1／60）




第91図　利光遺跡鵜ノ木地区５号竪穴柱穴２土器出土状況実測図（1／20）

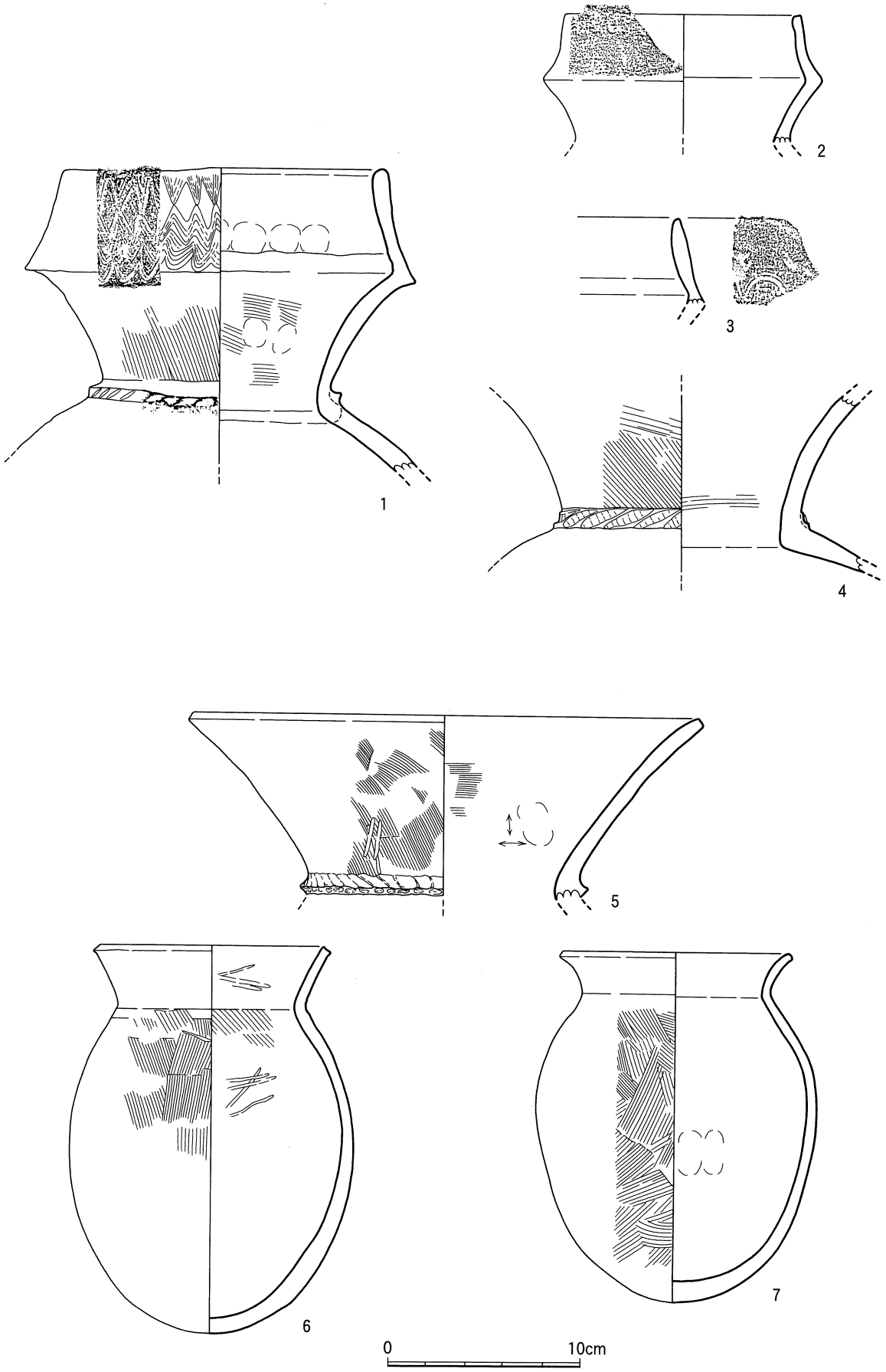
り外反しながら大きく折れる。調整は、外面は口縁部がハケメ後ヨコナデ、胴部がハケメである。内面は、口縁部がヨコナデ、胴部がナデとハケメである。14は口縁部と底部を欠くもので、内外面ともハケメがみられる。15は口径14.6㎝である。口縁部は頸部からいったん直立し、その後外方に折れる。調整は、外面が縦方向のハケメ、口縁内面が横方向のハケメとオサエ、胴部内面がヘラケズリである。16は口縁部と底部を欠く。内外面ともハケメ調整である。17は口径16.0㎝である。口縁部は胴部から強くくの字状に折れる。胴部内面は頸部までヘラケズリが施される。18は口径20.6㎝を測る。外面の調整は、口縁部がナデ、胴部が板状工具によるナデである。内面には、ケズリ状の調整がみられる。33は口径20.0㎝、高さ27.8㎝を測る。胴部最大径は中位よりやや上にある。底部は丸底で、胴部に焼成後の穿孔がみられる。外面の調整は、口縁部が縦方向のハケメ後ヨコナデ、胴部が縦方向のハケメ、底部がナデである。内面は、口縁部が横方向のハケメ、胴部が斜方向のハケメ、底部付近はナデである。

19～26は高坏である。19は浅い坏部で、口径19.4㎝を測る。調整は、外面がナデとオサエ、内面がヘラナデとナデである。20は深めの坏部で、口径19.5㎝である。調整は、外面が横方向のハケメ、内面は剥離のため不明である。21も深い坏部で、口径19.6㎝を測る。調整は内外面ともハケメである。22は、口縁部と底部を欠く。口縁部は、いったん上方に立ち上がり、ややあって外方に折れる。外面の調整は、坏部がナデ、脚部が縦方向のヘラミガキである。内面は、坏部がナデで平滑に、脚部がナデである。23～26は脚部である。いずれも、ハの字状に開く筒状部から底部にむかい大きく開く。23、26の外面には縦方向のヘラミガキが施される。また、23、25、26には円形の透かし穴がみられる。

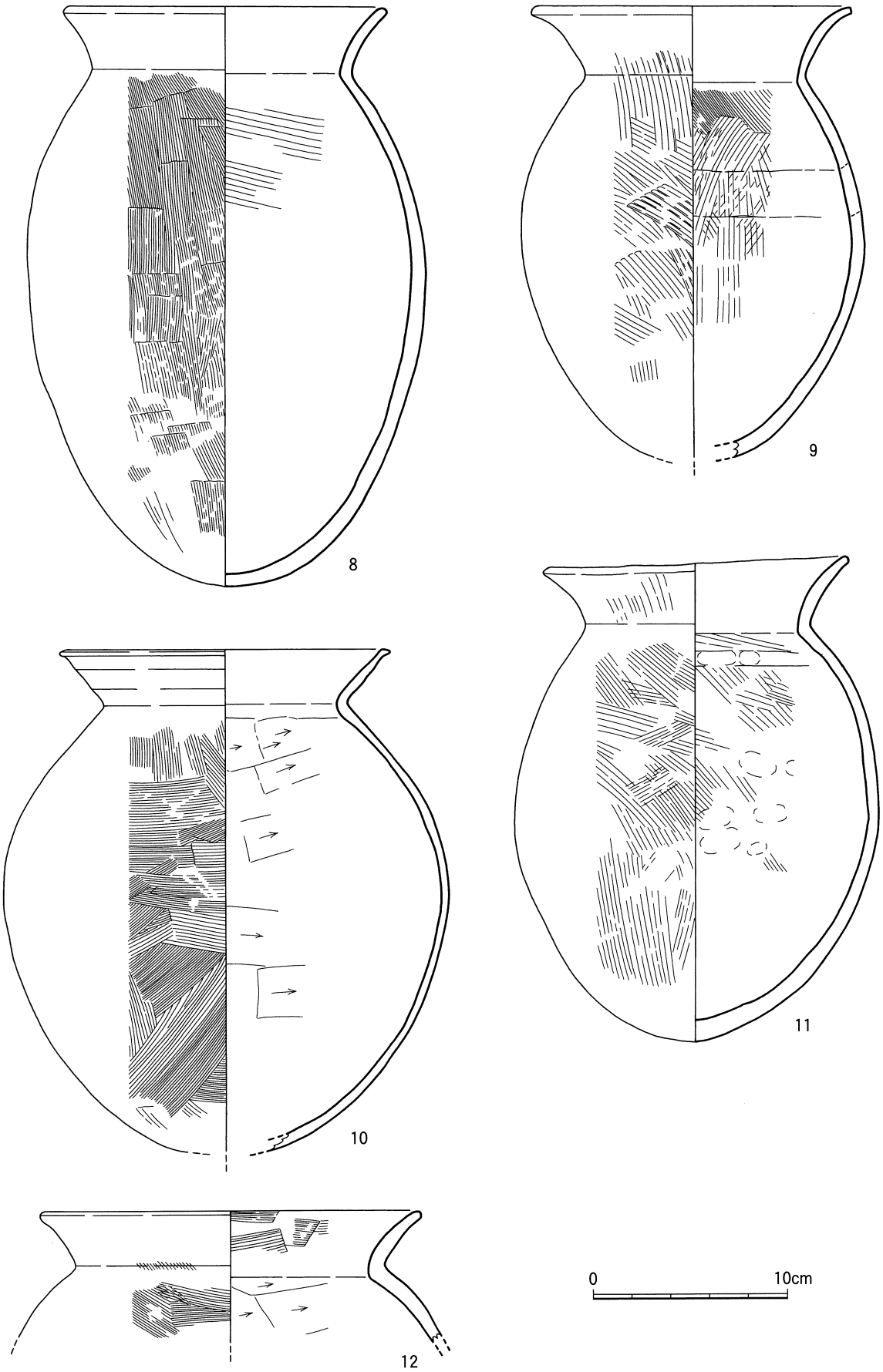
27は器台の可能性をもつ。また、28は脚付き鉢の脚であろう。

29、30は長頸壷と考えられる。29は口径10.2㎝を測る。調整は、外面が丁寧なナデ、内面がヨコナデである。30は口縁部を欠くものである。調整は、内外面とも丁寧なナデである。

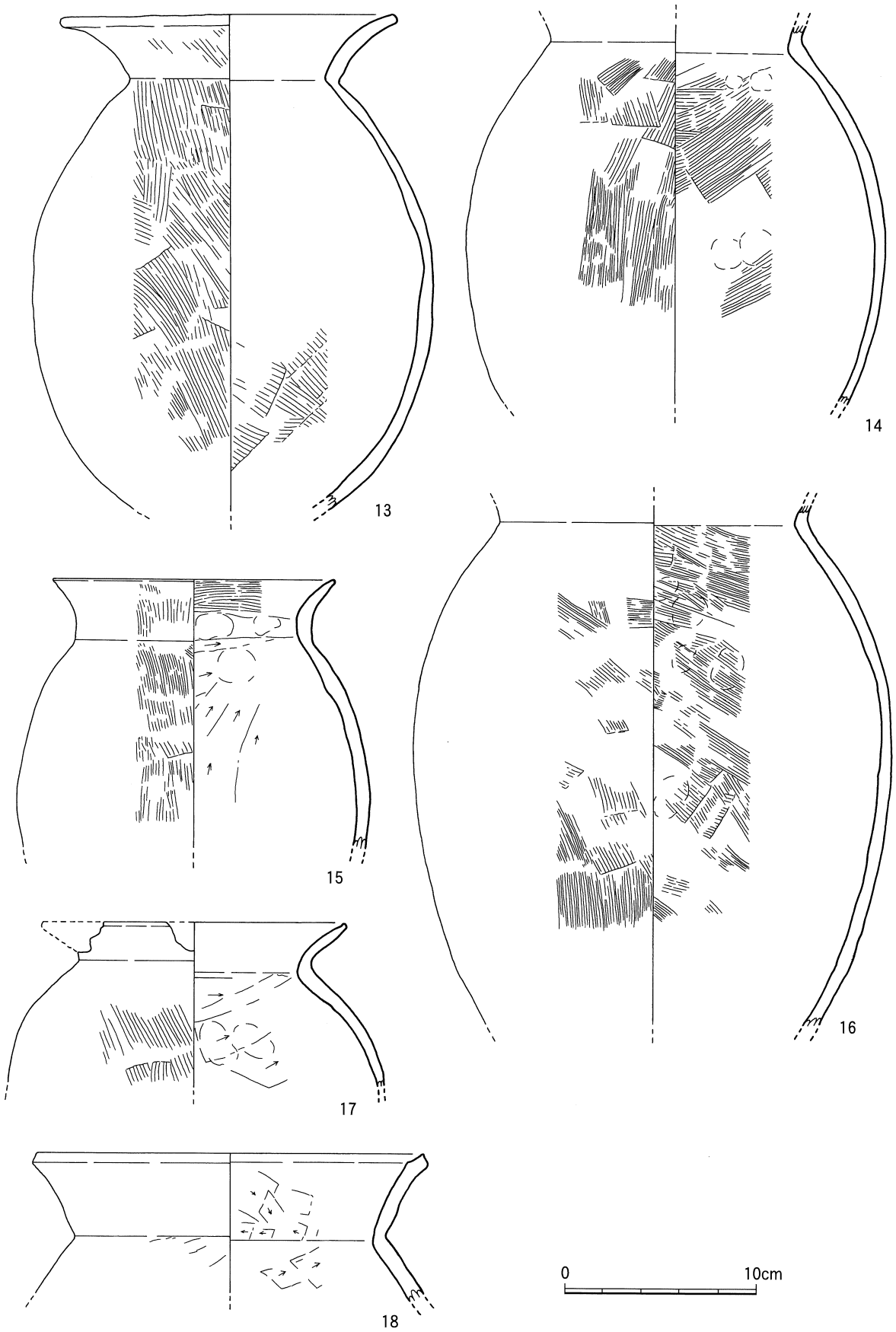
31は丸底の底部である。外面にはハケメ、内面にはヘラケズリがみられる。



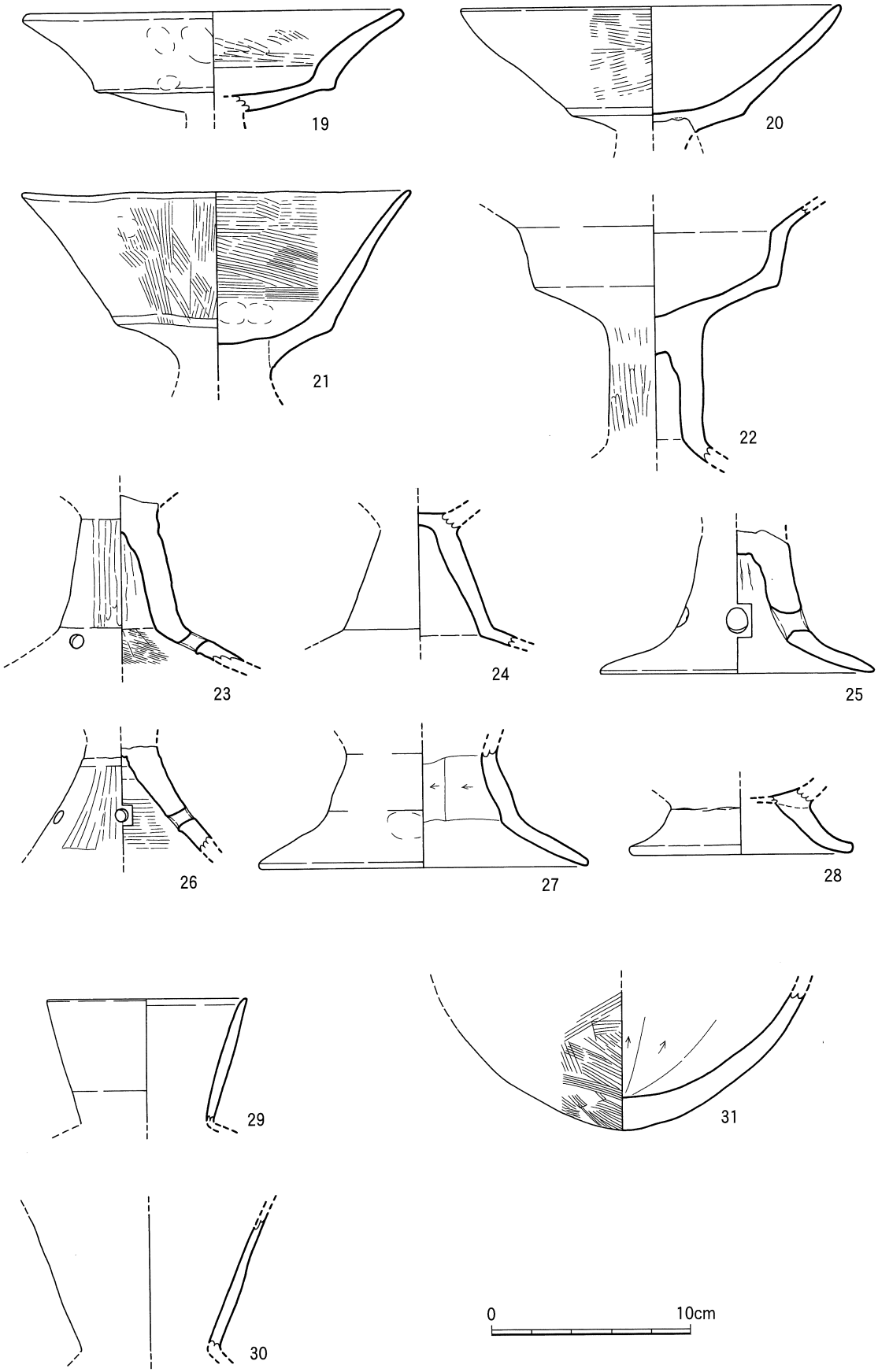

第92図　利光遺跡鵜ノ木地区５号竪穴出土遺物実測図１（1／3）



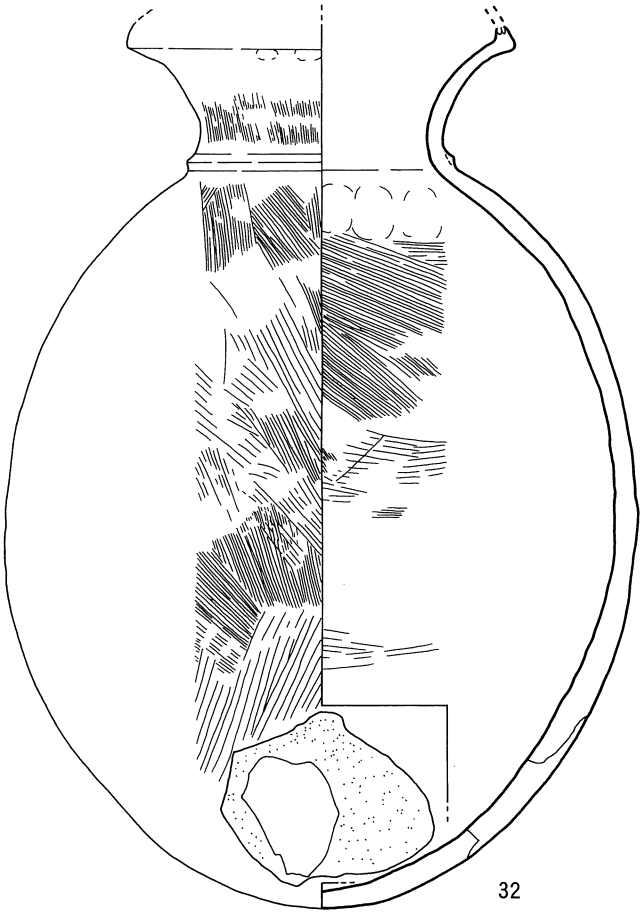

第93図　利光遺跡鵜ノ木地区５号竪穴出土遺物実測図２（1／3）

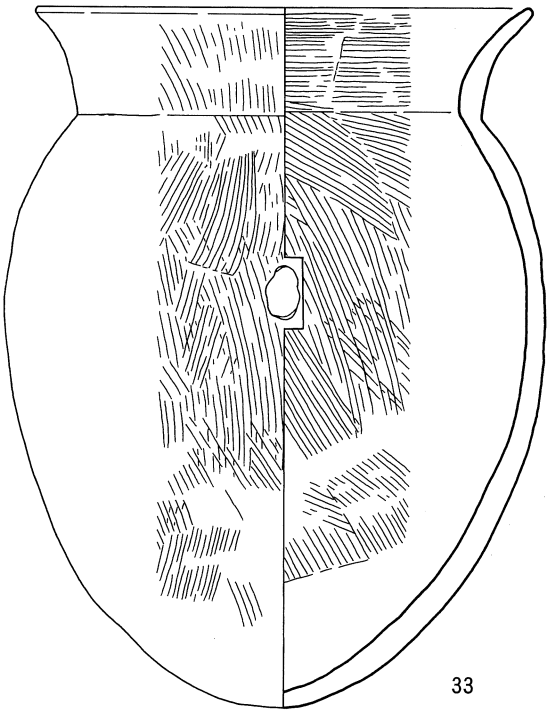



第94図　利光遺跡鵜ノ木地区５号竪穴出土遺物実測図３（1／3）




第95図　利光遺跡鵜ノ木地区５号竪穴出土遺物実測図４（1／3）




0　10cm

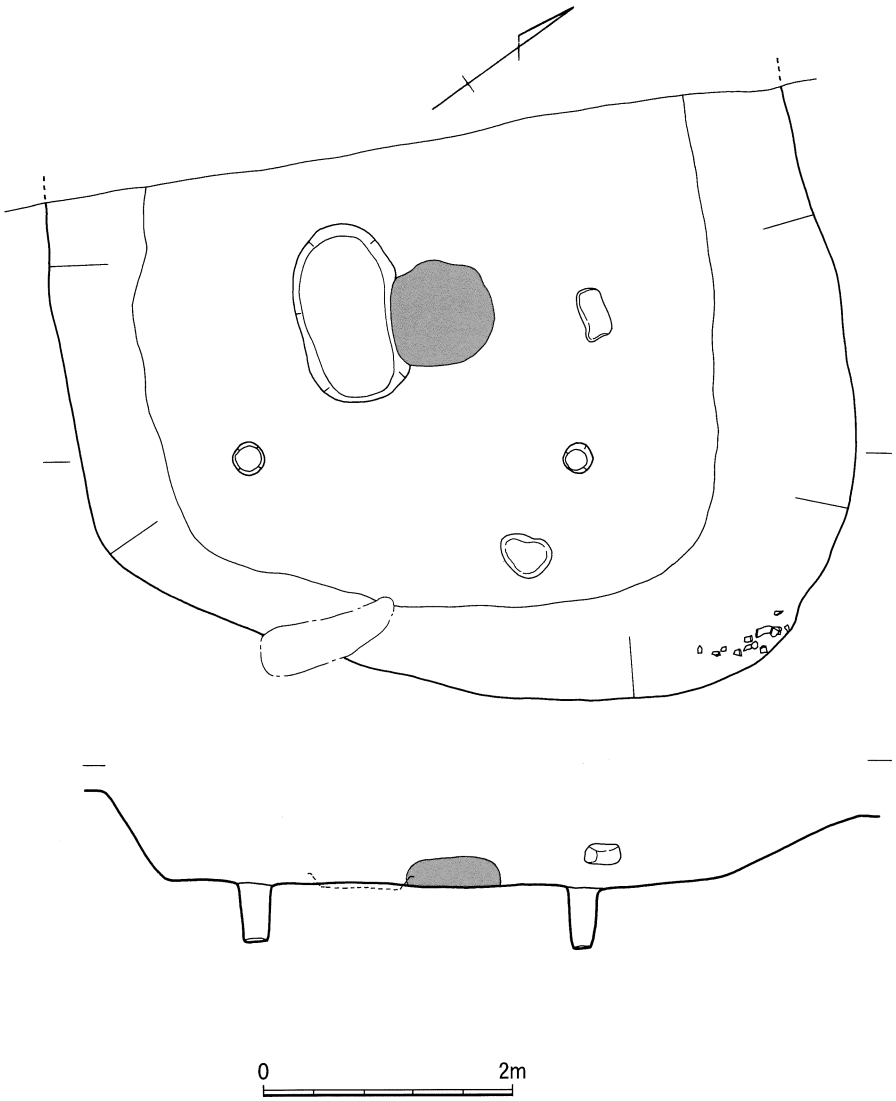
第96図　利光遺跡鵜ノ木地区５号竪穴出土遺物実測図５（1／3）

## 6　6号竪穴（第97図）

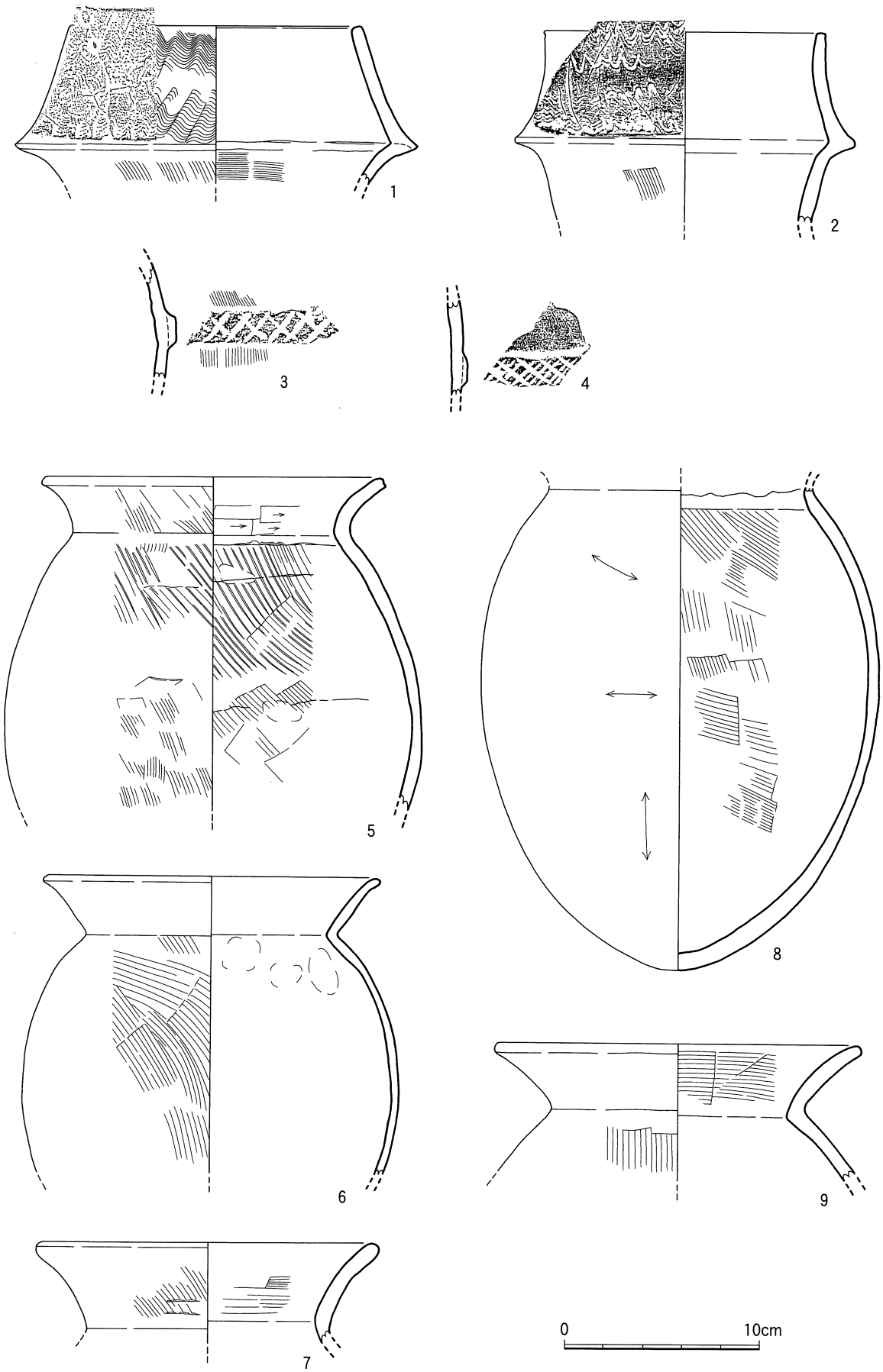
6号竪穴は調査区の西北隅に位置する。本竪穴も、当初は若干の色調の違いと遺物の出土が確認されたのみで、遺構の明確なプランは確認できなかった。そのため、条件を様々に変えて検出作業を幾度となく繰り返した。

竪穴は、西半分が調査区外に及ぶため全形は不明であるが、方形プランを呈するものと思われる。その規模は、ほぼ一辺6mである。深さは、検出面より0.6～0.7mを測る。本竪穴の特徴として、壁が直立しないという点である。なかでも、東北コーナー周辺が顕著である。このことについては、埋土が見分けにくかったことから調査ミスの可能性も考えられるが、そうでないとすれば、壁の崩壊等の原因が想定される。

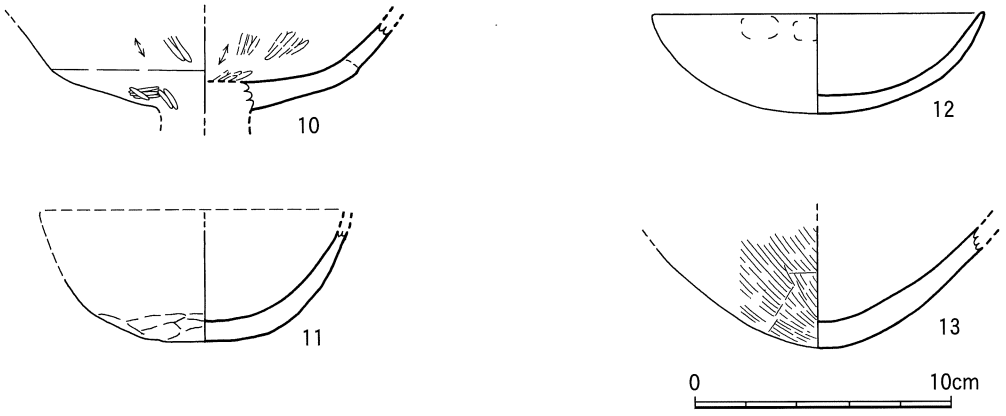
主柱穴の配置は4本柱と思われる。東側柱穴列の心々距離は、2.6mを測る。しかし、現状にお




第97図　利光遺跡鵜ノ木地区6号竪穴実測図（1／60）




第98図　利光遺跡鵜ノ木地区６号竪穴出土遺物実測図１（1／3）




第99図　利光遺跡鵜ノ木地区６号竪穴出土遺物実測図２（1／3）

いて東側柱穴列から2.8mの位置でも西側柱穴列は確認されていないことから、竪穴は東西に長い長方形を呈する可能性もある。

炉跡と考えられる焼土は、竪穴の中央やや東よりの位置にみられる。焼土は床面上にあり、厚さは0.2mを測る。形状は円形で、径約0.8mである。

焼土の南側には、楕円形の土壙がある。土壙は長辺1.4m、短辺0.8m、深さ0.1mの規模を有する。

出土土器（第98、99図）には、壷、甕、高坏、鉢などがある。

１～４は壷である。１は二重口縁壷の口縁部で、口径15.1㎝を測る。口縁部は内傾しており、端部はやや角張る。外面には、櫛描波状文が３段にわたり施文されている。調整は、頸部外面がヨコナデと縦方向のハケメ、口縁内面がヨコナデ、頸部内面が横方向のハケメである。２も二重口縁壷の口縁部であるが、１よりも小型で口径は14.6㎝である。口縁部は外反しながら直立し、端部は角張る。外面には、２段にわたり櫛描波状文が施文される。調整は、頸部外面が縦方向のハケメ後ナデ、内面はナデである。３は壷の胴部資料で、ベルト状の突帯が付される。突帯には、ヘラ状工具により斜行格子目文が施される。調整は、外面が縦方向のハケメ、内面がナデである。４も壷の胴部資料である。やはりヘラ状工具により斜行格子目文が施されたベルト状突帯が付される。調整は、外面が縦方向のハケメである。内面は、部分的にハケメが認められる。

５～９は甕である。５は口径17.6㎝を測る。胴部は中程に最大径をもつもので、やや下膨れ気味である。口縁部は頸部から外反しながら折れる。外面の調整は、口縁部が斜方向のハケメ後ヨコナデ、胴部が斜方向の粗いハケメである。内面は、口縁部がヨコナデとケズリ状の強いナデ、胴部が斜方向のハケメである。６は口径17.4㎝である。胴部は、底部を欠くものの、球形にちかい形態を呈する。口縁部は頸部からくの字状に折れ、端部を丸くおさめる。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、胴部が斜方向の粗いハケメである。内面は口縁部がヨコナデ、胴部がナデで、頸部下に指オサエがみられる。７は口縁部が比較的長くのびるもので、口径は17.8㎝である。調整は、外面が斜方向のハケメ後ヨコナデ、内面がヨコナデと横方向のハケメである。８は頸部より上を欠く資料である。頸部における割れ口の状況から、意識的に打ち欠いた可能性が考えられる。胴部は中程に最大径をもつやや長胴気味のもので、底部は丸底である。調整は、外面がナデにより平滑にされ、内面がハケメとナデである。９は口径19.0㎝を測る。口縁部は頸部からくの字状に折れる。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向の粗いハケメである。内面は、口縁部が粗い横方向のハケメ、胴部がナデである。

10は高坏の坏部である。坏底部は水平を呈し、ややあって口縁部にむかい斜めに立ち上がる。内外面ともヘラミガキがみられる。

11、12は鉢である。11は口縁部を欠く資料で、底部は平底を呈する。外面の調整は、胴部上半がヨコナデ、胴部下半が指ナデ、底部がナデである。内面は、丁寧なナデにより仕上げられている。12は口径13.0cmを測る浅めのもので、底部は丸底を呈する。調整は、外面がナデとオサエ、内面が丁寧なナデである。

13は甕の底部で、丸底を呈する。調整は、外面が斜方向のハケメ、内面がナデである。

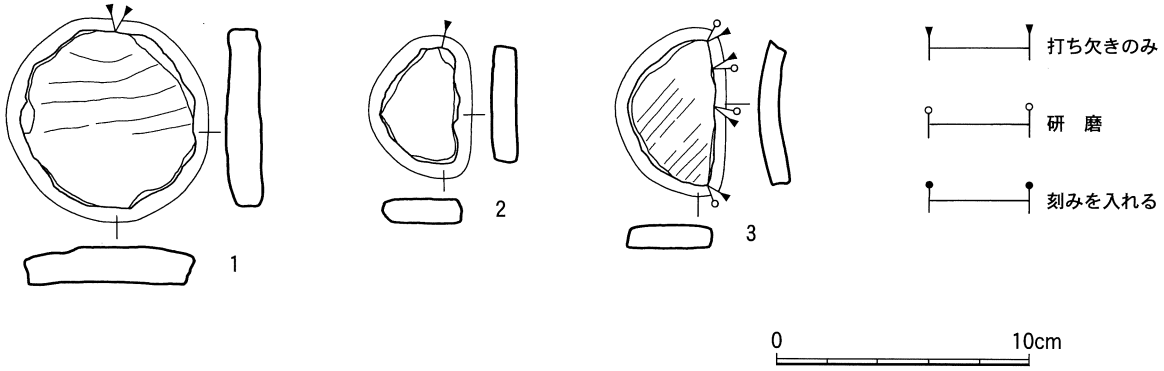
### b）その他の出土品

#### 1　土器片加工品（第100図）

遺構検出作業中などに、土器片加工品が３点出土した。これらは、いずれも弥生から古墳時代にかけての土器片を利用して作られたもので、その形態などから以下のようにⅠ類とⅡ類に分類される。

Ⅰ類（１）は円形基調のもので、径6.65～6.9cm、厚さ1.35cm、重量72.5ｇを測る。周囲は整形時に打ち欠いたままで、磨ったりはしていない。

Ⅱ類（２、３）は半月形のものである。１は縦4.5cm、横3.1cm、厚さ1.0cm、重量16.5ｇを測る。周囲は整形時に打ち欠いたままで、磨ったりはしていない。２は縦5.7cm、横3.4cm、厚さ0.8cm、重量20.2ｇを測る。打ち欠きにより半月形に整えた後、弧状部全体と弦状部の一部を磨っている。

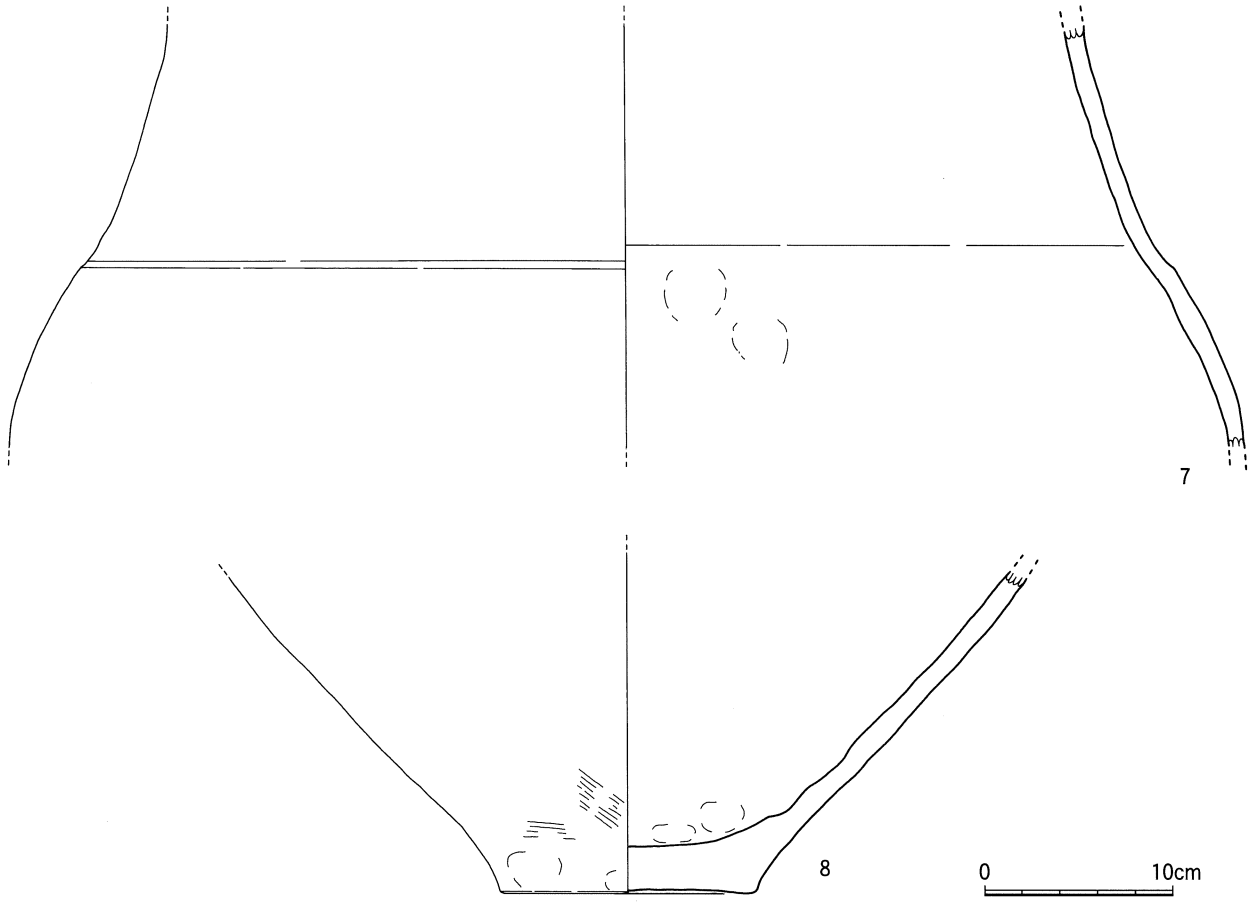



第100図　利光遺跡鵜ノ木地区出土土器片加工品実測図（1／3）

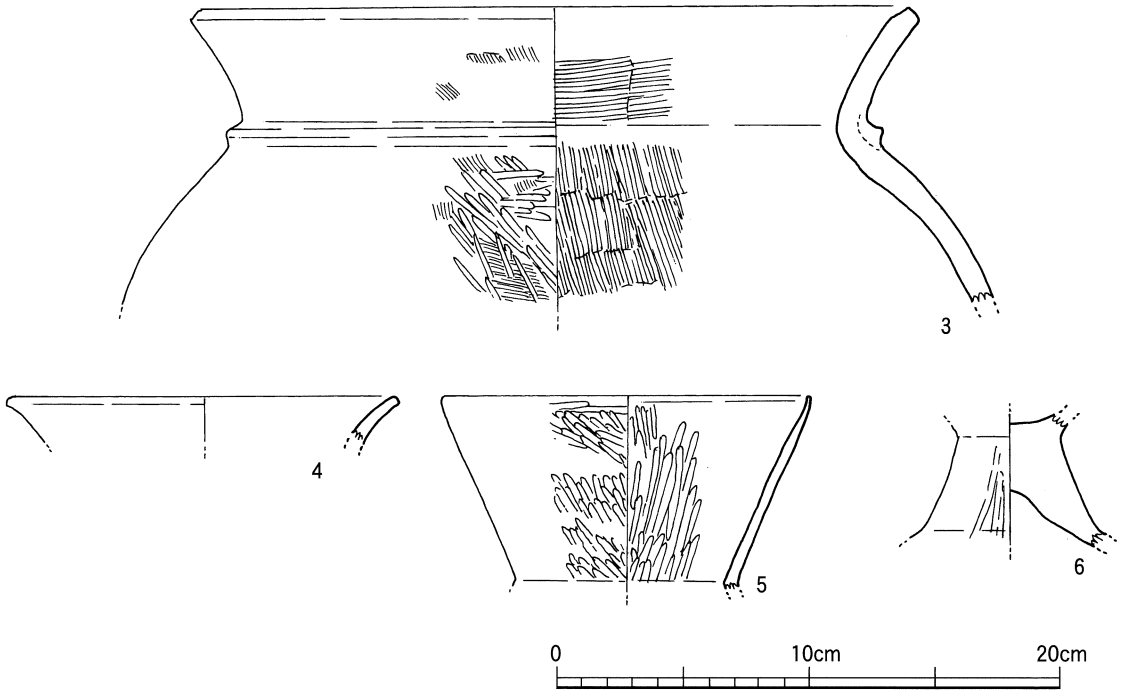
#### 2　その他の出土土器（第101、102図）

遺構検出作業中や縄文時代包含層調査トレンチなどから若干の土器が出土した。

１、２は縄文時代包含層調査トレンチ上層から出土したものである。両者は同一個体と思われ、近接した位置において検出された。出土状況から、これらの土器が何らかの遺構に伴うものではないかと考え、遺構検出作業を繰り返した。本遺跡では、弥生・古墳時代の遺構確認が困難をきわめ、かなりの時間をかけて平面プランを確認していた。これらの土器の周辺についても、様々に条件を変え遺構の検出を試みた。しかし、遺構は確認することができなかった。１、２は壷で、１は胴部から頸部にかけての資料である。外面の胴部から頸部にうつる部分に、軽い段を有する。調整は内外面ともナデ仕上げで、内面にはオサエもみられる。２は平底の底部で、底径13.6cmを測る。調整は、外面がナデと部分的にハケメ、内面がナデとオサエである。１、２は弥生時代前期の大型の壷で、器高は80cmほどにも達すると考えられる。




第101図　利光遺跡鵜ノ木地区出土弥生・古墳時代土器実測図１（1／4）




第102図　利光遺跡鵜ノ木地区出土弥生・古墳時代土器実測図２（1／3）

３も大型品で、口径29.0㎝を測る。口縁部は、胴部から短くくの字状に折れ、端部は角張る。頸部には、断面三角形の突帯が付される。外面の調整は、口縁部が縦方向のハケメ後ヨコナデ、胴部が斜方向あるいは横方向のハケメ後ヘラミガキである。内面は、口縁部がヨコナデと横方向のハケメ、胴部が縦方向のハケメである。

４は甕の口縁部と思われ、口径15.6㎝を測る。５は長頸壷の口縁部で、口径は14.6㎝である。口縁にむかい直線的にのびるが、口縁端部ちかくでやや内湾する。調整は内外面ともヘラミガキである。６は高坏の脚部で、外面にはヘラミガキがみられる。

### c）小結

鵜ノ木地区では、弥生・古墳時代の竪穴を６基確認した。弥生時代後期終末から古墳時代前期前葉のもので、いずれも方形の竪穴である。

現在の鵜ノ木地区の地形はほぼ平坦であるが、中・近世の遺構面では明らかに北から上流側の南にむかい下がる。弥生・古墳時代の遺構面に達するには、中・近世の遺構面から砂質土をさらに除去しなければならず、その深さは厚いところで1.7mにも及ぶ。弥生・古墳時代の遺構面は、中・近世の遺構面とは逆に南から北に向かい傾斜し、そのまま脇ノ津留川にいたる。

利光遺跡は大野川右岸にあり南北方向に展開する。遺跡は小河川などにより分断され、下流側から脇ノ津留地区、鵜ノ木地区、久保地区に分けられる。弥生・古墳時代の遺構が確認されたのは脇ノ津留地区と鵜ノ木地区である。鵜ノ木地区で遺構が確認されたのは中央部のみで、地区の南部ではこの時期の遺構は確認されず、また地区の北部では遺跡を分断する脇ノ津留川にむかい地形が下っていくのが試掘調査により確認されたのみである。よって、遺跡の広がりはあまりないものと考えられる。検出された竪穴は一部で重複するが、多くの竪穴が複雑に重複する脇ノ津留地区に比べると散在的である。

鵜ノ木地区で確認された６基の竪穴の規模は、すべて一辺６m程である。これに対し、脇ノ津留川を隔てた脇ノ津留地区検出の竪穴には一辺８m以上の大型竪穴が数基含まれる。前述した遺跡の広がりや竪穴の数の差も考え併せると、弥生・古墳時代は脇ノ津留地区が集落の中心で、鵜ノ木地区は集落の縁辺的な位置にあったものと推測される。

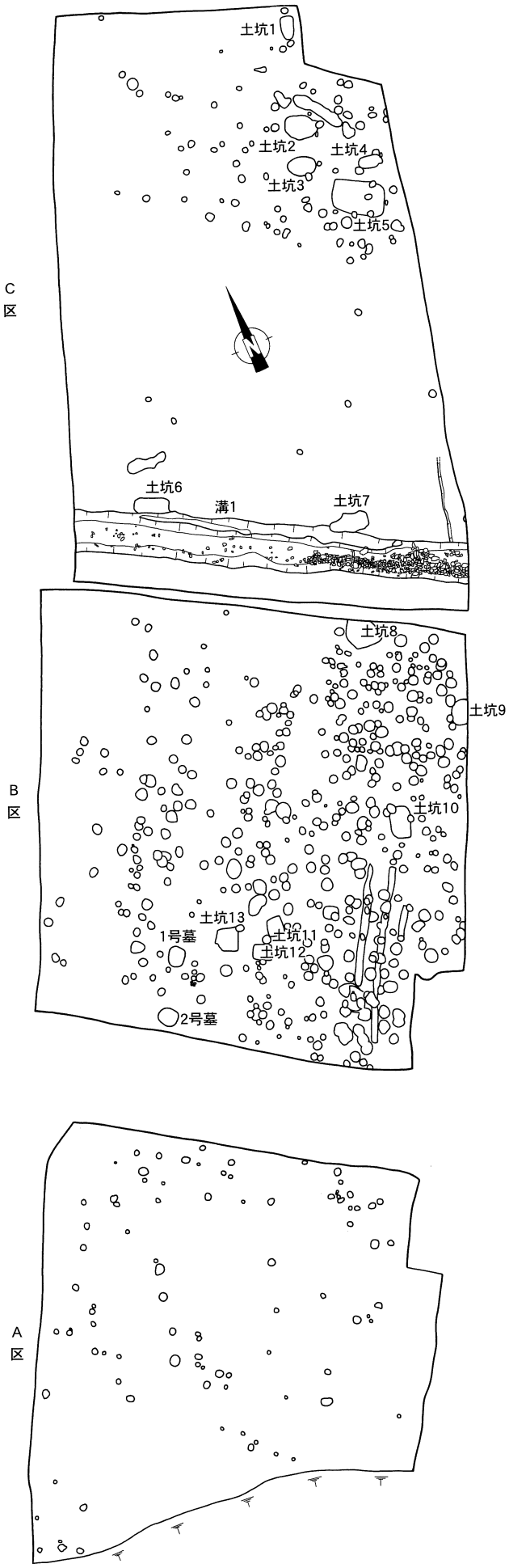
## C.近世

利光遺跡鵜ノ木地区は、現耕作土・床土の下に洪水で堆積したと思われる砂泥層が、約80㎝ほど厚く堆積している。これらの層を取り除いた面が近世の遺構検出面である。調査区の南端は緩やかに下降していて、旧地形では、東側の山間から延びる谷状になると思われる。この傾斜地では遺構の確認はなかった。確認された遺構は、溝１条・土坑墓２基・土坑９基・掘立柱建物跡16棟・柱穴群である。

A区では柱穴群が検出されたが、北側に集中していた。

B区では土坑墓２基・土坑９基・掘立柱建物跡15棟・柱穴群が確認された。土坑墓はB区の南に位置し、土坑は比較的東側に分布する。掘立柱建物跡は現地及び図上で確認できたものが15棟で東側部分に集中している。柱穴群も東側に集中している。柱穴の径は20～80㎝で、根石や根締石を持つ柱穴が多数存在する。

C区は北側から南側に向かって緩やかに下降する地形となっている。検出した遺構は溝１条・土坑８基・掘立柱建物跡１棟・柱穴群である。溝は南端で確認され、東西に走る。土坑・柱穴は北側に集中していて、中央部分は遺構の存在が稀薄である。




第103図　利光遺跡鵜ノ木地区近世遺構配置図

### a)溝

**溝１（第104図）**

鵜ノ木地区C区南側端に位置し、調査区を東西に横切る状態で確認された。全容は不明である。幅は2.0～2.4m、深さは40～70㎝で断面逆台形を呈している。埋土は上部が茶褐色系粘質土層で固くしまっている。下部は、褐色系の土層で砂を多量に含んでいる。埋土状況は北から南に向かって流れ込んでいる様子が窺える。床面は西から東に向かって緩やかに下降する。床には中央から東寄りに多量の礫が土器とともに出土している。礫の多くは被熱を受けている。西側部分は礫の出土は稀薄であり、土器の出土もない。故意に

破棄したものと思われる。

溝の北側部分には明確な遺構の存在は無く、南側はB区で、土坑・土坑墓・掘立柱建物跡が確認されている。溝１の出土遺物やＢ区で確認された遺構の時期はほぼ同時期のものであることから、この溝１はＢ地区で確認された遺構（屋敷等）の北限にあたるものと思われる。

また、溝１の出土遺物からみて、この溝は17世紀前半代に埋没したものと考えられる。

**出土遺物（第105～106図）**

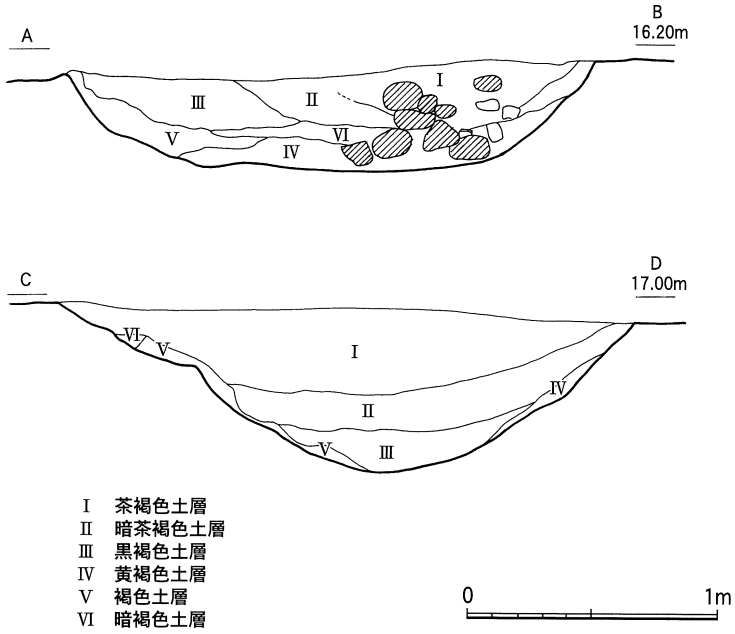
１は肥前唐津系陶器皿で、内面に砂目痕が４カ所認められる。1590年代の製品である。

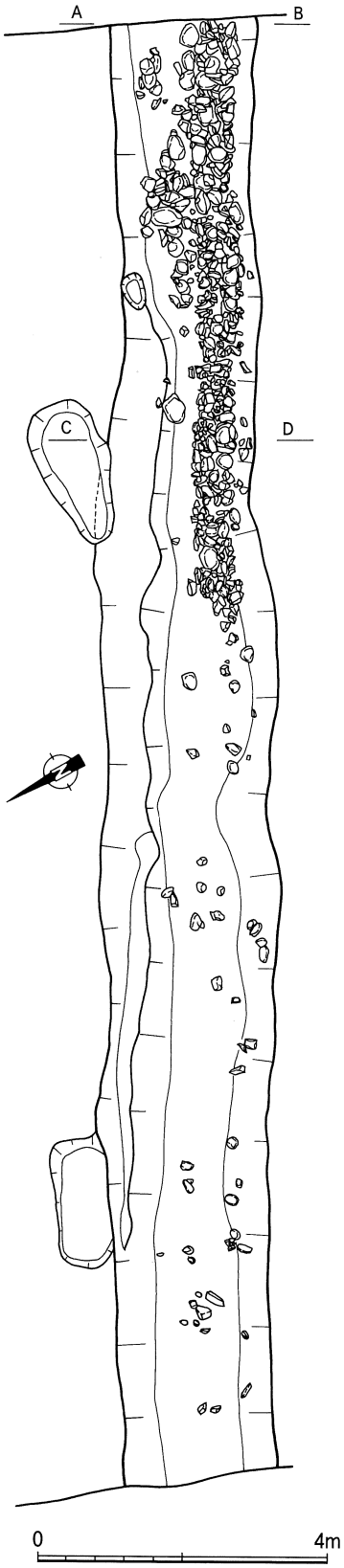
２・３は肥前唐津系陶器皿で、内面に砂目痕が認められる。1600～1630年代の製品である。

４・５は肥前唐津系陶器碗で、４は1590年代の製品、５は1600～1630年代の製品である。

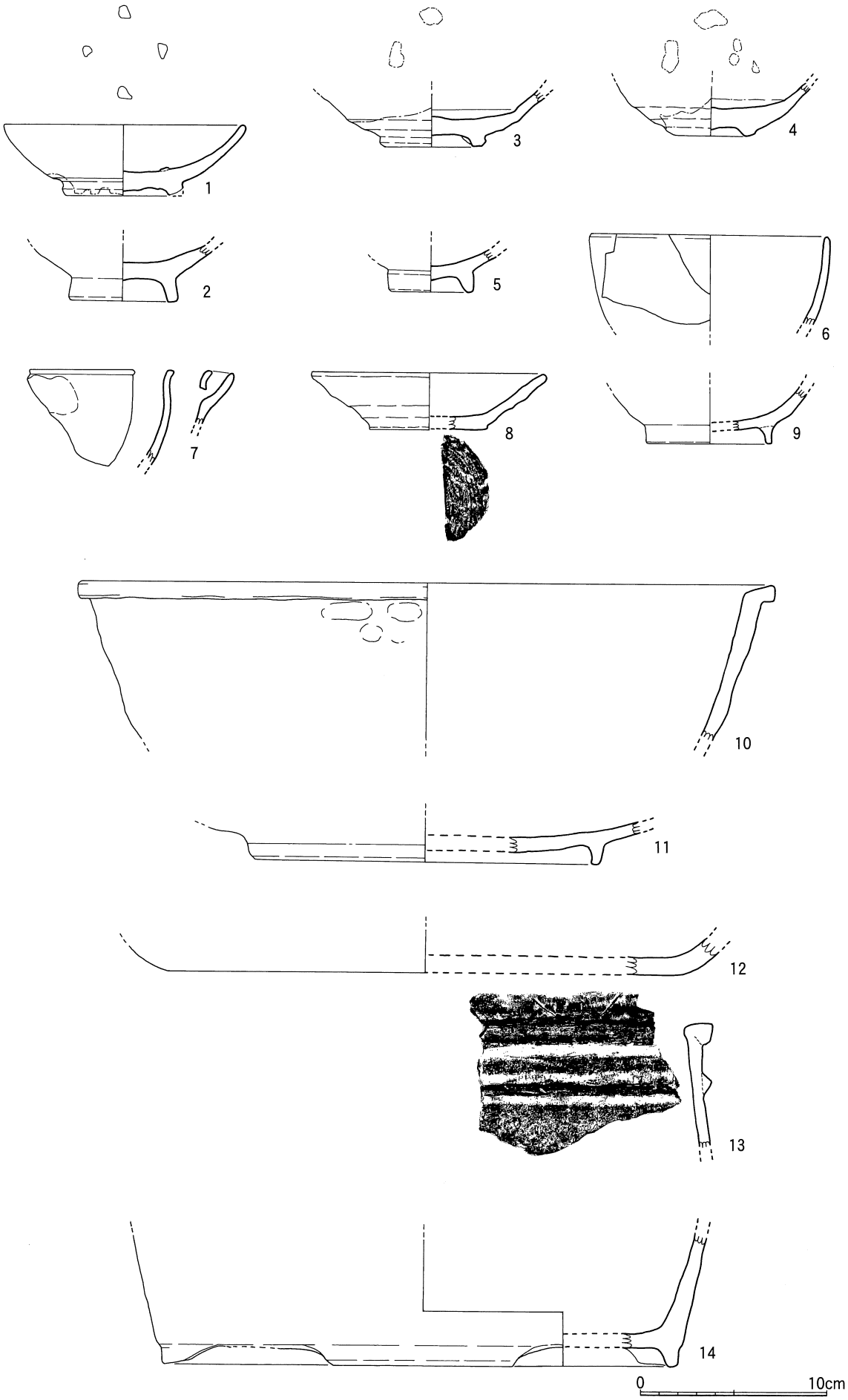
６は青磁碗で、口縁端部は丸みをもち、口縁部外面に退化した雷文を巡らす。暗緑色の透明釉薬を施している。胎土には灰褐色の砂粒が混入する。15世紀代の製品である。

７は染付片口の口縁部片で、呉須による不明確な紋様が認められる。




第104図　利光遺跡鵜ノ木地区溝１実測図(1／30・1／100)




第105図　利光遺跡鵜ノ木地区溝１出土遺物実測図１（1／3）

8は土師質土器坏で、口縁部が外へ直線的に開く。体部外面には整形による調整痕が残る。底部は糸切りである。

9は瓦質土器椀で、外面に炭素付着による黒色部分がみられる。内面には布目痕と思われる痕跡が残り、型押しによるものか。

10は瓦質土器鉢で、口縁部を外側に折り曲げ、口縁部は横方向のナデ調整を行っている。一部口縁下方に指押さえがみられる。

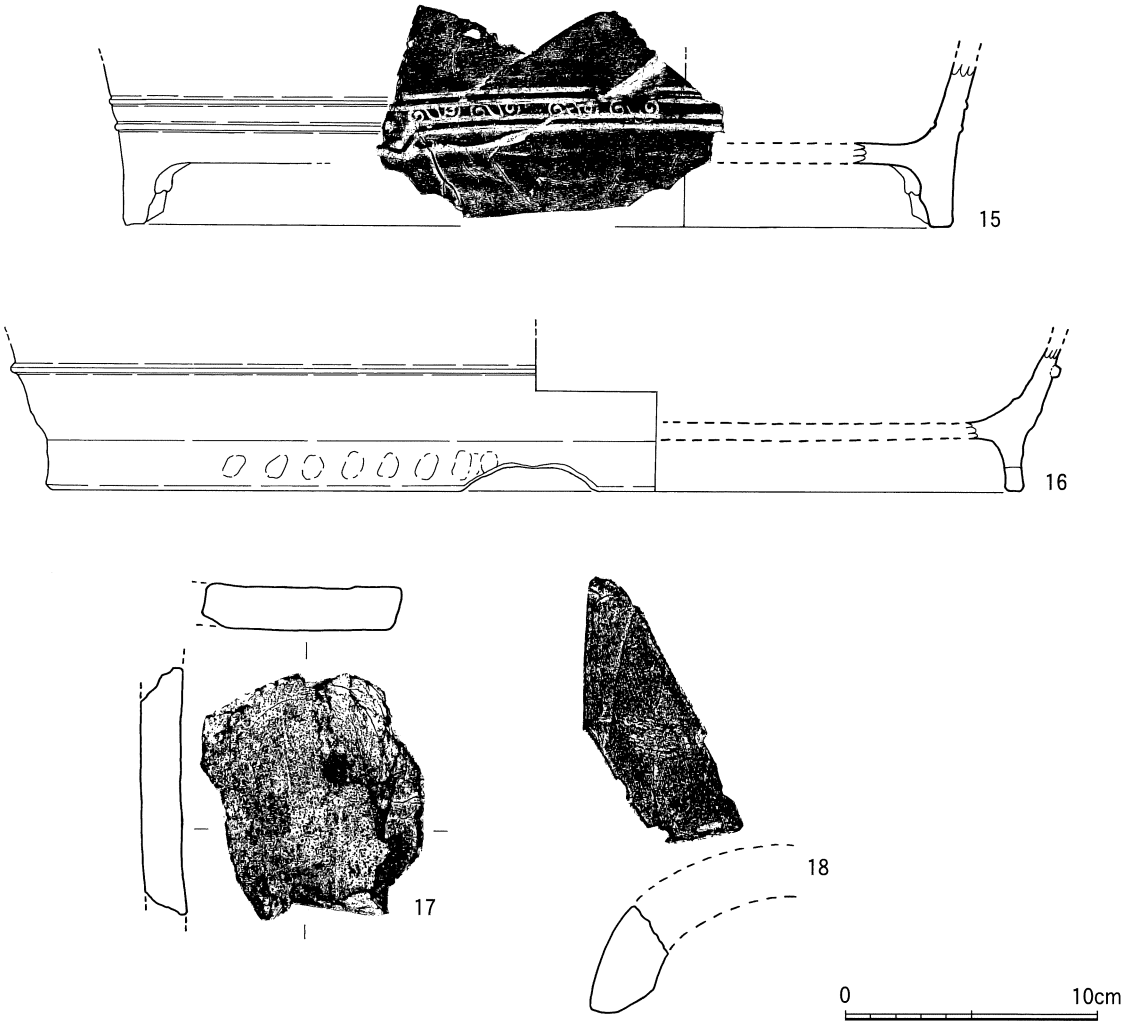
11は瓦質土器鉢の高台で、体部にヨコナデがみられる。

12は瓦質土器の鉢か盤の一部で、全体が炭素吸着により、黒色を呈する。底部には焼成時に付着したと思われる砂が確認できる。底部から立ち上がり部分にヘラによる調整痕が残る。

13は瓦質土器火鉢で、口縁端部は貼り付けによって肥厚している。また、頸部には断面三角形の突帯1条を有する。口縁部と突帯はヨコナデを施している。

14は瓦質土器火鉢の底部片で、脚が付く。3足或いは4足と思われる。脚の両端はヘラ状工具による整形が行われている。13と同一個体と思われる。

15は瓦質土器火鉢の底部片で、脚が付く。3足或いは4足と思われる。脚の両端はヘラ状工具に




第106図　利光遺跡鵜ノ木地区溝1出土遺物実測図2(1／3)

よる整形が行われている。脚上方に断面三角形の貼り付け突帯２条を有し、突帯間にスタンプ文を施す。

16は瓦質土器火鉢の底部片で、高台状の脚が付く。体部下方に断面台形の貼り付け突帯を１条有する。脚部外側に指押さえ痕が残る。突帯及び脚部はヨコナデを施している。内面は板状工具によるナデ調整を行っている。

17は女瓦の一部で、一枚造りである。

18は精製の男瓦の一部で、堅致である。一枚造りであり、側縁は面取りが行われている。内面には布目痕が認められる。

**表18　利光遺跡鵜ノ木地区溝１出土土器観察表**

（単位はcm）

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 色　　調 | 胎　　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 陶器皿 | 13.4 | 3.6 | 3.8 | — | — | 肥前唐津系 |
| 2 | 陶器皿 | — | 5.8 | — | — | — | 肥前唐津系 |
| 3 | 陶器皿 | — | — | — | — | — | 肥前唐津系 |
| 4 | 陶器碗 | — | — | 6.0 | — | — | 肥前唐津系 |
| 5 | 陶器碗 | — | — | 2.3 | — | — | 肥前唐津系 |
| 6 | 青磁碗 | 12.6 | — | — | 暗緑色の透明釉 | 灰褐色の砂粒混 | |
| 7 | 染付片口 | — | — | — | — | — | |
| 8 | 坏 | 12.6 | 2.9 | 3.0 | にぶい橙色 | 長石・角閃石 | |
| 9 | 瓦質埦 | — | 6.8 | — | （外面）灰色<br>（内面）にぶい褐色 | 白色粒・角閃石 | |
| 10 | 瓦質鉢 | — | — | — | （外面）褐灰色<br>（内面）にぶい褐色 | 長石・角閃石 | |
| 11 | 瓦質鉢 | — | — | — | 黄灰色 | 長石・角閃石 | |
| 12 | 瓦質鉢か盤 | — | 13.7 | — | 黄灰色 | 長石・角閃石 | |
| 13 | 瓦質火鉢 | — | — | — | 黄灰色 | 長石・角閃石 | |
| 14 | 瓦質火鉢 | — | — | — | 黄灰色 | 長石・角閃石 | |
| 15 | 瓦質火鉢 | — | 16.9 | — | 黄灰色 | 長石・角閃石 | |
| 16 | 瓦質火鉢 | — | 39.8 | — | にぶい黄褐色 | 白色粒・角閃石 | |
| 17 | 女瓦 | — | — | — | 灰色 | 白色砂粒微量 | |
| 18 | 男瓦 | — | — | — | 灰色 | 白色砂粒微量 | |

b）土坑墓

1号墓（第107図）

1号墓はB区の南側中央付近に位置する。検出面での標高は16.7mで主軸をS-29°-Wにとる。土坑の規模は101×83×28㎝、内法78×67㎝の隅丸長方形を呈している。

土坑上面は削平が激しく、残りは悪い。床面はほぼ平坦であるが、頭位方向に一段の段差を持ち、不定形である。土坑内からは頭骨の一部と歯、上腕骨・大腿骨と思われる人骨の一部が出土した。人骨の残りは悪い。頭位は南西方向で屈葬と考えられる。土坑内からは木棺と推定される施設は検出されなかった。

副葬品

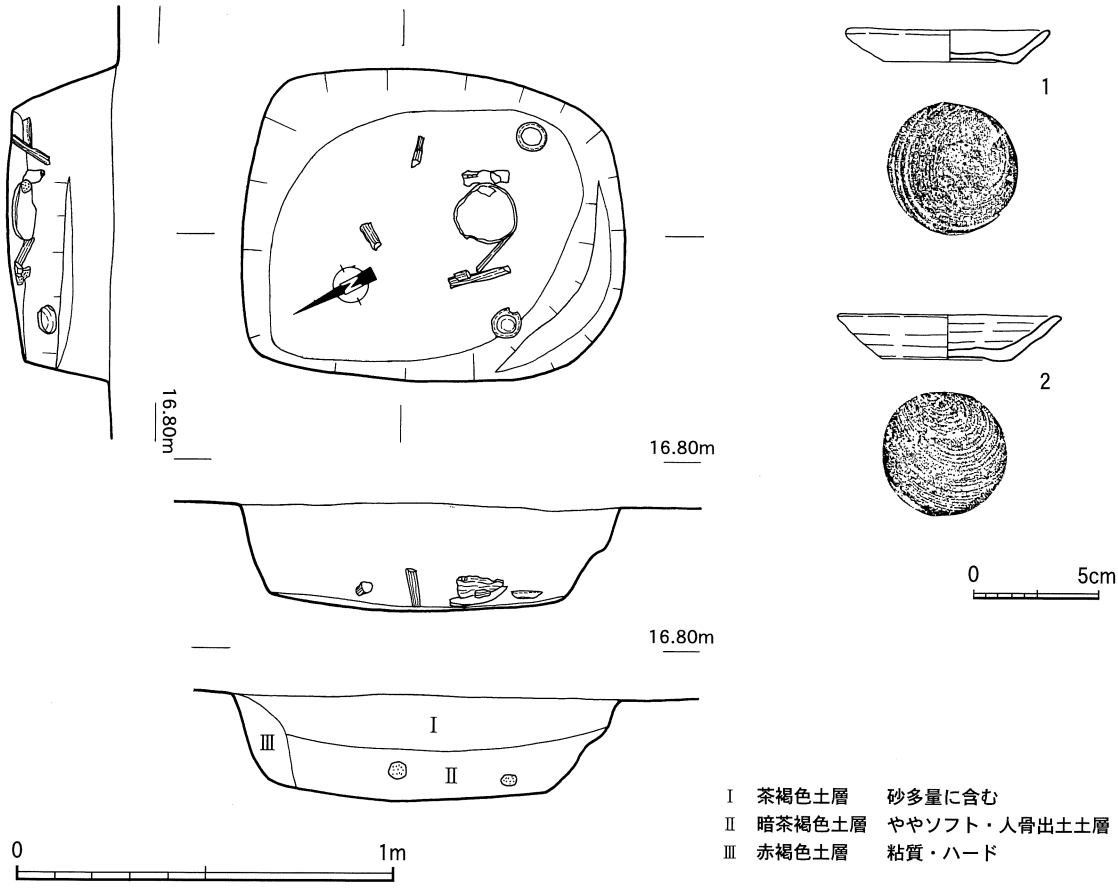
頭骨の両隅からそれぞれ1枚ずつ、計2枚の土師器小皿が出土した。1は口径8.2㎝、底径5.2㎝、器高1.3㎝で底部糸切りである。口縁端部内面にススが付着していることから、灯明皿として使用されていたことがわかる。東隅の床面直上から出土した。2は口径8.9㎝、底径5.2㎝、器高1.3㎝で底部糸切りである。西側の傾斜面に張り付いた状況で出土した。この他にも径1㎝前後の小石（石英）3個が被葬者の腹部付近から出土した。

出土遺物からみた1号墓は16世紀後半代に構築されたと考えられる。

表19　利光遺跡鵜ノ木地区1号墓出土土器観察表

（単位は㎝）

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 色　調 | 胎　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小皿 | 8.2 | 5.2 | 1.3 | 橙色 | 砂粒・角閃石 | |
| 2 | 小皿 | 8.9 | 5.0 | 1.8 | 明褐色 | 砂粒・角閃石・長石 | |



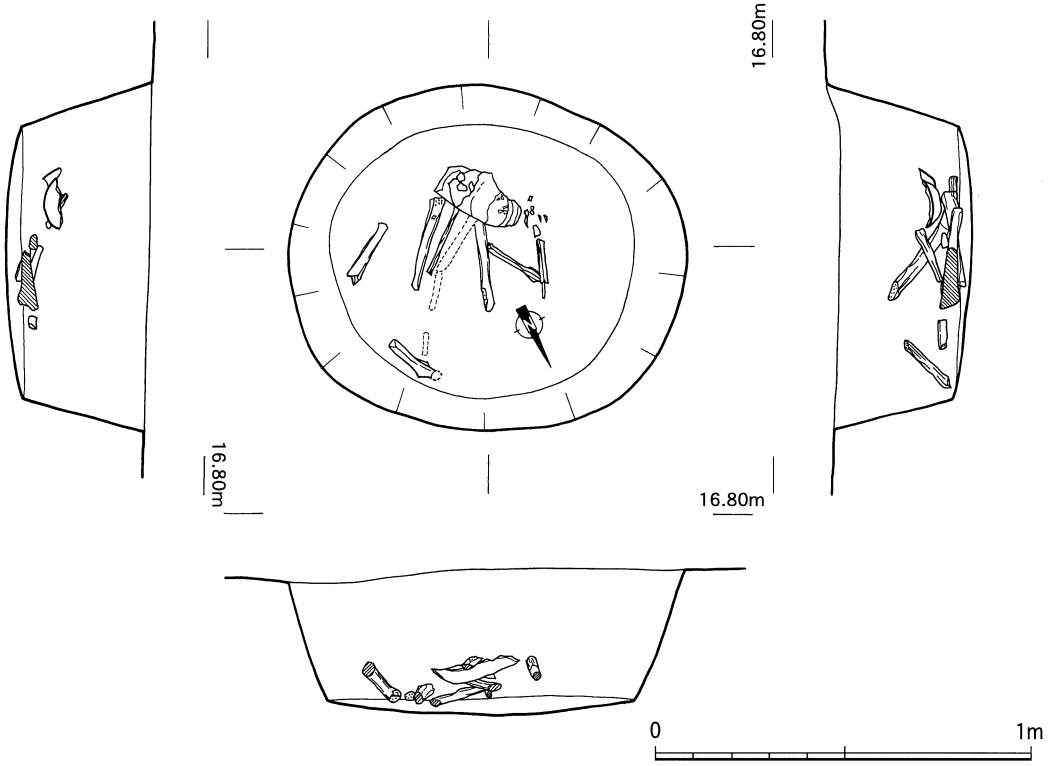

第107図　利光遺跡鵜ノ木地区1号墓及び出土遺物実測図（1／20・1／3）

### ２号墓（第108図）

２号墓はＢ区の南端、１号墓の南２m付近に位置する。検出面での標高は16.7mである。土坑はほぼ円形で、規模は106×91×38㎝、内法は82×72㎝である。土坑上面は削平が激しく、残りは悪い。床面はほぼ平坦である。

土坑内からは１体分の人骨が出土した。出土した人骨は大腿骨・脛骨・上腕骨の大きさからみて、成年以上の男性で、左足は立て膝をつき、座った状態で上体が右に傾いたまま埋葬されたと考えられる。また、頭部は西方向に向かっていたと思われるが、その後、前方に転げ落ちている。

副葬品はなく、明確な時期は不明であるが、１号墓と隣接していることからみて、１号墓と差異のない時期の構築と思われる。




第108図　利光遺跡鵜ノ木地区２号墓実測図(1／20)

### Ｃ）土坑(第109～111図)

土坑はＢ・Ｃ区を中心に13基確認された。上部の削平が激しく、残りはよくなかった。

#### 土坑１（第109図）

土坑１はC区の北端に位置する。規模は東西0.62m、南北1.22m、検出面からの深さは30～50㎝前後の不定形土坑である。南北の両端を柱穴で掘り込まれている。主軸方位はN-16°-Eを示す。土坑に伴うと考えられる遺物の出土はない。

#### 土坑２（第109図）

土坑２はC区の北端、土坑１の南４m付近に位置する。規模は東西1.72m、南北1.18m、内法は1.5×1.1m、検出面からの深さは７㎝前後の不定形土坑で残りは悪い。主軸方位はN-19°-Eを示す。土坑に伴うと考えられる遺物の出土はない。

**土坑３（第109図）**

土坑３は調査区の北側、土坑２の南1.5mに位置する。規模は東西1.42m、南北1.0m、内法は１.12×0.8m、 検出面からの深さは６㎝前後の楕円形をした土坑で、 残りは悪い。 主軸方位はN-19°-Eを示す。土坑に伴うと考えられる遺物の出土はない。

**土坑４（第109図）**

土坑４は調査区の北東隅、土坑３の東4.5mに位置する。規模は東西1.1m、南北0.63m、内法は0.9×0.45m、 検出面からの深さは30～40㎝前後の不定形土坑で、 残りは悪い。 主軸方位はN-11°-Eを示す。中央部分から角礫２点が出土した。柱穴の根石か根締石の可能性をもつ。土坑に伴うと考えられる遺物の出土はない。

**土坑５（第109図）**

土坑５は調査区の北東隅、土坑４の南1.5mに位置する。規模は東西2.73m、南北1.67m、内法は1.32×0.8m、検出面からの深さは５㎝前後のややいびつな隅丸方形をした土坑で、残りは悪い。主軸方位はN-31°-Eを示す。土坑に伴うと考えられる遺物の出土はない。

**土坑６（第110図）**

土坑６は調査区の中央やや北寄り、C区の南西方向に位置する。溝１によって南側を削平されている。規模は東西1.78m、南北は推定で0.9m前後、内法は1.55×0.6＋αm、検出面からの深さは18㎝前後の隅丸長方形をした土坑で、残りはあまり良くない。主軸方位はN-27°-Eを示す。土坑に伴うと考えられる遺物の出土はない。

**土坑７（第110図）**

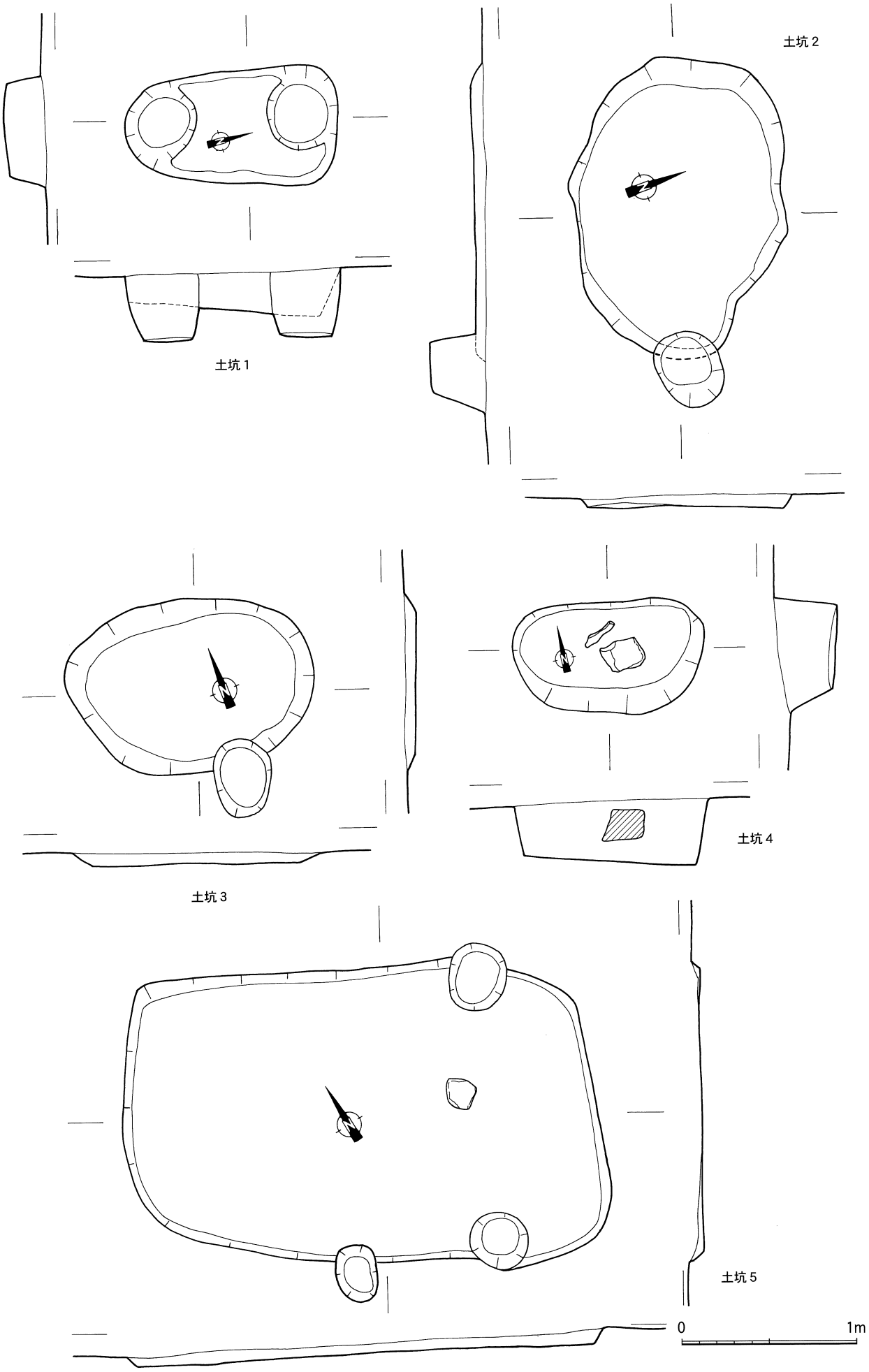
土坑７は調査区の中央やや北寄り、C区の南東に位置する。溝１の北側肩部分を切っている。規模は東西2.0m、南北は推定で0.75m、内法1.75×0.55m、検出面からの深さは14㎝前後の隅丸方形をした土坑で、残りは悪い。主軸方位はN-13°-Eを示す。土坑に伴うと考えられる遺物の出土はない。

**土坑８（第110図）**

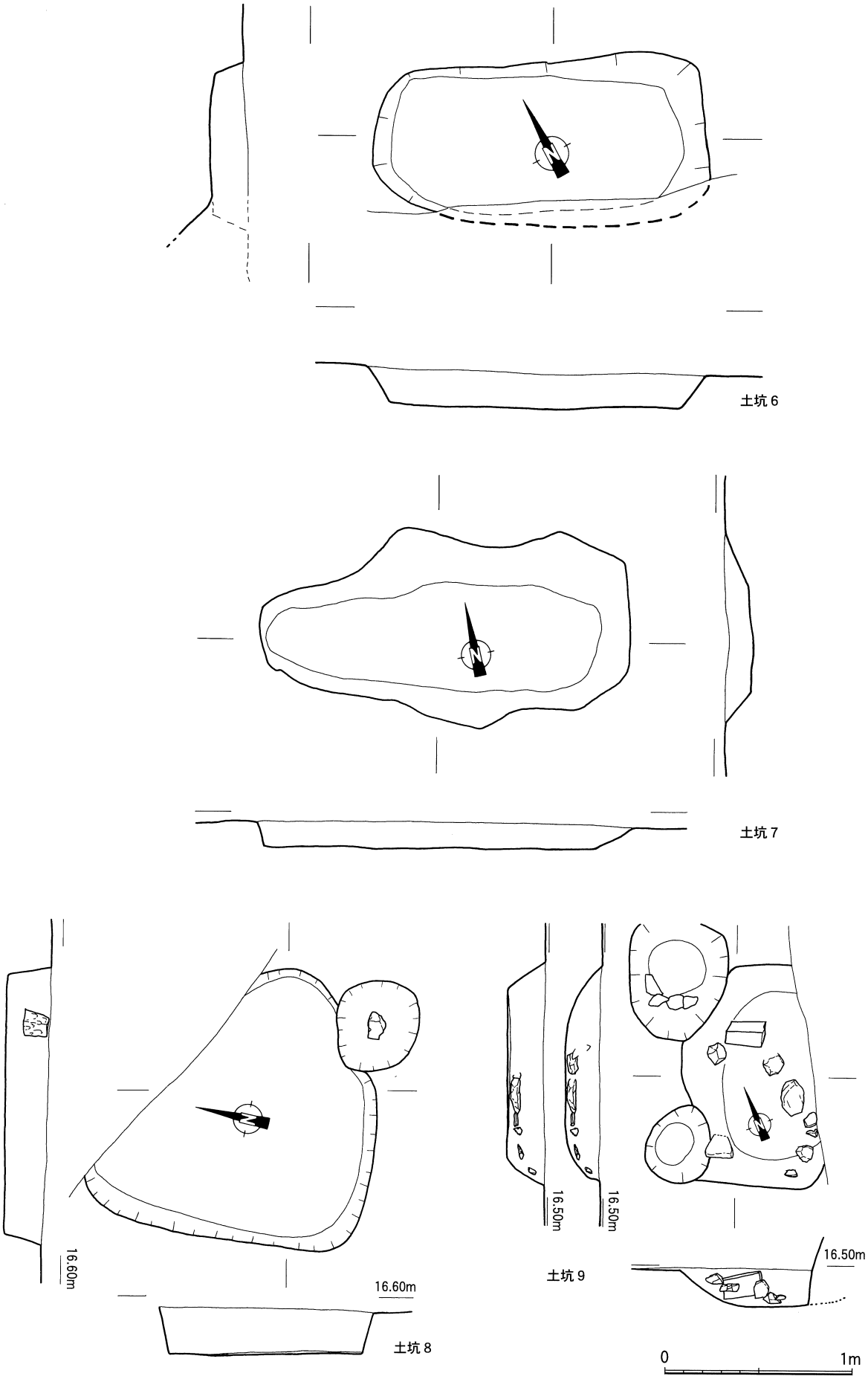
土坑８は調査区の中央やや北寄り、B区の北端に位置する。一部未調査である。検出面での標高は16.5mである。規模は東西1.45m、南北は推定で1.5m前後、内法は1.35×1.4＋αm、検出面からの深さは20～25㎝前後の隅丸長方形をした土坑と思われる。主軸方位はN-12°-Wを示す。土坑に伴うと考えられる遺物の出土はない。

**土坑９（第110図）**

土坑９は調査区のほぼ中央、東端に位置する。一部未調査である。検出面での標高は16.5mである。規模は東西0.55＋αm、南北1.17m、内法は0.5＋α×0.9m、検出面からの深さは19㎝前後の隅丸方形か長方形をした土坑と思われる。主軸方位はN-24°-Eを示す。土坑内からは焼土・炭と一部被熱した礫群が出土したが、床面の被熱はみられず、後で投げ込まれたものと考える。土坑に伴うと考えられる遺物の出土はない。



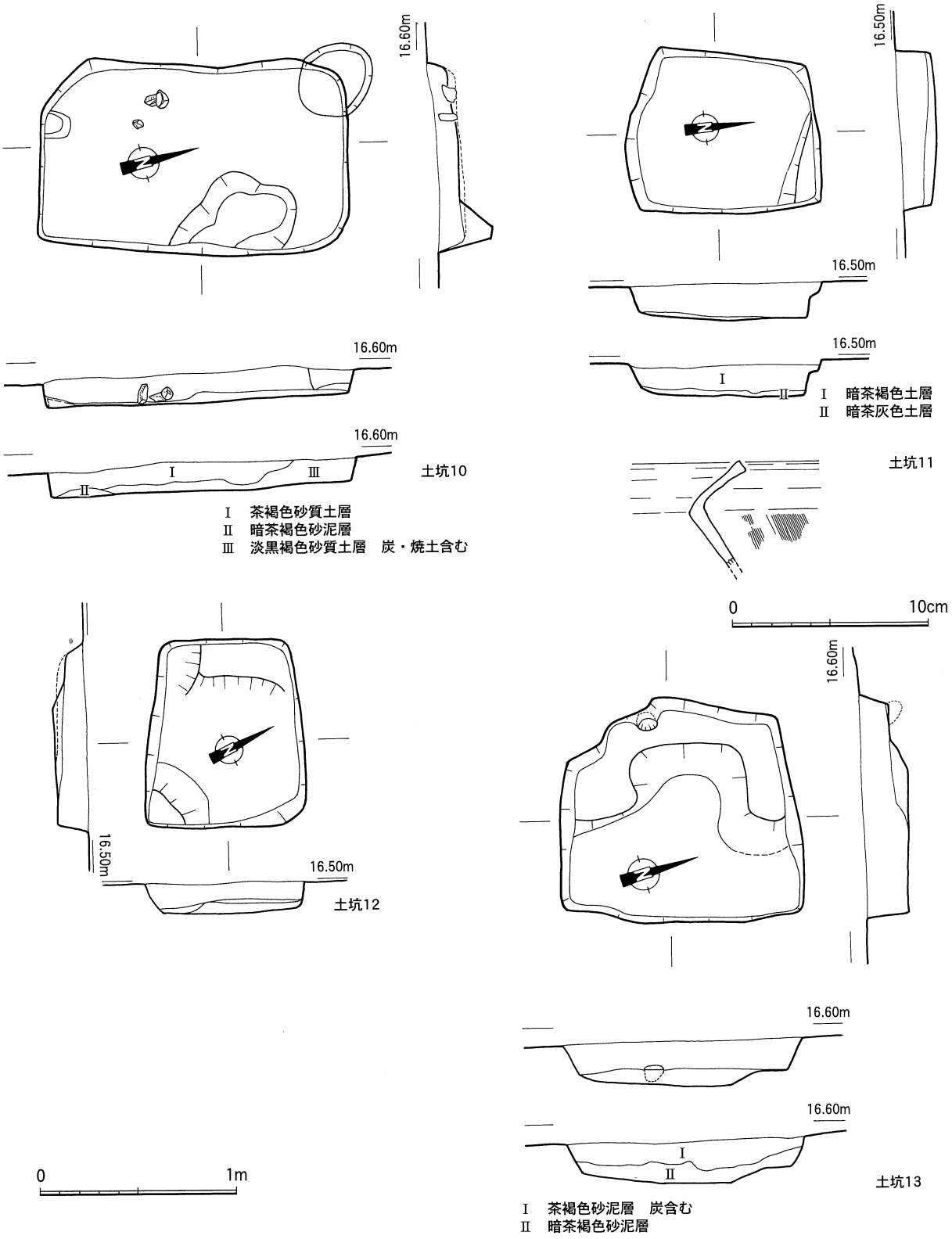

第109図　利光遺跡鵜ノ木地区土坑１～５実測図(1／30)




第110図　利光遺跡鵜ノ木地区土坑6～9実測図(1／30)

### 土坑10（第110図）

土坑10は調査区のほぼ中央東側、土坑９の西５m付近に位置する。検出面での標高は16.5mである。規模は東西0.96m、南北1.55m、内法は0.86×1.51m、検出面からの深さは10㎝前後の隅丸長方形をした土坑である。残りはあまり良くない。主軸方位はN-15°-Eを示す。土坑内からは礫数点が出土しただけで、土坑に伴うと考えられる遺物の出土はない。




第111図　利光遺跡鵜ノ木地区土坑10～13実測図及び出土遺物実測図(1／30・1／3)

**土坑11（第111図）**

土坑11は調査区のほぼ中央に位置する。検出面での標高は16.5mである。規模は東西0.81m、南北0.95m、内法は0.76×0.87m、検出面からの深さは20㎝前後のほぼ方形を呈した土坑である。残りはあまり良くない。主軸方位はN-6°-Eを示す。北東コーナー付近に一段の段差を持つ。土坑内からは土師器甕の口縁部１点が出土した。当土坑に伴うものではない。

**出土遺物**

土師器甕の口縁部片で、胎土には砂粒・石英・角閃石が含まれ、外面の調整は口縁部がヨコナデで胴部がハケ目調整、内面は口縁部がヨコナデで胴部はケズリを行っている。焼成は良好で、色調は内外面ともにぶい黄褐色である。庄内から布留並行期と考える。

**土坑12（第111図）**

土坑12は調査区のほぼ中央、土坑11の南0.5m付近に位置する。検出面での標高は16.5mである。規模は東西0.94m、南北0.8m、内法は0.89×0.7m、検出面からの深さは16㎝前後のややいびつな方形の土坑である。残りはあまり良くない。主軸方位はN-26°-Eを示す。土坑に伴うと考えられる遺物の出土はない。

**土坑13（第111図）**

土坑13は調査区のほぼ中央、土坑12の西1.5m付近に位置する。検出面での標高は16.5mである。規模は東西1.1m、南北1.2m、内法は1.02×1.05m、検出面からの深さは約22㎝でややいびつな方形の土坑である。残りはあまり良くない。主軸方位はN-17°-Eを示す。床面は西側に一段の段差をもつ。土坑に伴うと考えられる遺物の出土はない。

**d）掘立柱建物跡（第112～120図）**

掘立柱建物跡はＢ・Ｃ区を中心に16棟確認された。現地及び図上で復元したものであり、実際はさらに数棟の建物が建っていたものと考える。掘立柱建物跡はＣ区北端で１棟、Ｂ区の中央東側を中心に15棟を確認した。Ｂ区では多数の柱穴が確認されたため、建物の配置に困難を極めた。切り合いも多く、復元されたものの中には、実際には配置の違うものが存在する可能性を持つ。また、掘立柱建物跡の柱穴内からは当遺構の時期を決定する遺物の出土はなかった。

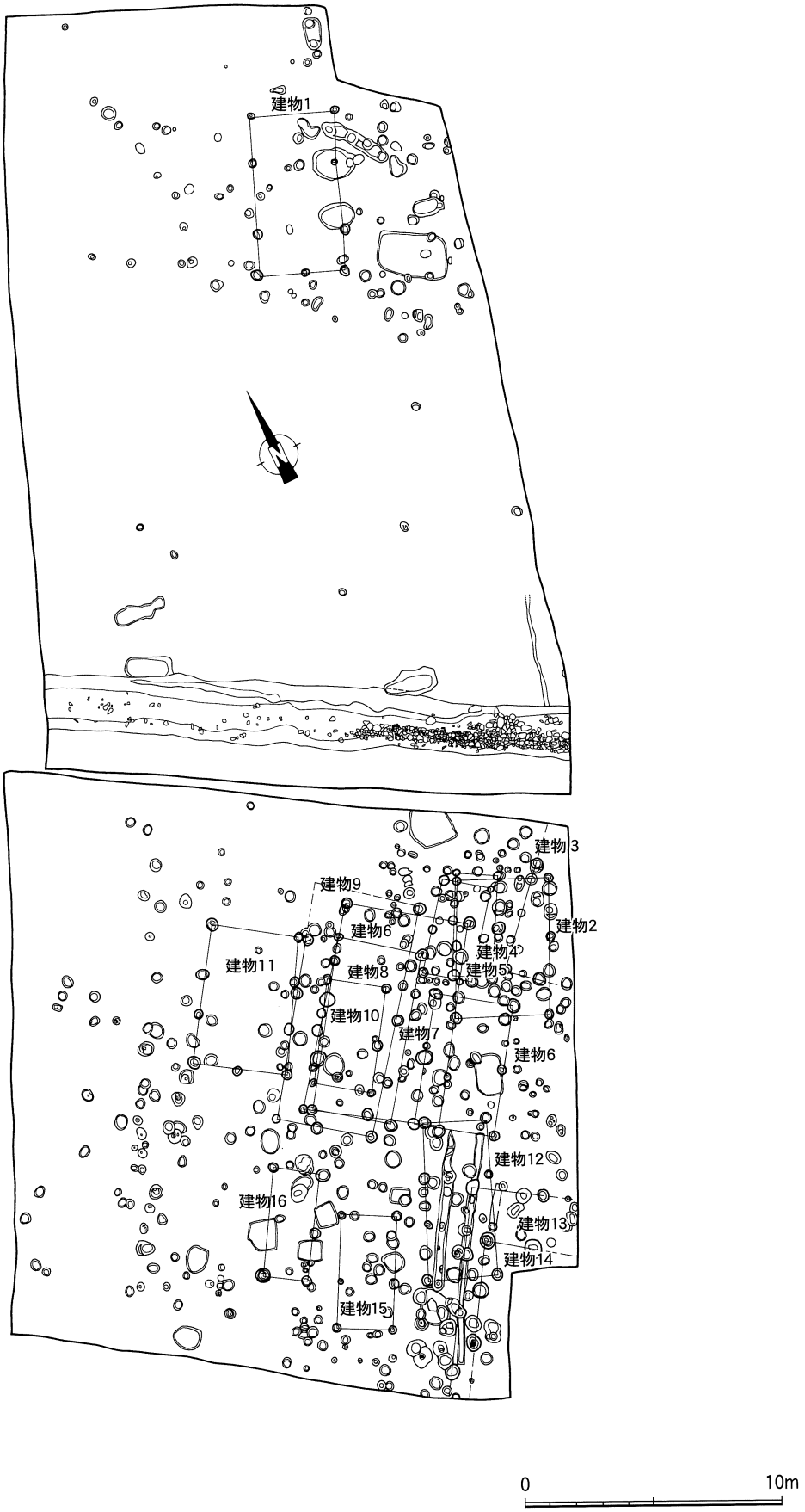
Ｃ区で確認された溝１がＢ区で確認された土坑墓・土坑・掘立柱建物跡を有する屋敷の北限と考えると、以下に説明する建物跡は、16世紀後半代の遺構と考えられる。

**建物１（第113図）**

建物１は調査区の北端に位置する。主軸をN-19°-Eにとる南北棟で、桁行３間、梁行２間の建物であるが、北側の梁中央部の柱穴が不明である。地形的には北方向から南方向へ緩やかに下降する。規模は桁間6.2m、梁間3.3～3.7mである。柱間は桁行の両端が1.7m前後、中央部分が2.7m、梁行で1.7mである。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径30～40㎝、確認面からの深さは10～35㎝である。根石や根締め石は確認できなかった。

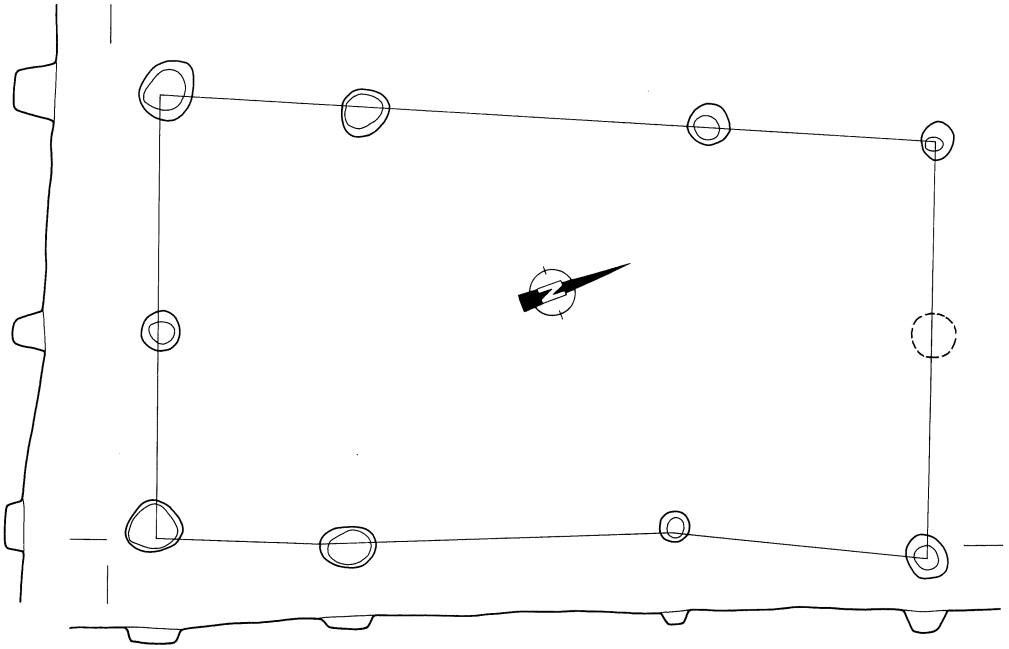
**建物２（第113図）**

建物２は調査区のほぼ中央、Ｂ区の北西方向に位置する。検出面での標高は16.5mで、主軸をN-23°-Eにとる南北棟で、桁行２間、梁行２間の建物である。地形的にはほぼ平坦である。規模は

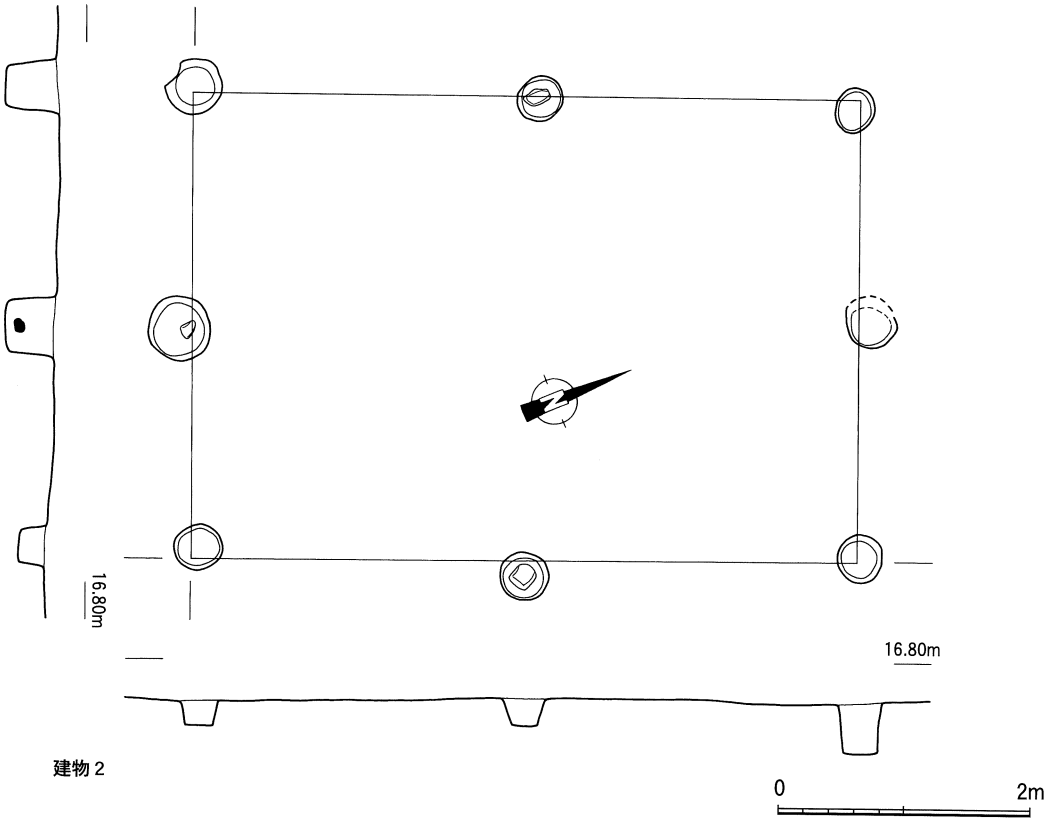



第112図　利光遺跡鵜ノ木地区掘立柱建物跡配置図(1／250)

桁間5.3m、梁間3.6m、柱間は桁行で2.6m前後、梁行で1.9m前後である。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径35～50㎝、確認面からの深さは25～40㎝である。桁行の西側中央柱穴から根石が、梁行の南側中央柱穴から根締め石１個が検出された。

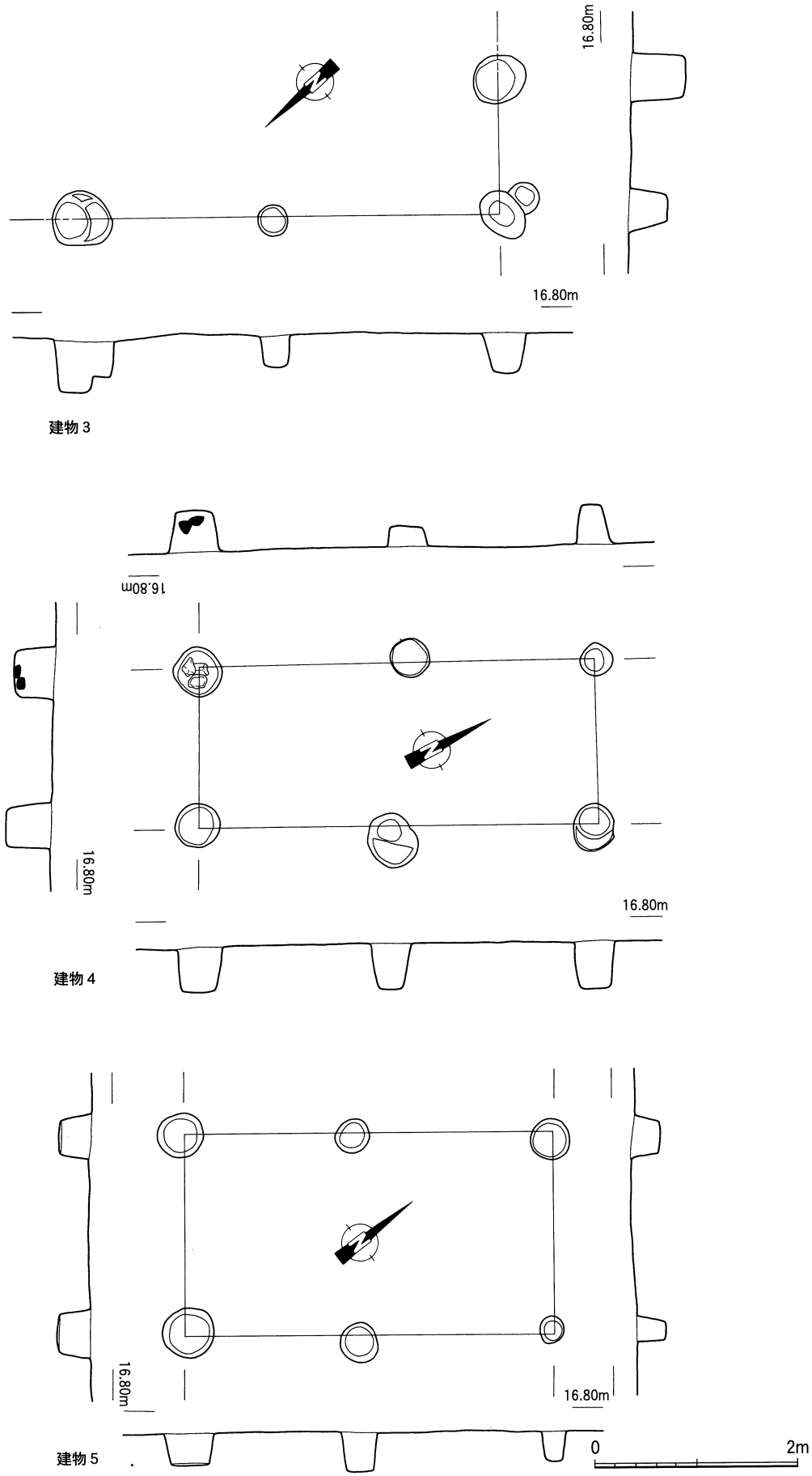


建物１




建物２

第113図　利光遺跡鵜ノ木地区建物１・２実測図(1／60)




第114図　利光遺跡鵜ノ木地区建物3～5実測図(1／60)

**建物３（第114図上）**

建物３はＢ区の北西方向、建物２と重なり合って位置する。検出面での標高は16.5mで、主軸をN-41°-Eにとる南北棟の建物と思われる。確認できた部分は西側の桁の一部分と南側の梁の一部分だけである。現状では桁行２間、梁行１間が確認されたが、柱穴間の幅から梁行部分は少なくとも１間は延びるものと考える。地形的には西から東に向かって緩やかに下降傾斜している。現状での規模は桁間4.4＋αm、梁間1.4＋αm、柱間は桁行で2.2m前後、梁行で1.4m前後である。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径30～50㎝、確認面からの深さは30～55㎝である。根石や根締め石は確認できなかった。

**建物４（第114図中）**

建物４はＢ区の北西方向、建物２の北西コーナー付近で重なり合うように位置している。検出面での標高は16.6mである。主軸をN-27°-Eにとる南北棟で、桁行２間、梁行１間の建物である。地形的には西側部分がやや高い位置にある。規模は桁間4.0m、梁間1.6m、柱間は桁行で2.0m、梁行で1.6mのやや小型の掘立柱建物跡である。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径30～45㎝、確認面からの深さは45㎝前後である。南西角の柱穴床面から根石３個が検出された。根石は安山岩製で、比較的丁寧に並べられている。

**建物５（第114図下）**

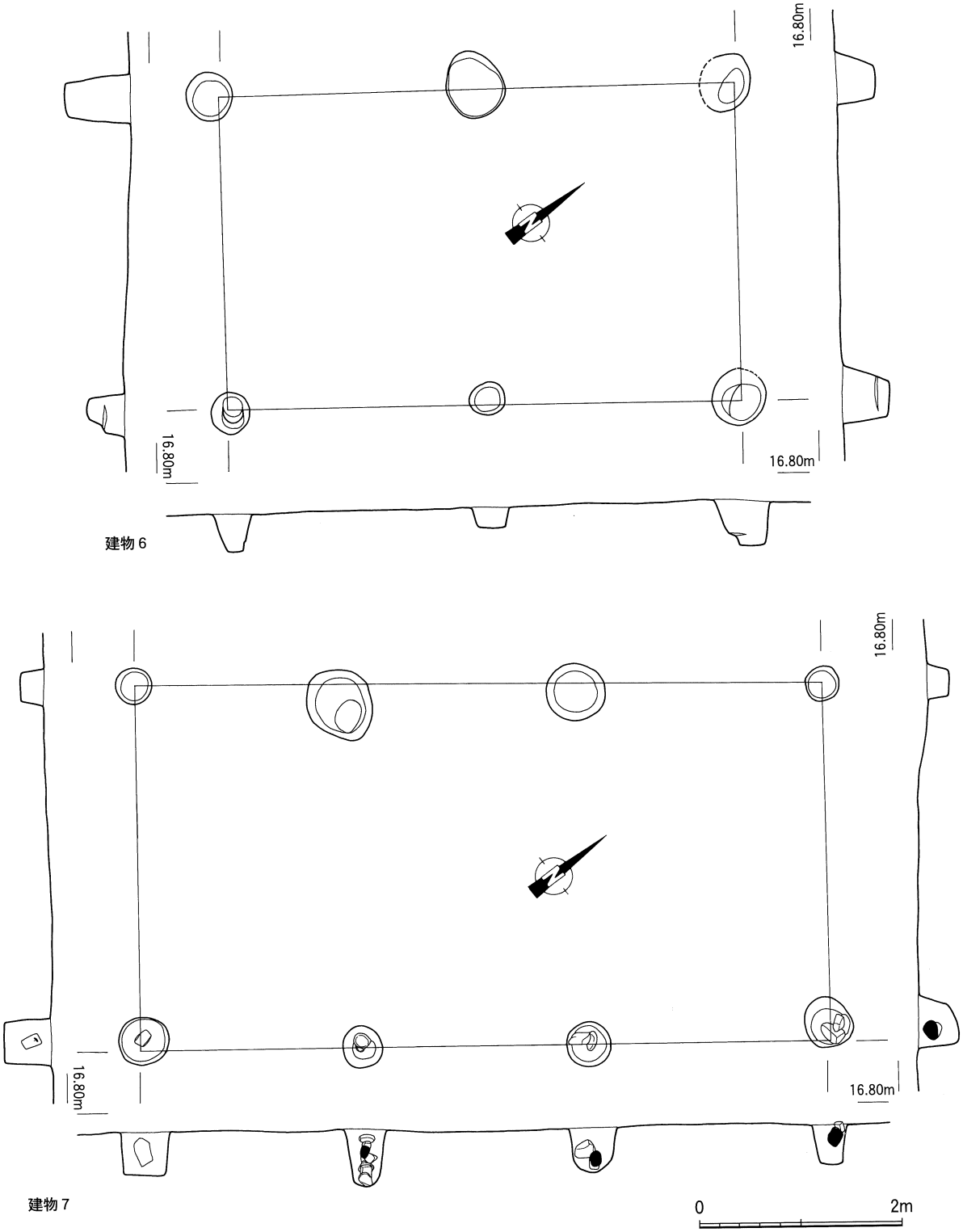
建物５はＢ区の北西方向、建物２・４と重なり合って構築されている。互いに主軸方位が違うため、時期差はあると思われるが、前後関係はつかめなかった。検出面での標高は16.6mである。主軸をN-32°-Eにとる南北棟で、桁行２間、梁行１間の建物である。規模は桁間3.6m、梁間2.0m、柱間は桁行で1.8m～1.9m、梁行で2.0mである。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径35～45㎝、確認面からの深さは35～45㎝前後である。根石や根締め石は確認できなかった。

**建物６（第115図上）**

建物６はＢ区の北西方向、建物２と一部重なり、建物５の南側に並列して構築されている。検出面での標高は16.6mである。主軸をN-33°-Eにとる南北棟で、桁行２間、梁行１間の建物である。建物５と比較するとやや大形の掘立柱建物跡である。地形的には北西から南東に向かってごく緩やかに下降傾斜する。規模は桁間5.1m、梁間3.1m、柱間は桁行で2.6m、梁行で3.1mである。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径40～50㎝、確認面からの深さは40～65㎝前後である。根石や根締め石は確認できなかった。

**建物７（第115図下）**

建物７はＢ区の北西側のやや中央よりに位置し、建物６の約1.5m西側に、南側の梁行を揃えて構築されているため、同時期のものと考える。検出面での標高は16.6m。主軸をN-35°-Eにとる南北棟で、桁行３間、梁行１間の建物である。地形的にはほぼ平坦である。規模は桁間6.8m、梁間3.4m、柱間は桁行が2.2m前後、梁行は3.4mである。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径40～50㎝で柱穴は比較的大きめである。確認面からの深さは20～50㎝前後である。東側桁行の柱穴全てから根締め石を確認した。桁行南側の柱穴には径15㎝、長さ25㎝前後の角礫１個が中央付近に補填されている。２番目の柱穴内からは西側に６個の小礫を床面から順に上部まで補填している。３番目の柱穴内には西側に２個の礫を根締め石として補填している。北端の柱穴内からは柱穴上部でやや大型の円礫１個と角礫１個が根締め石として使用されていた。



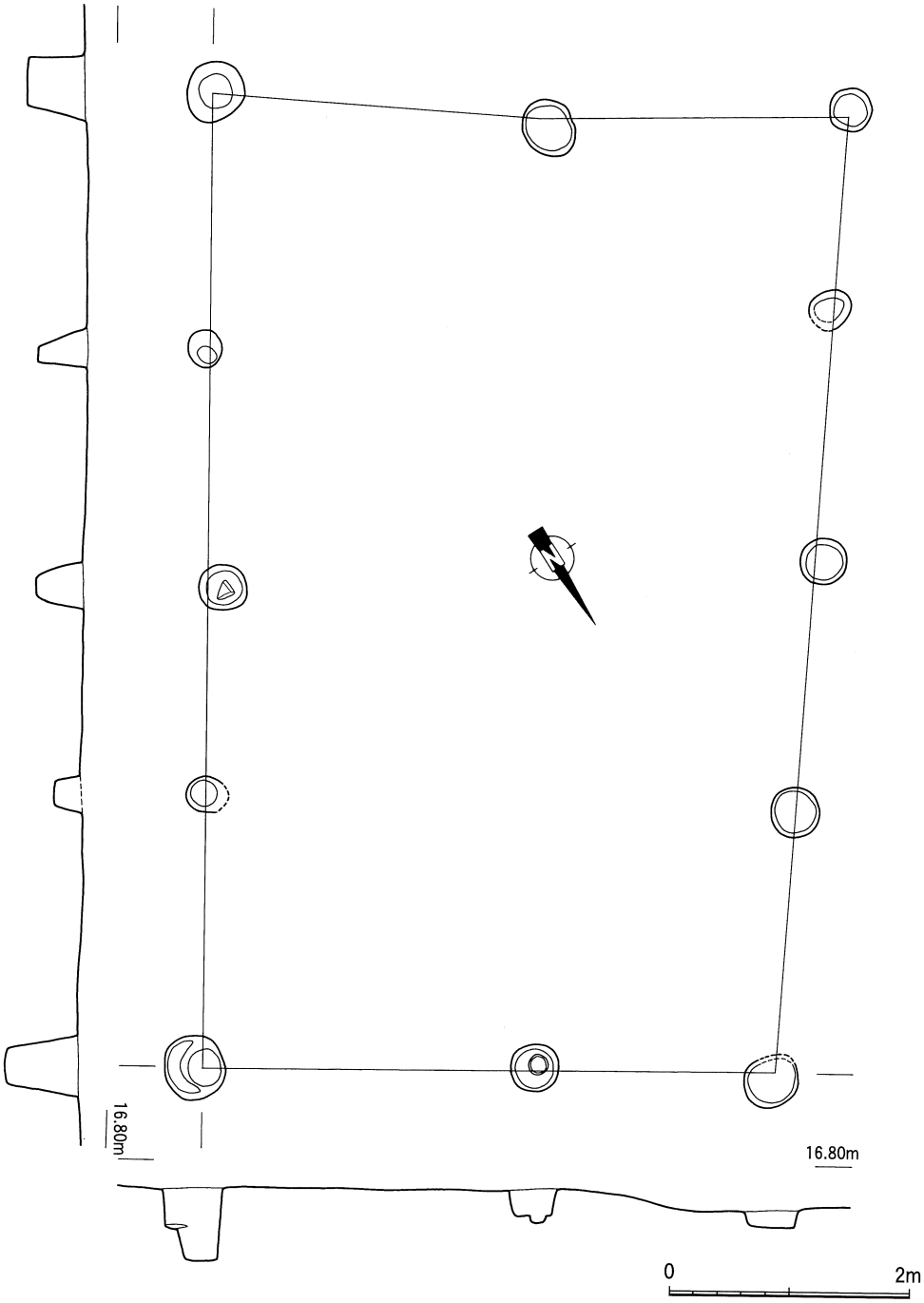

第115図　利光遺跡鵜ノ木地区建物６・７実測図(1／60)

**建物８（第116図）**

建物８はＢ区の北西側のやや中央よりに位置し、確認できた掘立柱建物跡内では大型の建物である。検出面での標高は16.6m。主軸をN-32°-Eにとる南北棟で、桁行４間、梁行２間の建物である。地形的には東側がやや高く、北西側に向かって、ごく緩やかに下降傾斜する。規模は桁間8.0m、梁間5.3m、柱間は桁行の両端間が2.3m前後、中央柱穴間が1.8m前後と両端間を広めに設けている。梁行は2.6m前後である。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径30～50㎝であるが、中央部分に位置する柱穴は比較的小さめで、各コーナー部分の柱穴は大きく造られている。確認面からの深さは40～65㎝前後である。東側桁行の中央柱穴から根締め石１個を確認した。

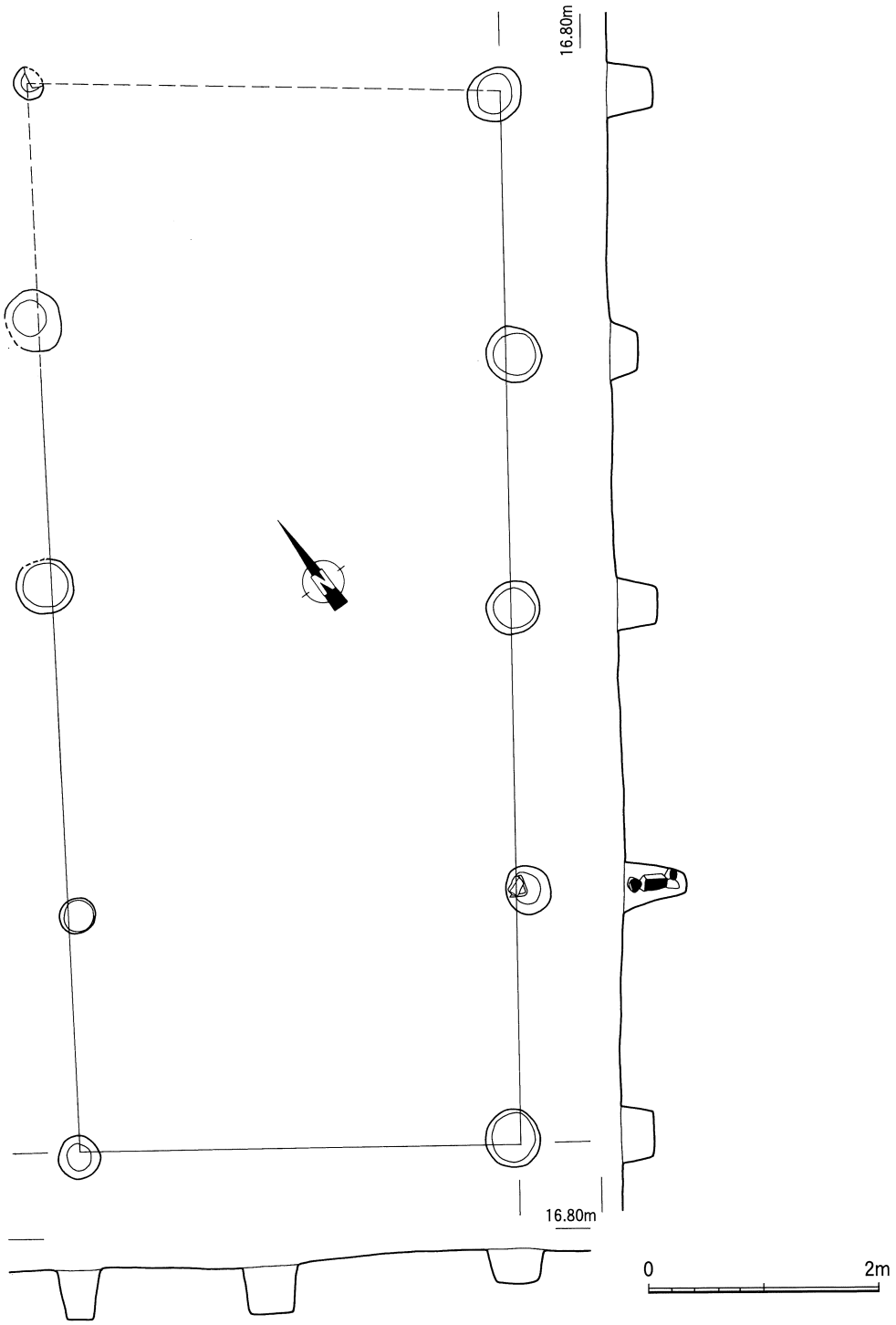
**建物９（第117図）**

建物９はＢ区北西側のやや中央よりに位置し、確認できた掘立柱建物跡内では最大の大きさであ




第116図　利光遺跡鵜ノ木地区建物８実測図(1／60)

る。北側梁行間の柱穴が確認できなかったため、桁行の北側部分はさらに延びる可能性がある。検出面での標高は16.6m。主軸をN-36°-Eにとる南北棟で、桁行４間、梁行２間の建物である。地形的には東側がやや高く、西側に向かってごく緩やかに下降傾斜する。現状での規模は桁間9.1m、梁間4.0m、柱間は桁行が2.1～2.3m前後、梁行は南側部分で1.9mと2.1mである。北側梁行は中央の柱穴２個が確認できなかったため、不明である。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径40～50cmと比較的大型である。確認面からの深さは30～55cm前後である。東側桁行の南から２番目の柱穴で角礫５個を使用した根締め石を確認した。根締め石は柱穴内の西側端に使用されていて、ほぼ床面から上部まで補填されている。




第117図　利光遺跡鵜ノ木地区建物９実測図(1／60)

**建物10（第118図上）**

建物10はＢ区の北西方向、やや中央よりに位置し、建物９内に重なりあって構築されている。検出面での標高は16.6m。主軸をN-31°-Eにとる南北棟で、桁行２間、梁行１間の小型の建物である。検出面からみた地形は北西側が低い傾斜地となっている。規模は桁間4.0m、梁間は2.3m、柱間は桁行で1.8mと2.2mで南側部分を広めにとっている。梁行は2.3mである。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径30～50㎝、確認面からの深さは30～50㎝前後である。根石や根締め石等は確認できなかった。

**建物11（第118図中）**

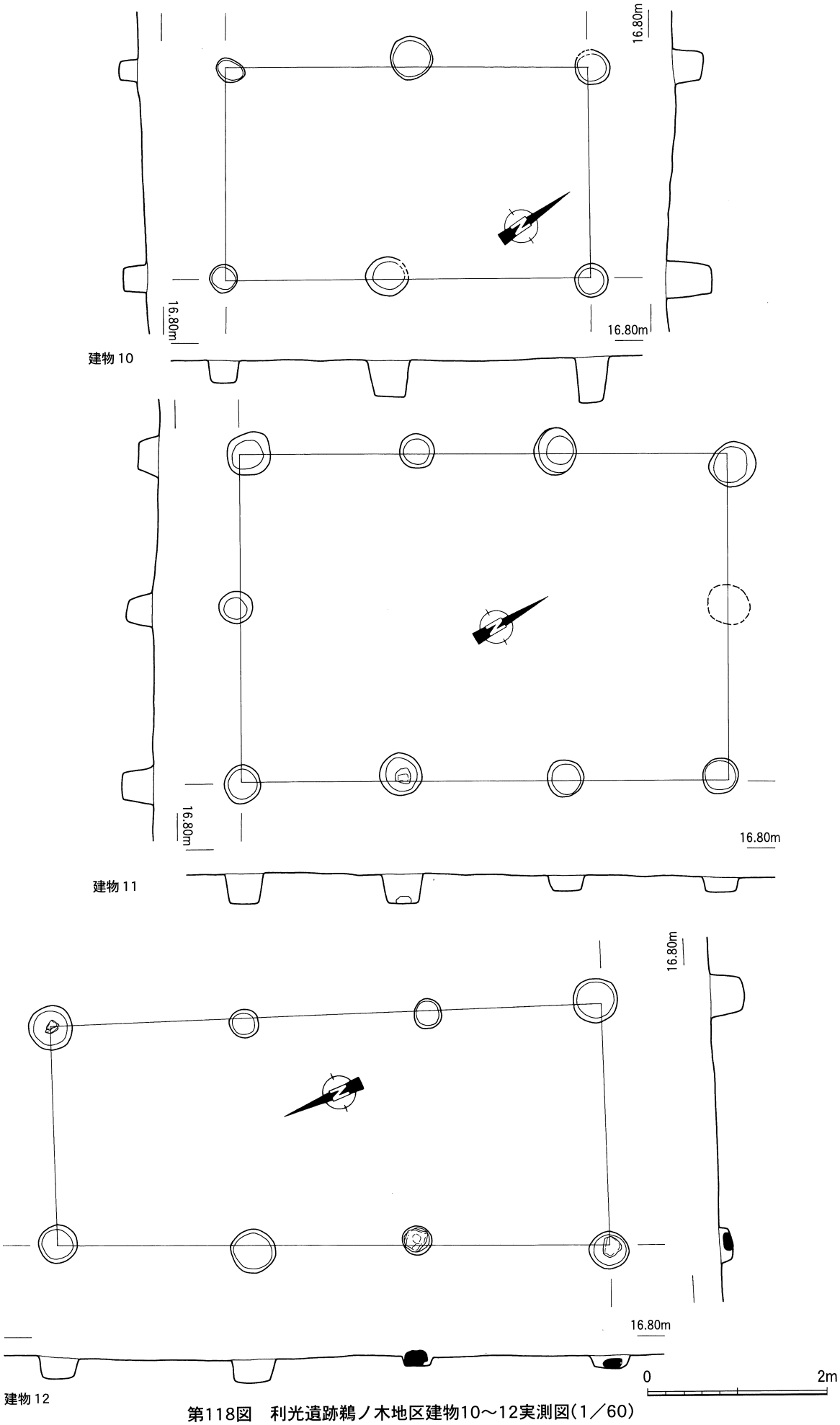
建物11はＢ区のほぼ中央よりに位置し、調査区内では一番西側である。建物10の西側に南側桁行を並べるように構築されていて、一連の可能性を持つ建物であろう。検出面での標高は16.6m。主軸をN-29°-Eにとる南北棟で、桁行３間、梁行１間の建物である。検出面からみた地形は南西側がやや高く、東側に向かって緩やかに下降する傾斜地となっている。規模は桁間5.4m、梁間は3.6m、柱間は桁行で1.7m、梁行で1.8mであるが、北側梁間の中央に位置する柱穴が今回確認できなかった。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径35～50㎝、確認面からの深さは20～35㎝前後と比較的浅く、後世の削平をかなり受けたものと推測される。根石は東側梁行の南から２番目の柱穴内で確認された。径25㎝、厚さ10㎝前後の円形河原石で、床面中央に据えられていた。根締め石は確認できなかった。

**建物12（第118図下）**

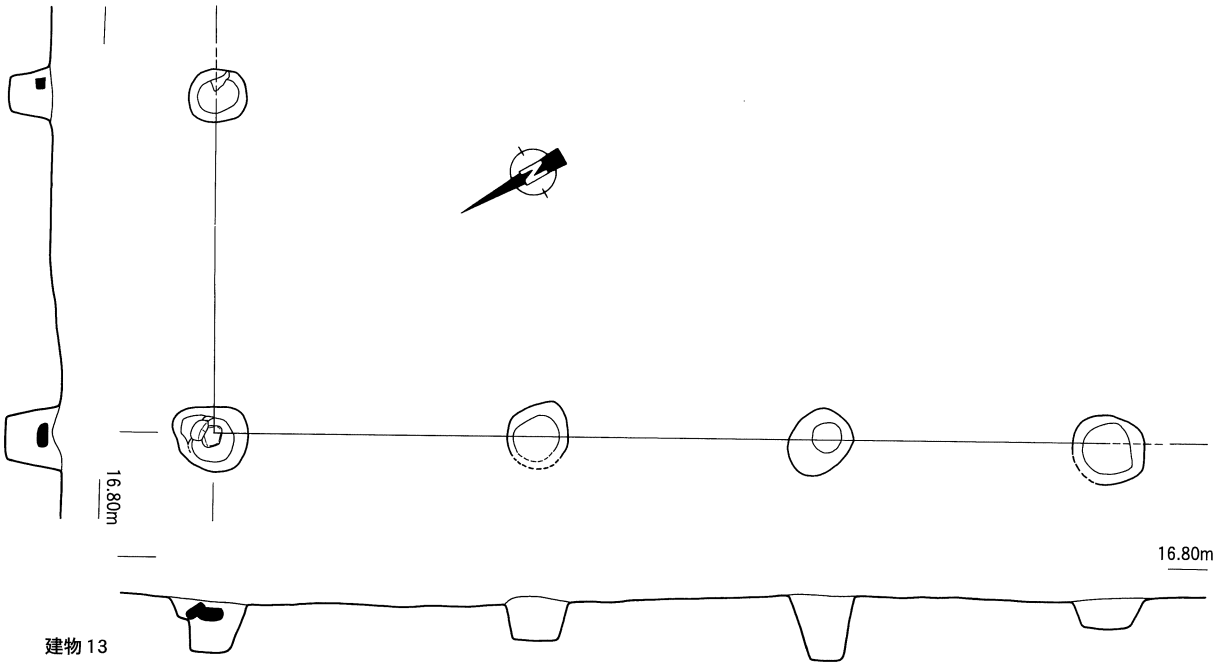
建物12はＢ区の南東方向に位置し、一部建物６・７と重なっている。検出面での標高は16.6m。主軸をN-20°-Eにとる南北棟で、桁行３間、梁行１間の建物である。検出面からみた地形は北西方向から南東方向に向かって緩やかに下降する傾斜地となっている。規模は桁間6.1m、梁間は2.6m、柱間は桁行で1.9～2.1m、梁行で2.6mである。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径30～50㎝、確認面からの深さは10～35㎝前後と比較的浅く、後世の削平をかなり受けたものと推測される。根石は２個の柱穴内で確認された。南西コーナーの柱穴と西側梁行の南から２番目の柱穴内で、厚さ10㎝前後の比較的大型の角礫がそれぞれ床面直上に据えられていた。また、北東コーナーの柱穴ではやや小型で薄めの根締め石２個が使用されていた。

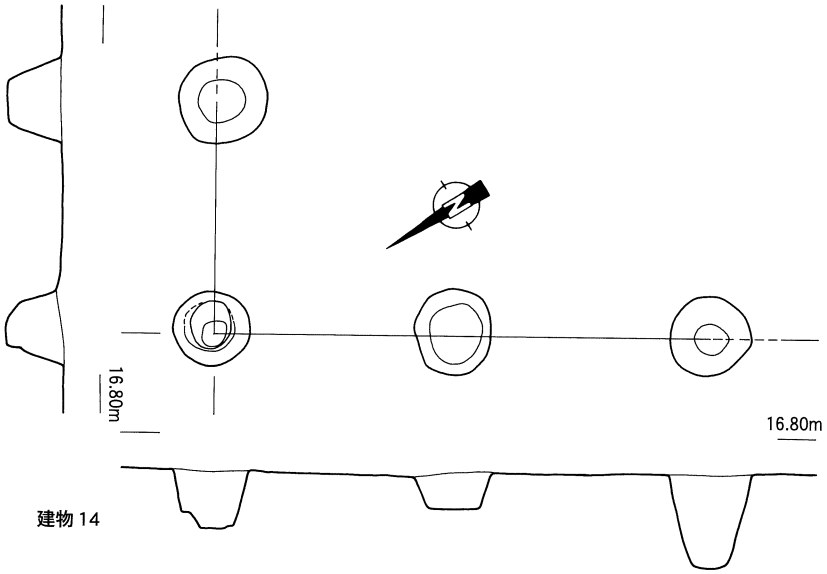
**建物13（第119図上）**

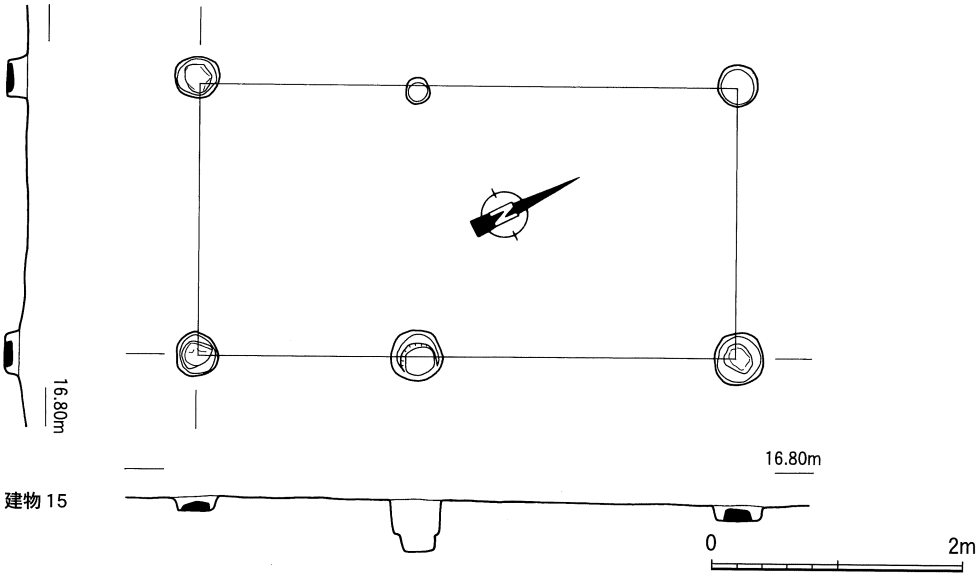
建物13はＢ区の南東隅に位置し、建物12・14と重なり合っている。検出面での標高は16.6mで、主軸をN-30°-Eにとる南北棟の建物と思われる。確認できた部分は西側の桁の一部分と北側の梁の一部分だけである。現状では桁行３間、梁行１間が確認されたが、柱穴間の幅から桁・梁行部分ともさらに延びると推測される。検出面からみた地形は南側がやや高く、東側に向かって緩やかに下降する傾斜地となっている。現状での規模は桁間7.1＋αm、梁間2.7＋αm、柱間は桁行で2.4m前後、梁行で2.7m前後である。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径45～60㎝と比較的大型である。確認面からの深さは10～35㎝と浅く、後世の削平をかなり受けたものと推測される。根石は北西コーナーの柱穴内で確認された。径20㎝、厚さ10㎝前後の扁平河原石を使用している。この柱穴は掘立柱建物構築以前の柱穴を切って掘り込んでいるため、根石が浮いた状態で確認された。根締め石は確認できなかった。




第118図　利光遺跡鵜ノ木地区建物10～12実測図(1／60)




第119図　利光遺跡鵜ノ木地区建物13～15実測図(1／60)

**建物14（第119図中）**

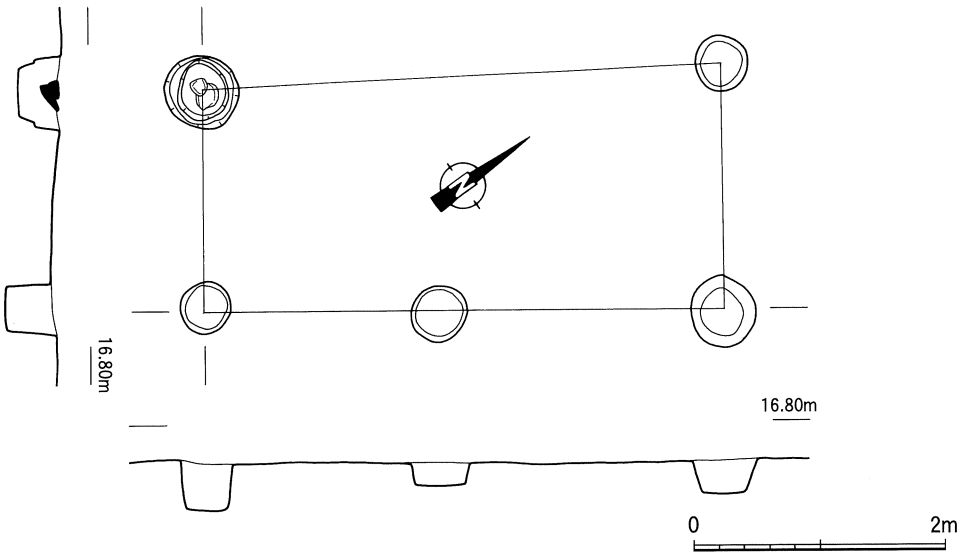
建物14はＢ区の南東隅に位置し、建物13の内部に構築されている。検出面での標高は16.5mで、主軸をN-32°-Eにとる南北棟の建物と思われる。確認できた部分は西側の桁の一部分と北側の梁の一部分だけである。現状では桁行２間、梁行１間が確認されたが、柱穴の大きさや柱穴間の幅から桁・梁行部分ともさらに延びるものと推測される。検出面からみた地形はほぼ平坦である。現状での規模は桁間4.0＋αm、梁間1.9＋αm、柱間は桁行で2.0m、梁行で2.1mである。柱穴の掘り方は円形で、径60～70㎝と大型である。確認面からの深さは30～70㎝である。根石・根締め石等の施設は確認できなかった。

**建物15（第119図下）**

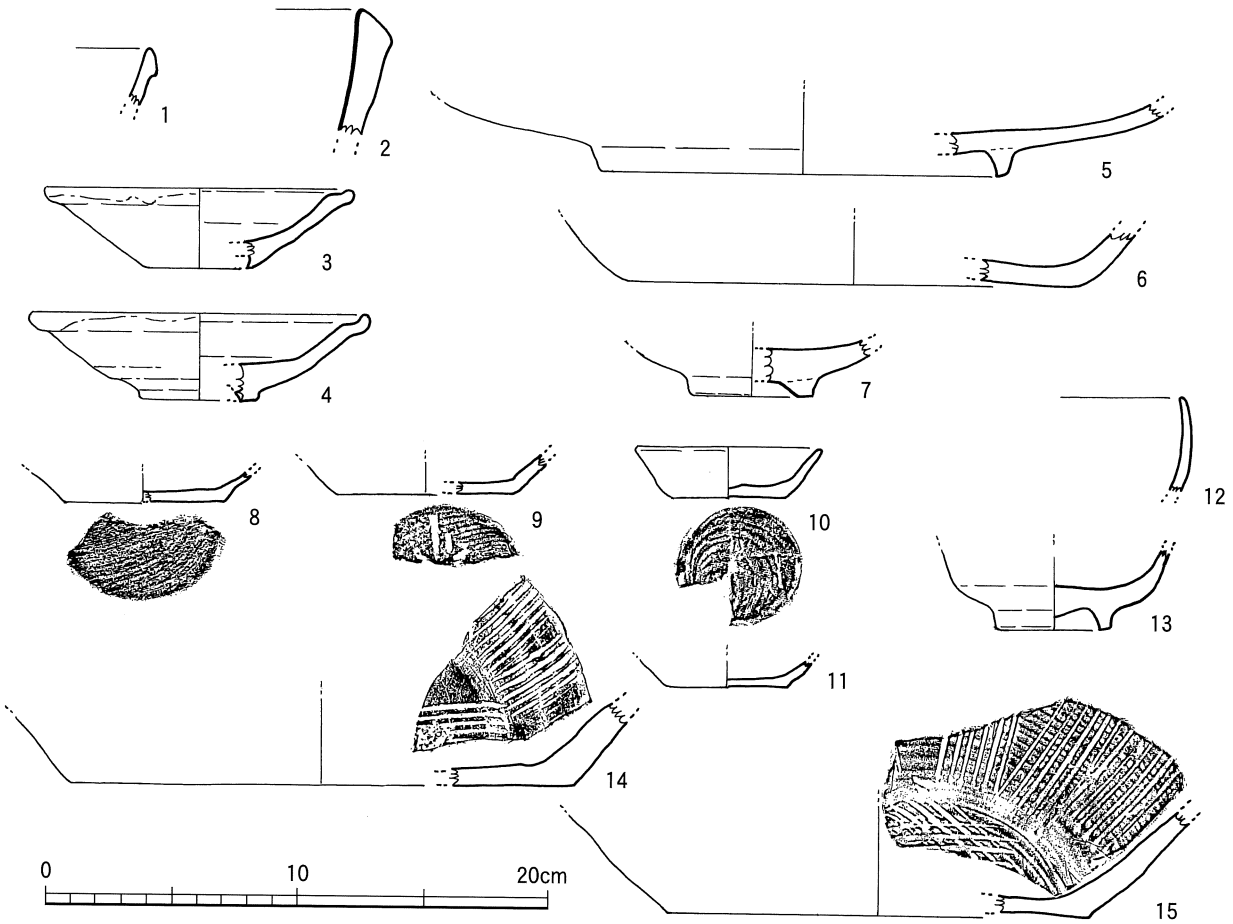
建物15はＢ区の南側中央付近に位置し、建物間の切り合いはない。検出面での標高は16.6m。主軸をN-26°-Eにとる南北棟で、桁行２間、梁行１間の建物である。検出面からみた地形は南側から北側に向かって緩やかに下降する傾斜地となっている。規模は桁間4.3m、梁間は2.1m、柱間は桁行で1.8mと2.5mで、南側部分の柱穴間が狭い造りとなっている。梁行は2.1mである。柱穴の掘り方は円形で、径25～40㎝、確認面からの深さは15～30㎝前後と比較的浅く、後世の削平をかなり受けたものと推測される。根石は３カ所の柱穴内で確認された。南側梁部分の柱穴と、北東コーナーの柱穴である。いずれも径20㎝、厚さ７㎝前後の礫を使用し、床面直上の中央部分に据えられていた。根締め石は確認できなかった。

**建物16（第120図）**

建物16はＢ区の南側中央付近に位置し、土坑11～13と重なっている。検出面での標高は16.5m。主軸をN-33°-Eにとる南北棟で、桁行２間、梁行１間の建物であるが、南側桁行の中央柱穴が土坑13のため、消滅している。検出面からみた地形は北西方向から南東方向に向かって緩やかに下降する傾斜地となっている。規模は桁間4.1m、梁間は2.0m、柱間は桁行で1.9mと2.2mで、南側部分の柱穴間が狭い造りとなっている。梁行で2.6mである。柱穴の掘り方は円形で、径40～50㎝、確認面からの深さは20～35㎝前後と比較的浅く、後世の削平を受けたものと推測される。南西コーナーの柱穴内から根石２個が出土した。根締め石は確認できなかった。




第120図　利光遺跡鵜ノ木地区建物16実測図（1／60）

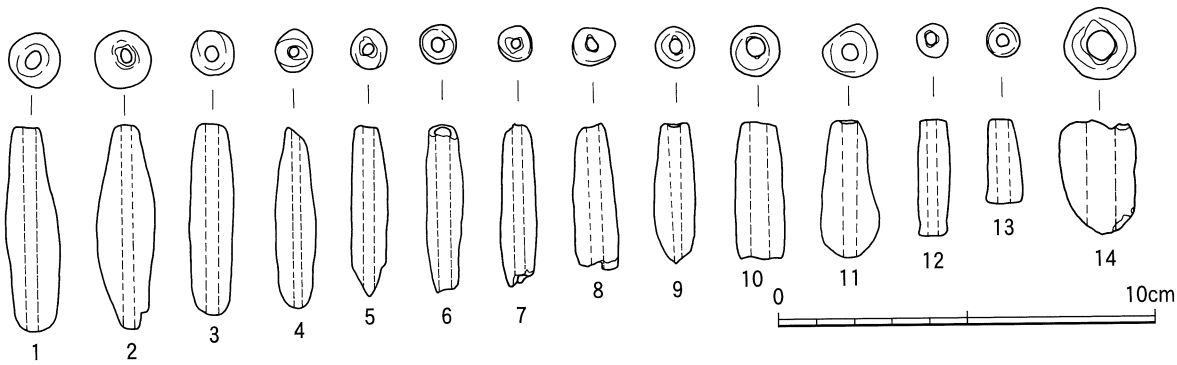



第121図　利光遺跡鵜ノ木地区出土近世土器実測図(1／3)

表20　利光遺跡鵜ノ木地区出土中・近世土器観察表

(単位はcm)

| 番号 | 器　種 | 種　別 | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 色　調 | 胎　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 碗 | 白磁 | — | — | — | 灰白色 | | |
| 2 | 碗？ | 陶器 | — | — | — | | | |
| 3 | 皿 | 陶器 | 12.2 | — | — | 灰白色 | | |
| 4 | 皿 | 陶器 | 13.4<br>(復元) | 4.8 | 3.5<br>(復元) | | | |
| 5 | 鉢or盤 | 瓦質土器 | — | 16.2<br>(復元) | — | 灰褐色 | 角閃石少、長石多 | |
| 6 | 鉢 | 瓦質土器 | — | 18.2<br>(復元) | — | 黄灰褐色 | 長石・赤色粒多 | |
| 7 | 埦 | 陶器 | — | 4.8 | — | | | |
| 8 | 皿 | 土師器 | — | 6.3<br>(復元) | — | 淡茶褐色 | 長石多 | 糸切り |
| 9 | 皿 | 土師器 | — | 6.8<br>(復元) | — | 淡茶褐色 | 長石多 | 糸切り |
| 10 | 小皿 | 土師器 | 7.3 | 4.6 | 2.1 | 橙褐色 | 長石多 | 糸切り |
| 11 | 小皿 | 土師器 | — | 4.8 | — | 淡茶褐色 | 角閃石少、長石多 | 糸切り |
| 12 | 埦 | 陶器 | — | — | — | 黒色 | | 同一個体か |
| 13 | 埦 | 陶器 | — | 4.5 | — | 灰褐色 | | |
| 14 | 擂鉢 | 陶器 | — | 19.8 | — | 赤茶褐色 | 長石少 | |
| 15 | 擂鉢 | 瓦質 | — | 16.8 | — | 灰黄褐色 | 長石多 | |




第122図　利光遺跡鵜ノ木地区出土土錘実測図（1／2）

表21　利光遺跡鵜ノ木地区出土土錘計測表

| 番号 | 最大長(cm) | 孔径(cm) | 最大径(cm) | 重量(g) | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 5.4 | 0.3 | 1.4 | 9.8 | 淡褐色 | |
| 2 | 5.4 | 0.3 | 1.5 | 10.5 | 淡褐色 | |
| 3 | 5.1 | 0.3 | 1.1 | 7.0 | 暗茶褐色 | |
| 4 | 4.8 | 0.2 | 1.0 | 4.2 | 灰白色 | |
| 5 | 4.5 | 0.3 | 1.0 | 3.9 | 淡黄色 | 一部欠損 |
| 6 | 4.4 | 0.4 | 1.0 | 3.8 | 黒褐色 | 一部欠損 |
| 7 | 4.3 | 0.3 | 0.9 | 3.1 | 灰色 | 欠損 |
| 8 | 3.9 | 0.4 | 1.2 | 3.4 | 淡黄色 | 欠損 |
| 9 | 3.8 | 0.3 | 1.1 | 4.0 | 淡褐色 | 欠損 |
| 10 | 3.6 | 0.5 | 1.3 | 6.4 | 暗灰褐色 | 欠損 |
| 11 | 3.6 | 0.4 | 1.5 | 2.6 | 淡褐色 | 欠損 |
| 12 | 3.1 | 0.3 | 0.9 | 2.7 | 黒褐色 | 欠損 |
| 13 | 2.2 | 0.3 | 0.9 | 1.9 | 淡茶褐色 | 欠損 |
| 14 | 3.0 | 0.8 | 1.9 | 5.5 | 橙褐色 | 欠損 |

## 小結

利光遺跡鵜ノ木地区の中・近世遺構は、現地表面から約80㎝掘り下げた面で確認された。確認された遺構は、溝１条と土坑群・土坑墓・掘立柱建物跡等である。調査区南側部分は緩やかに傾斜下降する斜面となる。この部分は昭和30年代の土地改良工事によって、谷であった部分を埋めて水田にしたものであろう。北側部分はC区で東西に走る溝が１条確認されている。この溝を中心に南側部分で土坑群・掘立柱建物跡・土坑墓等の遺構が検出されている。この溝を境に一つの屋敷を構成していたと推測する。溝から南の谷落ち部までは約50mである。

溝の南側（B区）部分では土坑墓２基、土坑９基、掘立柱建物跡15棟が検出されている。これらの遺構はB区の東側に集中しており、調査区外にもかなりの規模の遺構群が存在すると思われる。掘立柱建物跡は大きさに規則性はないが、いずれも南北棟であり、数棟ずつほぼ並列して建てられている。切り合いも多く、すべてが同一時期に建てられたわけではないが、構築時期に時期差はほとんどないものと思われる。また、掘立柱建物跡を構成する柱穴は、径が小さく、深度が浅いものが多いが、かなりの柱穴が根石・根締め石を持つため、恒常的な建物であろうと推測する。

この時期の遺物の出土は少なく、遺構に伴う遺物は溝１と１号土坑墓から出土した土器だけである。これら以外には一括遺物として10数点の陶器が出土している。いずれの土器の年代も16世紀後半を主流として、一部17世紀前半代のものが混入している。この時期は、天正14（1586）年の薩摩島津軍の豊後国進攻時の鶴ヶ城籠城や、戸次河原の合戦等の戦が当地区で幾度となく繰り返されており、この戦時の建物跡か、戦いに巻き込まれて破棄された屋敷の可能性を持つ。

溝１の北側約15mの範囲内には明確な遺構の検出はなく、柱穴数個が確認されただけである。この遺構空白地域のさらに北側部分で再び遺構が確認された。検出された遺構は土坑６基、掘立柱建物跡１棟、柱穴群である。南側ほどの遺構の密度はなく、深度も浅く残りは非常に悪い。この遺構群はさらに北に展開するものと思われたが、試掘調査の結果、後世の開発による攪乱を受けていて、既に消滅している。その先は脇ノ津留川の氾濫源となっている。遺構に伴う遺物の出土はない。

## 5. 利光遺跡久保地区

### A. 遺跡の概要

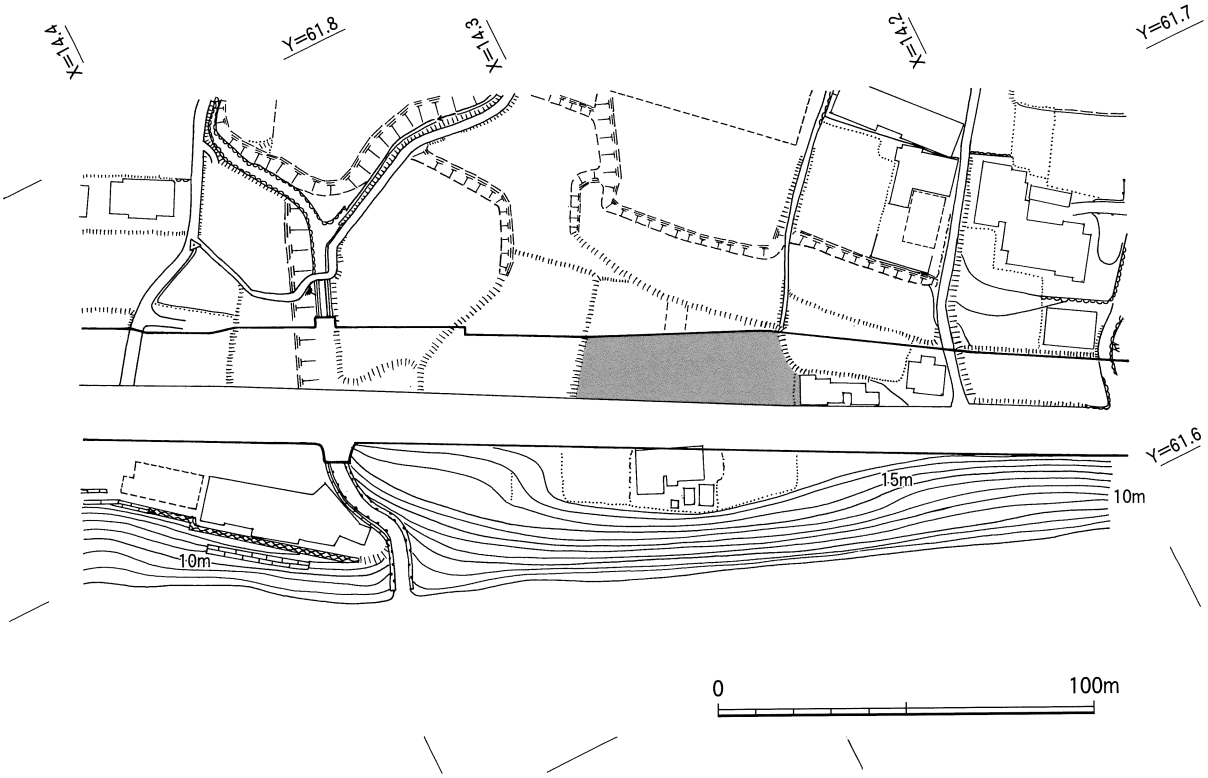
利光遺跡久保地区は、利光遺跡のほぼ北端に位置する。久保地区は大野川の河岸段丘状に位置し、川縁までは約50mである。東は約800m程度で山麓となり、その間を集落および水田として利用している。この山麓の頂上部は鶴ヶ城跡で、周辺には鶴ヶ城に付随する施設の存在が予想される地域でもある。

調査は平成６年度に試掘調査を行い、中世の遺物包含層を確認した。このため、平成7年度に本調査を実施した。調査区は当時水田として使用されていたため、耕作土・床土の除去を行った。この下層は約40㎝程度の厚さで、洪水による砂礫混じりの砂泥層が数層堆積していた。洪水層除去後は黒褐色の粘質土層で、多量の土師質土器や土錘等が出土した。この時点では調査区南側部分で近世の鍬溝と考えられる畝状遺構を検出しただけで、中世の遺構の確認はなかった。このため、この黒褐色粘質土層を中世の遺物包含層としてとらえ、利光遺跡鵜ノ木地区で行った縄文遺構掘り下げの要領で、各地区を１ｍメッシュ毎に区切り、掘り下げを行い、遺物の取り上げを行った。包含層は厚さ20～30㎝程度堆積しており、多量の青白磁・土師器小皿・坏・燭台等が出土した。包含層掘り下げ後に確認された遺構は、土坑19基・火葬墓１基・集石遺構２基・柱穴群で、調査区のほぼ全域にわたって確認された。これらの遺構の構築された時期はおおむね14世紀代と考えられるが、一部時期不明の遺構も存在する。

#### a）土坑

土坑は調査区のほぼ全域から19基が確認されている。比較的残りが良く多量の遺物を含む土坑も数基存在しているが、ほとんどの土坑は削平を受けていて残りは悪い。

土坑内には石組土坑（土坑１）、土坑墓（土坑６）、鉄滓廃棄土坑（土坑17）、甕を据えた土坑（土坑19）等もみられた。

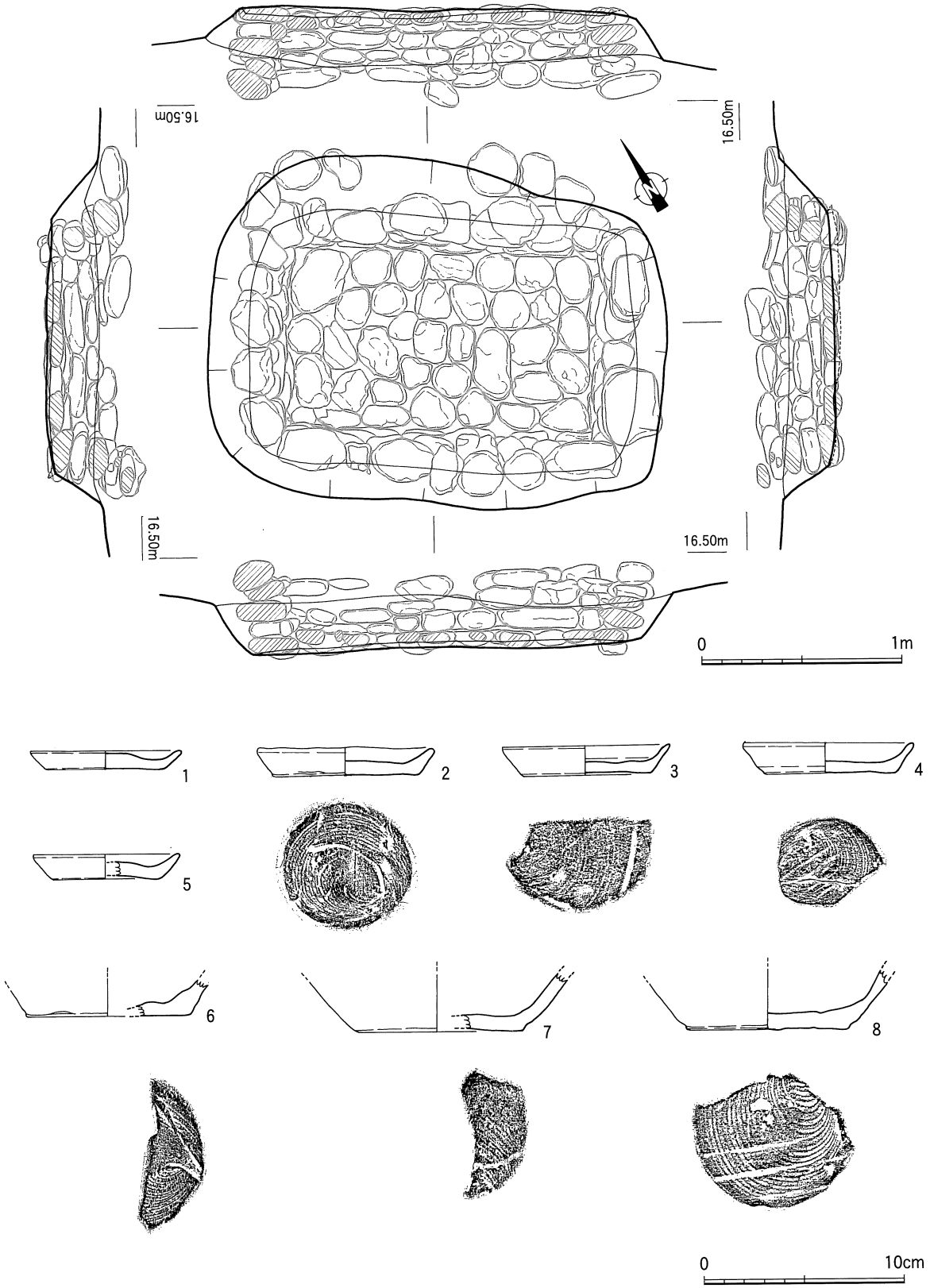



第123図　利光遺跡久保地区周辺地形図(1／2000)

第124図　利光遺跡久保地区遺構配置図(1／200)

### 土坑１（第125図）

土坑１は石組土坑で調査区の北東端に位置する。主軸方位はN-31°-Eを示す。検出面での標高は16.4mで、平面形は長方形を呈している。壁は床面から30㎝程度残っていて、やや外側に開き




第125図　利光遺跡久保地区土坑１及び出土遺物実測図(1／30・1／3)

気味に立ち上がり、河原石の乱積みであるが、比較的丁寧に積み上げられている。隙間部分には暗青灰色粘土を用い、目張りをしていた痕跡が認められる。内部には多量の河原石が散在しており、上部はかなり破壊をうけたものと推測される。床面にはやはり扁平の河原石を万偏なく敷き込んでいる。また、隙間部分には壁面と同様に粘土による目張りを行っている。

土坑の掘り方は隅丸長方形で、規模は東西2.26m、南北1.7m、内法は1.9×1.25m、検出面からの深さは40㎝前後である。この遺構は水貯め遺構と考えているが、詳細は不明である。

土坑内のほぼ床面直上から土師器小皿・坏数点が出土した。

**出土遺物（第125図）**

１～５は土師器小皿で、すべて底部糸切りである。口縁端部まで外傾しながらほぼ直線的に立ち上がる。６～８は土師器坏で、すべて底部糸切りである。口縁端部は欠損しているが、体部は内湾気味に立ち上がると思われる。出土遺物の年代は14世紀中頃と思われる。

**表22　利光遺跡久保地区土坑１出土土器観察表**

（単位は㎝）

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 色　調 | 胎　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小皿 | 7.5 | 5.9 | 0.9 | 淡黄褐色 | 砂粒 | |
| 2 | 小皿 | 8.9 | 7.5 | 1.4 | 淡橙褐色 | 砂粒 | |
| 3 | 小皿 | 8.3 | 6.4 | 1.4 | 淡褐色 | 精緻 | |
| 4 | 小皿 | 8.5 | 6.5 | 1.5 | 淡褐色 | 精緻 | |
| 5 | 小皿 | 7.2 | 5.8 | 1.2 | 淡褐色 | 砂粒 | |
| 6 | 坏 | | 8.2 | | 褐色 | 精緻 | |
| 7 | 坏 | | 8.3 | | 淡褐色 | 砂粒 | |
| 8 | 坏 | | 8.0 | | 灰黄褐色 | 精緻 | |

**土坑２（第126図）**

土坑２は調査区の北東、土坑１の約３m南に位置する。主軸方位はN-23°-Wを示す。検出面での標高は16.4m、平面形は不整円形を呈している。規模は東西0.96m、南北0.92m、内法は0.86×0.8m、検出面からの深さは20㎝で残りは良くない。床面はほぼ平坦である。土坑に伴う遺物の出土はない。

**土坑３（第126図）**

土坑３は調査区の北端方に位置する。主軸方位はN-30°-Wを示す。検出面での標高は16.3m、平面形は不整円形を呈している。規模は東西1.1m、南北1.06m、内法は0.96×0.9m、検出面からの深さは約12㎝で、残りは良くない。西側部分に一段の段差をもつ。この掘り方が当土坑の掘り方の可能性をもつ。土坑に伴う遺物の出土はない。

**土坑４（第126図）**

土坑４は調査区の北西寄り、土坑３の約1.5m西に位置する。主軸方位はN-23°-Eを示す。検出面での標高は16.3m、平面形は楕円形を呈している。中央部分に径0.5×0.6m、深さ20㎝程度の楕円形の柱穴状遺構が検出された。当土坑に伴うものかどうかは不明である。土坑の規模は東西1.13m、南北1.6m、内法は1.03×1.48m、検出面からの深さは約15㎝で残りは良くない。土坑に伴う遺物の出土はない。

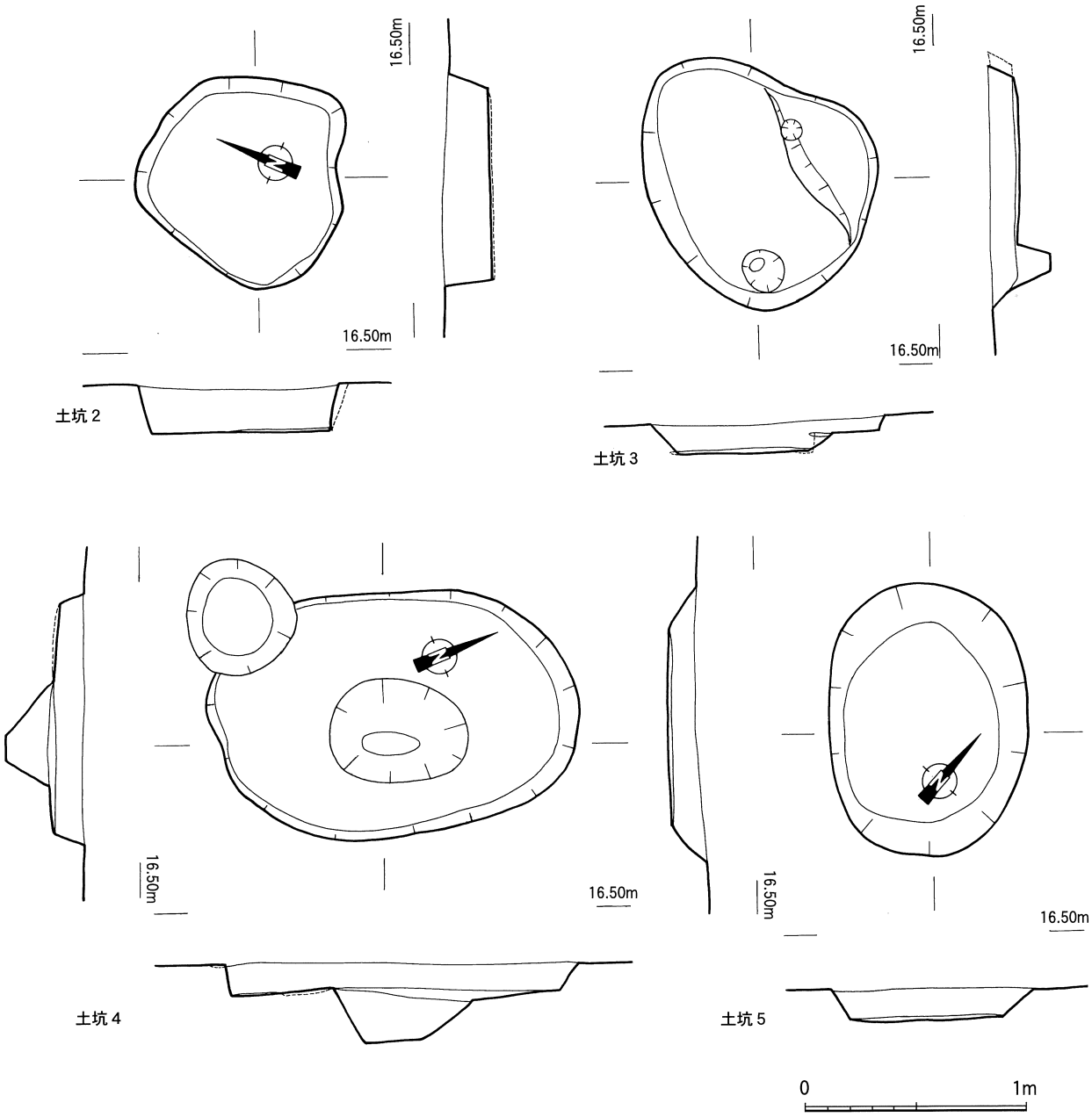
### 土坑５（第126図）

土坑５は調査区の北西、土坑４の約2.5m南に位置する。主軸方位はN-42°-Wを示す。検出面での標高は16.3m、平面形は楕円形を呈している。規模は東西0.91m、南北1.23m、内法は0.7×0.9m、検出面からの深さは約15㎝で残りは悪い。土坑に伴う遺物の出土はない。

### 土坑６（第127図）

土坑６は調査区の北西、土坑５の約２m南に位置する。主軸方位はN-33°-Eを示す。検出面での標高は16.25m、平面形は隅丸長方形を呈している。規模は長軸1.48m、短軸0.63m、内法は1.38×0.53m、検出面からの深さは最深部で26㎝である。埋土は黒褐色土の単一土層で、土坑内の西端で土師器坏１点が、床面からはやや浮いた状態で出土している。

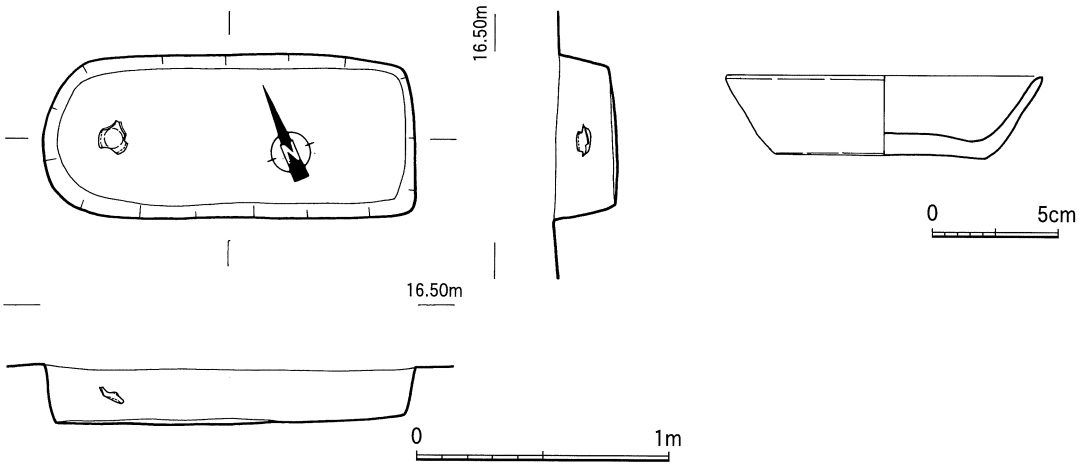
当土坑は墓と思われ、土師器坏は副葬品の可能性をもつ。




第126図　利光遺跡久保地区土坑２～５実測図(1／30)

**出土遺物（第127図）**

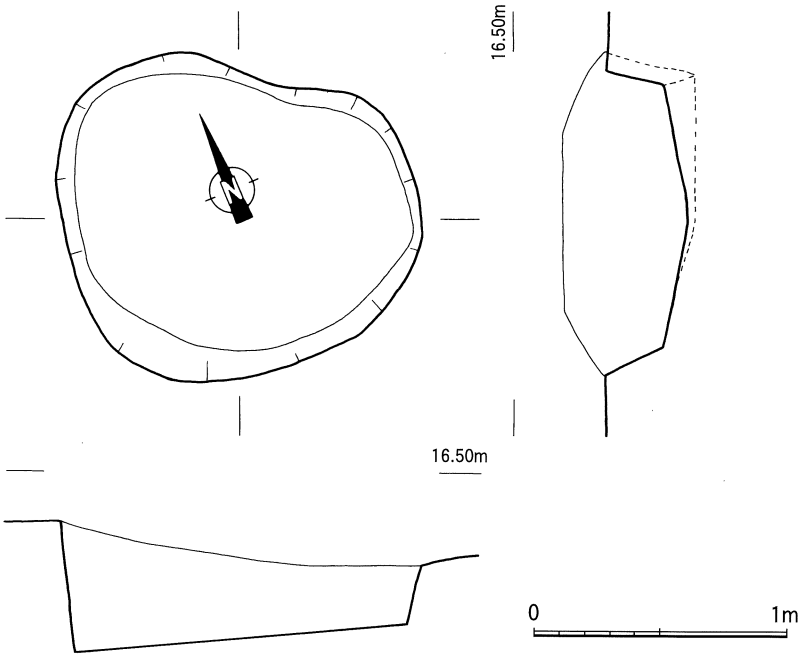
坏は口径12.8㎝、底径8.5㎝、器高3.1㎝で、体部は直線的に外反し、やや尖り気味の端部を持つ。胎土に長石・石英を含む。ロクロ成形で、口縁から体部にかけては、内外面ともヨコナデ、底部内面は指によるナデ調整を行っている。底部は糸切り平底である。焼成は良好、色調は内外面とも明茶褐色である。




第127図　利光遺跡久保地区土坑６及び出土遺物実測図(1／30・1／3)

**土坑７（第128図）**

土坑７は調査区の北側、東端に位置する。主軸方位はN-23°-Eを示す。検出面での標高は16.15m、平面形は不整円形を呈している。規模は東西1.45m、南北1.21m、内法は1.33×1.06m、検出面からの深さは約35㎝で、残りはあまり良くない。床面はレンズ状を呈し、中央部分が最深である。土坑に伴う遺物の出土はない。




第128図　利光遺跡久保地区土坑７実測図(1／30)

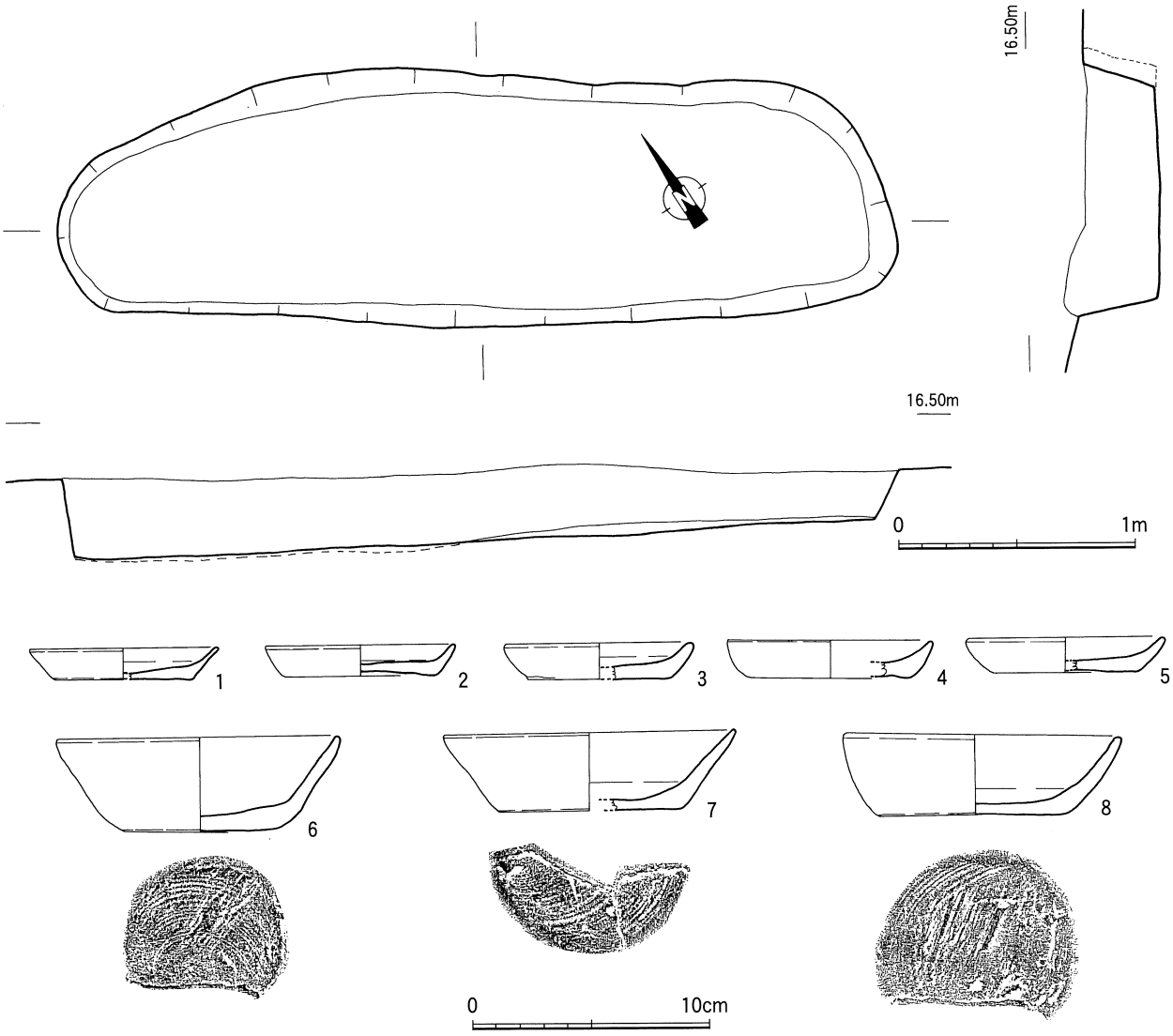
### 土坑８（第129図）

土坑８は調査区の北西、土坑５の約２m南に位置し、主軸方位はN-33°-Eを示す。検出面での標高は16.25m、平面形は隅丸長方形を呈している。規模は長軸1.48m、短軸0.63m、内法は1.38

**表23　利光遺跡久保地区土坑８出土土器観察表**

（単位はcm）

| 番号 | 器種 | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 色　調 | 胎　土 | 焼成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小皿 | 8.0(復元) | 5.8(復元) | 1.3 | 茶褐色 | 角閃石少、長石多 | 良好 | 底部糸切り |
| 2 | 小皿 | 8.0(復元) | 6.3(復元) | 1.3 | 淡褐色 | 角閃石少、長石多<br>赤色粒多量 | 〃 | 摩滅激しい |
| 3 | 小皿 | 8.0(復元) | 6.0(復元) | 1.5 | 茶褐色 | 角閃石・長石少<br>赤色砂粒多 | 〃 | 底部糸切り |
| 4 | 小皿 | 8.8(復元) | 6.8(復元) | 1.6 | 〃 | 角閃石・砂粒少 | 〃 | 〃 |
| 5 | 小皿 | 8.5(復元) | 6.2 | 1.4 | 淡黄褐色 | 長石・砂粒少 | 〃 | 〃 |
| 6 | 坏 | 12.0(復元) | 6.6 | 3.9 | 淡茶褐色 | 角閃石・長石少<br>赤色砂粒多 | 〃 | 底部糸切り<br>板状圧痕 |
| 7 | 坏 | 12.3(復元) | 7.8(復元) | 3.2 | 淡茶褐色 | 長閃石・赤色砂粒多 | 〃 | 底部糸切り |
| 8 | 坏 | 11.7 | 8.0 | 3.3 | 黄灰褐色 | 角閃石少<br>長石・赤色砂粒多 | 〃 | 底部糸切り<br>板状圧痕 |

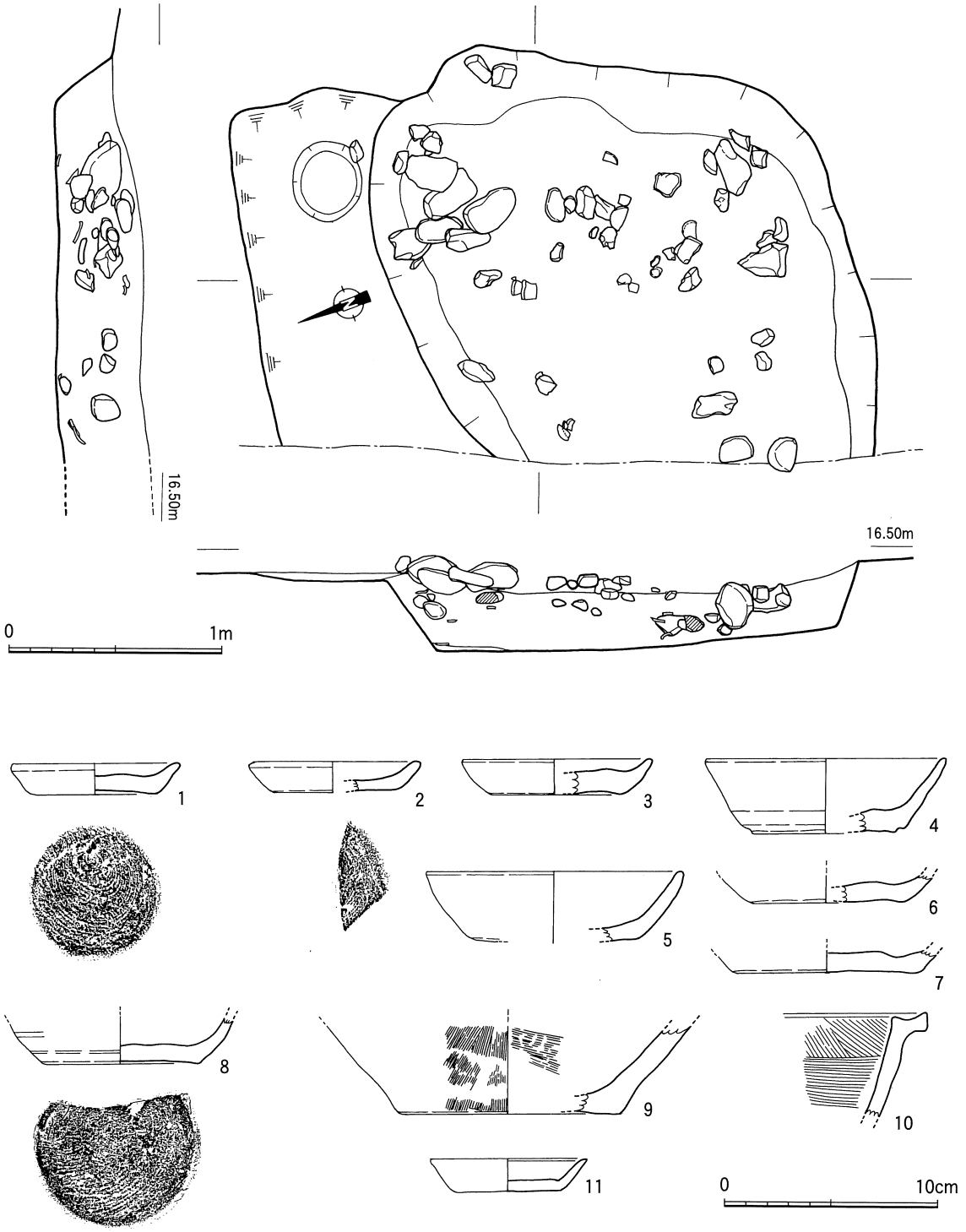



第129図　利光遺跡久保地区土坑８及び出土遺物実測図(1／30・1／3)

×0.53m、検出面からの深さは最深部で26㎝である。埋土は黒褐色砂質土層の単一層で、土坑内からは土師器小皿５点、坏３点が出土した。いずれも底部糸切りで平底である

**土坑９（第130図）**

土坑９は調査区の中央からやや北よりの西側壁部分に位置する。土坑８の約３m西に構築されている。主軸方位はN-21°-Eを示す。検出面での標高は16.4mで、西側部分は調査区外のため、全様は明らかでない。平面形は隅丸長方形を呈していると考える。北側部分は包含層検出中の掘りすぎ部分である。規模は東西1.85＋αm、南北2.2m、内法は1.5＋α×1.8m、検出面からの深さは北側で約40㎝、南側で約30㎝と、床面は南から北に向かって緩やかに傾斜下降する地形となって




第130図　利光遺跡久保地区土坑９及び出土遺物実測図(1／30・1／3)

いる。埋土は２層確認できた。上層は茶褐色砂質土層で、層厚は15㎝前後、下層は暗茶褐色砂質土層で層厚は20㎝前後である。いずれの層からも焼土・炭・遺物・礫・河原石が出土している。礫・河原は土坑内のほぼ全域から出土したが、特に北東隅から大型で多量の河原石が集中して出土している。この地点から投げ込まれたものと思われる。

**出土遺物（第130図）**

１～３は土師器小皿で、底部はいずれも糸切りの平底、口縁部は比較的肥厚している。

１・２は体部から口縁端部まで外傾しながら直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめている。

３は体部から口縁端部まで内湾しながら立ち上がり、端部は丸くおさめている。

４～８は土師器坏で、底部はいずれも糸切りの平底である。４は体部から口縁端部まで外傾しながら直線的に立ち上がり、５は体部から口縁端部まで内湾しながら立ち上がる。いずれも口縁端部は丸くおさめている。６～８はいずれも口縁部を欠く。

９・10は瓦質土器の鉢であり、底部と口縁部の一部である。

11は小型の白磁皿である。全面に釉薬が施されている。底部に板状圧痕が残り、口縁端部は口禿げである。

**表24　利光遺跡久保地区土坑９出土土器観察表**

（単位は㎝）

| 番号 | 器種 | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 色　調 | 胎　土 | 焼成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小皿 | 8.0 | 5.8 | 1.3 | 淡黄橙色 | 角閃石・長石少<br>赤色粒・砂粒少 | 良好 | 糸切り |
| 2 | 小皿 | 8.0(復元) | 6.0(復元) | 1.3 | 淡褐色 | 角閃石・長石少<br>赤色粒・砂粒少 | 〃 | 糸切り |
| 3 | 小皿 | 8.8(復元) | 6.4(復元) | 1.6 | 淡茶褐色 | 角閃石・長石・砂粒少 | 〃 | 糸切り |
| 4 | 坏 | 11.3(復元) | 6.8(復元) | 3.4 | 黄褐色 | 角閃石・長石・茶色粒少 | 〃 | 摩滅していて不明 |
| 5 | 坏 | 12.0(復元) | 7.8(復元) | 3.2 | 白赤褐色 | 角閃石少、石英多<br>白色砂粒少、赤色砂粒多 | 〃 | 糸切り |
| 6 | 坏 | — | 7.4 | — | 淡茶褐色 | 長石多 | 〃 | 糸切り |
| 7 | 坏 | — | 8.8 | — | 淡茶褐色 | 角閃石少、長石多 | 〃 | 糸切り |
| 8 | 坏 | — | 7.5 | — | 淡茶褐色 | 角閃石少、長石多 | 〃 | 糸切り・板状圧痕 |
| 9 | 鉢 | — | 10.4(復元) | — | 灰褐色 | 角閃石・砂粒少、長石多 | 〃 | 糸切り |
| 10 | 鉢 | — | — | — | 暗灰褐色 | 角閃石多、砂粒少 | 〃 | 瓦質土器 |
| 11 | 皿 | 7.3 | 5.1 | 0.5 | 灰白色 | | 〃 | 瓦質土器 |

**土坑10（第131図）**

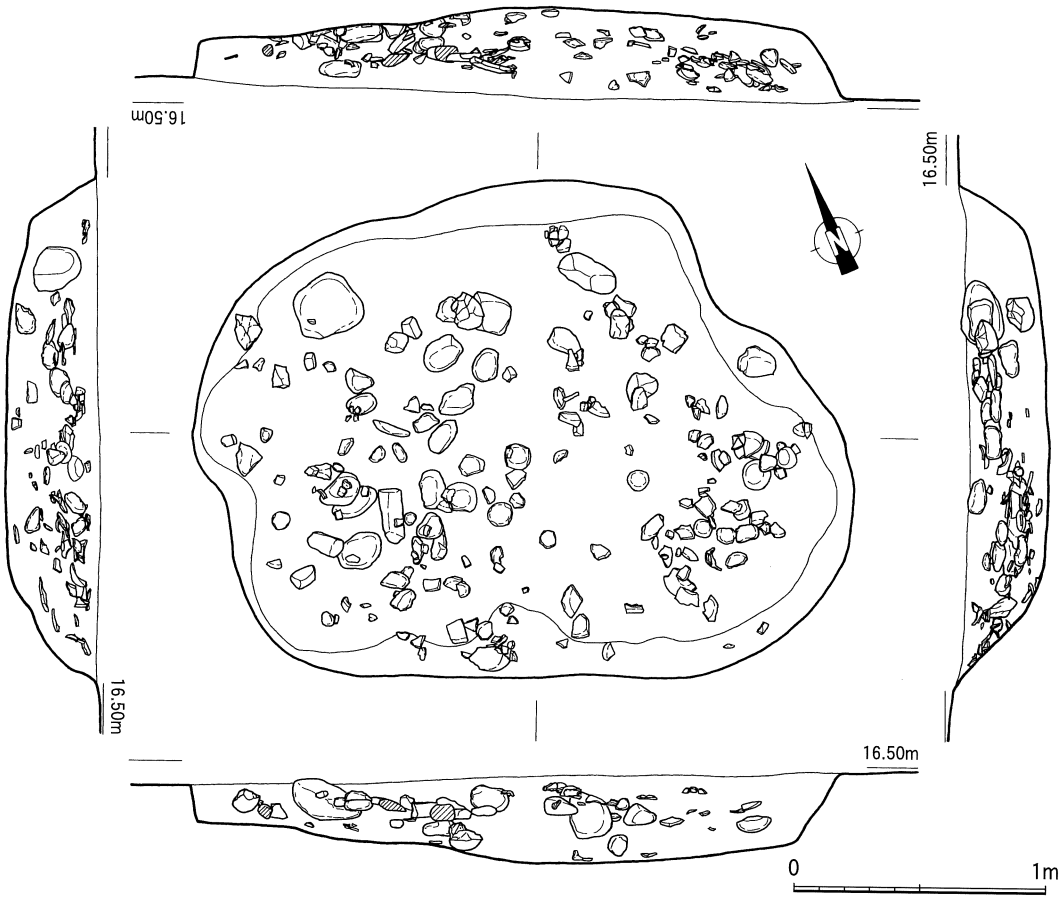
土坑10は調査区の中央からやや西よりに位置し、土坑９の約４m南にあたる。主軸方位はN-23°-Wを示す。検出面での標高は16.45mで、平面形は隅丸長方形に近い不定形を呈している。規模は長軸2.6m、短軸1.95m、内法は2.42×1.75m、検出面からの深さは中央部分で約35㎝となり、レンズ状の様子を呈している。上部は一部攪乱を受けている。埋土は黒褐色砂質土層の単一層で、埋土中は多量の焼土・炭・遺物を含む。河原石は土坑西側の上面に集中して破棄されており、土器群は南東側の床面に近い位置から多量に出土している。埋没の時期には先後関係があるものと思われる。

**出土遺物（第132・133図）**

土坑出土の土器には土師質土器と瓦器、輸入陶磁器がある。土師質土器は坏と皿である。

**小皿（第132図１～12）**

すべて底部糸切りの小皿である。黄褐色で胎土には角閃石が含まれる。形態上、大きく２種類に分れるが法量はほとんどかわらない。




**第131図　利光遺跡久保地区土坑10実測図(1／30)**

Ⅰ類（1～9）底部から口縁端部まで外傾しながら直線的に開き、口縁部に向かって器厚を減じながらも、端部は丸くおさめている。平均で口径8.2㎝、底径5.3㎝、器高1.5㎝である。

Ⅱ類（10～12）底部、体部の境に明瞭な段があり、体部は口縁部に向かって開いて行くが、内湾気味に立ち上がる。平均で口径7.7㎝、器高1.6㎝である。

坏（第132図13～24、第133図25～41）

すべて底部糸切りの平底、外反する体部、器厚を減じながらも端部を丸くおさめた口縁部からなるもので、断面形でみると、全体逆台形状を呈する。

Ⅰ類（13～19）直線的に外反する体部と、尖り気味の口縁端部が特徴である。黄褐色の色調で体部内外面はナデ調整を施す。

Ⅱ類（20～23）Ⅰ類と比較するとわずかながらも体部の立ち上がりが大きくなり、外面の体部下半に明瞭な回転ナデの痕跡が観察される。

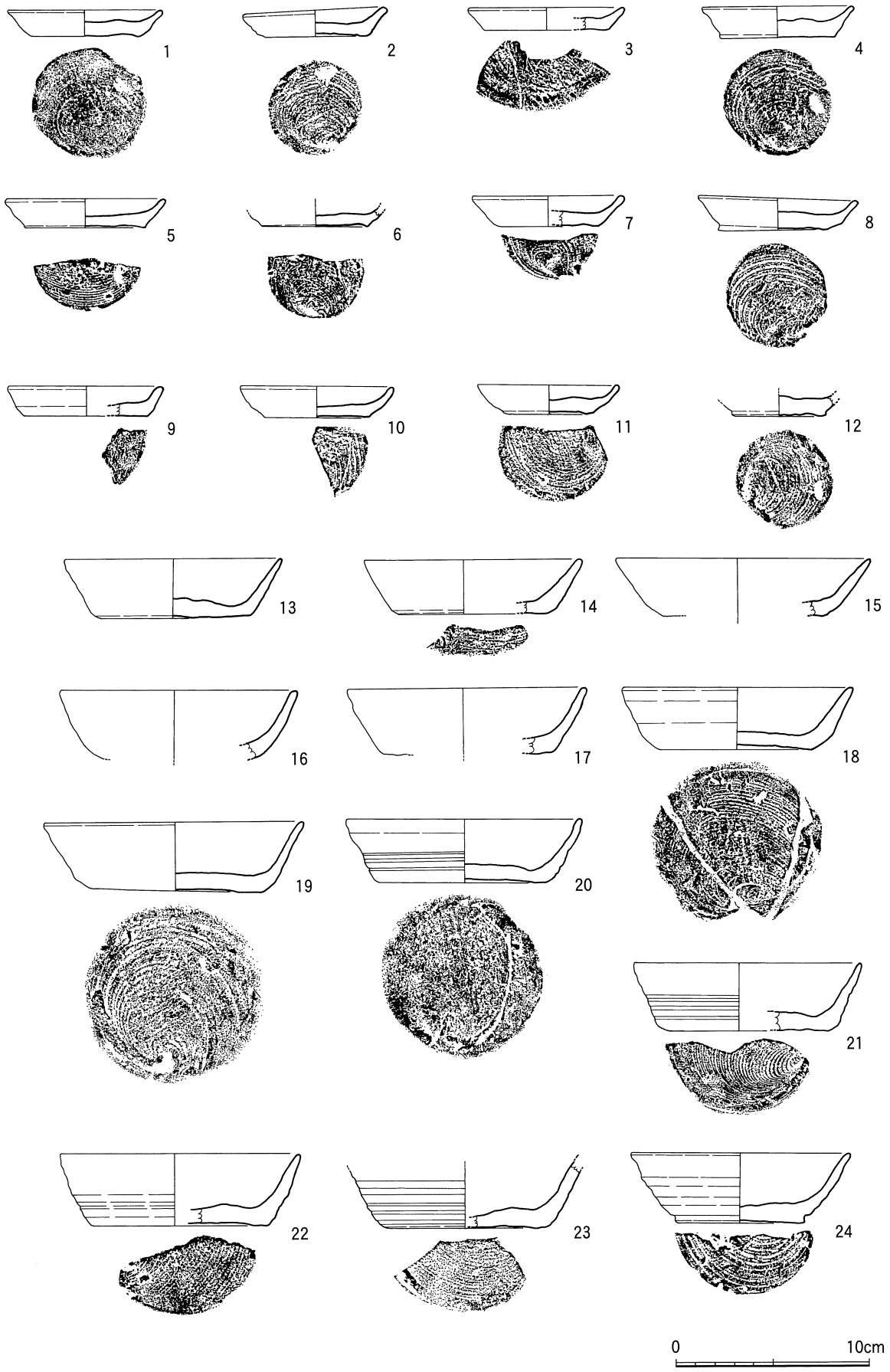
Ⅲ類（24・25）外面の体部下半に明瞭な回転ナデの痕跡が認められ、また、底部と体部に明瞭な段が残る。26～28の坏は口縁部を欠くが、Ⅲ類に属するものと思われる。

29～41は、やはり体部の一部から口縁部にかけて欠けているため、全様は不明であるが、Ⅰ・Ⅱ類に属する底部であろう。

**瓦器（第133図42、43図）**

埦（42）口径16㎝、器高4.8㎝の瓦器埦である。青灰色の色調を呈し、胎土に角閃石を含む。貼り付け高台で断面三角形の非常に退化したものである。体部内外面とも磨きは施されておらず、ナデ調整だけである。外面下半部には斜行の工具ナデ痕が認められる。

こね鉢（43）復元口径25㎝の瓦質のこね鉢で、口縁部を丸く膨らませる。内外面は平滑に調整

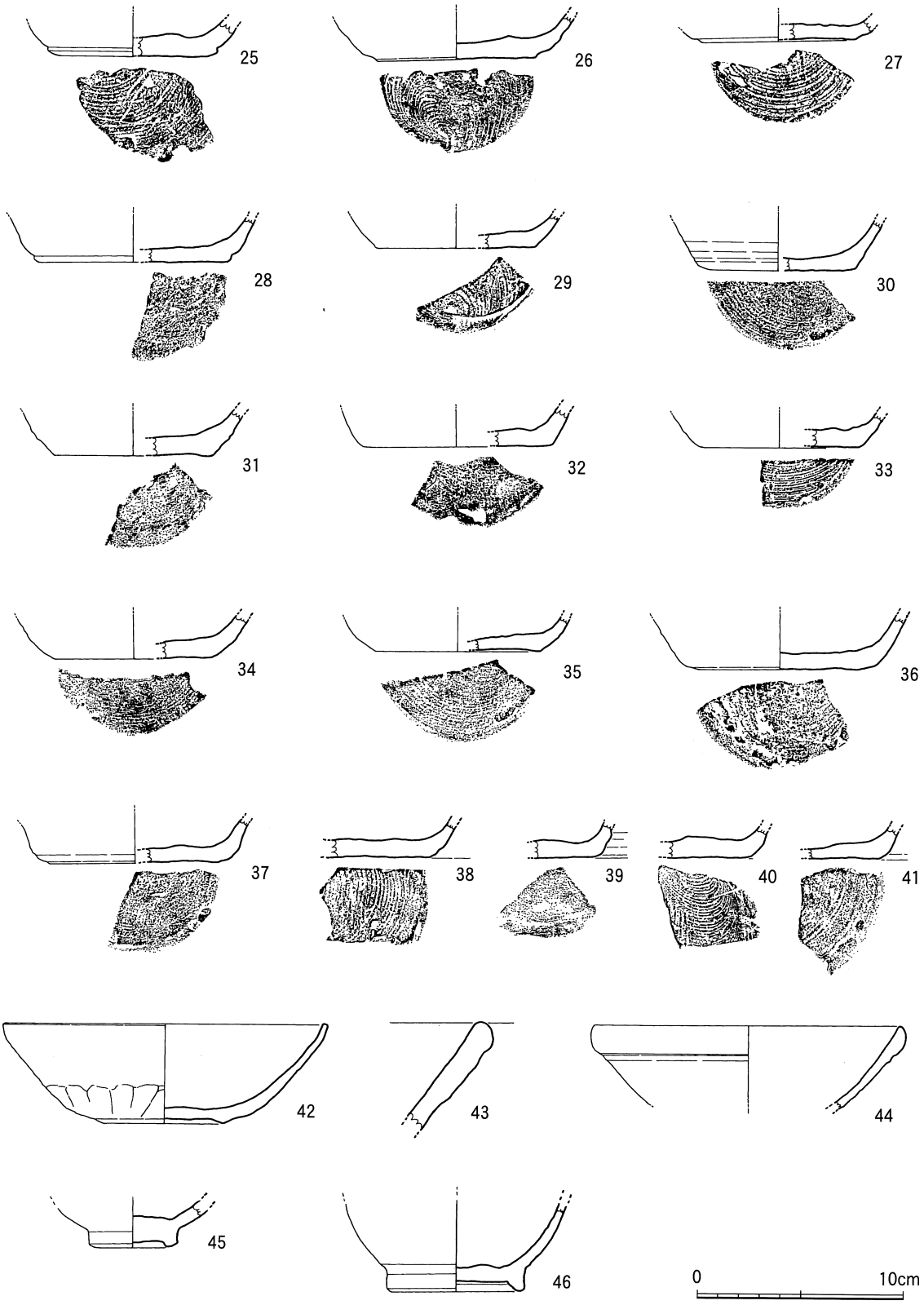



第132図　利光遺跡久保地区土坑10出土遺物実測図１（1／3）

されている。

**輸入陶磁器（第133図44～46）**

44は口縁部玉縁の白磁碗で、底部には低い高台が付く。45は淡い緑色を呈した龍泉窯系の青磁碗の底部で外面に鎬蓮弁が施されている。外面の釉薬は削り出し高台外面にまでおよんでいる。46は白磁四耳壺で削り出し高台。灰白色の釉薬を内外面に施している。高台付近は無釉である。




第133図　利光遺跡久保地区土坑10出土遺物実測図２（1／3）

表25　利光遺跡久保地区土坑10出土土器観察表

（単位はcm）

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 色　　調 | 胎　　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小皿 | 8.2 | 5.6 | 1.6 | 赤褐色 | 砂粒 | |
| 2 | 小皿 | 7.5 | 5.3 | 1.3 | 〃 | カクセン石 | |
| 3 | 小皿 | 8.3 | 6.5 | 1.2 | 〃 | | |
| 4 | 小皿 | 8.0 | 6.0 | 1.6 | 〃 | | |
| 5 | 小皿 | 8.5 | 6.3 | 1.5 | 〃 | | |
| 6 | 小皿 | | 6.5 | | 〃 | | |
| 7 | 小皿 | 8.0 | 5.3 | 1.5 | 〃 | | |
| 8 | 小皿 | 8.4 | 5.6 | 1.6 | 〃 | | |
| 9 | 小皿 | 8.1 | 6.5 | 1.5 | 〃 | | |
| 10 | 小皿 | 8.0 | 5.5 | 1.6 | 〃 | | |
| 11 | 小皿 | 7.4 | 4.7 | 1.5 | 〃 | | |
| 12 | 小皿 | | 4.9 | | | | |
| 13 | 坏 | 11.4 | 8.0 | 3.1 | 赤褐色 | カクセン石 | |
| 14 | 坏 | 11.4 | 7.8 | 2.8 | 〃 | 〃 | |
| 15 | 坏 | 13.2 | 8.2 | 3.0 | 〃 | 〃 | |
| 16 | 坏 | 12.3 | | 3.8 | 〃 | 〃 | |
| 17 | 坏 | 12.4 | 8.7 | 3.5 | 〃 | 〃 | |
| 18 | 坏 | 12.0 | 8.0 | 3.3 | 〃 | 〃 | |
| 19 | 坏 | 13.6 | 9.0 | 3.5 | 〃 | 〃 | |
| 20 | 坏 | 12.3 | 8.7 | 3.3 | 〃 | 〃 | |
| 21 | 坏 | 11.9 | 8.4 | 3.5 | 〃 | 〃 | |
| 22 | 坏 | 12.5 | 9.0 | 3.7 | 〃 | 〃 | |
| 23 | 坏 | | 8.3 | | 〃 | 〃 | |
| 24 | 坏 | 11.5 | 6.7 | 3.6 | 〃 | 〃 | |
| 25 | 坏 | | 8.0 | | 〃 | 〃 | |
| 26 | 坏 | | 8.0 | | 〃 | 〃 | |
| 27 | 坏 | | 7.5 | | 〃 | 〃 | |
| 28 | 坏 | | 9.5 | | 〃 | 〃 | |
| 29 | 坏 | | 7.8 | | 〃 | 〃 | |
| 30 | 坏 | | 7.4 | | 〃 | 〃 | |
| 31 | 坏 | | 7.7 | | 〃 | 〃 | |
| 32 | 坏 | | 9.3 | | 〃 | 〃 | |
| 33 | 坏 | | 7.5 | | 〃 | 〃 | |
| 34 | 坏 | | 7.7 | | 〃 | 〃 | |
| 35 | 坏 | | 8.0 | | 〃 | 〃 | |
| 36 | 坏 | 8.4 | 6.1 | 1.4 | 〃 | 〃 | |
| 37 | 坏 | 7.3 | 5.0 | 1.6 | 〃 | 〃 | |
| 38 | 坏 | 7.9 | 5.5 | 1.6 | 〃 | 〃 | |
| 39 | 坏 | 7.4 | 5.0 | 1.2 | 〃 | 〃 | |
| 40 | 坏 | 7.7 | 5.2 | 1.3 | 〃 | 〃 | |
| 41 | 坏 | 8.2 | 6.0 | 1.6 | 〃 | 〃 | |
| 42 | 埦 | 16.0 | 5.8 | 4.8 | 灰褐色 | 〃 | 瓦器 |
| 43 | 鉢 | 3.0 | | | 青灰褐色 | 〃 | 瓦質土器 |
| 44 | 碗 | 15.0 | | | 灰白色 | 〃 | 白磁 |
| 45 | 皿 | | 4.3 | | 淡緑色 | 〃 | 青磁 |
| 46 | 皿 | | 6.7 | | 淡青灰白色 | 〃 | 白磁 |

**土坑11（第134図）**

土坑11は調査区のほぼ中央に位置する。主軸方位はN-13°-Eを示す。検出面での標高は16.2mで、平面形は不整な隅丸長方形を呈している。規模は長軸（南北）1.52m、短軸（東西）0.57m、内法は1.4×0.43m、検出面からの深さは約23㎝、床面はほぼ平坦である。残りはあまり良くない。土坑に伴う遺物の出土はない。

**土坑12（第134図）**

土坑12は調査区の中央やや西側に位置し、土坑10の約1.5m南、土坑11の約４m北西に構築されている。主軸方位はN-１°-Eを示し、ほぼ磁北である。検出面での標高は16.3m、平面形は不整な楕円形を呈している。規模は東西1.1m、南北1.17m、内法は0.88×1.0m、検出面からの深さは約12㎝で、床面はほぼ平坦である。残りは悪い。土坑に伴う遺物の出土はない。

**土坑13（第134図）**

土坑13は調査区のほぼ中央に位置し、 土坑12の約２.５m南に構築されている。 主軸方位はN-25°-Wを示す。検出面での標高は16.3m、平面形は楕円形を呈している。規模は長軸1.18m、短軸1.04m、内法は1.03×0.9m、検出面からの深さは約15㎝で、床面はほぼ平坦である。残りは悪い。土坑に伴う遺物の出土はない。

**土坑14（第134図）**

土坑14は調査区の中央付近のやや西側方向に位置し、土坑13の南に近接して構築されている。検出面での標高は16.3m、平面形はほぼ円形を呈している。規模は長軸0.69m、短軸0.63m、内法は0.59×0.54m、検出面からの深さは約15㎝で、床面はほぼ平坦である。残りは悪い。埋土上面から土師器小皿の破片が出土したが、当土坑に伴う遺物ではない。

**土坑15（第134図）**

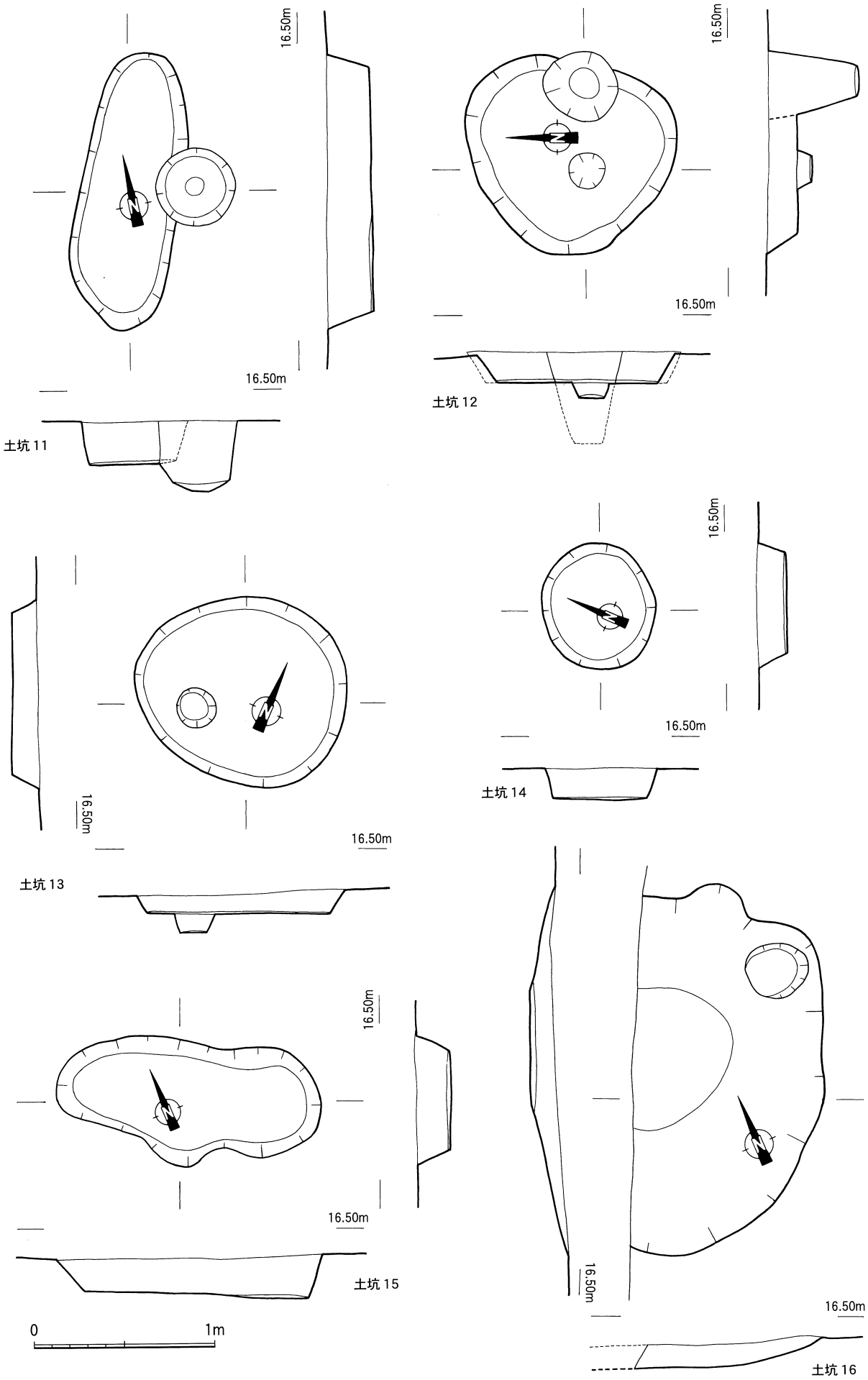
土坑15は調査区のほぼ中央に位置し、土坑14の約3.5m南東に構築されている。主軸方位はN-23°-Eを示す。検出面での標高は16.3m、平面形は不整な隅丸長方形を呈している。規模は長軸（東西）1.45m、短軸（南北）0.59m、内法は1.24×0.42m、検出面からの深さは約20㎝で、床面はほぼ平坦である。残りは良くない。土坑に伴う遺物の出土はない。

**土坑16（第134図）**

土坑16は調査区のほぼ中央、西壁沿いに位置し、西側部分は調査区外のため、未調査である。土坑14の約4m南に構築されている。主軸方位はN-23°-Eを示す。検出面での標高は16.45m、平面形は全様が不明であるが現状では半円形を呈している。規模は東西1.05＋αm、南北1.98m、内法は0.54＋α×0.78m、検出面からの深さは約15㎝で、床面はレンズ状の様子を呈している。残りは良くない。土坑に伴う遺物の出土はない。

**土坑17（第135図）**

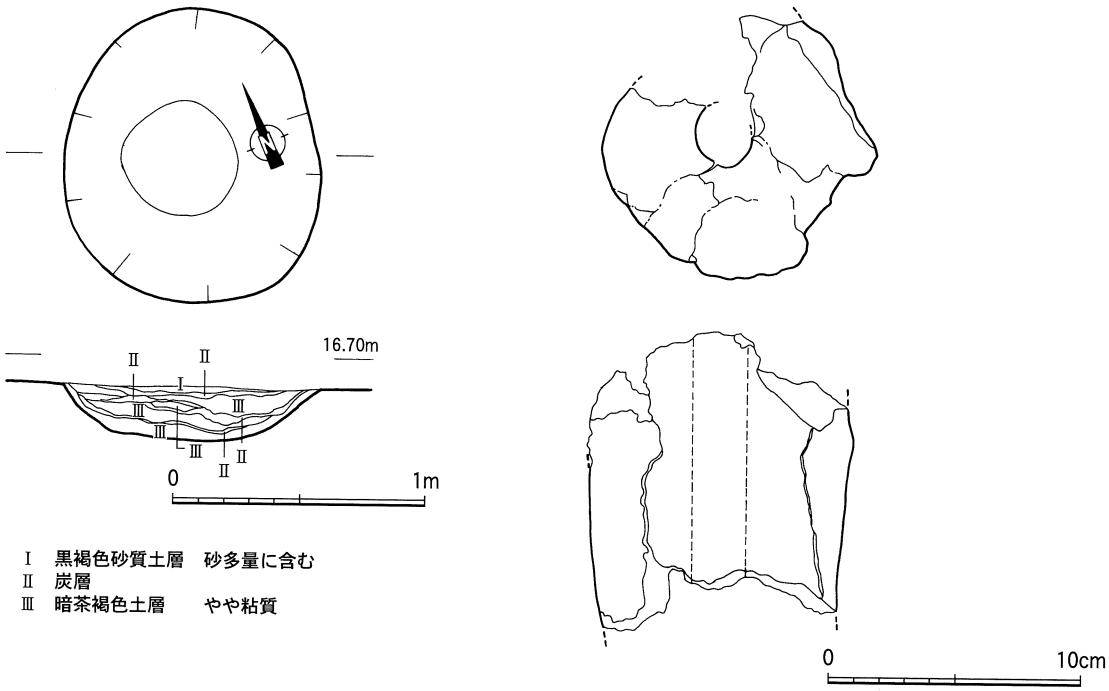
土坑17は鍛冶関連遺構で、作業段階で派生する鉄滓の廃棄土坑と思われる。調査区南側部分で確認された。検出面での標高は16.6mで、平面形は不整な楕円形を呈している。規模は長軸（南北）1.17m、短軸（東西）1.0m、検出面からの深さは約25㎝で、レンズ状の床面を呈している。残りはあまり良くない。埋土は炭層と暗茶褐色の粘質層がほぼ交互に堆積している。炭層は厚さ２㎝前



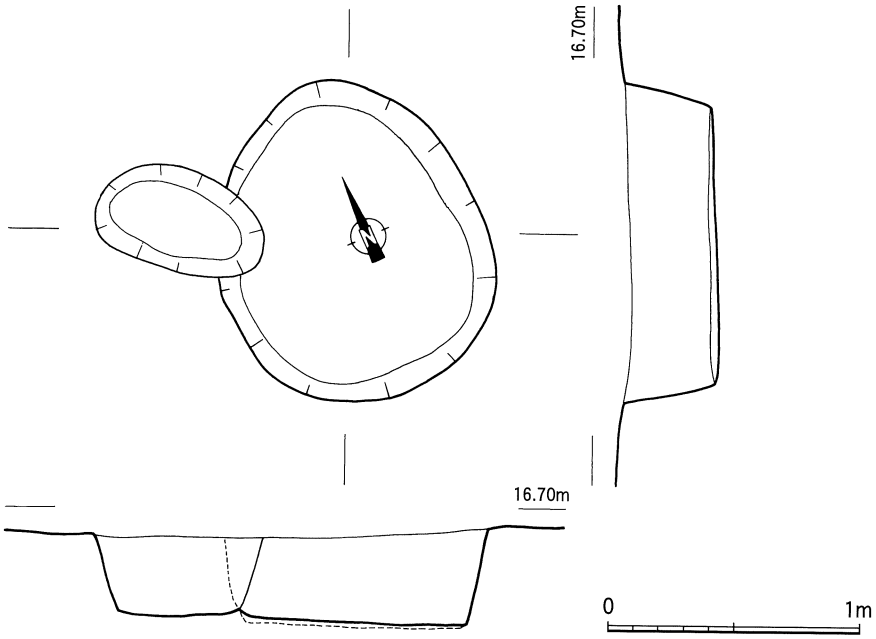

第134図　利光遺跡久保地区土坑11～16実測図(1／30)

後、粘質層は３～10㎝前後で、それぞれ４回にわたって堆積している。この炭層内からは鉄滓が多数出土している。鉄滓は上半部が比較的大きく径３㎝前後、下半部は小さく１㎝前後である。

当土坑内からの鉄滓以外の出土遺物はないが、周辺からフイゴの羽口の一部が出土した。このため、当遺構の周辺に鍛冶関連遺構の存在が考えられたが、調査区内からの検出はなかった。



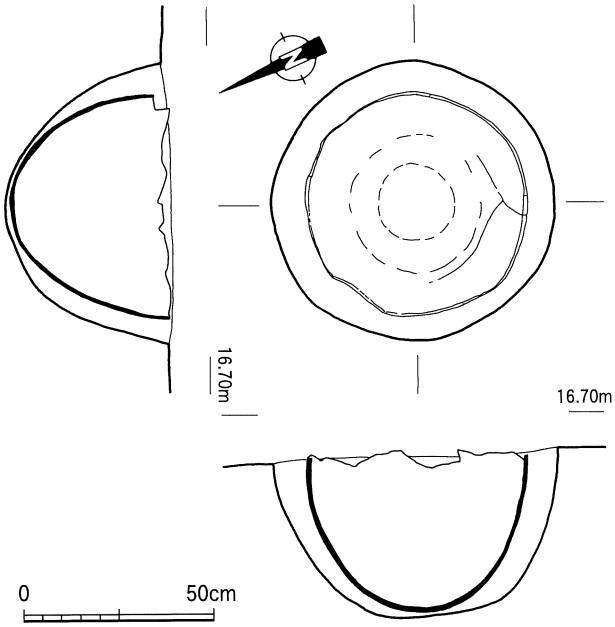

第135図　利光遺跡久保地区土坑17及び周辺出土遺物実測図(1／30・1／3)




第136図　利光遺跡久保地区土坑18実測図(1／30)

### 土坑18（第136図）

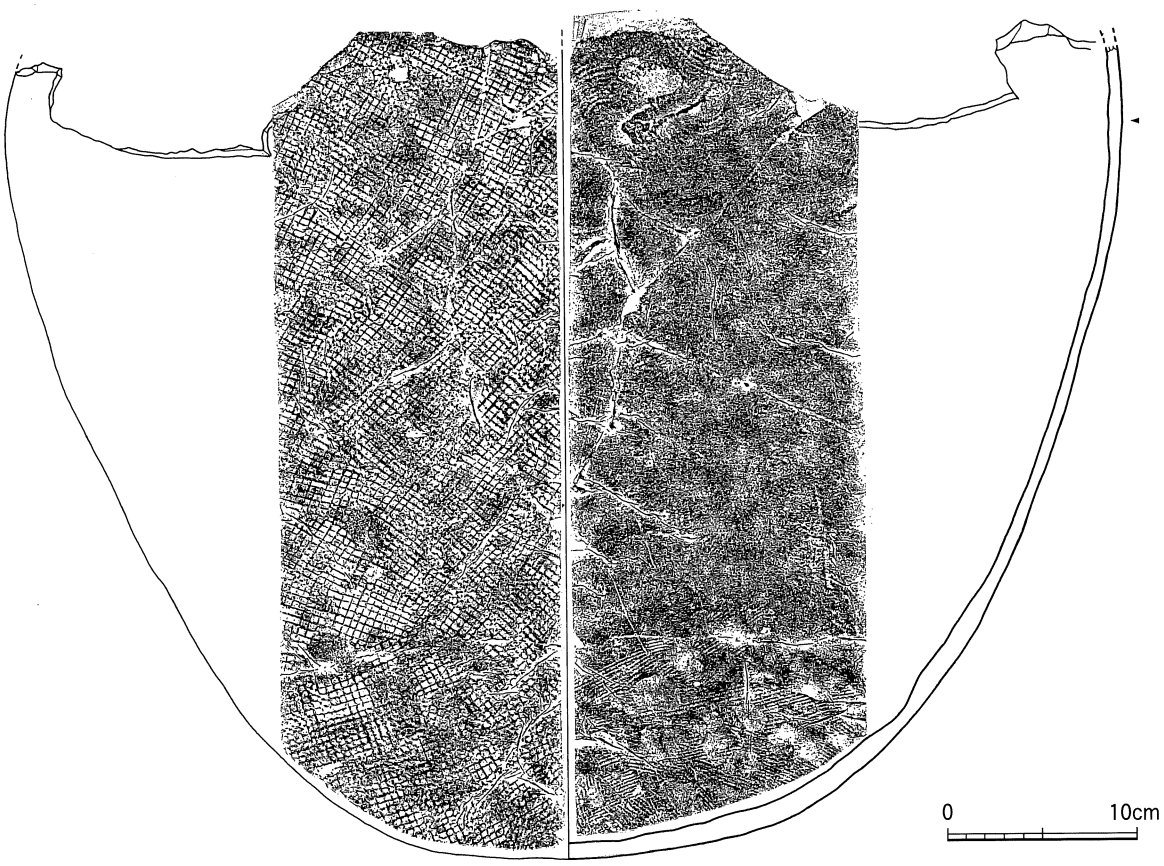
土坑18は調査区のほぼ南に位置し、土坑17の約3.3m南に構築されている。主軸方位はN-23°-Eを示す。検出面での標高は16.6m、平面形は不整な隅丸長方形を呈している。規模は東西1.07m、南北1.28m、内法は0.95×1.08m、検出面からの深さは約35cmで、床面はほぼ平坦である。残りは他の土坑からみると比較的良好である。土坑に伴う遺物の出土はない。




### 土坑19（第137図）

土坑19は内部に甕を据えている土坑で、調査区の中央東端に位置する。検出面での標高は16.6m、掘り方は円形で、径75cm、深さ44cmである。

床面は半球状に掘り込まれており、甕を床面に据えている。残りは悪く、甕の上半分は既に削平されていて、全様は不明である。当土坑は水甕として使用されたものと思われる。



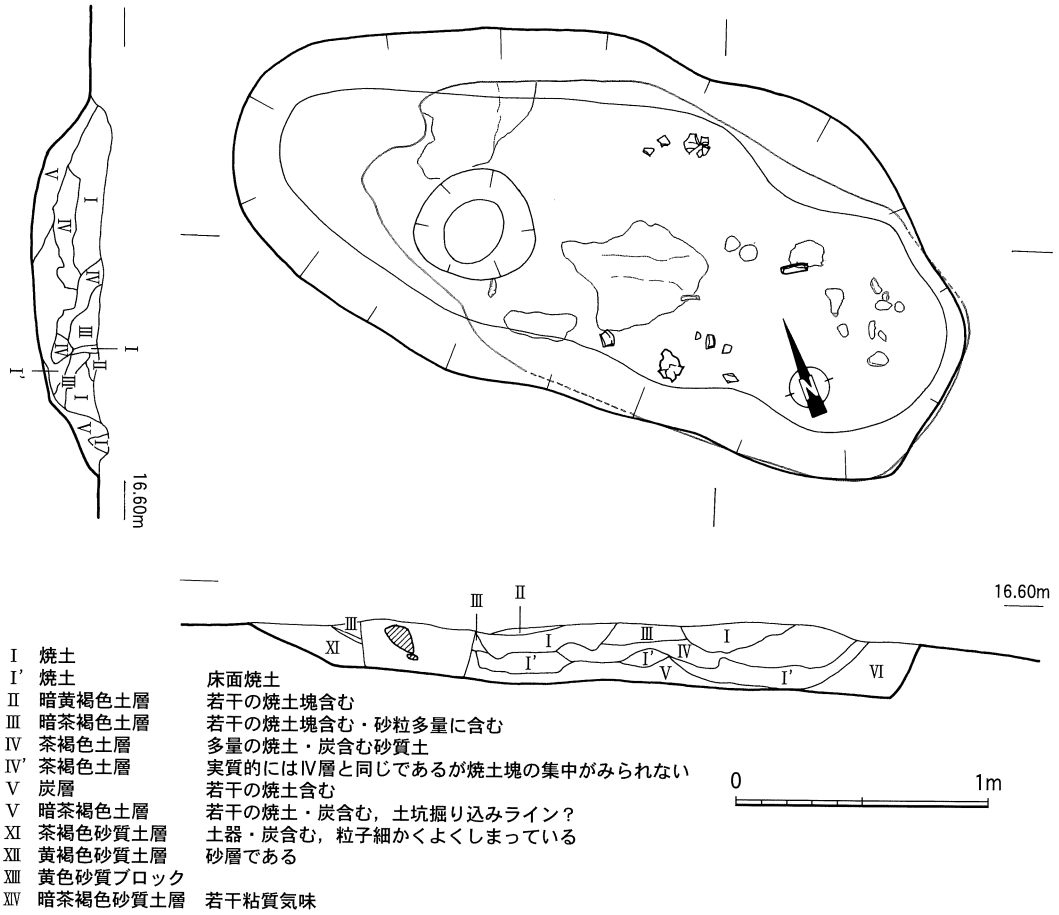

第137図　利光遺跡久保地区土坑19及び出土遺物実測図(1／20・1／4)

**出土遺物（第137図）**

出土遺物は須恵器甕である。胴部下半から底部の残存で、現存での高さ42.6m、胴部最大径58.8㎝である。胎土には白色砂粒がわずかにみられる。調整は外面全域に格子状タタキが施されている。底部付近に接合痕が認められる。内面は同心円タタキで調整を行っているが、ほとんどの部分はナデ消している。底部は斜め刷毛目調整を行った後に、指による深い圧痕が無数に残る。焼成は良好で、色調は外面淡黒灰色で、全面にススが付着している。内面は淡灰褐色で、一部ススが付着している。

**ｂ）火葬墓（第138図）**

火葬墓は調査区の中央からやや北側で１基確認された。土坑４の南東２m付近である。主軸方位はN-45°-Wを示す。検出面での標高は16.4m、掘り方の規模は長軸3.03m、短軸1.38m、内法は2.76×0.98m、検出面からの深さは25㎝前後で中央部分ががレンズ状になっている。全体に床面に凹凸を持つ。平面形は不整形を呈している。埋土は焼土層と炭層が主体である。最下層に炭の層が位置し、厚さは10㎝前後である。西側と中央南側部分がやや層厚が薄い。この炭層の上面で人骨片が検出された。また、炭層はソフトで、藁或いは竹であると思われる。炭層の上層は焼土層で、中間に茶褐色から黄褐色の砂質土層を含む。焼土層は比較的固くしまっているが、現在地で焼けた層とは考えられず、ブロック状であり、土坑構築後に持ち込まれたものと考える。火葬墓としては炭層の下の床面が焼けていないことと、炭層上面に焼土層が乗っていることからみて、当土坑




第138図　利光遺跡久保地区火葬墓実測図(1／30)

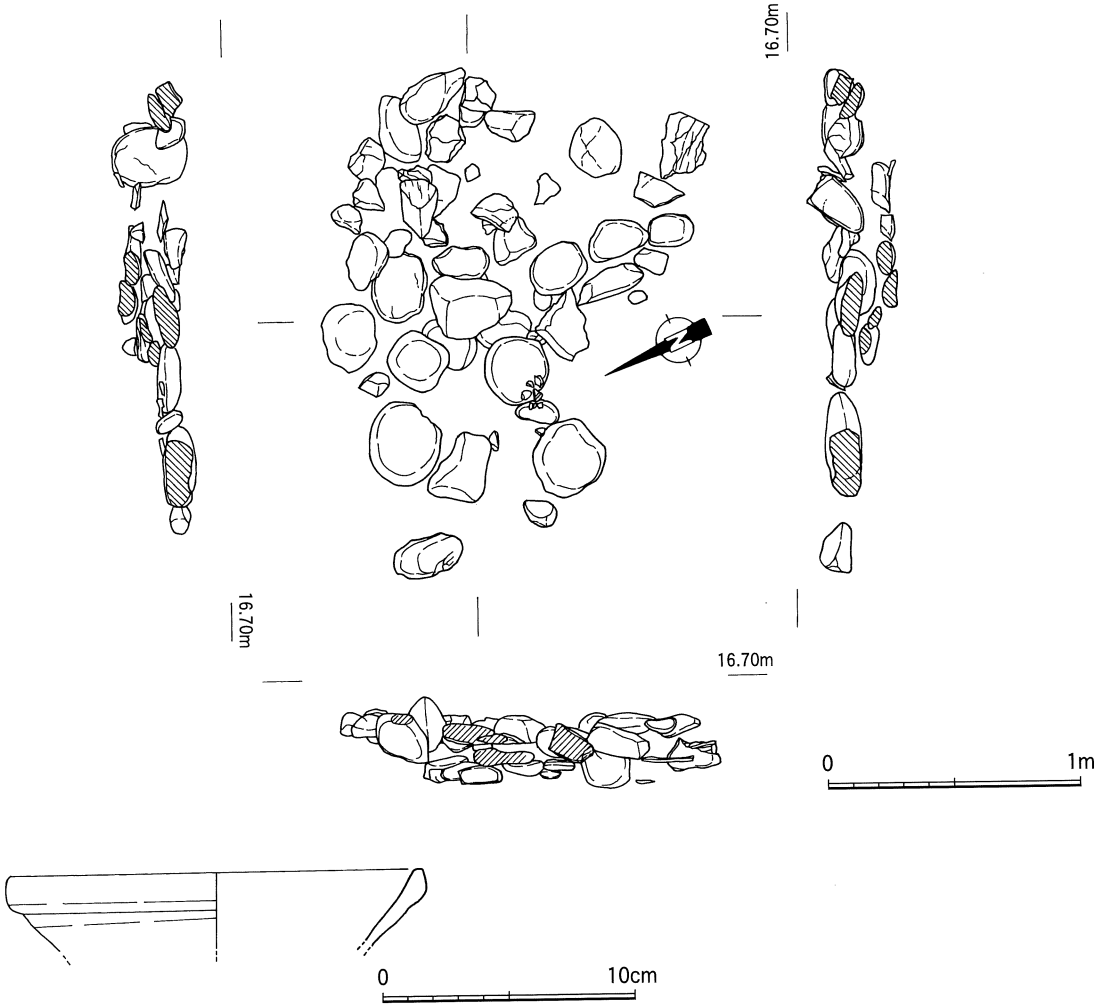
で火葬を行ったのではなく、炭敷き土坑墓として使用し、上面を焼土等で覆ったものと考える。遺物は砂質埋土中から土師器土器片が数点出土したが、当火葬墓に伴うかどうかは不明であり、また、体部片であったため、時期決定における資料とは成り得なかった。

### C）集石遺構

集石遺構は調査区内から２基確認された。２基とも旧石器・縄文時代の集石炉ではなく、出土遺物から中世（14世紀代）の礫集中遺構と考える。

**集石遺構１（第139図上）**

集石遺構１は調査区北方向の西壁付近に位置する。主軸方位はN-23°-Eを示す。土坑17の東１mで確認された。集石は東西2.0m、南北1.6mの範囲に径30㎝前後の扁平河原石と、径15～20㎝前後の角礫で構成されている。包含層掘り下げ時に礫群の検出をみたため、掘り方の確認に努めたが、特定できなかった。礫群は規則正しく配置された状況ではなく、投げ込まれた状態であった。礫は被熱を受けた様子はなく、炉跡ではないと考える。礫間は比較的ゆとりをもって構成されており、礫は東側半分に集中的に破棄された状態であった。床面の標高は16.3mであるが、床面の掘り込み等は確認できなかった。埋土は暗茶褐色砂泥層で、炭・焼土と若干の遺物を含んでいる。遺物は礫間から出土した。




第139図　利光遺跡久保地区集石遺構１及び出土遺物実測図（1／30・1／3）

**出土遺物（第139図下）**

土師器小皿片数点と、白磁碗口縁部数点が出土した。土師器小皿は胴部片で、図示できない。図示した遺物は白磁碗口縁部片で、玉縁の口縁である。復元口径16.6㎝、器高・底径は不明である。全面に釉薬を施している。

**集石遺構２（第140図上）**

集石遺構２は調査区中央からやや北方向に位置する。周囲を土坑８～10・火葬墓に囲まれている。主軸方位はN-31°-Wを示す。集石は東西２.1m、南北1.0mの範囲に径20㎝前後の扁平河原石数点と、径10㎝前後の角礫多数で構成されている。集石１遺構と同様に包含層掘り下げ時に礫群の検出をみたため、掘り方の確認に努めたが、特定できなかった。礫群は大きく東西２群に分けられる。礫群は規則正しく配置された状況ではなく、礫は被熱を受けた様子もなく、炉跡ではないと考える。礫間は比較的ゆとりをもって構成されており、西側礫群中から多くの遺物が出土している。床面の標高は16.45m前後であるが、床面の掘り込み等は確認できなかった。埋土は暗茶褐色砂泥層である。

**出土遺物（第140図下）**

出土遺物は土師器小皿と坏である。いずれも糸切りの平底である。

１・２は土師器小皿で、口径は7.7㎝と8.2㎝である。いずれも体部から口縁端部まで外傾しながら、直線的に立ち上がる。口縁部は比較的肥厚し端部は丸くおさめている。１はひずんでいる。

３～10は土師器坏で、３は口縁部が欠けているが、やや開き気味の器形になると思われる。４～６は直線的に外反する体部と、尖り気味の口縁端部である。口径は12.0㎝と12.8㎝で、６の坏がやや大きい。７は体部から口縁端部までわずかに内湾しながら立ち上がり、底部と体部の境を丸くおさめている。８は他の坏に比べて体部の立ち上がりがわずかながらも大きいもので、口径は11.4㎝である。９は体部下半が肥厚し、外傾しながら直線的に立ち上がる。口径は12.5㎝で、内外面とも摩滅が激しい。10は底部と体部の境に明瞭な段がつき、体部は外傾しながら直線的に立ち上がる。

**表26　利光遺跡久保地区集石遺構２出土土器観察表**

（単位は㎝）

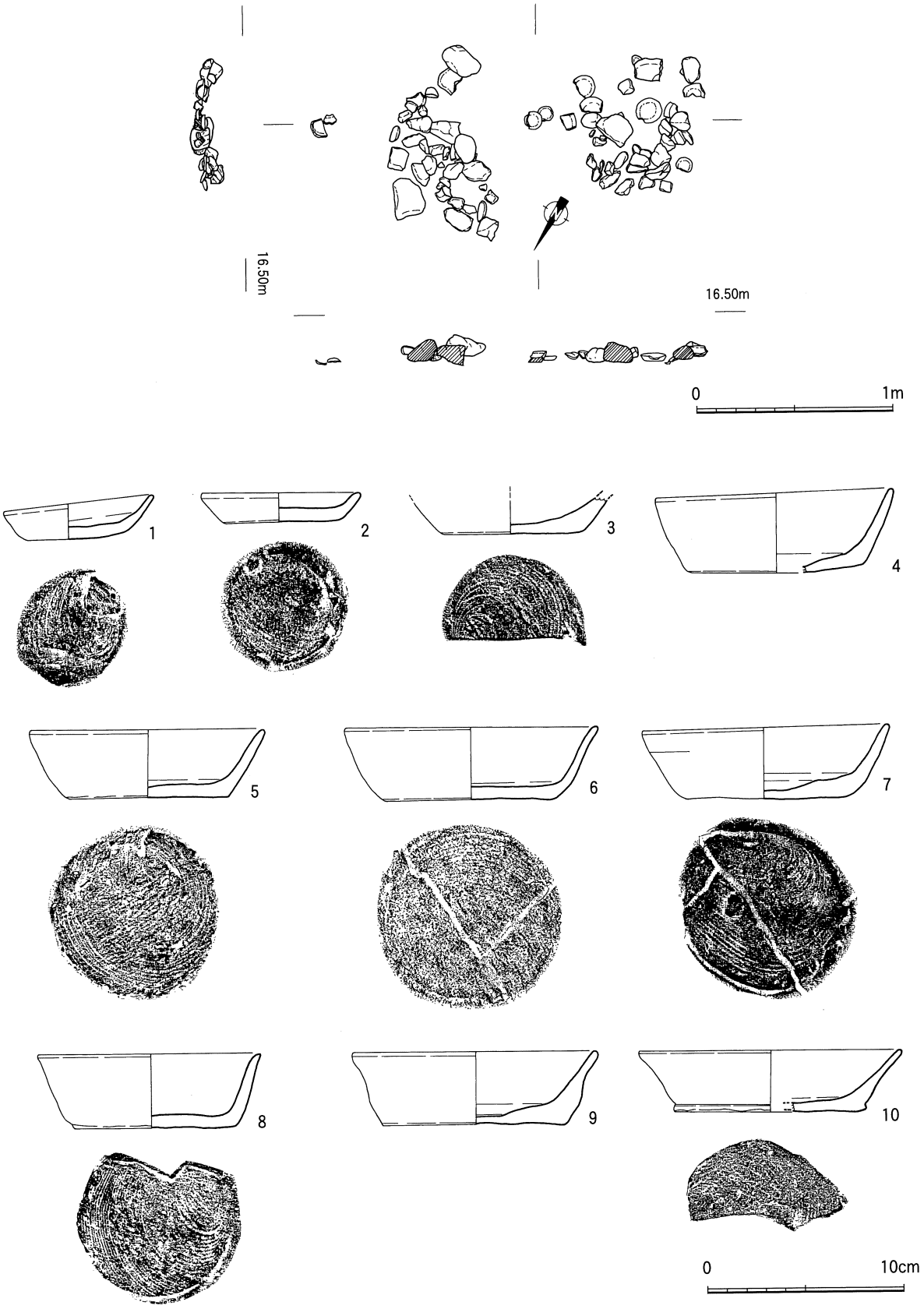
| 番号 | 器種 | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 色　調 | 胎　土 | 焼成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小皿 | 7.7 | 5.2 | 1.8 | 淡橙褐色 | 角閃石・長石・赤色粒多<br>砂粒少 | 良好 | 糸切り<br>板状圧痕 |
| 2 | 小皿 | 8.2 | 6.0 | 1.4 | 〃 | 角閃石・長石・赤色粒多<br>砂粒少 | 〃 | 糸切り |
| 3 | 坏 | — | 7.2 | — | 淡茶褐色 | 長石・赤色砂粒多<br>角閃石・石英少 | 〃 | 糸切り |
| 4 | 坏 | 12.0(復元) | 9.0(復元) | 4.0 | 淡茶褐色 | 長石多い | 〃 | 摩滅激しい |
| 5 | 坏 | 12.0 | 8.0 | 3.4 | 淡橙褐色 | 角閃石・石英少、長石多<br>赤色粒・砂粒多 | 〃 | 糸切り<br>板状圧痕 |
| 6 | 坏 | 12.8 | 8.8 | 3.6 | 淡茶褐色 | 長石少、石英・赤色粒多 | 〃 | 糸切り |
| 7 | 坏 | 12.5 | 8.5 | 3.5 | 茶褐色 | 長石多 | 〃 | 糸切り |
| 8 | 坏 | 11.4 | 8.2 | 3.7 | 黄橙褐色 | 角閃石少、長石・石英多<br>赤色粒・白色粒多 | 〃 | 糸切り |
| 9 | 坏 | 12.5(復元) | 9.5 | 3.6 | 黄褐色 | 長石多 | 〃 | 糸切り |
| 10 | 坏 | 13.3(復元) | 9.8(復元) | 3.0 | 淡茶褐色 | 長石多 | 〃 | 糸切り |

**d）包含層出土遺物**

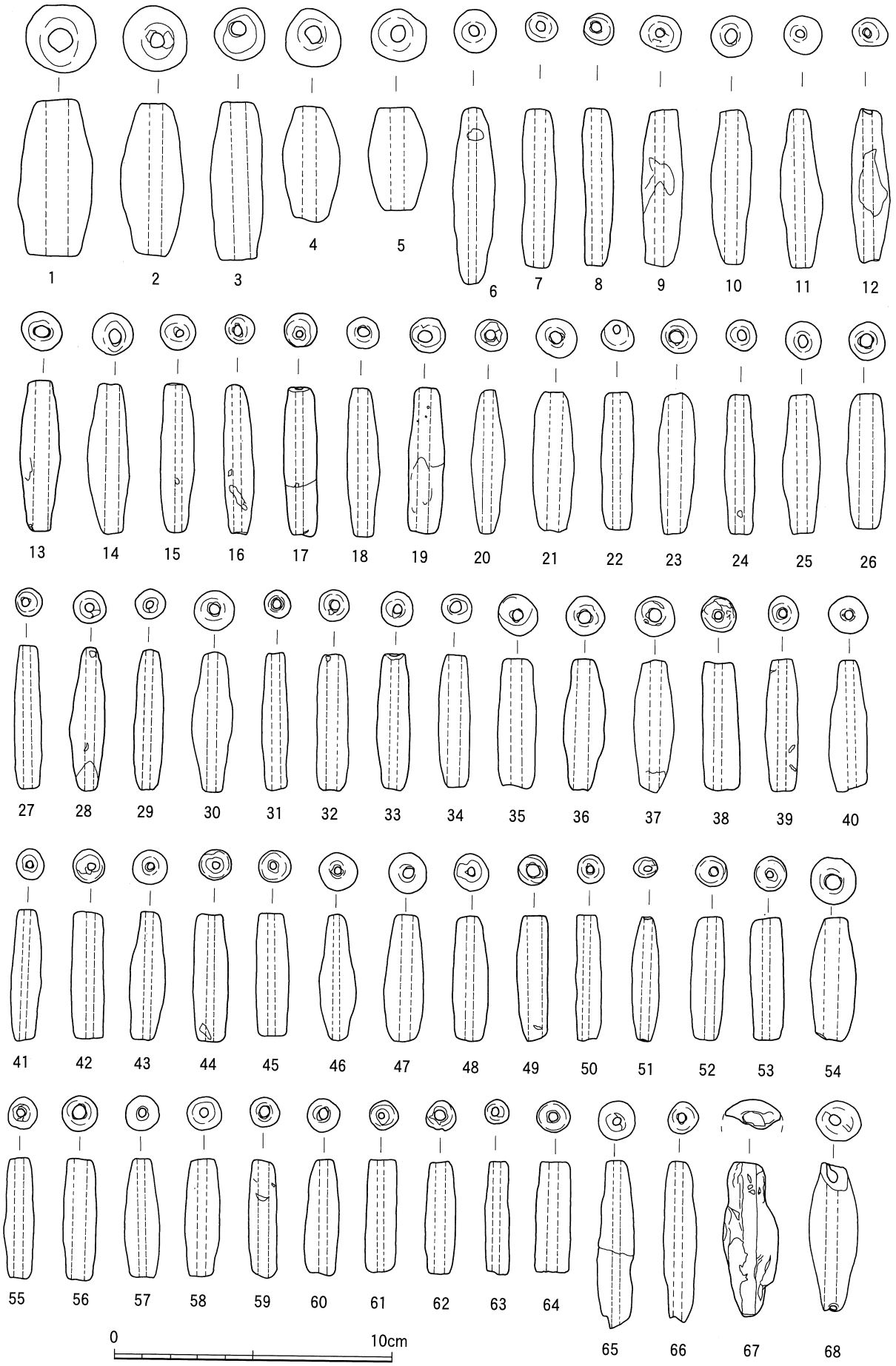
遺構を特定できない多量の遺物が出土しており、以下包含層出土遺物として取り扱う。

**土錘（第141・142図）**

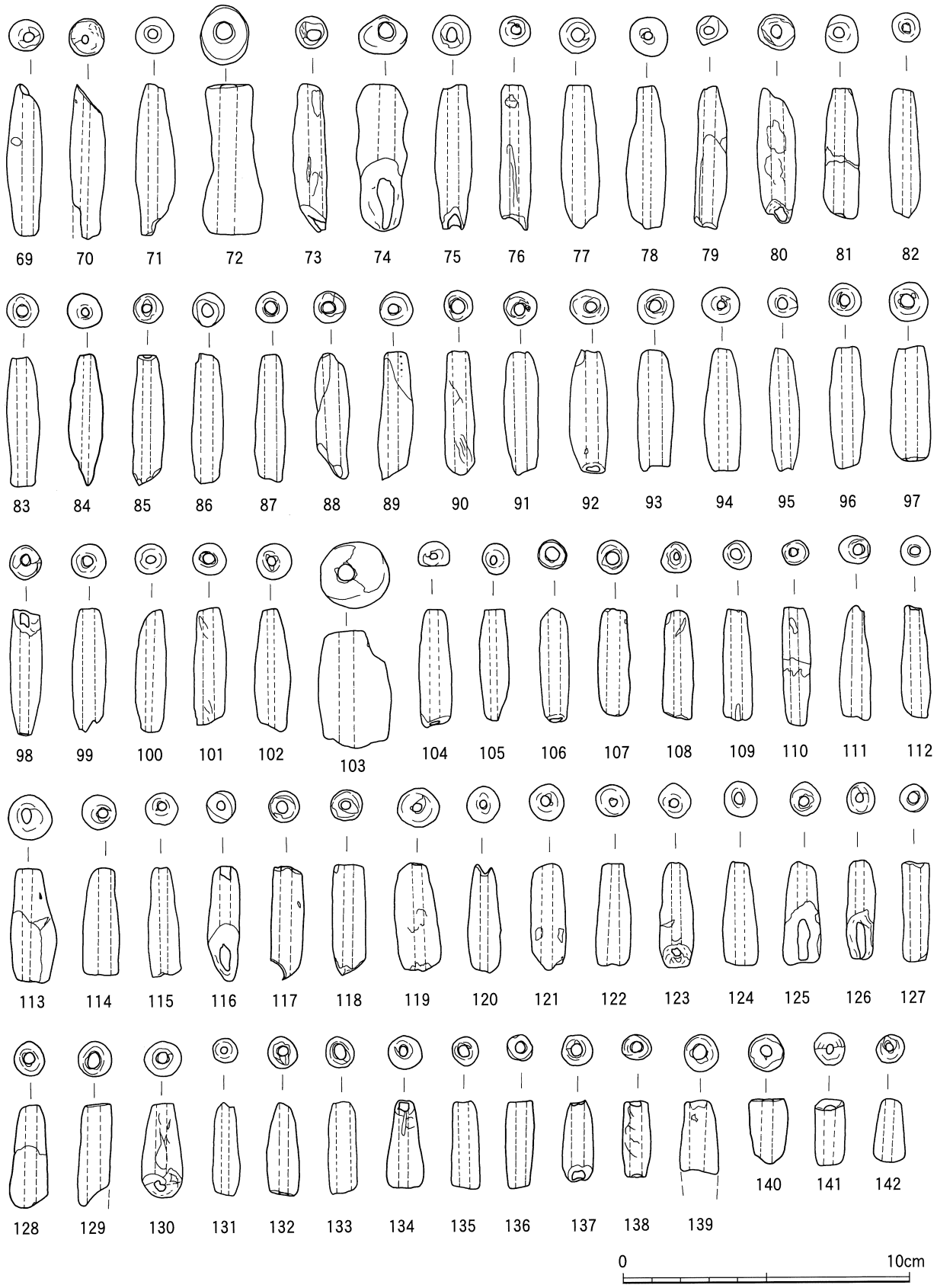
土錘はすべて土師質で、実測可能な個体数は142点である。




第140図　利光遺跡久保地区集石遺構２及び出土遺物実測図(1／30・1／3)




第141図　利光遺跡久保地区出土土錘実測図１




第142図　利光遺跡久保地区出土土錘実測図２

## 表27　利光遺跡久保地区出土土錘観察表１

| 番号 | 出土地点 | 最大長(cm) | 孔径(cm) | 最大径(cm) | 重量(g) | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | C-13-44 | 5.6 | 0.8 | 2.7 | 38.1 | 淡 褐 色 | |
| 2 | C-11-1 | 5.4 | 0.5 | 2.3 | 26.2 | 淡赤褐色 | |
| 3 | C-13-6 | 5.6 | 0.5 | 1.1 | 21.0 | 淡 褐 色 | |
| 4 | C-13-72 | 4.1 | 0.5 | 2.0 | 15.9 | 灰 褐 色 | |
| 5 | C-14-74 | 3.7 | 0.5 | 2.1 | 13.0 | 淡 褐 色 | |
| 6 | B-13-78 | 6.3 | 0.3 | 1.5 | 12.9 | 橙 褐 色 | |
| 7 | C-12-77 | 5.6 | 0.4 | 1.1 | 8.3 | 淡 褐 色 | |
| 8 | B-13-44 | 5.6 | 0.3 | 1.1 | 6.8 | 淡黄褐色 | |
| 9 | B-11-59 | 5.6 | 0.3 | 1.5 | 12.4 | 黒 褐 色 | |
| 10 | C-13-80 | 5.5 | 0.4 | 1.5 | 10.9 | 淡 褐 色 | |
| 11 | C-13一括 | 5.6 | 0.3 | 1.4 | 9.8 | 淡黄褐色 | |
| 12 | B-10-28 | 5.5 | 0.3 | 1.3 | 9.0 | 黒 褐 色 | |
| 13 | B-12-22 | 5.3 | 0.5 | 1.5 | 10.1 | 淡 褐 色 | |
| 14 | C-10-2 | 5.3 | 0.4 | 1.5 | 9.3 | 橙 褐 色 | |
| 15 | C-10-63 | 5.3 | 0.3 | 1.2 | 8.4 | 淡 褐 色 | |
| 16 | B-12-31 | 5.3 | 0.3 | 1.1 | 6.7 | 暗灰褐色 | |
| 17 | B-12-80 | 5.4 | 0.3 | 1.2 | 7.8 | 灰 褐 色 | |
| 18 | B-11-57 | 5.3 | 0.4 | 1.2 | 7.0 | 淡黄褐色 | |
| 19 | B-12-54 | 5.2 | 0.4 | 1.3 | 8.0 | 灰 白 色 | |
| 20 | B-11-33 | 5.1 | 0.3 | 1.2 | 6.1 | 淡黄褐色 | |
| 21 | C-11-2 | 5.0 | 0.4 | 1.5 | 8.7 | 淡黄褐色 | |
| 22 | C-13-55 | 4.9 | 0.3 | 1.2 | 7.7 | 淡 褐 色 | |
| 23 | B-13-61 | 5.0 | 0.5 | 1.3 | 8.4 | 灰黄褐色 | |
| 24 | C-10-16 | 5.0 | 0.3 | 1.1 | 5.8 | 淡 褐 色 | |
| 25 | C-13-9 | 4.9 | 0.4 | 1.2 | 7.8 | 淡 褐 色 | |
| 26 | C-16-79 | 4.8 | 0.5 | 1.3 | 8.3 | 橙 褐 色 | |
| 27 | C-13-39 | 5.1 | 0.3 | 1.0 | 5.2 | 橙 褐 色 | |
| 28 | B-12-54 | 5.1 | 0.3 | 1.3 | 6.3 | 淡 褐 色 | |
| 29 | C-12-13 | 5.0 | 0.3 | 1.1 | 6.5 | 淡 褐 色 | |
| 30 | C-10-21 | 5.0 | 0.3 | 1.5 | 8.1 | 淡 褐 色 | |
| 31 | C-13-42 | 4.9 | 0.3 | 1.0 | 4.1 | 淡 褐 色 | |
| 32 | B-13-63 | 4.9 | 0.4 | 1.1 | 7.0 | 淡 褐 色 | |
| 33 | C-14-47 | 4.9 | 0.3 | 1.1 | 6.6 | 淡 褐 色 | |
| 34 | C-16-44 | 4.7 | 0.4 | 1.1 | 4.7 | 淡 褐 色 | |
| 35 | C-14-42 | 4.6 | 0.4 | 1.3 | 9.6 | 淡 褐 色 | |
| 36 | B-12-59 | 4.7 | 0.5 | 1.4 | 8.7 | 淡 褐 色 | |
| 37 | B-11-34 | 4.7 | 0.3 | 1.4 | 8.4 | 淡黄褐色 | |
| 38 | B-11-25 | 4.6 | 0.3 | 1.3 | 10.2 | 黒 褐 色 | |
| 39 | B-14-79 | 4.7 | 0.3 | 1.1 | 7.0 | 淡 褐 色 | |
| 40 | C-14-57 | 4.7 | 0.3 | 1.4 | 7.9 | 淡 褐 色 | |
| 41 | C-12-79 | 4.7 | 0.2 | 1.1 | 5.8 | 淡 褐 色 | |
| 42 | C-11-11 | 4.5 | 0.3 | 1.1 | 7.7 | 黒 褐 色 | |
| 43 | C-13-71 | 4.5 | 0.3 | 1.2 | 6.2 | 淡 褐 色 | |
| 44 | B-11-25 | 4.6 | 0.2 | 1.2 | 7.1 | 淡 褐 色 | |
| 45 | 1号集石 | 4.4 | 0.3 | 1.2 | 5.8 | 淡 褐 色 | |
| 46 | C-13-55 | 4.5 | 0.2 | 1.3 | 7.2 | 淡 褐 色 | |
| 47 | C-13-18 | 4.5 | 0.4 | 1.4 | 8.6 | 淡 褐 色 | |
| 48 | C-10-5 | 4.5 | 0.3 | 1.3 | 8.1 | 淡 褐 色 | |
| 49 | B-13-37 | 4.5 | 0.5 | 1.1 | 4.6 | 淡 褐 色 | |
| 50 | C-12-80 | 4.5 | 0.2 | 0.9 | 4.2 | 淡黄褐色 | |
| 51 | B-10-78 | 4.4 | 0.3 | 0.9 | 4.1 | 淡赤褐色 | |
| 52 | B-10-60 | 4.4 | 0.3 | 1.2 | 7.5 | 淡 褐 色 | |
| 53 | C-12-8 | 4.4 | 0.3 | 1.2 | 7.3 | 黒 褐 色 | |
| 54 | B-12-61 | 4.4 | 0.5 | 1.6 | 8.8 | 橙 褐 色 | |
| 55 | C-11-38 | 4.3 | 0.4 | 1.1 | 6.1 | 黒 褐 色 | |
| 56 | C-11-40 | 4.3 | 0.4 | 1.2 | 5.8 | 淡 褐 色 | |
| 57 | C-11-65 | 4.2 | 0.2 | 1.2 | 6.0 | 淡 褐 色 | |
| 58 | C-13-1 | 4.2 | 0.3 | 1.3 | 5.9 | 橙 褐 色 | |
| 59 | C-12-2 | 4.2 | 0.4 | 1.0 | 4.2 | 淡 褐 色 | |
| 60 | 火 葬 墓 | 4.1 | 0.3 | 1.1 | 5.4 | 淡黄褐色 | |
| 61 | C-12-37 | 4.0 | 0.2 | 1.1 | 5.6 | 淡 褐 色 | |
| 62 | C-14-73 | 4.0 | 0.4 | 1.1 | 4.5 | 灰 褐 色 | |
| 63 | C-12-12 | 4.0 | 0.3 | 0.9 | 3.7 | 橙 褐 色 | |
| 64 | C-12-20 | 4.0 | 0.4 | 1.2 | 6.7 | 黒 褐 色 | |
| 65 | C-11-24 | 6.0 | 0.3 | 1.3 | 9.7 | 橙 褐 色 | 一部欠損 |
| 66 | C-12-39 | 5.7 | 0.3 | 1.2 | 7.5 | 淡 褐 色 | 一部欠損 |
| 67 | B-13-73 | 5.5 | 0.5 | 2.0 | 9.2 | 橙 褐 色 | 欠　損 |
| 68 | B-10-12 | 5.2 | 0.4 | 1.7 | 12.5 | 橙 褐 色 | 一部欠損 |
| 69 | B-11-10 | 5.3 | 0.4 | 1.2 | 8.2 | 淡 褐 色 | 一部欠損 |
| 70 | B-13-42 | 5.4 | 0.3 | 1.2 | 7.6 | 淡 褐 色 | 一部欠損 |
| 71 | C-13-69 | 5.2 | 0.3 | 1.4 | 7.7 | 橙 灰 色 | 一部欠損 |
| 72 | C-13-69 | 5.2 | 0.6 | 2.0 | 18.7 | 淡 褐 色 | 一部欠損 |

| 番号 | 出土地点 | 最大長(cm) | 孔径(cm) | 最大径(cm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 73 | B-13柱穴 | 5.1 | 0.4 | 1.1 | 5.7 | 淡黄褐色 | 一部欠損 |
| 74 | C-13-16 | 5.0 | 0.6 | 1.7 | 11.1 | 淡褐色 | 一部欠損 |
| 75 | C-11-12 | 5.0 | 0.4 | 1.3 | 8.2 | 淡褐色 | 一部欠損 |
| 76 | B-12-35 | 5.0 | 0.3 | 1.1 | 6.1 | 淡褐色 | 一部欠損 |
| 77 | C-13柱穴 | 4.9 | 0.3 | 1.3 | 6.8 | 灰褐色 | 一部欠損 |
| 78 | C-14-63 | 4.9 | 0.3 | 1.3 | 8.2 | 淡褐色 | 一部欠損 |
| 79 | B-11-10 | 5.0 | 0.4 | 1.2 | 5.4 | 淡褐色 | 一部欠損 |
| 80 | B-11-44 | 4.7 | 0.4 | 1.3 | 6.9 | 淡褐色 | 一部欠損 |
| 81 | 一括 | 4.5 | 0.4 | 1.2 | 7.0 | 淡褐色 | 一部欠損 |
| 82 | B-13-58 | 4.4 | 0.3 | 1.0 | 5.0 | 橙褐色 | 一部欠損 |
| 83 | B-11-62 | 4.5 | 0.3 | 1.2 | 5.4 | 暗茶褐色 | 一部欠損 |
| 84 | B-12一括 | 4.6 | 0.2 | 1.2 | 5.3 | 灰色 | 一部欠損 |
| 85 | B-13-45 | 4.5 | 0.3 | 1.0 | 5.5 | 淡褐色 | 一部欠損 |
| 86 | C-12柱穴 | 4.5 | 0.4 | 1.1 | 5.0 | 暗灰色 | 一部欠損 |
| 87 | C-12-8 | 4.4 | 0.3 | 1.2 | 7.3 | 黒褐色 | 一部欠損 |
| 88 | B-10-42 | 4.4 | 0.4 | 1.1 | 4.7 | 灰褐色 | 欠損 |
| 89 | B-13-44 | 4.4 | 0.3 | 1.1 | 5.1 | 淡黄色 | 欠損 |
| 90 | B-12-46 | 4.3 | 0.4 | 1.1 | 4.5 | 淡褐色 | 一部欠損 |
| 91 | C-10-28 | 4.3 | 0.4 | 1.2 | 5.7 | 灰茶褐色 | 一部欠損 |
| 92 | B-11-25 | 4.2 | 0.4 | 1.3 | 6.1 | 淡褐色 | 一部欠損 |
| 93 | C-11-40 | 4.2 | 0.5 | 1.3 | 5.8 | 淡褐色 | 一部欠損 |
| 94 | C-11-56 | 4.2 | 0.3 | 1.3 | 6.9 | 淡赤褐色 | 一部欠損 |
| 95 | B-10-25 | 4.2 | 0.3 | 1.1 | 4.0 | 淡赤褐色 | 一部欠損 |
| 96 | C-11-1 | 4.2 | 0.3 | 1.2 | 5.1 | 橙褐色 | 一部欠損 |
| 97 | C-12-7 | 4.0 | 0.4 | 1.3 | 7.2 | 淡褐色 | 一部欠損 |
| 98 | B-10-60 | 4.3 | 0.3 | 1.2 | 6.2 | 灰褐色 | 一部欠損 |
| 99 | B-13-46 | 4.3 | 0.4 | 1.2 | 5.3 | 橙褐色 | 一部欠損 |
| 100 | C-13-42 | 4.3 | 0.2 | 1.1 | 5.0 | 淡赤褐色 | 一部欠損 |
| 101 | C-11-56 | 4.1 | 0.4 | 1.2 | 5.0 | 暗灰褐色 | 一部欠損 |
| 102 | C-14-75 | 4.3 | 0.3 | 1.2 | 6.1 | 淡黄色 | 一部欠損 |
| 103 | C-13-55 | 4.1 | 0.5 | 2.5 | 23.3 | 灰褐色 | 欠損 |
| 104 | 一括 | 4.1 | 0.3 | 1.1 | 4.4 | 灰褐色 | 一部欠損 |
| 105 | C-14-15 | 3.9 | 0.2 | 1.0 | 4.5 | 黒褐色 | 一部欠損 |
| 106 | B-11-33 | 3.9 | 0.4 | 1.0 | 3.9 | 淡黄褐色 | 一部欠損 |
| 107 | B-13柱穴 | 3.7 | 0.5 | 1.1 | 4.7 | 淡褐色 | 一部欠損 |

| 番号 | 出土地点 | 最大長(cm) | 孔径(cm) | 最大径(cm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 108 | B-13柱穴 | 3.8 | 0.2 | 1.0 | 4.5 | 暗灰褐色 | 欠損 |
| 109 | C-13-30 | 3.8 | 0.4 | 1.0 | 3.4 | 橙褐色 | 欠損 |
| 110 | B-10-80 | 4.1 | 0.3 | 1.0 | 4.7 | 黒褐色 | 一部欠損 |
| 111 | B-11-22 | 3.9 | 0.4 | 1.1 | 4.1 | 灰色 | 欠損 |
| 112 | C-14-51 | 3.9 | 0.3 | 1.0 | 3.7 | 灰白色 | 欠損 |
| 113 | B-12-23 | 3.9 | 0.3 | 1.6 | 8.7 | 淡褐色 | 欠損 |
| 114 | C-10-5 | 3.7 | 0.4 | 1.2 | 5.9 | 淡褐色 | 欠損 |
| 115 | B-13-47 | 3.8 | 0.3 | 1.1 | 5.1 | 淡褐色 | 欠損 |
| 116 | C-13-77 | 4.0 | 0.3 | 1.1 | 4.1 | 灰褐色 | 欠損 |
| 117 | C-12-52 | 3.9 | 0.4 | 1.1 | 3.9 | 灰白色 | 欠損 |
| 118 | B-11-76 | 3.9 | 0.4 | 1.1 | 5.3 | 暗灰褐色 | 欠損 |
| 119 | B-11一括 | 3.7 | 0.4 | 1.4 | 8.0 | 淡褐色 | 欠損 |
| 120 | 一括 | 3.8 | 0.3 | 1.1 | 5.4 | 淡褐色 | 欠損 |
| 121 | C-12一括 | 3.6 | 0.4 | 1.2 | 5.7 | 淡褐色 | 欠損 |
| 122 | B-12-14 | 3.5 | 0.3 | 1.2 | 5.6 | 白黄色 | 欠損 |
| 123 | B-13-72 | 3.7 | 0.3 | 1.2 | 5.0 | 灰白色 | 欠損 |
| 124 | C-14-5 | 3.6 | 0.3 | 1.2 | 4.5 | 淡褐色 | 欠損 |
| 125 | C-13-13 | 3.6 | 0.3 | 1.3 | 5.3 | 暗灰褐色 | 欠損 |
| 126 | C-12-39 | 3.5 | 0.3 | 1.0 | 3.2 | 灰褐色 | 欠損 |
| 127 | B-10-37 | 3.5 | 0.4 | 0.9 | 3.1 | 淡褐色 | 欠損 |
| 128 | B-13-77 | 3.6 | 0.4 | 1.4 | 4.6 | 淡褐色 | 欠損 |
| 129 | C-10-60 | 3.5 | 0.5 | 1.1 | 4.4 | 淡黄褐色 | 欠損 |
| 130 | B-10-57 | 3.3 | 0.4 | 1.3 | 5.0 | 暗灰褐色 | 欠損 |
| 131 | C-13-3 | 3.2 | 0.3 | 0.9 | 2.6 | 黒褐色 | 欠損 |
| 132 | B-12-13 | 3.2 | 0.3 | 1.1 | 3.8 | 灰白色 | 欠損 |
| 133 | B-13-58 | 3.2 | 0.4 | 1.0 | 3.4 | 淡褐色 | 欠損 |
| 134 | C-10-11 | 3.0 | 0.3 | 1.3 | 3.9 | 淡赤褐色 | 欠損 |
| 135 | C-12柱穴 | 3.0 | 0.4 | 1.0 | 2.4 | 灰褐色 | 欠損 |
| 136 | B-11-25 | 3.0 | 0.4 | 1.0 | 2.5 | 灰褐色 | 欠損 |
| 137 | C-13-70 | 2.9 | 0.5 | 1.1 | 3.0 | 淡褐色 | 欠損 |
| 138 | B-10-50 | 2.7 | 0.4 | 1.0 | 3.0 | 灰色 | 欠損 |
| 139 | C-10-62 | 2.6 | 0.5 | 1.3 | 4.2 | 淡黄褐色 | 欠損 |
| 140 | B-13-76 | 2.3 | 0.4 | 1.3 | 3.5 | 灰褐色 | 欠損 |
| 141 | B-11-74 | 2.4 | 0.3 | 1.0 | 3.0 | 灰褐色 | 欠損 |
| 142 | B-11一括 | 2.2 | 0.3 | 1.1 | 2.4 | 淡褐色 | 欠損 |

**土師器坏（第143図・第144図）**

土師器はすべて、底部回転糸切り離しのものである。

１類：口径14㎝以上のもの。1-①（１～５）は平底から滑らかに体部へ続く。極わずかながら内湾気味の体部は大きく外に開く。器面内外を撫で調整する。

1-②（６、７）は底部から立ち上がりが急で、かつ直線的もしくはやや外湾気味な体部に続くもの。

２類（8～17）：口径13㎝台の類。８、９は底部と体部の境が明瞭で、大きく開く体部の器壁は口縁部へ向かって薄くなる。

10～12は口径、底径に比べて器高の大きなものである。

13～15は直線的に外反する体部をもつもので、通有の形態をしたもの。

３類（18～38）：13㎝以下、12㎝台のもの。18～23は器高が浅く、体部は内湾気味に外へ大きく開く。24～35、39はこれらよりも体部の外反度が弱い。34、35は体部が外湾気味に開く。36～38は口径と底径の差が大きく、器高も深めである。

４類（39～47）：口径11～10㎝台の小型坏。器形は既述のものが含まれている。

**土師器小皿（第145図・第146図 91～116）**

土師器小皿は、総数は300点以上出土している。すべて底部糸切りである。形態や大きさを勘案して以下のように作業分類する。

１類（48～51）：糸切り離しの平底から大きく外傾する体部が特徴的。体部の外面を押さえ気味に引き上げるため、弱い外湾を示す。口縁部は細くなるが、端部は丸く収めている。口径９㎝以上と比較的大きい。

２類（52～69）：底部と体部の境が不明瞭で、滑らかに続く。体部は内湾気味に引き出されながら、口縁部へと続く。口径は8.5～９㎝後半台と比較的大型のものである。

３類（70～99）：平底から直線的に外反する。口縁部に向かって器壁は薄くなり、その端部は尖り気味であるが、おおむね丸く仕上げたものが多い。器形や口径の大きさなどで数種類に細分される。75、76は体部の器厚が極端に薄く特徴のある作りである。79～82は、底部と体部の境が顕著で、わずかながら内湾気味に体部が開くもの。以上は口径８㎝弱。86～97は口径7.5～７㎝弱と小型品である。98、99は口径が６㎝台で一段と小型になっている。

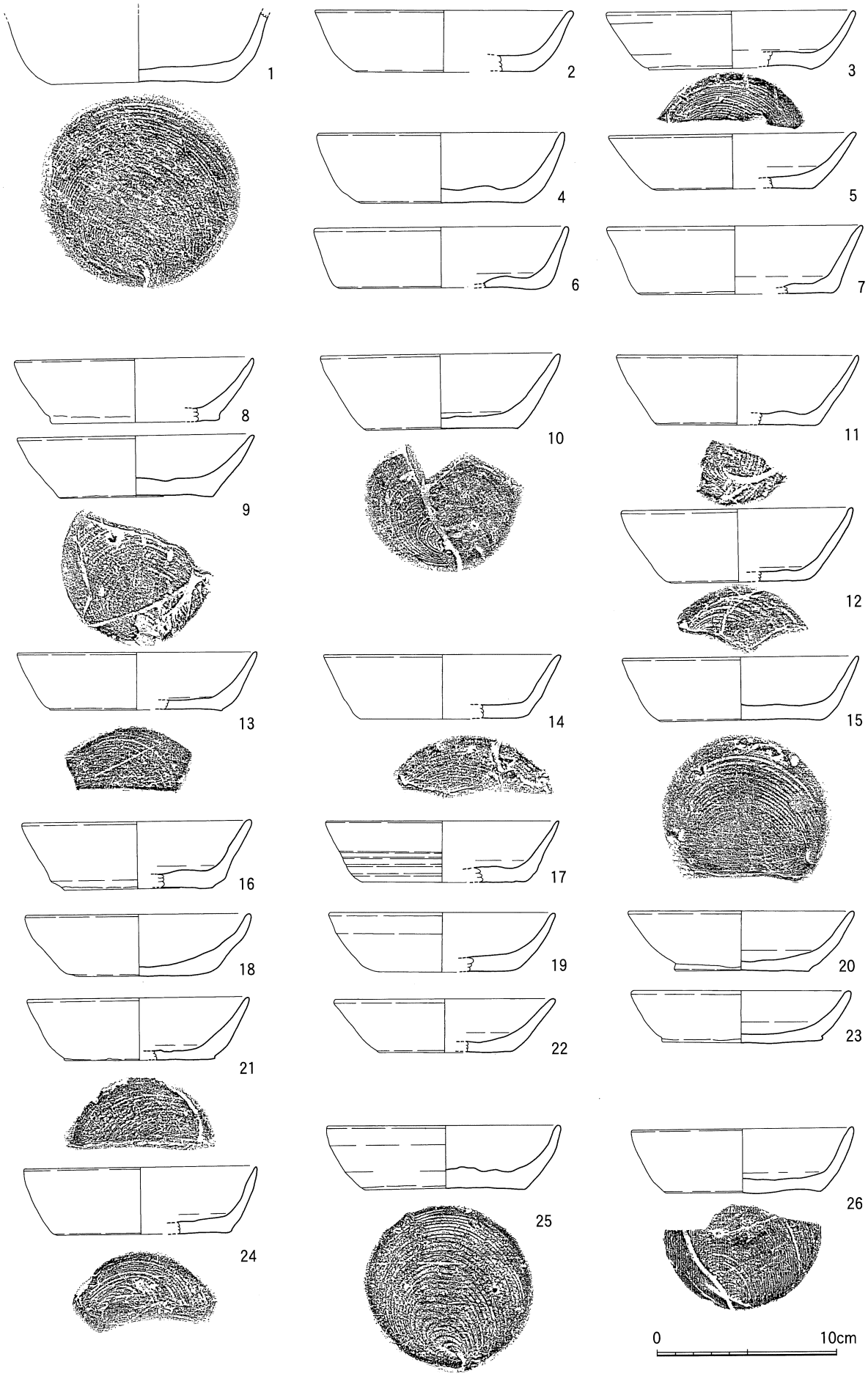
４類（100～116）：口径に比し器高が高いもの（２㎝を越す）。体部の立ち上がり度$\left(=\frac{2\times器高}{口径-底径}\right)$が急である。100、101は口径6.8～７㎝、器高1.7㎝。体部の立ち上がり角度が1.6～２弱のもの（100～105）と2.5以上のもの（106、107、109～116）がある。116の底部には粘土紐を貼り付けた台が２カ所にある。

**土師質鍋・釜（第146図 117～125・第147図 126、127）**

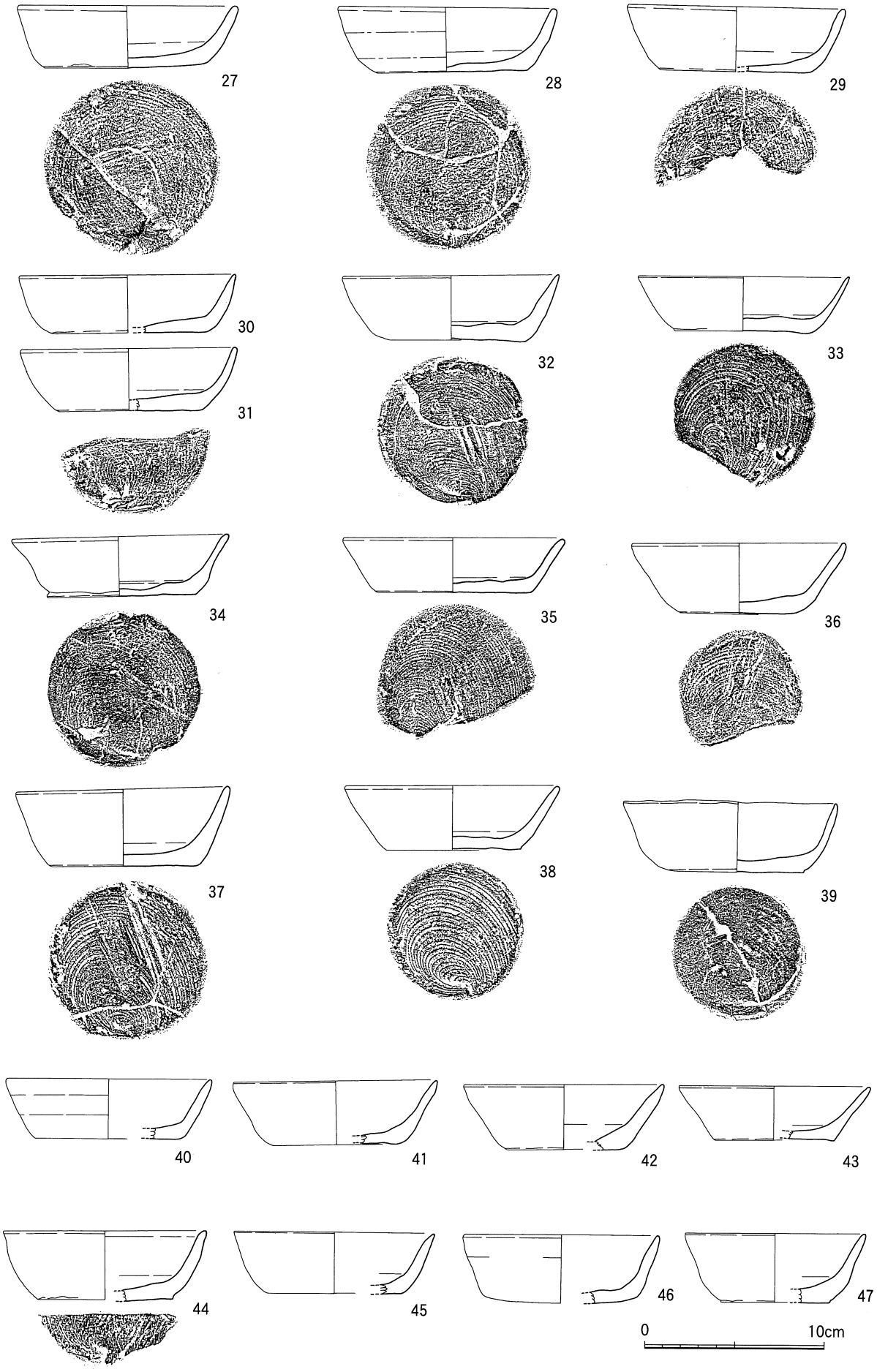
117～124は「く」の字状もしくは逆「L」字状の口縁部を持つ土師質の鍋。126,127は口縁部下に突帯状の鍔が巡る羽釜か。121はこうした鍋・釜の脚。

**陶器・須恵器他（第147図 128～133）**

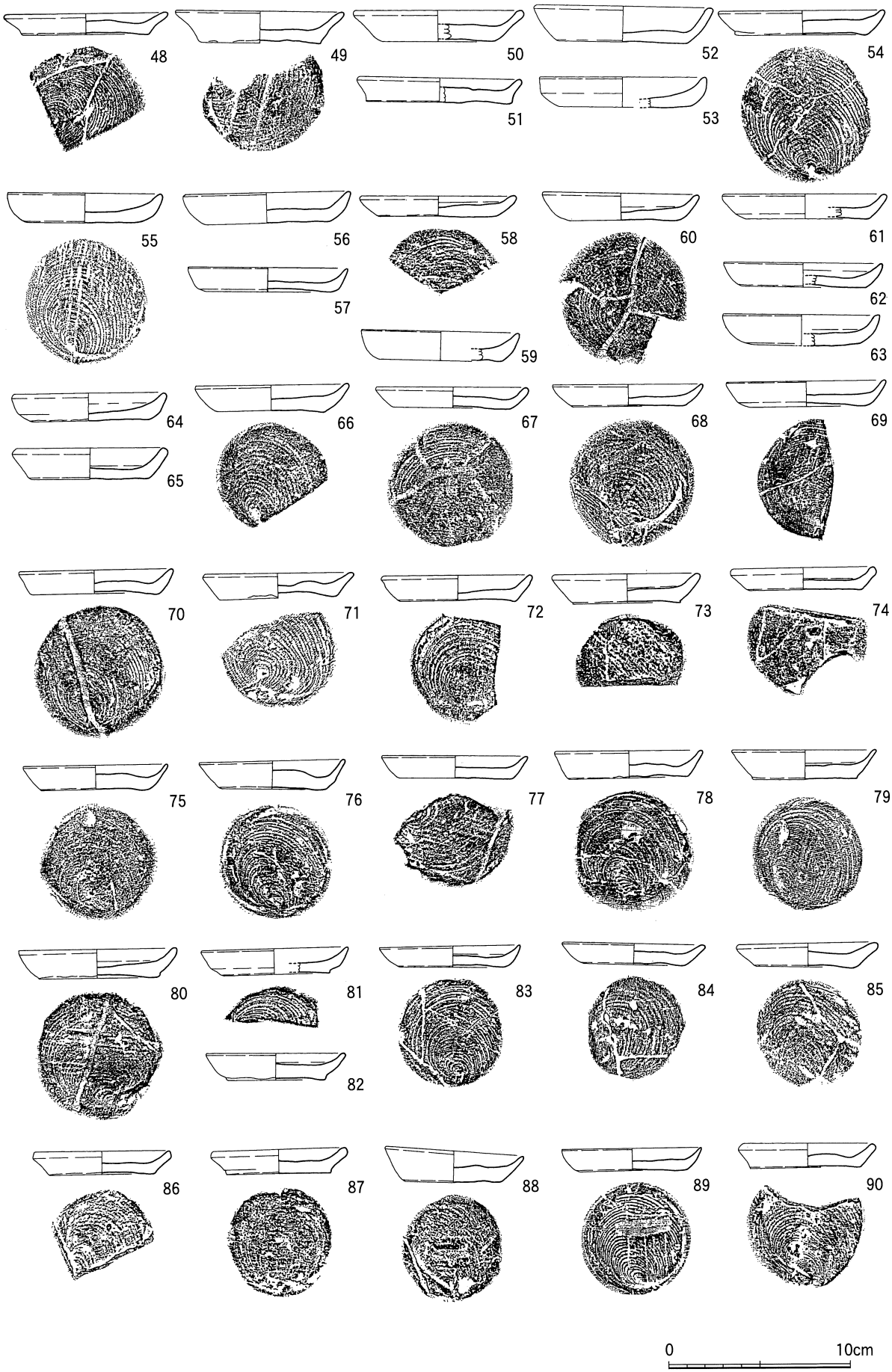
128～130は常滑焼の甕。13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。131は擂鉢で備前系。132,133は東播系の須恵器片口鉢で13世紀前半。



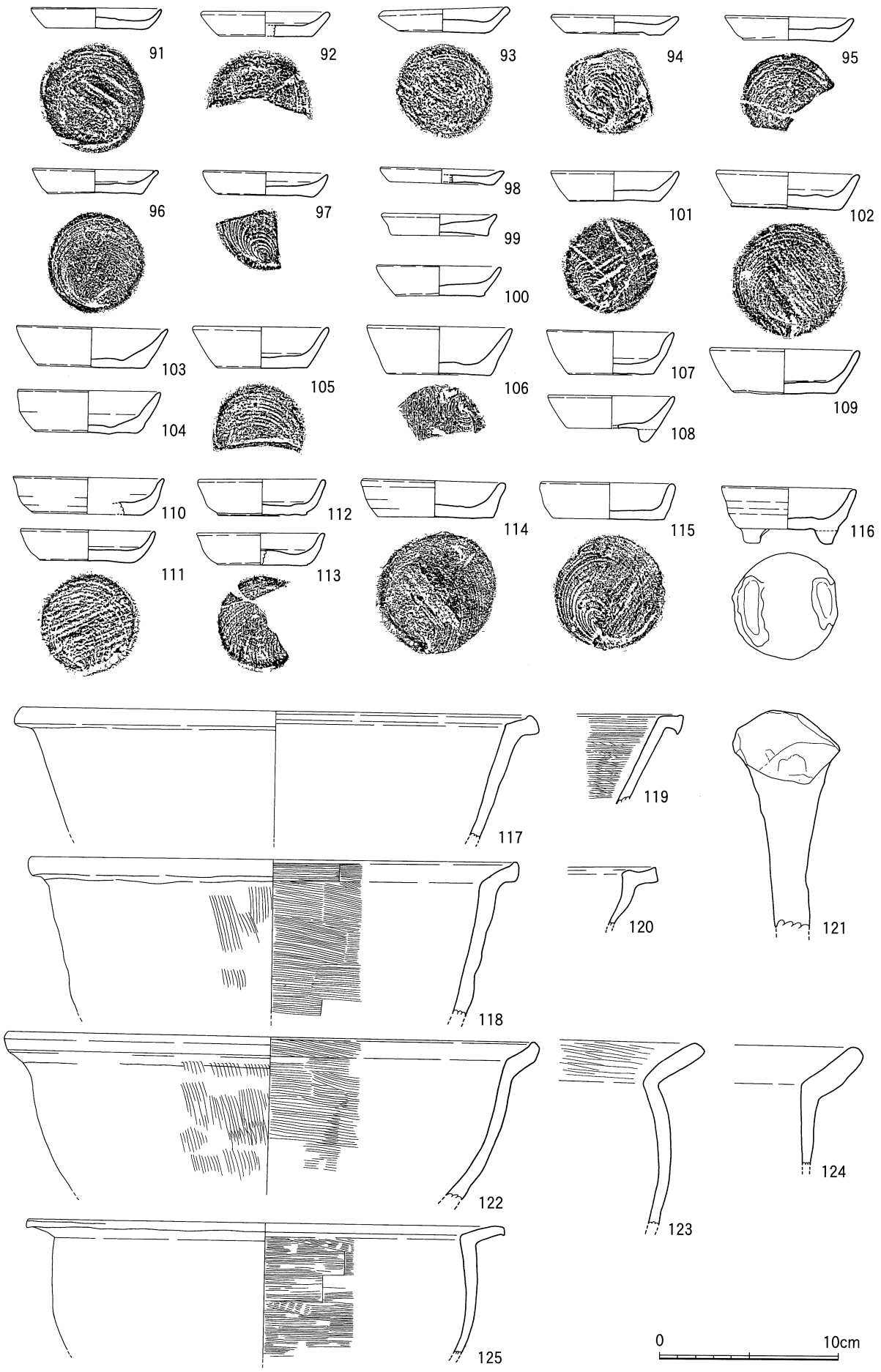

第143図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図１（1／3）



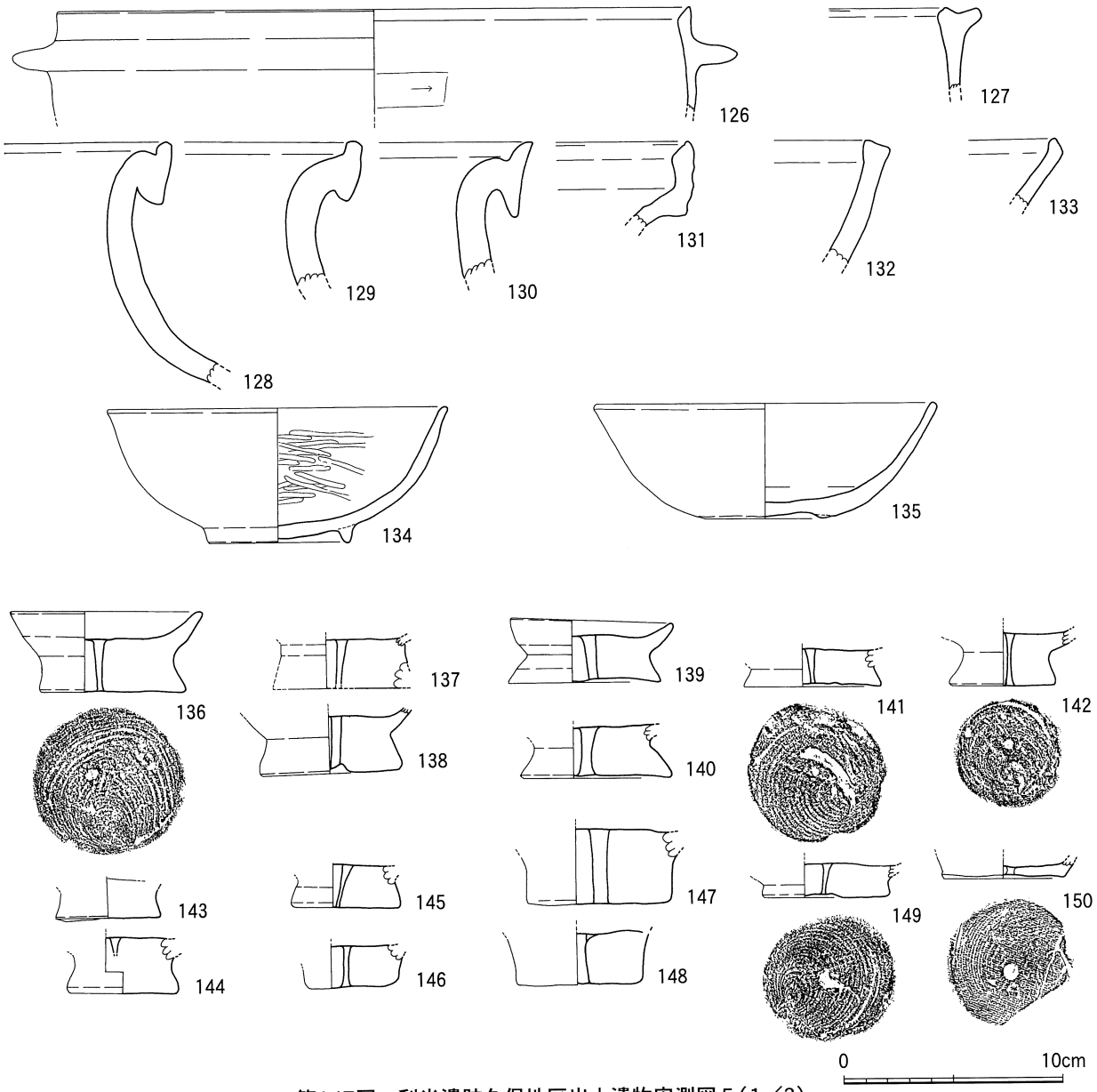

第144図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図２(1／3)




第145図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図３（1／3）



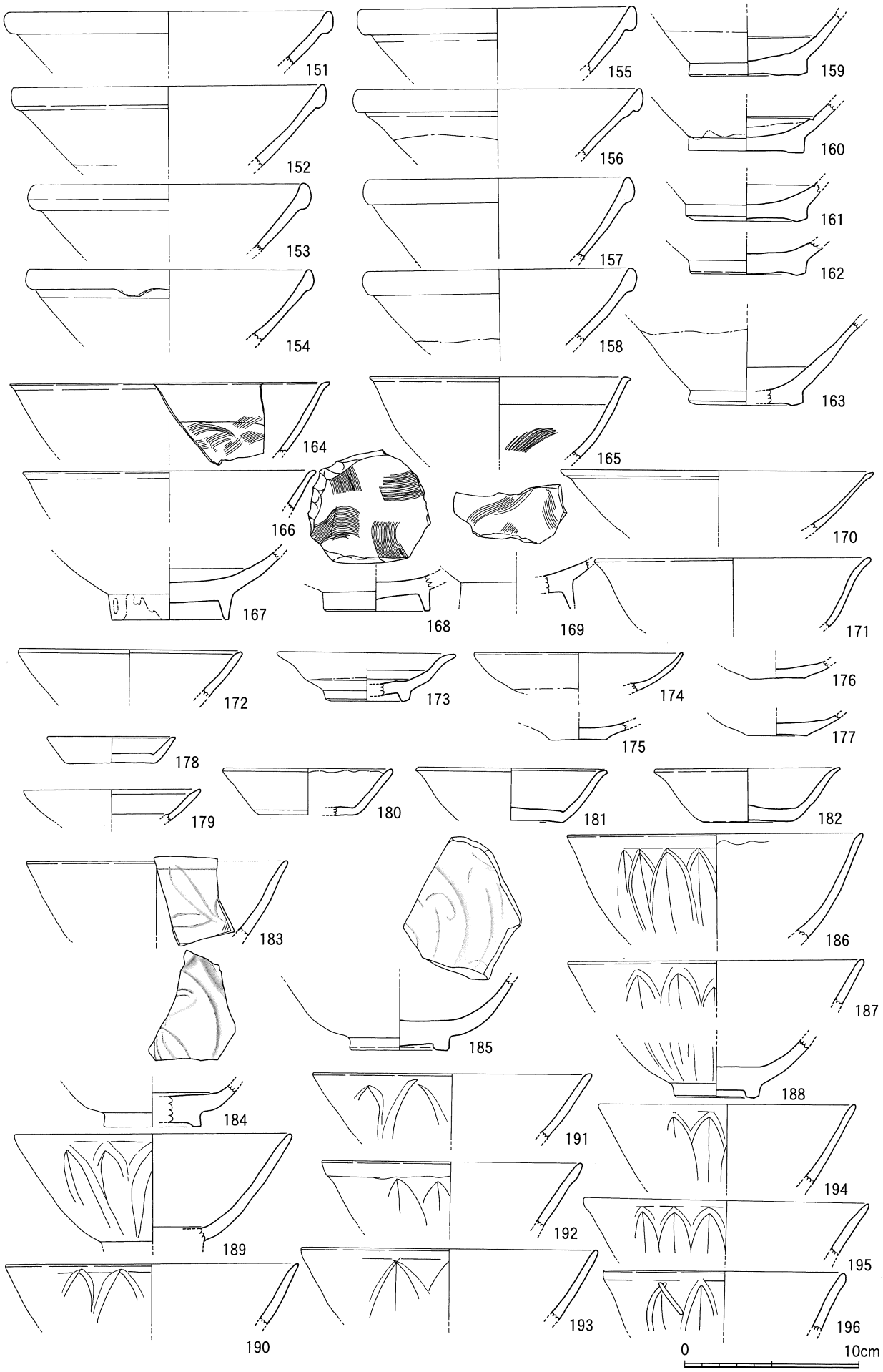

第146図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図４(1／3)



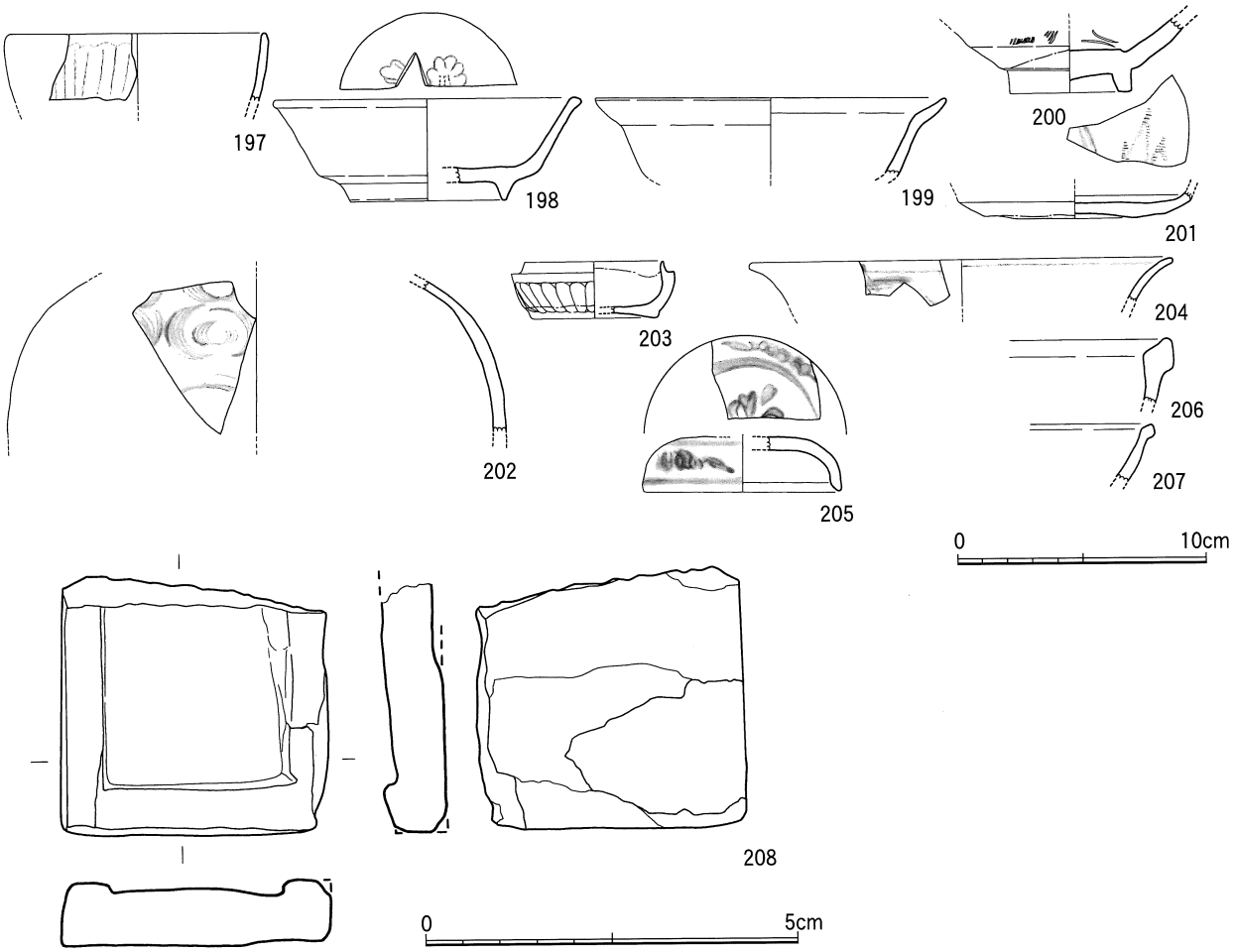

第147図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図５（1／3）

表28　利光遺跡久保地区出土遺物観察表１

| 番号 | 器種 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | — | 10.0 | — | 橙黄褐色 | 長石、石英、黒色粒 | |
| 2 | 〃 | 14.3（復元） | 9.8（復元） | 3.4 | 暗灰黄褐色 | 長石 | |
| 3 | 〃 | 14.0（復元） | 9.7（復元） | 3.2 | 茶褐色 | 長石、角閃石、精緻 | |
| 4 | 〃 | 13.8（復元） | 9.4（復元） | 3.8 | 橙褐色 | 長石、角閃石、赤色粒 | |
| 5 | 〃 | 13.8（復元） | 9.0（復元） | 3.0 | 淡褐色 | 長石、角閃石、赤色粒 | |
| 6 | 〃 | 14.2（復元） | 11.8（復元） | 3.3 | 淡茶褐色 | 長石、角閃石、灰色粒 | |
| 7 | 〃 | 14.2（復元） | 10.6（復元） | 3.7 | 淡茶褐色 | 長石 | |
| 8 | 〃 | 13.4（復元） | 9.0（復元） | 3.5 | 淡茶褐色 | 長石、角閃石、茶色粒 | |
| 9 | 〃 | 13.2（復元） | 8.5（復元） | 3.4 | 淡灰黄褐色 | 長石、精緻、赤色粒 | |
| 10 | 〃 | 13.4（復元） | 8.5 | 4.1 | 橙褐色 | 長石、角閃石、石英、精緻 | |
| 11 | 〃 | 13.5（復元） | 9.0（復元） | 3.8 | 白黄褐色 | 長石、赤色粒 | |
| 12 | 〃 | 12.9（復元） | 8.0（復元） | 4.0 | 白灰黄褐色 | 長石、赤色粒 | |
| 13 | 〃 | 13.3（復元） | 9.5（復元） | 3.1 | 茶褐色 | 長石、精緻 | |
| 14 | 〃 | 13.2（復元） | 9.5（復元） | 3.5 | 白黄褐色 | 長石、角閃石、赤色粒 | |
| 15 | 〃 | 13.1（復元） | 9.0 | 3.4 | 茶褐色 | 長石、精緻 | |
| 16 | 〃 | 12.8（復元） | 8.2（復元） | 3.7 | 白黄褐色 | 長石、角閃石、赤色粒 | |
| 17 | 〃 | 13.0（復元） | 9.3（復元） | 3.3 | 茶褐色 | 長石、角閃石、茶色粒 | |
| 18 | 〃 | 12.6（復元） | 7.4（復元） | 3.4 | 黄橙褐色 | 長石、角閃石、茶色粒 | |
| 19 | 〃 | 12.6（復元） | 8.2（復元） | 3.3 | 淡黄橙色 | 長石、角閃石、茶色粒 | |
| 20 | 〃 | 12.6（復元） | 7.6 | 3.3 | 淡褐色 | 長石、角閃石、石英 | |
| 21 | 〃 | 12.4（復元） | 8.4（復元） | 3.4 | 淡黄橙色 | 長石、角閃石、精緻 | |
| 22 | 〃 | 12.2（復元） | 7.4（復元） | 2.9 | 淡黄橙褐色 | 長石、精緻、黒色粒、赤色粒 | |
| 23 | 〃 | 12.2（復元） | 8.9（復元） | 2.9 | 淡黄橙褐色 | 長石、石英、精緻、赤色粒 | |




第148図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図６（1／3）




第149図　利光遺跡久保地区出土遺物実測図７（1／3・実大）

表29　利光遺跡久保地区出土遺物観察表２

| 番号 | 器種 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 24 | 坏 | 13.0（復元） | 9.9（復元） | 3.7 | 灰黄褐色 | 長石、角閃石、精緻 | |
| 25 | 〃 | 13.0 | 9.0 | 3.4 | 淡黄褐色 | 長石、精緻、赤色粒 | |
| 26 | 〃 | 12.3（復元） | 8.6（復元） | 3.5 | 淡茶褐色 | 長石、角閃石 | |
| 27 | 〃 | 12.4 | 9.2 | 3.4 | 淡褐色 | 長石、角閃石、石英、精緻 | |
| 28 | 〃 | 12.2 | 8.5 | 3.5 | 淡褐色 | 長石、角閃石、石英 | |
| 29 | 〃 | 12.2（復元） | 8.4（復元） | 3.6 | 橙褐色 | 長石、角閃石、赤色粒 | |
| 30 | 〃 | 12.2（復元） | 8.5（復元） | 3.2 | 橙茶褐色 | 長石、角閃石 | |
| 31 | 〃 | 12.2（復元） | 8.0（復元） | 3.4 | 淡褐色 | 長石、角閃石、石英、赤色粒 | |
| 32 | 〃 | 12.1 | 8.0 | 3.5 | 茶褐色 | 長石 | |
| 33 | 〃 | 11.7（復元） | 7.6 | 3.0 | 茶褐色 | 長石、精緻 | |
| 34 | 〃 | 12.2（復元） | 8.2 | 3.3 | 茶褐色 | 長石、精緻 | |
| 35 | 〃 | 12.3（復元） | 8.5 | 3.0 | 茶褐色 | 長石、石英、精緻 | |
| 36 | 〃 | 12.0（復元） | 6.6 | 3.9 | 淡茶褐色 | 長石、角閃石、精緻 | |
| 37 | 〃 | 12.0 | 8.2 | 4.2 | 茶褐色 | 長石、精緻、赤色粒 | |
| 38 | 〃 | 12.0 | 7.5 | 3.5 | 黄橙色 | 長石、精緻、赤色粒 | |
| 39 | 〃 | 12.0（復元） | 7.5 | 3.8 | 淡茶褐色 | 長石、精緻、赤色粒 | |
| 40 | 〃 | 11.4（復元） | 8.2（復元） | 3.3 | 茶褐色 | 長石、角閃石、赤色粒 | |
| 41 | 〃 | 11.4（復元） | 7.4（復元） | 3.5 | 浅黄橙色 | 長石、茶色粒 | |
| 42 | 〃 | 11.2（復元） | 6.5（復元） | 3.6 | 淡茶褐色 | 長石、角閃石、石英、赤色粒 | |
| 43 | 〃 | 10.6（復元） | 6.6（復元） | 3.0 | 淡黄褐色 | 長石、角閃石、石英 | |
| 44 | 〃 | 11.4（復元） | 7.6（復元） | 3.8 | 茶褐色 | 長石、角閃石、茶色粒 | |
| 45 | 〃 | 11.2（復元） | 7.6（復元） | 3.4 | 淡黄褐色 | 長石 | |
| 46 | 〃 | 11.0（復元） | 8.4（復元） | 3.7 | 淡茶褐色 | 長石、精緻、赤色粒 | |
| 47 | 〃 | 10.0（復元） | 6.0（復元） | 3.8 | 黄褐色 | 長石、角閃石、茶色粒 | |
| 48 | 小皿 | 9.1（復元） | 7.0（復元） | 1.2 | 黄褐色 | 長石、角閃石、砂粒 | |
| 49 | 〃 | 9.3 | 6.7 | 1.7 | 淡黄褐色 | 長石、角閃石、砂粒 | |
| 50 | 〃 | 9.3（復元） | 6.1（復元） | 1.7 | 淡黄褐色 | 長石、角閃石、茶色粒 | |
| 51 | 〃 | 9.1（復元） | 8.0（復元） | 1.3 | 白灰黄褐色 | 長石、赤色粒 | 内面スス付着 |
| 52 | 〃 | 9.8（復元） | 7.0 | 1.9 | 淡茶褐色 | 長石、石英、灰色粒 | |
| 53 | 〃 | 9.1（復元） | 7.0（復元） | 1.6 | 淡黄褐色 | 長石、角閃石、赤色粒 | |
| 54 | 〃 | 9.4 | 7.5 | 1.3 | 淡茶褐色 | 長石、角閃石、砂粒 | |
| 55 | 〃 | 8.6 | 6.4 | 1.6 | 茶褐色 | 長石、茶色粒 | |

## 表30　利光遺跡久保地区出土遺物観察表３

| 番号 | 器　種 | 口　径(cm) | 底　径(cm) | 器高(cm) | 色　調 | 胎　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 56 | 小皿 | 9.2（復元） | 7.0（復元） | 1.6 | 赤褐色 | 長石、角閃石、石英、茶色粒 | |
| 57 | 〃 | 8.8（復元） | 6.8（復元） | 1.3 | 淡黄褐色 | 長石、茶色粒 | |
| 58 | 〃 | 8.6（復元） | 6.4（復元） | 1.1 | 黒褐色 | 長石、角閃石 | 黒色土器 |
| 59 | 〃 | 8.8（復元） | 6.8（復元） | 1.6 | 茶褐色 | 長石、角閃石、茶色粒 | |
| 60 | 〃 | 8.6 | 6.2 | 1.4 | 淡茶褐色 | 長石、赤色粒 | |
| 61 | 〃 | 9.2（復元） | 6.6（復元） | 1.3 | 浅黄褐色 | 長石、角閃石、砂粒 | |
| 62 | 〃 | 8.8（復元） | 6.8（復元） | 1.3 | 灰白色 | 長石、茶色粒 | |
| 63 | 〃 | 8.6（復元） | 6.5（復元） | 1.7 | 黄橙褐色 | 長石 | |
| 64 | 〃 | 8.6（復元） | 6.4（復元） | 1.5 | 淡黄褐色 | 長石、茶色粒、砂粒 | |
| 65 | 〃 | 8.5（復元） | 6.7（復元） | 1.6 | 淡茶褐色 | 長石、角閃石、石英、赤色粒 | |
| 66 | 〃 | 8.4（復元） | 6.0 | 1.4 | 茶褐色 | 長石、角閃石、精緻 | |
| 67 | 〃 | 8.3 | 6.6 | 1.1 | 淡橙褐色 | 長石、石英、精緻 | |
| 68 | 〃 | 8.3 | 6.2 | 1.2 | 茶褐色 | 長石、石英、精緻 | |
| 69 | 〃 | 8.4（復元） | 5.8（復元） | 1.3 | 浅黄褐色 | 長石、茶色粒 | |
| 70 | 〃 | 8.5 | 7.2 | 1.3 | 茶褐色 | 長石、精緻 | |
| 71 | 〃 | 8.2 | 6.3 | 1.4 | 茶褐色 | 長石、角閃石 | |
| 72 | 〃 | 8.3（復元） | 6.4（復元） | 1.4 | 茶褐色 | 長石、石英、赤色粒 | |
| 73 | 〃 | 8.1（復元） | 5.8（復元） | 1.6 | 灰黄褐色 | 長石 | 外面赤色顔料か？ |
| 74 | 〃 | 7.9 | 6.4 | 1.2 | 白黄灰褐色 | 長石、赤色粒 | |
| 75 | 〃 | 8.0（復元） | 6.0 | 1.3 | 淡茶褐色 | 長石、角閃石 | |
| 76 | 〃 | 8.0（復元） | 5.6 | 1.6 | 淡茶褐色 | 長石、角閃石、赤色粒 | |
| 77 | 〃 | 8.0（復元） | 6.2（復元） | 1.2 | 淡褐色 | 長石、赤色粒 | |
| 78 | 〃 | 8.1（復元） | 6.5 | 1.5 | 淡茶褐色 | 長石、角閃石 | |
| 79 | 〃 | 7.9（復元） | 5.7 | 1.6 | 淡茶褐色 | 長石 | |
| 80 | 〃 | 8.7～9.0 | 6.6～6.9 | 1.6 | 淡茶褐色 | 長石、石英、精緻 | |
| 81 | 〃 | 8.0（復元） | 5.8（復元） | 1.4 | 淡茶褐色 | 長石、石英、精緻 | |
| 82 | 〃 | 7.6（復元） | 5.4（復元） | 1.4 | 灰白色 | 長石、角閃石、茶色粒 | |
| 83 | 〃 | 7.8（復元） | 6.0 | 1.2 | 淡褐色 | 長石、精緻、赤色粒 | |
| 84 | 〃 | 7.8（復元） | 5.4（復元） | 1.1 | 淡黄褐色 | 長石、角閃石、茶色粒 | |
| 85 | 〃 | 7.8 | 5.4 | 1.4 | 明茶褐色 | 長石、角閃石、茶色粒 | |
| 86 | 〃 | 7.6（復元） | 5.8（復元） | 1.3 | 淡褐色 | 長石、角閃石、赤色粒 | 内,外とも顔料か？ |
| 87 | 〃 | 7.5 | 5.6～5.8 | 1.3 | 淡褐色 | 長石、角閃石、赤色粒 | |
| 88 | 〃 | 7.6 | 5.5 | 1.8 | 淡茶褐色 | 長石、精緻 | |
| 89 | 〃 | 7.6 | 5.8 | 1.2 | 淡褐色 | 長石、精緻、赤色粒 | 内,外灰色部分あり |
| 90 | 〃 | 7.6 | 6.1 | 1.3 | 白黄褐色 | 長石 | |
| 91 | 〃 | 7.3 | 5.8 | 1.1 | 灰黄褐色 | 長石、角閃石、精緻、赤色粒 | |
| 92 | 〃 | 7.2（復元） | 5.2 | 1.4 | 褐色 | 長石、石英、砂粒 | |
| 93 | 〃 | 7.2 | 5.0 | 1.3 | 灰黄褐色 | 長石、石英、精緻、赤色粒 | |
| 94 | 〃 | 7.1（復元） | 5.5（復元） | 1.1 | 淡褐色 | 長石、石英、灰色粒、砂粒 | |
| 95 | 〃 | 7.2 | 5.0 | 1.3 | 灰褐色～橙色 | 長石、精緻、赤色粒 | |
| 96 | 〃 | 7.1 | 5.4 | 1.3 | 灰黄褐色～橙褐色 | 長石、精緻 | |
| 97 | 〃 | 7.0（復元） | 5.5（復元） | 1.3 | 暗灰褐色 | 長石、精緻、赤色粒 | |
| 98 | 〃 | 7.0（復元） | 5.8（復元） | 0.8 | 淡黄褐色 | 長石 | |
| 99 | 〃 | 6.4 | 5.4 | 1.2 | 淡黄褐色 | 長石、角閃石 | |
| 100 | 〃 | 7.2（復元） | 5.1 | 1.7 | 茶褐色 | 長石、角閃石、精緻 | |
| 101 | 〃 | 7.0（復元） | 5.0（復元） | 1.7 | 明黄褐色 | 長石 | |
| 102 | 〃 | 8.0（復元） | 6.2 | 2.0 | 茶褐色 | 長石、精緻 | |
| 103 | 〃 | 8.4（復元） | 6.0 | 2.2 | 橙茶褐色 | 長石、精緻、赤色粒 | |
| 104 | 〃 | 8.0（復元） | 5.8 | 2.3 | 茶褐色 | 長石、角閃石、精緻 | |
| 105 | 〃 | 7.6（復元） | 5.1（復元） | 2.2 | 淡茶褐色 | 長石、石英、砂粒 | |
| 106 | 〃 | 8.1（復元） | 5.8 | 2.6 | 茶褐色 | 長石、角閃石、精緻 | |
| 107 | 〃 | 7.1（復元） | 4.8（復元） | 2.4 | 橙～浅黄橙色 | 長石、角閃石 | |
| 108 | 〃 | 7.0（復元） | 5.0（復元） | 1.8 | 茶褐色 | 長石、精緻 | |
| 109 | 〃 | 8.4（復元） | 5.8（復元） | 2.4 | 黄橙褐色 | 長石、石英、砂粒 | |
| 110 | 〃 | 8.4（復元） | 6.2（復元） | 2.0 | 淡茶褐色 | 長石、角閃石、精緻 | |
| 111 | 〃 | 7.5 | 5.3 | 1.7 | 淡茶褐色 | 長石、石英、精緻、赤色粒 | |
| 112 | 〃 | 7.2（復元） | 5.0（復元） | 2.0 | 黄橙褐色 | 長石、精緻 | |
| 113 | 〃 | 7.1（復元） | 5.0（復元） | 1.8 | 茶褐色 | 長石、精緻、黒色粒 | |
| 114 | 〃 | 8.0 | 6.5 | 2.0 | 茶褐色 | 角閃石 | |
| 115 | 〃 | 7.6（復元） | 6.2（復元） | 2.0 | 淡黄褐色～灰白色 | 長石、角閃石 | |
| 116 | 〃 | 7.5 | 5.6 | 3.1 | 黄褐色 | 長石、角閃石 | |
| 117 | 鍋 | 29.2（復元） | — | — | 淡茶～暗褐色 | 長石、石英、砂粒 | |
| 118 | 〃 | 27.4（復元） | — | — | 白灰褐色 | 石英、砂粒 | 外面スス付着 |
| 119 | 〃 | — | — | — | 暗褐色 | 長石、精緻 | |
| 120 | 〃 | — | — | — | 灰色～暗灰色 | 長石、石英、砂粒 | |
| 121 | 〃 | — | — | — | 灰黄褐色 | 長石、角閃石、精緻 | |
| 122 | 〃 | 29.8（復元） | — | — | 白灰褐色 | 長石、石英、精緻 | |
| 123 | 〃 | — | — | — | 内面 淡茶褐色　外面 赤褐色 | 長石、角閃石、石英、赤色粒、灰色粒、砂粒 | 外面スス付着 |
| 124 | 〃 | — | — | — | 内面 黄褐色　外面 暗褐色 | | スス付着 |
| 125 | 〃 | 26.7（復元） | — | — | 黄橙褐色 | 長石、角閃石、石英、砂粒 | |
| 126 | 羽釜 | 28.8（復元） | — | — | 黄橙褐色 | 長石、角閃石、砂粒 | |
| 127 | 〃 | — | — | — | 暗褐色 | 長石、角閃石、砂粒 | |
| 128 | 陶器　甕 | — | — | — | 暗赤灰色 | 長石、堅緻 | |
| 129 | 〃 | — | — | — | 暗赤灰色 | 長石、角閃石、堅緻 | |
| 130 | 〃 | — | — | — | 暗灰緑色 | 堅緻 | |
| 131 | 擂鉢　口縁 | — | — | — | 暗赤灰色 | 長石、堅緻 | |
| 132 | 片口鉢 | — | — | — | 緑灰色 | 堅緻 | |
| 133 | 〃 | — | — | — | 青灰色 | 堅緻 | |
| 134 | 瓦器　椀 | 15.6（復元） | 6.5 | 6.0 | 灰色～暗灰色 | 長石、角閃石、精緻 | |

| 番号 | 器種 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 135 | 瓦器埦 | 15.6（復元） | 5.6（復元） | 5.1 | 暗灰褐色 | 長石、角閃石、精緻 | |
| 136 | 蝋燭立 | 8.8 | 6.6 | 3.6 | 黄褐色 | 長石 | |
| 137 | 〃 | — | — | — | 茶褐色 | 長石、石英 | |
| 138 | 〃 | — | 6.1 | — | 淡黄褐色 | 長石、角閃石、石英 | |
| 139 | 〃 | 7.4 | 7.0 | 2.8 | 黄褐色～橙褐色 | 長石 | |
| 140 | 〃 | — | 6.8 | — | 橙褐色～赤褐色 | 長石 | |
| 141 | 〃 | — | 6.2 | — | 淡黄褐色 | 長石 | |
| 142 | 〃 | — | 4.8 | — | 淡黄褐色～褐灰色 | | |
| 143 | 〃 | — | 4.7 | — | 灰白色～褐灰色 | 長石、角閃石、石英 | |
| 144 | 〃 | — | — | — | 黄褐色 | 長石 | |
| 145 | 〃 | | — | — | 淡黄褐色 | 長石、角閃石 | |
| 146 | 〃 | — | — | — | 橙色 | 長石、角閃石、石英 | |
| 147 | 〃 | — | 6.5 | — | 茶褐色 | 長石、角閃石、石英 | |
| 148 | 〃 | — | 5.7（復元） | — | 淡茶褐色～灰褐色 | 長石、角閃石 | |
| 149 | 〃 | — | 5.7 | — | にぶい黄橙色 | 長石 | |
| 150 | 〃 | — | 5.5 | — | 淡黄褐色 | 長石 | |
| 151 | 白磁碗 | 18.4（復元） | — | — | 灰白色 | | |
| 152 | 〃 | 18.0 | — | — | 灰白色 | | |
| 153 | 〃 | 15.4（復元） | — | — | 白色 | | |
| 154 | 〃 | 16.4（復元） | — | — | 乳白色 | | |
| 155 | 〃 | 15.9（復元） | — | — | 灰白色 | | |
| 156 | 〃 | 16.4（復元） | — | — | 灰白色 | | |
| 157 | 〃 | 15.0（復元） | — | — | 灰白色 | | |
| 158 | 〃 | 15.1（復元） | — | — | 灰緑色 | | |
| 159 | 〃 | — | 6.8 | — | 白黄色 | | |
| 160 | 〃 | — | 6.1（復元） | — | 灰白色 | | |
| 161 | 〃 | — | 7.0（復元） | — | 灰白色 | | |
| 162 | 〃 | — | 6.6（復元） | — | 淡茶色 | | |
| 163 | 〃 | — | 6.1 | — | 灰白色 | | |
| 164 | 〃 | 18.4（復元） | — | — | 灰白色 | | |
| 165 | 〃 | 14.5（復元） | — | — | 灰白色 | | |
| 166 | 〃 | 16.8（復元） | — | — | 灰緑色 | | |
| 167 | 〃 | — | 6.7（復元）(高台) | — | 灰白色 | | |
| 168 | 〃 | — | 6.1（高台） | — | 灰白色 | | |
| 169 | 〃 | — | 高台くびれた径 6.4(復元) | — | 灰白色 | | |
| 170 | 〃 | 17.7（復元） | — | — | 灰白色 | | |
| 171 | 〃 | 14.0（復元） | — | — | 灰白色 | | |
| 172 | 白磁皿 | 12.2（復元） | — | — | 灰白色 | | |
| 173 | 〃 | 10.0（復元） | 4.7（高台） | — | 灰白色 | | |
| 174 | 〃 | 12.0（復元） | — | — | 乳白色 | | |
| 175 | 〃 | — | 3.2 | — | 灰白色 | | |
| 176 | 〃 | — | 3.2 | — | 灰色 | | |
| 177 | 〃 | | 3.2（復元） | — | 灰白色 | | |
| 178 | 〃 | 7.7 | 5.0 | — | 灰青色 | | |
| 179 | 〃 | 10.0（復元） | — | — | 白色 | | |
| 180 | 〃 | 9.5（復元） | 5.6（復元） | — | 白色 | | |
| 181 | 〃 | 10.3（復元） | 5.8（復元） | — | 灰白色 | | |
| 182 | 〃 | 10.6（復元） | 3.0 | 5.2 | 灰白色 | | |
| 183 | 青磁碗 | 15.0（復元） | — | — | 灰緑色 | | |
| 184 | 〃 | — | 5.5（復元） | — | 灰白色 | | |
| 185 | 〃 | — | 5.5（復元） | — | 灰緑色 | | |
| 186 | 〃 | 17.0（復元） | — | — | 灰緑色 | | |
| 187 | 〃 | 17.0（復元） | — | — | 灰青色 | | |
| 188 | 〃 | — | 4.9（復元） | — | 灰白色 | | |
| 189 | 〃 | 15.8（復元） | — | — | 灰白色 | | |
| 190 | 〃 | 16.9（復元） | — | | 灰緑色 | | |
| 191 | 〃 | 16.0（復元） | — | | 灰緑色 | | |
| 192 | 〃 | 14.7（復元） | — | | 灰白色 | | |
| 193 | 〃 | 17.0（復元） | — | | 灰緑色 | | |
| 194 | 〃 | 14.6（復元） | — | | 白色 | | |
| 195 | 〃 | 16.3（復元） | — | | 灰白色 | | |
| 196 | 〃 | 14.0（復元） | — | | 灰青色 | | |
| 197 | 〃 | 10.2（復元） | — | | 乳白色 | | |
| 198 | 青磁坏 | 12.4（復元） | 4.0 | | 灰青色 | | |
| 199 | 〃 | 14.0（復元） | — | | 灰青色 | | |
| 200 | 青磁碗 | — | 4.9（復元）(高台) | | 灰色 | | |
| 201 | 青磁皿 | — | 4.6（復元） | | 灰色 | | |
| 202 | 青白磁瓶 | — | — | | 灰白色 | | |
| 203 | 青磁合子 | 5.6（復元） | 5.2（復元） | | 白色 | | |
| 204 | 染付皿 | 16.7（復元） | — | | 白色 | | |
| 205 | 染付合子蓋 | 8.0（復元） | — | | 乳白色 | | |
| 206 | 華南三彩 | — | — | | 緑色 | | 華南三彩 |
| 207 | 〃 | — | — | | 緑色 | | 華南三彩 |

## 表31　利光遺跡久保地区出土石硯計測表

| 番号 | 器種 | 横(cm) | 縦(cm) | 厚み(cm) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 208 | 石硯 | 3.5 | 3.2＋α | 0.8 | 黄褐色 | 欠損 |

**瓦器（第147図 134、135）**

134、135は瓦器椀。134の貼付高台は比較的しっかりしており、外面は図示し難いが器内外面に磨きが施されている。小倉正五の瓦器編年Ⅱ式に比定される。135は内外面とも撫で調整で、外面には指頭痕が見られる。高台は退化し、わずかに痕跡が残っている程度である。小倉のⅢ式に該当し、13世紀後半～14世紀前半の年代が与えられている。

**灯火具（第147図 136～150）**

136～150は土師質の蝋燭立て。回転糸切り離しの底部と浅い皿状の受け部からなる。底部には小孔があり、144を除いて上下に貫通する。ここに釘状のものを刺し蝋燭を固定したと考えられている。底部断面が台形のもの（136～145、149）、断面長方形のもの（146～148）が多いが、150のように通常の土師器小皿の底部を穿孔したものを１例確認した。細部の違いはあるが、おおむね小柳和宏の灯火具分類４類、５類に比定され、氏の年代観によれば14世紀後半～15世紀前半のものとなる。

**輸入陶磁器**

**白磁碗（第148図 151～171）**

151～154は玉縁の口縁部を持つ白磁碗Ⅳ-１類。159～163はこれらの底部である。164～169は短く外反する口縁端部と細長い高台の特徴から白磁碗Ⅴ-４b類。以上は11世紀後半～12世紀前半のものである。

170は白磁碗のⅧ類で12世紀後半。171は口縁部無釉のいわゆる口禿碗で白磁碗Ⅸ類（13世紀中頃～14世紀初頭）か。

**白磁皿（第148図 172～182）**

172は皿Ⅱ類。173は体部下半から底部まで露胎で、内面見込みも釉が掻き取られている。白磁皿Ⅲ類。174～177は白磁皿Ⅵ-ｂ類。178は同Ⅸ-１a類。179、180は同Ⅸ-１b類、181は同Ⅸ-１c類、182は同Ⅸ-２類。以上は13世紀中頃～14世紀初頭のものとされている。

**青磁碗他（第148図 183～196、第149図 197～203）**

183～185は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-２類で12世紀中頃～後半のもの。186～196は同青磁碗Ⅰ-５b類。13世紀初頭～前半。

197は外面に細い線画の連弁を描く、同小碗Ⅲ-２類。198は内底見込みに蓮花文のスタンプを配した龍泉窯系青磁坏Ⅲ-１b類。199は同坏Ⅲ-３類。以上は13世紀中頃～14世紀初頭。200は飴色ガラス質の釉を施した同安窯系青磁碗Ⅰ-１b類の底部片、201も同安窯系青磁皿Ⅰ-２類（12世紀中頃～後半のもの）である。202は青磁瓶、203は体部に菊花文をあしらった青磁合子。

**染付他（第149図 204、205）**

204は染付皿。205は乳白色胎土をした漳州（しょうしゅう）窯系合子蓋である。

**華南三彩（第149図 206、207）**

206,207は鉢口縁部で、16世紀代の華南三彩陶器である可能性が高い。

**石製硯（第149図 208）**

208は頁岩製の長方形石硯。14世紀代のものであろう。

## 小結

利光遺跡久保地区の土器は、その大半が包含層出土として取り上げられたものである。それゆえ各土器相互の共伴関係を把握できず、使用時期にかなりの幅がある輸入陶磁器の位置づけは暫定的なものに留まらざるを得ない。

ともあれ、当該地区が生活空間として使用された時期は、出土遺物から次のように整理される。

Ⅰ期：口径14cmを超す土師器坏１類および小皿１類、２類が用いられた時期。白磁碗や皿もこの段階に出現しているのであろうか。12世紀代。

Ⅱ期：口径が14cm以下、すなわち13cm台の土師器坏２類と、小皿３類、Ｄ期、E期の白磁・青磁、瓦器椀（134）、須恵器片口鉢が該当する。12世紀末から13世紀前半。

Ⅲ期：13世紀後半～14世紀前半。口径が12cm台に縮小した土師器坏３類が出現する段階。すべての坏がこの大きさに縮小するわけではなく、引き続き口径13cm台を維持するものも共存する。土師器以外では、F期の青・白磁類、常滑甕、瓦器椀（135）等もこの時期に属すものであろう。

Ⅳ期：14世紀後半～15世紀前半。口径が11cm～10cm台の一段と小型化した土師器坏が現れる。小皿４類（101～105）、土師質鍋、灯火具、石硯等もこの期に該当するものと思われる。

Ⅴ期：15世紀後半～16世紀。土師器小皿（106、110～115）、染付、華南三彩等が用いられた時期。

以上のように、利光久保遺跡の形成は、12世紀代に遡り、以後16世紀まで連綿と継続する。注目されるのは当初から、大量の土師器坏、小皿とともに白磁、青磁等の中国製輸入陶磁器類を多く出土することである。また常滑甕や、土師質鍋・釜の日常雑器の他に比較的まとまった数量の蝋燭立てが検出されており本遺跡の性格を規定する重要な資料といえよう。小柳和宏の見解(小柳1994)に従えば、こうした蝋燭立ては、大分市岩屋寺遺跡、同尼ヶ城遺跡、臼杵市臼杵石仏群、同戸室台遺跡、同野村台遺跡、西国東群大田村岡ノ前遺跡など寺院か居館に係わる遺跡で出土すると考えられるからである。本遺跡の1km南には建久年間（12世紀末）の築城伝承が残る鶴ヶ城があり、また16世紀末に行われた大友連合軍と島津軍との戦場（戸次河原の合戦場）もまた至近の場所に想定されている。いずれにしても、当該地区が中世の全期間を通じて戦略状上、地政学上重要な位置を占めていたことは間違いなく、調査区域およびその近くに居館もしくはそれに付随する施設が存在していた可能性は極めて高いと考える。(注1)

注１　土師器坏、小皿については後藤一重、華南三彩については井口あけみ、吉田寛、蝋燭立てについては小柳和宏の諸氏からその年代等について有益なご教示を得た。記して感謝する。

参考文献

小倉正五　1984　「宇佐地方の瓦器椀について －型式・編年に関する試案－」『古文化談叢』第14号
小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.２
小柳和宏　1994　「灯火具について」『豊後国田原別府の調査Ⅰ』　大田村教育委員会１
中野晴久　1995　「常滑・渥美」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会
森田　稔　1995　「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会
横田賢次郎・森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４